2 1 6. 764.7/フ-21

The BEATLESONGS
2021年版

ビートルズ213曲全ガイド

FUJIMOTO KUNIHIKO
藤本国彦

001 Love Me Do 002 P.S. I Love You 003 Please Please Me 004 Ask Me Why 005 I Saw Her Standing There 006 Misery 007 Anna （Go To Him） 008 Chains 009 Boys 010 Baby It's You 011 Do You Want To Know A Secret 012 A Taste Of Honey 013 There's A Place 014 Twist And Shout 015 From Me To You 016 Thank You Girl 017 She Loves You 018 I'll Get You 019 It Won't Be Long 020 All I've Got To Do 021 All My Loving 022 Don't Bother Me 023 Little Child 024 Till There Was You 025 Please Mister Postman 026 Roll Over Beethoven 027 Hold Me Tight 028 You Really Got A Hold On Me 029 I Wanna Be Your Man 030 Devil In Her Heart 031 Not A Second Time 032 Money 033 I Want To Hold Your Hand 034 This Boy 035 Komm, Gib Mir Deine Hand 036 Sie Liebt Dich 037 Can't Buy Me Love 038 You Can't Do That 039 A Hard Day's Night 040 I Should Have Known Better 041 If I Fell 042 I'm Happy Just To Dance With You 043 And I Love Her 044 Tell Me Why 045 Any Time At All 046 I'll Cry Instead 047 Things We Said Today 048 When I Get Home 049 I'll Be Back 050 Long Tall Sally 051 I Call Your Name 052 Slow Down 053 Matchbox 054 I Feel Fine 055 She's A Woman 056 No Reply 057 I'm A Loser 058 Baby's In Black 059 Rock And Roll Music 060 I'll Follow The Sun 061 Mr. Moonlight 062 Kansas City/Hey-Hey-Hey-Hey! 063 Eight Days A Week 064 Words Of Love 065 Honey Don't 066 Every Little Thing 067 I Don't Want To Spoil The Party 068 What You're Doing 069 Everybody's Trying To Be My Baby 070 Ticket To Ride 071 Yes It Is 072 Help! 073 I'm Down 074 The Night Before 075 You've Got To Hide Your Love Away 076 I Need You 077 Another Girl 078 You're Going To Lose That Girl 079 Act Naturally 080 It's Only Love 081 You Like Me Too Much 082 Tell Me What You See 083 I've Just Seen A Face 084 Yesterday 085 Dizzy Miss Lizzy 086 Bad Boy 087 Day Tripper 088 We Can Work It Out 089 Drive My Car 090 Norwegian Wood （This Bird Has Flown） 091 You Won't See Me 092 Nowhere Man 093 Think For Yourself 094 The Word 095 Michelle 096 What Goes On 097 Girl 098 I'm Looking Through You 099 In My Life 100 Wait 101 If I Needed Someone 102 Run For Your Life 103 Paperback Writer 104 Rain 105 Taxman 106 Eleanor Rigby 107 I'm Only Sleeping 108 Love You To 109 Here, There And Everywhere 110 Yellow Submarine 111 She Said She Said 112 Good Day Sunshine 113 And Your Bird Can Sing 114 For No One 115 Doctor Robert 116 I Want To Tell You 117 Got To Get You Into My Life 118 Tomorrow Never Knows 119 Strawberry Fields Forever 120 Penny Lane 121 Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band 122 With A Little Help From My Friends 123 Lucy In The Sky With Diamonds 124 Getting Better 125 Fixing A Hole 126 She's Leaving Home 127 Being For The Benefit Of Mr. Kite! 128 Within You Without You 129 When I'm Sixty-Four 130 Lovely Rita 131 Good Morning Good Morning 132 Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band （Reprise） 133 A Day In The Life 134 Only A Northern Song 135 All You Need Is Love 136 Baby, You're A Rich Man 137 All Together Now 138 It's All Too Much 139 Hello Goodbye 140 I Am The Walrus 141 Magical Mystery Tour 142 Your Mother Should Know 143 The Fool On The Hill 144 Flying 145 Blue Jay Way 146 Lady Madonna 147 The Inner Light 148 Hey Bulldog 149 Across The Universe 150 Hey Jude 151 Revolution 152 Back In The U.S.S.R. 153 Dear Prudence 154 Glass Onion 155 Ob-La-Di, Ob-La-Da 156 Wild Honey Pie 157 The Continuing Story Of Bungalow Bill 158 While My Guitar Gently Weeps 159 Happiness Is A Warm Gun 160 Martha My Dear 161 I'm So Tired 162 Blackbird 163 Piggies 164 Rocky Raccoon 165 Don't Pass Me By 166 Why Don't We Do It In The Road? 167 I Will 168 Julia 169 Birthday 170 Yer Blues 171 Mother Nature's Son 172 Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey 173 Sexy Sadie 174 Helter Skelter 175 Long, Long, Long 176 Revolution 1 177 Honey Pie 178 Savoy Truffle 179 Cry Baby Cry 180 Revolution 9 181 Good Night 182 Get Back 183 Don't Let Me Down 184 Two Of Us 185 Dig A Pony 186 I Me Mine 187 Dig It 188 Let It Be 189 Maggie Mae 190 I've Got A Feeling 191 One After 909 192 The Long And Winding Road 193 For You Blue 194 The Ballad Of John And Yoko 195 Old Brown Shoe 196 You Know My Name （Look Up The Number） 197 Come Together 198 Something 199 Maxwell's Silver Hammer 200 Oh! Darling 201 Octopus's Garden 202 I Want You （She's So Heavy） 203 Here Comes The Sun 204 Because 205 You Never Give Me Your Money 206 Sun King 207 Mean Mr. Mustard 208 Polythene Pam 209 She Came In Through The Bathroom Window 210 Golden Slumbers 211 Carry That Weight 212 The End 213 Her Majesty

はじめに

すべての音楽の入口になりうる存在。

“ビートルズってどんなグループ？”と訊かれたら、たとえばそんなふうに答えるだろう。わずか8年足らずの活動なのに、ほぼ半世紀前に解散したバンドなのに、なぜかいまだに現役で活動を続けているかのような錯覚にとらわれることがある。たぶんそれは、ビートルズが曲作りやレコーディングの現場でアイディアを出しあいながら、決して過去をなぞることなく、それぞれの曲について最良・最善の“形”を目指して1曲ずつ丁寧に仕上げていったからだと思う。

感覚重視。ひらめき一発。ノリこそはすべてとばかりに、あれこれ試行錯誤をくり返しながら出来上がった“完成品”は、まるで最初からそう演奏されるのが決まっていたかのように、いつ聴いても自然に耳に馴染む。だから“時代の音”にならず、古臭いと感じさせることもない。そうして生まれた全213曲。オリジナル・アルバム13枚にシングル22枚。すごい量だ。

本書は、ビートルズが1962年のレコード・デビューから70年の解散までに残したその全213曲を、1ページ1曲ずつまとめたものだ。録音日・発売日・収録レコードなどのデータはもちろん、メンバーの発言や代表的なカヴァーを含め、それぞれの曲について、メンバーがどんな状況の中、どんな思いで曲を書いたのか、エピソードを交えて詳述している。さらに“ボーナストラック”として、213曲以外の準オリジナル曲——“新曲”を含め、90年代以降に発売された未発表音源集からの74曲も併せて紹介した。

もうひとつ、歯に衣着せぬ発言や独特のユーモア感覚も、ビートルズの大きな魅力だ。そんな4人のキャラクターとしての面白さも、曲紹介や発言などにちりばめてみた。妄想・暴走しすぎて筆が止まらなかったところもあるとは思うけれど、曲を通して浮かび上がる彼らの佇まいはとても人間臭い。神棚に上げて崇め奉るなんてもったいない。すべてを笑い飛ばしてしまう諧謔精神もまた、ビートルズ流なのだから。それに、かっちりまとまったデータ本は、巻末の参考文献で挙げた“真面目”な本に譲りたい。この『ビートルズ213曲全ガイド』は、ポールやリンゴのライヴに足を運んだ若いビート

ルズ・ファンに、ゆるく楽しく読んでほしいと思うから。

そんな若いファンに向けて——巻末のディスコグラフィにも掲載したが、本書の"213曲"を楽しむためにまず押さえておきたいのは、イギリスのオリジナル・アルバムに沿った形に統一された現行のCDだ。発売順に挙げてみる。

❶プリーズ・プリーズ・ミー（1963年）
❷ウィズ・ザ・ビートルズ（1963年）
❸ハード・デイズ・ナイト（1964年）
❹ビートルズ・フォー・セール（1964年）
❺ヘルプ！（1965年）
❻ラバー・ソウル（1965年）
❼リボルバー（1966年）
❽サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド（1967年）
❾マジカル・ミステリー・ツアー（1967年）
❿ザ・ビートルズ（1968年）
⓫イエロー・サブマリン（1969年）
⓬アビイ・ロード（1969年）
⓭レット・イット・ビー（1970年）
⓮パスト・マスターズ（2009年）

この14枚で213曲が網羅できるが、本書では、発売順ではなく録音順を原則とした。デビュー・シングル「ラヴ・ミー・ドゥ」からラスト・アルバム『アビイ・ロード』収録の「ジ・エンド」までの流れが、ビートルズの意図を汲んだものでもあるからだ。

ビートルズは、4人の個性もさることながら、213曲の表情も色とりどり。ロックンロール、R&B、フォーク、ヘヴィ・メタル、ブルース、クラシック、現代音楽ほか、ありとあらゆるタイプの音楽を取り込んで自分たちの色に染めてしまえる柔軟性と雑食性。"すべての音楽の入口になりうる存在"だと思う大きな理由はそこにある。知っている曲やお気に入りの曲を聴きながら、ぜひ楽しく読み進めていただければ、と思う。

ビートルズ213曲全ガイド 2021年版　目次

はじめに …… 002

ビートルズ213曲全ガイド
1. 1962-1963 …… 005
2. 1964 …… 041
3. 1965 …… 077
4. 1966 …… 111
5. 1967 …… 129
6. 1968 …… 157
7. 1969-1970 …… 195

準オリジナル全74曲
1958-1995 …… 229
クリスマス・レコード …… 255

21世紀のビートルズ
インタビュー：ピート・ベスト …… 258
インタビュー：ジャイルズ・マーティン …… 264
「LOVE」収録の全28曲を徹底解剖 …… 272
インタビュー：アラン・ラウズ&ガイ・マッシー …… 274
GET BACK SESSIONS LIST …… 286

Column 213曲をさらに楽しむ
❶作詞・作曲／メイン・ヴォーカル／録音年／演奏時間 …… 040
❷ライヴ演奏曲 …… 128
❸録音テイク数 …… 194
❹ソロでの演奏曲 …… 228
❺213曲の曲名が使われたビートルズ&ソロ曲 …… 256
❻ゲット・バック・セッションで演奏された213曲 …… 280

DISCOGRAPHY …… 294
INDEX …… 296

おわりに …… 303

凡例

通し番号(001～213／214～287)

曲名(邦題)

曲名(原題)

作詞・作曲

発売日(録音日)［演奏時間］
2ヴァージョンある曲は「／」で表示

収録レコード
原則として、CDで入手可能なオリジナル・アルバムを記載。オリジナル・シングルとオリジナルEPも併記。2ヴァージョンある曲は「／」で表示

曲解説

曲についてのコメント

その他の主な収録アルバム
同一ヴァージョン収録のオリジナル・ベスト盤、アメリカ編集盤(US)、日本編集盤(JP)、リミックス盤、別ヴァージョン収録盤、ライヴ盤、マッシュアップ盤の順に該当レコードを記載

おススメのカヴァー
代表的なカヴァー・アーティストと収録レコード

註

ジャケット写真

収録CD（原則として、入手可能なオリジナル盤を掲載）

メイン・ヴォーカル

1

1962-1963

001

ラヴ・ミー・ドゥ

Love Me Do

Lennon/McCartney
1962.10.5（1962.9.4／9.11）[2'22／2'19]
シングル&「PAST MASTERS」／「PLEASE PLEASE ME」

一言でいって、ヘンな曲、である。ビートルズが60年代に発表した全213曲の中に、1962年10月5日に発売されたこのデビュー曲を置いてみると、その奇妙な感覚がよりリアルに伝わるのではないだろうか。聴いていくうちにじわじわ沁み込む不思議な曲でもある。

…ということは全曲を何度も聴いて初めてわかることなのかもしれないけれど、いずれにしても、「ラヴ・ミー・ドゥ」を初めて聴いた時、なんて地味な曲なんだろうと思ったものだ。ブルース・チャネル[*1]の曲「ヘイ・ベイビー」（62年）の、デルバート・マクリントンが吹くハーモニカを聴いたジョンが、その後ビートルズ・サウンドの代名詞のひとつとなるハーモニカを「ラヴ・ミー・ドゥ」にも加えたそうだが、そのブルージーな響きに、初期ビートルズの溌剌とした演奏とのギャップを感じたからだろうか。

ポールが10代半ば（58年頃）に書き、ジョンが少し手伝ったそうだが、ジョンが書いたといってもいいような曲である。実際、よりブルージーに歌えるだろうからとジョンがリード・ヴォーカルを受け持つ予定もあったそうだ。でも、当時はまだいわゆる一発録りの時代。歌いながらハーモニカを吹くことはできない。そう気づいたプロデューサーのジョージ・マーティン[*2]は、ポールにリード・ヴォーカルを任せた。“えっ、オレが歌うの？”というポールの動揺は、ソロで歌う場面での声の震えにはっきり聴き取れる。そこにデビュー曲の初々しさを感じ取ることもできるわけだが。

「ラジオで初めて聴いた時、体中がゾクゾクした。生涯最高の快感だったね」（ジョージ）

「2日でチャート入りしたもんだから、イカサマだろうってみんな思ったはずだ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1962-1966」「THE BEATLES 1」「THE EARLY BEATLES」（US）　「MEET THE BEATLES!」（JP）
「ANTHOLOGY 1」「LIVE AT THE BBC」

おススメのカヴァー

Sandie Shaw「Reviewing The Situation」（1969）／Ringo Starr「Vertical Man」（1998）

[*1] ブルース・チャネル＝62年6月21日にビートルズと競演。「ヘイ・ベイビー」は、76年にリンゴがカヴァー。

[*2] ジョージ・マーティン＝50年にEMIに入社。62年6月からビートルズを担当。

002

P.S.アイ・ラヴ・ユー

P.S. I Love You

Lennon/McCartney
1962.10.5（1962.9.11）［2'02］
シングル&「PLEASE PLEASE ME」

イギリスでのオリジナル・シングルの中で、AB両面ともにポールが（中心になって）書いてヴォーカルを取っているのはこのデビュー・シングルだけである。ジョンの「プリーズ・プリーズ・ミー」も録音されていたが、いかんせん、まだ完成には至らなかったのだ。

「ラヴ・ミー・ドゥ」の9月4日のセッションではリンゴがドラムを叩いたが、9月11日の2回目のセッションにはドラマーにアンディ・ホワイト*1が起用され、リンゴはタンバリンを担当した。B面の「P.S.アイ・ラヴ・ユー」は11日のセッションで収録され、リンゴはマラカスを担当している。同じくアンディの軽やかなドラミングのせいか、南国風の雰囲気を聴き取ることができる。と同時に、いきなり演奏なしで歌い出すイントロと掛け合い（後追い）コーラスという、ビートルズならではの色合いをはっきり見つけることができる。とくに後半の合いの手——"As I write this letter"の後のジョンの"Oh"、"Send my love to you"の後のポールの"You know I want you to"、"Remenber that I'll always"の後のジョージの"Yeah"——がこの曲の最大の聴きどころだ。そのちょっとした歌声に、3人の個性の違いとそれぞれの魅力が凝縮されているように思う。

ところで、ビートルズ・ナンバーの中でポール自身が著作権を持っているのはデビュー・シングルの2曲。しかしポールは、何を思ったのか、この2曲を80年代にメドレーで演奏してしまった。タイトルは「P.S.ラヴ・ミー・ドゥ」（あぁっ！）。このユルさもまたポールの魅力といえば魅力だが。

「ポールはシレルズ*2の〈ソルジャー・ボーイ〉のような曲を書こうとしていた」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
「THE EARLY BEATLES」（US）　「MEET THE BEATLES!」（JP）　「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」
おススメのカヴァー
The Bad Boys「Meet The Bad Boys」（1973）／Ronnie Spector「VA／The Art Of McCartney」（2014）

---

*1アンディ・ホワイト＝EMIのロン・リチャーズの依頼でビートルズのセッションに参加。
*2シレルズ＝58年にデビュー。「ソルジャー・ボーイ」（62年3月）は英23位・米1位。

003

プリーズ・プリーズ・ミー

Please Please Me

McCartney/Lennon
1963.1.11（1962.11.26）［2'00］
シングル&「PLEASE PLEASE ME」

ジョンが歌う"カモン"の"カ"の響きのカッコ良さ。それがこの曲の最大の魅力だ。もちろん惚れ惚れする瞬間はほかにもたくさんあるけれど、この曲を聴くと、バンドの大将がようやくグイッと前に出てきてくれた――そんな思いを強くする。"プリーズ"を2つの意味で使った思わせぶりな歌詞もいい。

2枚目のシングルにして初の全英1位を獲得する大ヒットとなり、ビートルズの快進撃はこの曲から始まった（ただしミュージック・ウィークでは2位止まりだったため、そのチャートを元に1位の曲をまとめたベスト盤「1」には収録されていない）。

…と書いてはみたものの、チャートで1位か2位かというのは、さほど重要ではない。まず伝えなきゃいけないのは、この曲こそ、初期ビートルズ・サウンドの魅力が詰め込まれた最初の作品であるということだ。ジョンのヴォーカルに併走するポールのハーモニー、ジョンの"カモン"の掛け声に奮い立つポールとジョージの後追いコーラス、疾走感たっぷりなバンド・サウンド。"若さ炸裂&エネルギー凝縮"という力強さがみなぎっている。リンゴのドラムは、アンディ・ホワイト版をなぞっただけだが。

もともとロイ・オービソン*をイメージしてジョンが書いたのは、ゆったりとしたテンポの曲だったが、ジョージ・マーティンのアイディアで軽快なサウンドへと生まれ変わった。スロー・ヴァージョンの元歌は、"カモン"の"カ"の響きも、きっと弱々しかったんだろう。

「ロイ・オービソンの〈オンリー・ザ・ロンリー〉を聴いていたらできたんだ」（ジョン）

「ジョージ・マーティンが"もっとテンポを上げよう"と。で、大ヒットになった」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1962-1966」「THE EARLY BEATLES」（US）　「MEET THE BEATLES!」（JP）　「ANTHOLOGY 1」「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

おススメのカヴァー

Petula Clark「Que Ton Cœur Me Soit Fidele」(Single)（1963）／Flamin' Groovies「Jumpin' In The Night」（1979）

---

*ロイ・オービソン＝55年にデビュー。63年5月に行なわれたビートルズの3度目のイギリス・ツアーのメイン・アクト。「オンリー・ザ・ロンリー」（60年5月）は英2位・米1位。

004

アスク・ミー・ホワイ

Ask Me Why

McCartney/Lennon
1963.1.11（1962.11.26）［2'24］
シングル&「PLEASE PLEASE ME」

甘さと苦さ。その違いは、そのままポールとジョンの作風の違いとして表われている。

セカンド・シングル「プリーズ・プリーズ・ミー」のB面に収録されたこのジョンの作品は、213曲の中でも最高にビターなテイストに満ちている。甘さと苦さを分けているのは2人の声質の違いだ。個人的にはポールの甘くまろやかな声は、いつなんどきでも聴くことができるので、鼻歌気分で軽く楽しく味わえるものだけれども、ジョンの翳りのある声は、一度はまると抜け出せない魔力があって、さすがのポールも、初期のジョンには勝てないなあと思う。

そのジョンならではの苦さ、もう少し言葉を足すと、ノスタルジックな曲調に枯れた歌いまわしと裏声が加わったほろ苦さこそ、この曲の肝だろう。「ツイスト・アンド・シャウト」をがなり声で歌うジョンと同じ人物とは到底思えない。とくに2番の“My happiness near makes me cry”の“cry”でジョンの声が嗄れ気味になるところは、何度聴いても痺れっぱなしになるほどの艶やかさだ。“That I should never never never be blue”と“never”をネバネバっと続けたあたりも、曲にふくらみをもたらせているように思う。「P.S.アイ・ラヴ・ユー」同様、軽やかなドラミングやポールとジョージのコーラスもいいけれど、とにかくこの曲の主役は、圧倒的にジョンだ。21歳でよくこんな曲が書けるものだ。

「ジョンのアイディアを元に、2人で座り込んで作った曲だね」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「THE EARLY BEATLES」（US）　「BEATLES NO.5」（JP）　「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

おススメのカヴァー

Litto Nebbia 『Beatles Songbook Vol.1』（1999）／Tino Reyes Trio 「Bossa With The Beatles」（2016）

005

アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア

I Saw Her Standing There

McCartney/Lennon
1963.3.22（1963.2.11）［2′52］
「PLEASE PLEASE ME」

デビュー・アルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』用のセッションは63年2月11日のわずか1日で行なわれ、全部で10曲収録された。その中で最もロックンロール色が強いのが、この初期の代表曲。ポールがチャック・ベリー＊に影響を受けて10代後半（60～61年頃）に作った曲である。若きビートルズの、どこにも収まりきらないエネルギーが充満している。

そもそもこのアルバム・セッションは、“ライヴの雰囲気をそのままスタジオに持ち込めないか”というプロデューサーのジョージ・マーティンの発案によって1日で行なわれることになったもの。そのため、演奏はほとんど“一発録り”で、ライヴで鍛え抜かれたバンドの勢いを感じさせる曲が多い。この曲は、その勢いが顕著に表われたナンバーだろう。イントロの“1-2-3-4”で始まるポールのカウントが、まずカウンター・パンチのように耳を直撃する。こんなにパンチの効いたカウントがあるだろうか。そう思えるぐらい、曲の導入部にふさわしく、曲の勢いを増長させる“1-2-3-4”なのである。しかもビートルズのデビューLPの1曲目に針を落とした瞬間にこれが聞こえてくるのだ。カンペキすぎる。

このカウントは、第9テイクから持ってきたものだ。別のテイクからカウントだけを曲の頭に付け加えたのである。でも、そう言われなければ全くわからないほど、曲に溶け込んでいる。逆に言えば、わざわざカウントを持ってくるほど、1曲の出だしの“音”が重要だと考えたのである。

「最初のフレーズで行き詰まったけど、ジョンが
“She'd never been a beauty queen”の代わりに
“You know what I mean”を思いついて“これだ!”ってね」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「MEET THE BEATLES」（US）「MEET THE BEATLES!」（JP）「ANTHOLOGY 1」「LIVE AT THE BBC」「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

おススメのカヴァー

Little Richard「The Rill Thing」（1970）／Bob Welch「Three Hearts」（1979）

＊チャック・ベリー＝53年に音楽活動を開始し、55年に「メイベリーン」（米5位）でデビューしたロックンロールの創始者。

006

ミズリー

Misery

McCartney/Lennon
1963.3.22（1963.2.11）[1'47]
「PLEASE PLEASE ME」

63年2月2日から3月3日にかけての1ヵ月間、ビートルズは初のイギリス・ツアーを行なった。とはいえ、16歳の女性歌手、ヘレン・シャピロ[*1]がメインで、開始当初ビートルズは6組中の最下位という位置付けだった。2月10日の公演がキャンセルとなったのは、翌11日にアルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』用のレコーディングが控えていたためだ。ちなみに、セッション翌日の2月12日から3月3日までの約3週間でライヴを休んだのは、2月17日のわずか1日だった。

と、ここまでライヴの話を書いてきたのにはワケがある。「ミズリー」は、もともとジョンとポールがツアー開始直前の1月27日に彼女のために作った曲だったからだ。しかし、歌詞が悲観的すぎて、アイドル歌手が歌うのはどうかと録音を拒否されてしまった。取り上げてもらっていたら、ステージでビートルズをバックにヘレン・シャピロが歌うという“歴史的”な場面が見られたかもしれない。結局この曲は、同じくツアーに同行していた男性歌手兼俳優のケニー・リンチ[*2]が取り上げ、ビートルズよりも先にレコーディングしている。ということで、“ビートルズの曲を最初にカヴァーしたのは？”というクイズがあったとしたら、答えは“ケニー・リンチ”である。

エンディングの、曲がフェイド・アウトしていくところで合いの手で入るヴォーカル（ここはジョンとポールは一緒ではない）の最後の最後に聞こえるジョンの“ララララララ”という裏声。個人的におおっと思う瞬間はそこ、だ。

「バラードに初めて挑戦した作品。ヘレン・シャピロのために書いた。
B面でもいいから録音してもらえれば僕らの作曲活動にプラスになると思ってね」（ポール）

その他の主な収録アルバム
「THE BEATLES'SECOND ALBUM」(JP)　「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

おススメのカヴァー
Kenny Lynch「Nothing But The Real Thing」(1982)／The Parrots「Please Please Me Live At Abbey Road」(2001)

[*1] ヘレン・シャピロ＝61年に「子供じゃないの」でデビュー（英3位）。
[*2] ケニー・リンチ＝60年にデビュー。

007

アンナ

Anna (Go To Him)

A.Alexander
1963.3.22（1963.2.11）［2'54］
「PLEASE PLEASE ME」

初のカヴァー曲である。62年9月にアーサー・アレキサンダー*が発表したシングル曲で、全米チャートの最高位は68位。ということは、それほど知られていない比較的新しめの曲を早めに取り上げたことになる。

デビュー・アルバムのカヴァー曲は全部で6曲あり、その多くがセッションの後半に録音されている。より手のかかりそうなオリジナル曲を先に録音するというのは、賢明な措置だった。その代わりといってはなんだが、ジョン、ポール、ジョージの3人は、コーラスを含めてずーっと歌い続けたわけだから、後半に収録された曲では、とくにジョンとジョージの声が嗄れ気味になる。この「アンナ」もしかり。最後に収録された「ツイスト・アンド・シャウト」で息絶えるジョンのヴォーカル。その“嗄れゆく声”の経過を、この「アンナ」で聴き取ることができる。

とはいえ、ジョンのその艶やかなしゃがれ声は、「アスク・ミー・ホワイ」と同じく、一度聴いたら忘れられなくなるほどの魔力がある。ドスがただ効いているだけではなく、ほのかな色香があるのだ。しかしジョンはその後、自分の声が嫌いになり、声のトーンもどんどん高くなっていってしまうのだが（だからこそ、初期の声にはなおさら捨てがたい魅力を感じてしまうのかも）。この曲での聴きどころは、2度目のサビで歌われる“breaks my heart and leaves me sad”の“heart”の巻き舌。ジョンのこういう歌いまわしは、案外珍しい。

ついでに言えば、曲名の副題は“Go To Him”なのに、“Go with him”と歌われているのはなぜだろう。

その他の主な収録アルバム

「THE EARLY BEATLES」(US)　「BEATLES NO.5」(JP)　「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

---

*アーサー・アレキサンダー＝60年にデビュー。「アンナ」は4枚目のシングル。

008

チェインズ

Chains

G.Goffin/C.King
1963.3.22（1963.2.11）［2'23］
『PLEASE PLEASE ME』

　ジョージのヴォーカル曲、ついに初登場である。オリジナルはガール・グループ、クッキーズ[1]が62年11月に発表した曲（米17位）で、作者はジェリー・ゴフィン＆キャロル・キング[2]。リトル・エヴァが歌うゴフィン＝キングの代表曲「ロコモーション」のバック・コーラスをつとめていたのがクッキーズで、「チェインズ」も実はリトル・エヴァが歌っていたらしい。

　213曲の中でジョージがソロでリード・ヴォーカルをとる曲は、ジョンとポールに比べると圧倒的に少ない。でも、健気で儚げで、拙さが逆に味になってしまう不思議な魅力がある。それに"リヴァプール訛り"といわれるあの歌い方も、だ（濁音とラ行の発音に特徴がある）。

　さて、この曲はどうか。イントロのハーモニカの奇異なフレーズにまず耳を奪われてしまうが、ポールの力強いハーモニーとともに聞こえるジョージのヴォーカルは、"あれ？ ジョンかな"と一瞬思わせるほど声嗄れが激しい。とくに、"I think you're fine"のところは聴き逃せない。もともと喉のそれほど強くないジョージが、わずか1日のアルバム・セッションで歌い続けたためにこんな声になってしまったのだ。ジョンの「ツイスト・アンド・シャウト」状態まであと一歩、である。ソロ・アルバム『ダーク・ホース』（74年）のタイトル曲を歌う、喉をやられたジョージのガラガラ声とつい比較したくなる。

　ところで、ジョージがソロで歌う直前にごちゃごちゃした喋り声が聞こえるが、なんて言っているんだろうか。

その他の主な収録アルバム
『THE EARLY BEATLES』（US）　『BEATLES NO.5』（JP）　『ON AIR・LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

---

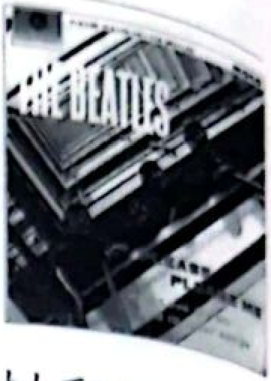
[1] クッキーズ＝54年に結成され、56年に「イン・パラダイス」でデビュー。
[2] ジェリー・ゴフィン＆キャロル・キング＝58年に結婚後、作曲活動を開始した名コンビ。

009

ボーイズ

Boys

L.Dixon/W.Ferrell
1963.3.22（1963.2.11）［2'24］
「PLEASE PLEASE ME」



ジョージに続いてリンゴのヴォーカル曲も登場。これもカヴァー曲である。オリジナルはシレルズのヒット曲「ウィル・ユー・ラヴ・ミー・トゥモロウ」のシングルB面に収録されたもので、60年11月に発売された。

疾走感あふれるサウンドはライヴ映えする仕上がりで、リンゴが加わる前は、前任ドラマーのピート・ベスト*1の持ち歌だった（同じくリンゴが歌う「マッチ・ボックス」と「ハニー・ドント」もそう）。

聴きどころは2つ。間奏でギター・ソロを弾く前に入る“alright George！”というリンゴの掛け声と、間奏やエンディングなど、あちこちで聞こえるポールの“Ahhhhh”というシャウトだ。ポールの“遠吠え”を聴くと、トニー・シェリダン*2のバック・バンドとしてレコーディングされた61年の「マイ・ボニー」を思い出す。はしゃぎ具合がよく似ているのだ。とくにポールは、バックにまわった時にその傾向が強くなる。目立ちたがり屋なのか、余裕がなせる業なのかはわからないけれども。ポールのシャウトだけでなく、ジョン、ポール、ジョージによる“bop shuop, m'bop bop shuop”“yeah, yeah, boys”というバック・コーラスも小気味良く、リンゴを一所懸命に盛りたてる3人の姿が目に浮かぶ。リンゴの鼻にかかったヴォーカルを聴くと、ビートルズは4人のキャラがそれぞれいい塩梅に混ざり合っているだけでなく、声の質も4人4様であるなあと、いまさらながらに思う。

その他の主な収録アルバム

「THE EARLY BEATLES」（US）「THE BEATLES'SECOND ALBUM」（JP）「ANTHOLOGY 1」「THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL」「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

---

*1ピート・ベスト＝60年8月にポールの誘いでビートルズに加入。62年8月16日に解雇。

*2トニー・シェリダン＝60年8月にドイツのハンブルクでビートルズと知り合う。

ベイビー・イッツ・ユー

Baby It's You

M.David/B.Bacharach/B.Williams
1963.3.22（1963.2.11）［2'35］
「PLEASE PLEASE ME」

作曲はバート・バカラック*。B.J.トーマスの「雨にぬれても」やカーペンターズの「遥かなる影」ほかポピュラー界の大御所として知られている人だが、バカラックのカヴァーはこれ1曲のみだ。オリジナルは「ボーイズ」同様シレルズで、61年12月に発売された（米8位）。

ビートルズは、女性コーラス・グループに限らず他人の曲を取り上げる際に、オリジナルのほんわかムードを一変させ、ビートの効いたシャキッとしたサウンドへと再生させることが多い。この曲も、眼鏡の曇りが取れて視界が良好になったような印象がある。その変貌の最大の功績は、なんといってもジョンの声である。しゃがれ声ここに極まれり、という感じで、"ほかの誰でもない。君しか見えない（Don't want nobody,nobody）"と思いの丈をぶちまける痛切な叫びが耳に沁みる。

"シャラララララララ～"というコーラスも印象深い。セッションも後半に突入し、ポールとジョージのコーラスもかなり嗄れている（間奏の直前に余計にコーラスが入っているが、ポールの声かな？）。また、間奏にはジョージ・マーティンによるチェレスタ（鐘のような音が出るキーボード）が入っているが、ジョージのギターだけでは線が細いと思ったのだろう。「ミズリー」のピアノ同様、音に厚みを加えた判断は正しかった。このキラキラ感には「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ」へと続く道が見える（ような気がする）。BBCラジオでのスタジオ・ライヴは、この曲の完成形だ。

その他の主な収録アルバム

「THE EARLY BEATLES」(US)　「MEET THE BEATLES!」(JP)　「LIVE AT THE BBC」

---

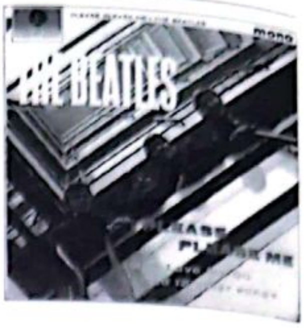
*バート・バカラック＝アメリカの音楽家、歌手。
57年に知り合った作詞家ハル・デヴィッドとのコンビで62年以降多くの楽曲を手掛けた。

011

ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット

Do You Want To Know A Secret

McCartney/Lennon
1963.3.22（1963.2.11）［1'56］
『PLEASE PLEASE ME』



「チェインズ」に続くジョージのリード・ヴォーカル曲である。これでデビュー・アルバムにはジョージのヴォーカル曲が2曲収録されたことになるが、作者はジョンだ。ジョージに自作の曲がまだなく、ジョンとポールがリード・ヴォーカルをとる曲が多くなるのを避けるという考えがあったからだろう。ジョンはこの曲を、幼少の頃、母ジュリアに歌ってもらったディズニー映画『白雪姫』の挿入歌「アイム・ウィッシング」の歌詞を元に書いたという。

演奏はというと、エレキ・ギターをちょっと爪弾いた思わせぶりでドラマチックなイントロにまず耳がいく。ジョージの健気な歌いっぷりもたまらない。と思っているうちに、ジョンとポールの“デューラールー〜”というハーモニーがロマンチックな曲をさらに盛りたてる。ヴォーカルには深いエコーがかけられていて、幻想的な雰囲気も作り出しているが、曲調はポップで爽やか。また、サビでの“カーンカーン”という抜けの良い音はリンゴがドラムのスティックで出したもので、これにもエコーがかけられている。やたらと動きまわるポールのベースも躍動感たっぷりだ。

もともとはビリー・J.クレイマー・ウィズ・ザ・ダコタス[*1]に提供されたもので、このデビュー・シングルはイギリス2位の大ヒットとなった。ちなみにジョンは、この曲のデモ・テープをトイレで録音したそうだ。なぜトイレでだったのかというと、ジョン曰く“音が良くて響くから”。この曲のエコーが深いのは、実はその“トイレ効果”によるものだったのかも。

「3音しかないから、ジョージ向きだと思ったのさ」（ジョン）

「この曲は〈アイ・リアリー・ラヴ・ユー〉[*2]を元にして書いたと思う」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

『THE EARLY BEATLES』（US）　『THE BEATLES'SECOND ALBUM』（JP）　『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

おススメのカヴァー

Billy J. Kramer with The Dakotas『Little Children』（1964）／Fairground Attraction『The Best Of Fairground Attraction』（2002）

[*1] ビリー・J.クレイマー・ウィズ・ザ・ダコタス＝61年にブライアン・エプスタインのNEMSと契約。

[*2] 〈アイ・リアリー・ラヴ・ユー〉＝ステレオズの61年の曲。ジョージが82年にカヴァー。

012

蜜の味

A Taste Of Honey

R.Marlow/B.Scott
1963.3.22（1963.2.11）〔2'01〕
「PLEASE PLEASE ME」

映画音楽やミュージカルなど、先にインストゥルメンタルが発表されて、後で歌詞が付く場合がある。この曲もそう。同名映画の主題歌としてボビー・スコット&コンボによるインスト曲が同名映画のサウンドトラックに収録されて60年に発売されたのがオリジナル。その後、62年6月4日にビクター・フェルドマン・カルテットがインストのままカヴァーし、さらに62年9月17日にレニー・ウェルチによる初のヴォーカル入りカヴァーが発表される、という流れだ。

ビートルズは（というよりもポールは）もちろんレニー・ウェルチをお手本にしている。ロックンロールだけでなく、この手のポピュラー音楽をも平気で取り込んでしまえる貪欲さと雑食性もまたビートルズの音楽性の幅を広げる原動力になったわけだ。発売されてからカヴァーするまでの時間の速さにも目を見張るものがある。

しかしこの曲のような、いかにも白人好みのポップスをジョンが毛嫌いしていたのは有名な話だ。ライヴで演奏する前にジョンはお得意の言い換えで“Waste Of Money（金の無駄）”と紹介していたというし、ポールはポールで“ジョンの嫌いな曲です”と言っていたという微笑ましいエピソードがある。とはいえ、仕上がりは別。ジョンのギターとヴォーカルの援助は見事だし、リンゴのシャッフル気味のドラムもいいアクセントになっている。

デビュー・シングルを除くと、デビュー・アルバムに収録されたポールだけのリード・ヴォーカル曲は、「アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア」とこの曲しかない。

その他の主な収録アルバム
「THE EARLY BEATLES」(US)　「THE BEATLES'SECOND ALBUM」(JP)　「LIVE AT THE BBC」

013

ゼアズ・ア・プレイス

There's A Place

McCartney/Lennon
1963.3.22（1963.2.11）［1'49］
『PLEASE PLEASE ME』

あれ、「プリーズ・プリーズ・ミー」かな？　出だしの一音で一瞬そんなふうに思ってしまう。しかも、ギターもハーモニカも曲の展開も、両者はどことなく似ている。でも、大きく違うのが、歌われている内容だ。

一言でいうと、「プリーズ・プリーズ・ミー」が動的・性的なレノンだとすると、「ゼアズ・ア・プレイス」には静的・内省的なレノンの心情が歌い込まれている。相手への想いや不満をそのままぶちまけるのではなく、自分の内面へと目を向けた内容には、その後の醒めて冴えて達観したレノンイズム――「ひとりぼっちのあいつ」「トゥモロー・ネバー・ノウズ」「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」などへの片鱗がすでに見られる。さらにソロ・ナンバーの「マインド・ゲームス」（73年）も、だ。

ということで、演奏だけ追っかけていると、ちょっとマイナー調の、典型的な初期ビートルズ・サウンドというだけで終わってしまうけれど、ソロ以降も含む"ジョン・レノンの音楽活動"を通してビートルズ・ナンバーを俯瞰して見ると、最初に挙げられる重要なメッセージ・ソングはこの「ゼアズ・ア・プレイス」となるだろう。リトル・リチャード[*1]直伝といわれるファルセットを取り入れた最初のオフィシャル曲でもある。ちなみに曲名は、ミュージカルの古典『ウェスト・サイド物語』[*2]の挿入歌"Somewhere（There's A Place For Us）"から拝借したらしい。

「モータウンのブラック・ミュージック風。歌詞はいつものレノン風さ」（ジョン）

「その"場所"は、頭の中にある。知的なレベルのことを書いているんだよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES'SECOND ALBUM』（JP）　『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

オススメのカヴァー

The Kestrels『Smash Hits! From The Kestrels』（1963）／Flamin' Groovies『Now』（1978）

---

*1リトル・リチャード＝51年にデビュー。62年にビートルズと競演。
*2『ウェスト・サイド物語』＝57年に初演されたブロードウェイ・ミュージカル。

014

ツイスト・アンド・シャウト

Twist And Shout

P.Medley/B.Russel
1963.3.22（1963.2.11）〔2'33〕
『PLEASE PLEASE ME』

もはやビートルズのオリジナルと言ってしまってもいい。そのくらい仕上がりは完璧。ビートルズがカヴァーした曲ではこれが間違いなくベストだ。

オリジナルは61年にフィル・スペクターのプロデュースによりトップ・ノーツ*1が発表（クッキーズも参加）。作者の1人、バート・ラッセル（発売時はバート・バーンズ名義）は"曲を台無しにした"とスペクターに告げ、みずからのプロデュースでアイズレー・ブラザーズ*2のヴァージョンを出し直したという。

その2曲を聴いてみると、"翻訳"がどれほど飛躍し、かつ優れているかがわかる。ビートルズが手本にしたアイズレー・ブラザーズのヴァージョンはファルセットや高音を多用し、ホーン・セクションを大々的に起用した快活なお祭りソングだが、ビートルズは土台をロックンロールで地固めし、そこに誰もかなわないジョンの強烈なシャウトを乗せたのだから。それにしても、何度聴いても ジョンの声はすごい。すごすぎる。1日で仕上げられたアルバム・セッションの最後に演奏されたのは、幸運だったというべきだろう。ジョンは、のど飴をなめながらこの曲のレコーディングに臨んだそうだが、2テイク目の途中でもう喉が限界だったことが、このテイク1の最後の最後のジョンの一声を聴けばわかる。

ビートルズ・サウンドとして吸収・消化するスピードの速さもさることながら、ジョンのシャウトにポールとジョージの後追いコーラスが絡んでくる声の混ざり具合も見事。あまりの熱量に汗が吹き出そう。

デビュー・アルバムの曲の中でも人気が高かったため、イギリスでは63年7月12日にこの曲をタイトルにしたデビューEPが発売された。

その他の主な収録アルバム

『THE EARLY BEATLES』（US）『MEET THE BEATLES!』（JP）『ANTHOLOGY 1』『THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL』『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

---

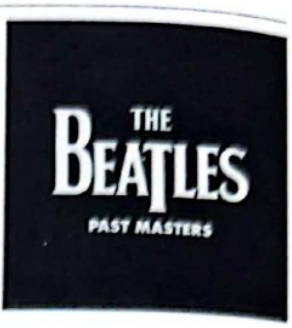
*1トップ・ノーツ＝60年に結成。「ツイスト・アンド・シャウト」は4枚目のシングル。
*2アイズレー・ブラザーズ＝54年に結成され、58年にデビュー。

015

フロム・ミー・トゥ・ユー

From Me To You

McCartney/Lennon
1963.4.11（1963.3.5）［1'56］
シングル&『PAST MASTERS』



いきなり否定的な見解になってしまうが、ビートルズのイギリスのオリジナル・シングル（全22枚）の中で最もありきたりなのがこの曲だと常々思っている。6週連続全英1位の大ヒット曲だし、知名度も高いのに、なぜそう思うのか——。歌詞も曲調も変化に乏しく単調に聞こえるからだ。とはいえ、もちろんポールが言うように、サビ（ミドル・エイト）のコード進行は斬新だとは思うけれど…。

なんというか、シングルA面曲を並べてみた時に、ほかの曲は、メロディ、サウンド、イントロ、アウトロ、ヴォーカルその他、必ずどこかに耳に意識が集中する“何か”がある。でもこの曲は、シングルA面としての印象が薄く、シングルにするには何かが足りないと思うのだが、いかがだろうか。この曲の前後に発売されたシングルが強力すぎたのだろうか。この曲の発展形だと勝手に思っている「恋する二人」ですらイギリスではシングルにならなかったわけだし、カップリングの「サンキュー・ガール」に歌詞と曲調が似ているのも、そう思わせる一因なのかもしれない。ビートルズのイギリスでのオリジナル・シングルの格付けを考えると、相撲でいえば横綱・大関じゃなくて小結ぐらいの印象である。好きな方には申し訳ないけれども…。

「ミズリー」のところで触れたヘレン・シャピロとのツアー後半の2月28日、イギリスの音楽誌『NME』の読書欄“From You To Us”をヒントにジョンとポールがツアー・バスの中で書き、3月5日に録音するという速さだった。

「初期のツアーのバンの中で書いた。最初はもっとブルースっぽかったな」（ジョン）

「重要な作品だよ。ミドル・エイトは曲作りの出発点になり、
僕らは一歩進んだ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1962-1966』『THE BEATLES 1』『MEET THE BEATLES!』（JP）『ANTHOLOGY 1』『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

おススメのカヴァー

Del Shannon『Little Town Flirt』（1963）／Earl Green『VA／Beatles Blues』（2001）

016

サンキュー・ガール

Thank You Girl

McCartney/Lennon
1963.4.11（1963.3.5、3.13）［2'02］
シングル&『PAST MASTERS』

“ファンレターをくれた女の子たちへの感謝の意を込めて書いた”とポールが言っているとおり、「フロム・ミー・トゥ・ユー」と同じく、応援してくれているファンへの返答歌である。当初はシングルのA面用の曲になる可能性があったそうだが、「フロム・ミー・トゥ・ユー」のところでも書いたように、ビートルズのシングルとしては最も地味な2曲だと思うので、B面収録が妥当、だろう。

3月5日に行なわれたシングルのセッションは難航し、中断やジョンのハーモニカだけの演奏も含めて28テイクも録られている。それでもなかなかうまく仕上がらず、28テイクのうちの6テイクをジョージ・マーティンが編集して1曲にまとめたという。ここまでツギハギだらけの曲はほかにない。しかもわずか2分の曲なのに、だ。ツアーの合間で集中力が欠けていたのかもしれないが、わずか1日のセッションでは、アレンジを練る時間がおそらく取れなかったのだろう。手探りで進めざるを得なかったに違いない。もうひとつ、エンディングに入れることになったリンゴのドラム・ソロも、仕上がるまでに手を焼いたようで、ドラム・ソロが始まるところの繋ぎでいきなりテンポが速くなる（気がする）。

つい辛口になってしまったけれど、「フロム・ミー・トゥ・ユー」と「サンキュー・ガール」は、ジョンとポールが“ウー”とか“アウ！”とか言いながら2人で楽しげに歌う単純なポップ・ソングなのだから、初期ビートルズの象徴的な曲として単純に楽しむべきなのかも。

「初期の一連の共作はいい練習になった。この曲名だと多少は僕寄りかな」（ポール）

「シングル用の曲を書こうと頑張ったけどダメだった。
だからB面になったのさ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
『THE BEATLES' SECOND ALBUM』(US)　『THE BEATLES'SECOND ALBUM』(JP)　『LIVE AT THE BBC』
おススメのカヴァー
The Smithereens『B-Sides The Beatles』(2008)／The Two Of Us『Please Please Me』(2008)

017

シー・ラヴズ・ユー

She Loves You

Lennon/McCartney
1963.8.23 (1963.7.1) [2'20]
シングル&「PAST MASTERS」

常に前進あるのみ。まるで日本一の無責任男（植木等）のようだが、ビートルズもしかり。カヴァー曲にも独自性を盛り込もうという精神で向かい、“オリジナルであること”を常に目指して過去をなぞろうとはしなかった。だからこそ、21世紀の現在でもこうして213曲をまとめた本なんかも作れちゃうわけだが。

ということで「シー・ラヴズ・ユー」の革新性を挙げてみると、まずはイントロのドラム2連打だけで歌い出す展開、いきなりサビで始まる展開、“イェーイェーイェー”のコーラス、そして3人称の視点で書いた歌詞。ざっと思い浮かぶだけでもこれだけある。

「ラヴ・ミー・ドゥ」「プリーズ・プリーズ・ミー」「フロム・ミー・トゥ・ユー」に続く4枚目のシングルだが、こうして並べてみると、63年半ばになって、曲作りがひとつ突き抜けた感がある。本書の後半、213曲以外の準オフィシャル曲紹介に多いBBC出演時の演奏曲も含め、63年6月から9月に録音された曲に、ブリティッシュ・ビート・バンドとしての最初のピークが表われていると思う。また、63年はまだジョンとポールが2人で顔を突き合わせて曲を書いていた時期だが、この曲は3人称のアイディアを含め、ポール寄りの印象が強い。

個人的にも最初に意識的に聴いた曲なので、愛着も深い。家にあった東芝音工の赤いドーナツ盤を耳にした時の印象は今でもよく憶えている。ダンゴ状となった音の塊から耳に届いた電気音。エレキ・ギターの音色を意識した最初の曲だった。

「ボビー・ライデル*を思い浮かべてね。人称代名詞にこだわったんだ」（ポール）

「3人称はポールのアイディアかな。“Woo”は〈ツイスト・アンド・シャウト〉からだ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1962-1966」「THE BEATLES 1」「THE BEATLES' SECOND ALBUM」(US)　「MEET THE BEATLES!」(JP)　「ANTHOLOGY 1」「THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL」「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

おススメのカヴァー

Swinging Blue Jeans「Shakin'」(2002)／タケカワユキヒデ「Chronicle 2」(2007)

＊ボビー・ライデル＝58年に音楽活動を開始し、59年に「キッシン・タイム」でデビュー

018

アイル・ゲット・ユー

I'll Get You

Lennon/McCartney
1963.8.23（1963.7.1）［2'04］
シングル&「PAST MASTERS」

シングル「シー・ラヴズ・ユー」のB面に収録された、同じく"ビートルズとの出会いの曲"。最初に聴いた時に"電気ショック"を受けたのはA面のほうだったけれど、惹かれたのはなぜかこの「アイル・ゲット・ユー」だった。

だから、ビートルズで最も好きな曲は？などというこの世で最も難しい質問（？）をされた時にはこの曲を挙げることが多い。好きな理由は、"imagine"という歌詞が使われた唯一のビートルズ・ナンバーだから。というのはウソで、単純にジョンとポールが2人で楽しげに歌っているから。じゃあ「フロム・ミー・トゥ・ユー」はどうなんだ、という話だけど、それとは大きな違いがある。こっちはジョンの低音がいいんだよね。ポールの高音との混ざり具合も含めて。ずーっと鳴り続けるハーモニカもいい。「ラヴ・ミー・ドゥ」と同じく、ちょっとまったりしたテンポで、ハーモニカも使われたブルージーな曲が好きなだけなのかもしれないが。

不思議なもので、今「アイル・ゲット・ユー」を聴きながらこの一文を書いていても、最初に家で聴いた時の場面がすぐに目に浮かんでくる。音楽の大きな効用と言われればそれまでだけど、一瞬にして40年以上前に時代を遡れるんだから、そんな幸せはない。80年代にポールがこの曲を好きだと言っているのを耳にした時はほんとにうれしかった。2005年のツアーでこの曲を演奏してくれた時にはさらに感謝感激。今後、どのくらい可能性があるのかはわからないが、日本でもぜひ聴いてみたい。

「"imagine"や"picture"はルイス・キャロル[*1]からきてるんだよ。
"to pretend"の"pretend"のコードはジョーン・バエズ[*2]の
〈オール・マイ・トライアルズ〉から頂いた」（ポール）

その他の主な収録アルバム
「THE BEATLES' SECOND ALBUM」(US)　「ANTHOLOGY 1」「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

おススメのカヴァー
Michael Carpenter「Soop #1 - Songs Of Other People」(2001)／Dennis Darling「The Beatles Reheated」(2009)

[*1] ルイス・キャロル＝イギリスの作家・詩人・数学者。
[*2] ジョーン・バエズ＝60年にデビューしたフォーク歌手。ボブ・ディランと親交が深い。

019

イット・ウォント・ビー・ロング

It Won't Be Long

Lennon/McCartney
1963.11.22（1963.7.30）［2'11］
『WITH THE BEATLES』

1曲目はどんな始まり方なのか。アナログ盤（LP）に針を落とした瞬間のワクワク感は、60年代の“現役世代”にとって、ビートルズのアルバムを聴く大きな楽しみだっただろう。でも、“飛ばし聴き”や“楽曲買い”が普通になった21世紀の現在でも、疑似体験は十分にできる。

デビュー・アルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』のオープニングはカウントで始まったが、セカンド・アルバム『ウィズ・ザ・ビートルズ』のオープニングを飾るこの曲は、いきなりヴォーカル始まりである。しかもお定まりの“Yeah”入りだ。とはいえ、「イット・ウォント・ビー・ロング」は、オリジナル・アルバムの1曲目としては最も知名度は低いのではないだろうか。ニール・ヤング*が人前で演奏した最初のビートルズ・ナンバーがこれだったというけれど、イギリスのマージービート系を含めてカヴァーも少ないし。

“シングルにしようと思ったけど叶わなかった”とジョンはこの曲について語っているが、ところどころにメロディアスなフレーズの入る魅力的なロックだと思う。個人的なツボは、エンディングの2度目の“Yeah”のポールとジョージの後追いコーラスでポールが音を外すところ。初期は歌詞のミス（ジョンに多い）などがそのまま修正なしに残されている場面が多い。オタクの性なのか、そういうちょっとした粗探しがつい楽しくなってしまう。その生々しさがたまらないのだ。

「シングル用に書こうとしたが、完璧には仕上がらなかった」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『MEET THE BEATLES』（US）　『THE BEATLES'SECOND ALBUM』（JP）

おススメのカヴァー

Redd Kross『Visionary』（Single）（1993）／The Smithereens『Meet The Smithereens』（2007）

---

*ニール・ヤング＝バッファロー・スプリングフィールド、CSN&Y（クロスビー、スティルス、ナッシュ&ヤング）を経て69年にアルバム『ニール・ヤング』でソロ・デビュー。

オール・アイヴ・ゴット・トゥ・ドゥ

All I've Got To Do

Lennon/McCartney
1963.11.22（1963.9.11）［2'01］
『WITH THE BEATLES』

『プリーズ・プリーズ・ミー』収録の「アンナ」（アーサー・アレキサンダー作）のビートルズ・ヴァージョンを作ってみようとジョンは思ったのかもしれない。淡々としたマイナーな曲調や陰りのあるヴォーカル、ドラムのリズム・パターンがそっくりである。ドラムのリズム・パターンはその後「イン・マイ・ライフ」に受け継がれている。ジョンはさらに歌詞も、ジョージに歌わせた「ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット」に続いてバディ・ホリー[1]の「ワーズ・オブ・ラヴ」（64年に『ビートルズ・フォー・セール』でカヴァー）から拝借している（"whisper in your ear/the words you long to hear"の箇所）。

前期の（アイドル時代の）ビートルズは、ツアーや映画制作やテレビ・ラジオ出演なども多く、限られた時間の中で曲作りを行なわなければならなかった。そのため、アルバムのこうした埋め草的な1曲も必要だったというわけだが、とはいえ、ジョンがよく言う"ゴミ箱行きの曲"かというと、さにあらず。たとえばBBC出演時の「トゥ・ノウ・ハー・イズ・トゥ・ラヴ・ハー」や「アイ・ジャスト・ドント・アンダースタンド」などと同じく、ジョンの声の魅力を堪能できる渋い佳作なのである。

聴くべき大きなポイントは、初めて取り入れられたジョンのハミング。ポールの鼻歌まじりのハミング（「マザー・ネイチャーズ・サン」ほか）も軽やかでいいけれど、ジョンのは深みがある。

「スモーキー・ロビンソン[2]風にやろうとした曲だ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『MEET THE BEATLES』（US）　『BEATLES NO.5』（JP）

おススメのカヴァー

Louise Goffin『Kid Blue』(1979)／Andrew Gold『Copy Cat』(2008)

---

[1] バディ・ホリー＝56年にデビュー。57年にクリケッツを結成。59年に事故死した。
[2] スモーキー・ロビンソン＝ミラクルズのリーダーとして58年にデビュー。

021

オール・マイ・ラヴィング

All My Loving

Lennon/McCartney
1963.11.22（1963.7.30）［2'06］
「WITH THE BEATLES」

ポールの代表曲。ビートルズ初期、63年以前のポールといえば、まずはこれ、後は「アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア」である。ポールの曲をほとんど褒めないジョンも、この曲には脱帽した。63年5月18日から6月9日にかけて行なわれたロイ・オービソンなどとのツアー中に書いた曲で、「P.S.アイ・ラヴ・ユー」に続く"手紙で愛を告白したい曲"シリーズの2曲目となる。歌詞も両者はよく似ている。

メロディアスでポップなロックはポールの得意とするところで、ビートルズ解散後も「アナザー・デイ」（71年）や「ヤング・ボーイ」（97年）ほか、枚挙に暇はないが、この曲のもうひとつの肝がジョンのリズム・ギターの3連符弾きであるのは言うまでもない。

ところで、人の縁は面白い。「プリーズ・プリーズ・ミー」が当初ロイ・オービソン風の曲だったことは先に触れたが、敬愛していたロイとのツアーで縁ができ、四半世紀後にジョージがロイやボブ・ディラン[1]らとトラヴェリング・ウィルベリーズを結成することになるのだから。ポールが64年と65年のツアーを一緒に回ったムーディー・ブルース[2]のデニー・レインと70年代にウイングスを組むことになったのもそうだ。曲の縁もしかり。「オール・マイ・ラヴィング」が収録された『ウィズ・ザ・ビートルズ』が発売されたのは63年11月22日。その半世紀後となる2013年11月21日、まさかポールが東京ドームでこの曲を演奏するなんてね。

「ツアー・バスの中で初めて歌詞から書いた曲。これ以降もまずないね」（ポール）

「残念ながらポールの曲。悔しいほどいい。でも、すごくうまいギターは僕」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1962-1966」「MEET THE BEATLES」（US）「MEET THE BEATLES!」（JP）「ANTHOLOGY 1」「THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL」「LIVE AT THE BBC」

おススメのカヴァー

Suzy Bogguss & Chet Atkins「VA／Come Together：America Salutes The Beatles」（1995）／Jim Sturgess「Across The Universe：Music From The Motion Picture」（2007）

---

[1] ボブ・ディラン＝62年にデビューした"フォークの神様"。

[2] ムーディー・ブルース＝64年に結成。デニー・レイン在籍時の「ゴー・ナウ」（64年）は英1位。

022

ドント・バザー・ミー

Don't Bother Me

Harrison
1963.11.22（1963.9.12）［2'26］
「WITH THE BEATLES」

ジョンとポールというあまりに強力・強烈・最高・最大のメロディメイカーがすぐ目の前にいて、しかも2人でタッグを組んでいるのだから、そもそも曲を書こうという気にもならないだろう。相撲で喩えていうならば、大鵬と柏戸を目指す貴ノ花のような心境だろうか。でもジョージは一歩踏み出してみた。“自分にも書けるかどうか試してみよう”と。そうして初めて形になったのがこの「ドント・バザー・ミー」である。

ジョンが結成したビートルズの前身バンド、クォリーメン*時代に制作されたビートルズ最古のオフィシャル音源として90年代に陽の目を見た「イン・スパイト・オブ・オール・ザ・デインジャー」でもポールとの共作扱いでクレジットされてはいたが、当時はもちろんほとんど知る人のいない音源。ジョージがビートルズの作品に作曲者として単独で名前が載ったのは、63年のこの曲が最初だった。

間奏では、ジョージの曲で目立つポールのベースが早くも登場。ポールが叩くクラベス（拍子木）もいいアクセントになっている（ちょっとうるさいけど）。

この曲を聴いて思う。ジョージの持ち味は、レノン＝マッカートニーにはない独特のビート感だと。万人に必ず届くような曲ではないとは思うけれど、60年代のマージービート系のバンドや、それこそ90年代以降のビートルズに影響すら受けていないバンドにこそ届くような不思議な魅力がある。そしてその感覚は、後の「サボイ・トラッフル」や「オールド・ブラウン・シュー」にも共通している。

「初めて書いた曲。寝込んでいたので、このタイトルになったんだろう」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム
「MEET THE BEATLES」(US)　「MEET THE BEATLES!」(JP)
おススメのカヴァー
The George Martin Orchestra「Off The Beatle Track」(1964)／The Bad Boys「Meet The Bad Boys」(1973)

---

*クォリーメン＝57年3月にジョンがピート・ショットンと結成。

023

リトル・チャイルド

Little Child

Lennon/McCartney
1963.11.22（1963.9.12、10.3）［1'45］
「WITH THE BEATLES」

ビートルズ解散後、メキシコでは独自のEPが多数発売されている。ジョージだけの曲を選んだものや、リンゴだけのものなどもあって、それはそれでファンにはありがたい。なんでそんなことを書いたかというと、リンゴの曲だけを収録したそのEPを発売する際に選曲を頼まれたジョンが、間違ってこの「リトル・チャイルド」を入れてしまったからだ。

ジョンがなぜ勘違いしたかというと、そもそもこれはジョンとポールがリンゴのために書いた曲だったからだ。ポールが書いた手書きの歌詞が残っているので、作詞はポール（がメイン）かもしれない。レコーディングではジョンが歌っているが、ローリング・ストーンズ[*1]にあげた「アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン」（ストーンズが63年11月にセカンド・シングルとして発表）はリンゴに歌わせているので、この曲はジョンが自分で歌うことにしたのかもしれない。（勝手な妄想だけど、ジョンならきっとそうするはずだ）。それでもこの曲のジョンの声は、どことなくリンゴに似ている。

「サンキュー・ガール」に近い単純なロックンロールだが、ギターが前面に出ていない（というかほとんど隠れている）せいか、妙なラウンジ感があって、サブカル好きに好まれている曲でもある。後からダビングされたハーモニカもいい味を出している。そして、この曲の続編的な位置付けになるのが「ぼくが泣く」だと思っている。

ステレオ・ミックスはかなり投げやりというか、雑。とくに初期はモノ・ミックスが優先されていたことがよくわかる。

「たしかリンゴのために2人で書いた。
力んで書いた曲はうまくいかなかったな」（ジョン）

「エルトン・ヘイズ[*2]のメロディを頂戴した。
“これから2時間でリンゴの曲を”と」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「MEET THE BEATLES」(US)　「MEET THE BEATLES!」(JP)

おススメのカヴァー

Jackie Lynton「Little Child」(Single) (1964)／The Inmates「Meet The Beatles」(1987)

[*1] ローリング・ストーンズ＝63年にデビュー。「アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン」は英12位
[*2] エルトン・ヘイズ＝イギリスの俳優兼ギタリスト。代表作は「ロビン・フッド」（52年）ほか

024

ティル・ゼア・ウォズ・ユー

Till There Was You

M.Wilson
1963.11.22（1963.7.30）［2'14］
『WITH THE BEATLES』

「蜜の味」パート2。とりあえずそう言っておいても間違いはない。ブロードウェイ・ミュージカル『ザ・ミュージック・マン』（57年）用に書かれた曲で、オリジナル・キャストによるアルバムに収録されたロバート・プレストンとバーバラ・クックがオリジナルである。

もちろんポール好みのナンバーで、60年のアニタ・ブライアント、または61年のペギー・リーのヴァージョンを参考にポールはデビュー前から歌っていた。63年11月4日の“ロイヤル・バラエティ・パフォーマンス”[*1]や64年2月9日の『エド・サリヴァン・ショウ』[*2]でも披露されたので、日本のファン以上に英米のファンに馴染みが深い曲かもしれない。というよりも、そういう“特別な場”で披露するほどだから、ポールにとってはある意味“切り札”、つまり自信を持って送り届けられる曲でもあるのだろう（これもまた勝手な妄想だけど、ポールの表情がそう言っている）。

冒頭で“とりあえず”と書いたのは、「蜜の味」とは曲調が大幅に異なるからだ。「蜜の味」はちょっとジメジメしているが、こちらは明るく開放的。何よりジョージの弾くガット・ギターのクラシカルな音色が格調高さを漂わせている。リンゴの叩くボンゴも洗練された響きで、バックに応えるポールの“この声でみんなオレにヤラれちゃうよね”と言わんばかりの（失礼！）ヴォーカルが実に映える。この曲をポールのオリジナルに変換すると、「アンド・アイ・ラヴ・ハー」そして「アイ・ウィル」になる。

その他の主な収録アルバム

『MEET THE BEATLES』（US）　『THE BEATLES'SECOND ALBUM』（JP）　『ANTHOLOGY 1』『LIVE AT THE BBC』『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

---

*1“ロイヤル・バラエティ・パフォーマンス”＝イギリス王室を迎えてのバラエティ・ショウ。
*2『エド・サリヴァン・ショウ』＝48年から71年にかけて放送されたアメリカのバラエティ番組。

025

プリーズ・ミスター・ポストマン

Please Mister Postman

G.Dobbins/W.Garrett/F.Gorman/B.Holland/R.Bateman
1963.11.22（1963.7.30）［2'34］
『WITH THE BEATLES』

「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」が英米のファンに馴染みが深いとすると、この「プリーズ・ミスター・ポストマン」は日本で人気の高い初期の1曲である。65年のアルバム『ヘルプ！』までは、各国で独自のアルバムやシングルがこれでもかとばかりに発売されていた。日本とアメリカはとくにひどく、いやすごく、イギリスのオリジナル・アルバムからどれほど多くのシングルが生み出されたことか。だからこそ、アメリカのヒット・チャートで上位5位独占とか、100位以内に14曲という二度と破られない記録が作られたわけだが。

この曲も永ちゃん（矢沢永吉）をはじめ、ビートルズとの出会いの1曲として挙げるファンは多い。当時はレコードが高く、買えてもシングル1枚、ちょっと頑張ってお得なEP（4曲入り）か、お正月のお年玉をはたいてLP1枚、というのがやっと。レコードの貸し借りも頻繁だった。当時、曲を知る手段はもっぱらラジオのチャート番組だった。

オリジナルはマーヴェレッツが61年8月に発表した全米1位のデビュー・シングル。ビートルズはそのヴァージョンを手本に即座にカヴァー。62年3月にBBCラジオの音楽番組に初めて出演した際に披露し、オフィシャル・レコーディングと同じくジョンがリード・ヴォーカルを受け持った。ファンに教えられた曲だそうだが、ヴォーカルとコーラスの掛け合いはビートルズとの相性もばっちり。出だしの歯切れの良いサウンド（とくに手拍子）を含め、良質なカヴァーの典型だ。

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES' SECOND ALBUM』（US）　『MEET THE BEATLES!』（JP）　『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

026

ロール・オーバー・ベートーヴェン

Roll Over Beethoven

C.Berry
1963.11.22（1963.7.30）［2'44］
『WITH THE BEATLES』

チャック・ベリーといえばジョンの独壇場。でも「ロール・オーバー・ベートーヴェン」は、デビュー前の61年まではジョンが自分のレパートリーにしていたのに、デビュー後にジョージに譲った曲。おかげで64年の初のアメリカ公演や91年の唯一の日本公演でも演奏された。今やジョージの代名詞的な1曲になった。ちなみにジョージの息子ダニーのお気に入りのビートルズ・ナンバーで、91年の日本公演のステージでは13歳の息子が父親と共演した。ダニーは父親のオリジナルだと思っていたようだが。

56年にシングルとして発売されたロックのスタンダードだが、チャックのオリジナルは凹凸の少ない淡々とした演奏だ。対するビートルズ・ヴァージョンは、出だしのジョージのギターからしてノリはバツグン。お得意の手拍子も大々的に取り入れ、ドラムも変幻自在。ジョージのヴォーカルもダブルトラックにして疾走感あふれる前のめりな姿勢を強調している。さらに、なかなか決まらず苦労したというエンディングには別録りしたギターの一音を配し、掴みのいい、ライヴ映えするロックンロールに仕上げた。間奏の手拍子のズレ具合も最高。

もうひとつ重要なのは、これが「ウィズ・ザ・ビートルズ」のB面トップに収録された曲だということ。CD登場以後は、アルバムの曲順は1曲目と最後の曲以外は重要視されなくなったが、アナログ（LP）時代はA面とB面の1曲目はとくに重要な位置付けだった。ちなみにジョージの"アルバムB面1曲目"は、あと2曲ある。何だ？

その他の主な収録アルバム

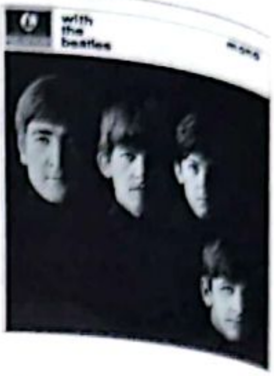
『THE BEATLES' SECOND ALBUM』（US）　『THE BEATLES'SECOND ALBUM』（JP）　『ANTHOLOGY 1』『THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL』『LIVE AT THE BBC』『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

027

ホールド・ミー・タイト

Hold Me Tight

Lennon/McCartney
1963.11.22（1963.9.12）［2'29］
『WITH THE BEATLES』



個人的な話で恐縮だが、早くも出てきてしまった、ビートルズで2番目に嫌いな曲、…いや212番目に好きな曲が。どれが一番好きかという問いにはすぐには答えられないのに。

この曲は、『プリーズ・プリーズ・ミー』のセッションで一度レコーディングされたものの見送りとなり、アレンジを変えて『ウィズ・ザ・ビートルズ』用に再び取り上げられたもの。その経緯だけでも“大丈夫かな、この曲”とメンバーは思っていたのかもしれない。

212番目に好き、といっても、もちろんビートルズとして発表された曲の中での話なので、アウトテイクや他人に贈った曲も入れると、本書のおしまいのほうに出てくる「ザット・ミーンズ・ア・ロット」のような、もっと悲惨な曲もあるにはある。この曲、なんでそんなに苦手なのか――いい機会（?）なので改めて考えてみた。ポイントはいくつかある。まずイントロからの“ズンチャ、ズンチャ”というヘンにノリのいいリズム。次に“it's you, you, you, you”のところのメロディのベタさ加減、そして耳にまとわりつくポールの歌いまわし――主にこの3点だろうか。

金沢明子の「イエロー・サブマリン音頭」の発案者・川原伸司さん（平井夏美さん）、ミュージシャンの杉真理さん、松尾清憲さんとの4人で“定例会”と称して長年ビートルズの与太話（?）をしているけれど、ある時「ホールド・ミー・タイト」の話題になった。すかさず杉さんが一言。“この曲、大好きなんですよ！”――うう、すみません！

「シングル用に作った失敗作。ちょっとシレルズっぽいね」（ポール）

「ひどい曲。全く興味がない」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『MEET THE BEATLES』（US）　『MEET THE BEATLES!』（JP）

おススメのカヴァー

Stackridge『Mr.Mick』（1976）／Evan Rachel Wood『VA／Across The Universe』（2007）

028

ユー・リアリー・ゴッタ・ホールド・オン・ミー

You Really Got A Hold On Me

W.Robinson
1963.11.22（1963.7.18）〔3'00〕
「WITH THE BEATLES」

エルヴィス・プレスリー*やチャック・ベリーやリトル・リチャードやバディ・ホリーなどに比べると、この人は、ビートルズに与えた影響の大きさが表立って語られていないような気がする。スモーキー・ロビンソンのことだ。ジョンが「ジス・ボーイ」や「オール・アイヴ・ゴット・トゥ・ドゥ」をスモーキー風に歌おうとしていたり、同じくジョージが「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス」をスモーキー風に歌おうとしていたり、ソロ以降の「ウー・ベイビー、わかるかい」（75年）や「ピュア・スモーキー」（76年）をスモーキーに捧げていたりするなど、モータウン系のミュージシャンの中で欠かせない1人である。

そして62年11月にスモーキー・ロビンソンをフィーチャーしたミラクルズが発表したこの曲は、213曲の中で唯一ジョンとジョージが一緒に歌ったものだ。2人の息が合わなかったというわけではないだろうが、アルバム・セッションの最初に手をつけた曲だったのに、仕上げにはかなり手こずったようだ。出だしのヴォーカル（“I don't like you～ thinking of you”）やジョンが“Baby”と歌うところ、間奏、エンディングなど、あちこちツギハギして1曲として仕上げられた。アルバム完成間近にも再録音を試みたぐらい時間をかけたのは、スモーキーへの敬意の表われだったのかもしれないけれども。

ジョンとジョージが一緒に歌っているというだけで個人的には十分に満足だけれど、後半の“hold me”の後のブレイクのカッコ良さをはじめ、苦労した甲斐のある深みのあるカヴァー作品となった。

その他の主な収録アルバム
「THE BEATLES' SECOND ALBUM」(US)　「BEATLES NO.5」(JP)　「ANTHOLOGY 1」「LIVE AT THE BBC」

---

*エルヴィス・プレスリー＝54年にデビューした“ロックンロールの王様”。

029

アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン

I Wanna Be Your Man

Lennon/McCartney
1963.11.22（1963.9.12、9.30、10.3、10.23）[1'56]
『WITH THE BEATLES』

ビートルズ（ジョンとポール）がローリング・ストーンズに贈った曲。両者は人気を二分したライバル・バンドだったと言われることがあるけれど、曲作りに関しては、ビートルズのほうが先んじていたし、圧倒的に分があった。

この2組を語る時にまず重要な日として挙げられるのは、63年9月10日。ロンドンのクラブ（スタジオという説もあり）でジョンとポールがミックとキースと顔を合わせ、2人の前であっという間に曲を書き上げる――というのはちょっと出来過ぎた話なので、実際はすでに出来上がっていた曲を披露したのだと思うが、いずれにしても、そんなに簡単に曲が書けるのかと2人に刺激を受けたミックとキースも曲作りに乗り出すことになる。それによって、ブライアン・ジョーンズがリーダーの座を奪われたのは歴史の皮肉だ。そして、ブライアン・ジョーンズがビートルズのラスト・シングル「ユー・ノウ・マイ・ネーム」に参加しているのも面白い縁だとは思う。

ビートルズではリンゴが歌い、ライヴの持ち歌としても色を添えたが、歌詞を覚えるのが苦手だったリンゴには、繰り返しの多いこのくらいの歌詞がちょうどよかったかも。ジョンとポールのコーラスがまたいい。ということで、ビートルズとストーンズがともにオフィシャル・レコーディングした2曲のうちのひとつとなった。もう1曲は「マネー」である。ところで、ボブ・ディランに返答歌「アイ・ウォナ・ビー・ユア・ラヴァー」があるのを知っている人はどのくらいいるのだろうか。

「捨て曲だ。ストーンズにやったんだ。通行人に配るチラシみたいなものさ」（ジョン）

「タイトル・フレーズは〈フォーチュン・テラー〉*から頂戴した」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『MEET THE BEATLES』（US）　『THE BEATLES'SECOND ALBUM』（JP）　『ANTHOLOGY 1』『LIVE AT THE BBC』

おススメのカヴァー

The Rolling Stones 『I Wanna Be Your Man』（Single）（1963）／Suzi Quatro 『Suzi Quatro』（1973）

---

*〈フォーチュン・テラー〉＝ベニー・スペルマンの62年のシングル「口紅のあと」のB面収録曲

030

デヴィル・イン・ハー・ハート

Devil In Her Heart

R.Drapkin
1963.11.22（1963.7.18）〔2'25〕
「WITH THE BEATLES」

イントロのドラムの音色がいいと、聴くたびに思っている。掴みはばっちり。『ビートルズ・フォー・セール』に収録されたカヴァー曲「ミスター・ムーンライト」と同じく、トロピカルな雰囲気を漂わせたマイルドなサウンドが耳に心地良い。ヴォーカルはジョージだし。この曲もステレオ・ミックスは雑だが。

この時期、BBCのラジオ・セッションでジョージは213曲に入らなかったカヴァー曲をたくさん歌っているが、そうした中で『ウィズ・ザ・ビートルズ』に収録されるジョージの曲としてこれが選ばれたのはなぜだろうか。思うに、ジョンとポールのコーラス"あの娘の心の中には悪魔が棲みついている"が先に出てきて、ジョージがリード・ヴォーカルで"でも彼女は魅力的なのさ"と応える掛け合いと曲の構成が面白い、というのがあるからかなと。BBCでの「ヤング・ブラッド」はこの曲よりもヒョウキンな掛け合いが楽しめる曲なので、ジョージが歌うカヴァー曲はそのどっちかにしようと思っていたのかもしれない。

それにしても、R&B系の女性グループ、ドネイズの唯一のシングル曲（62年）――しかもB面曲を引っ張り出してきて、オリジナルよりもメリハリの効いた曲として仕上げるのだから、カヴァー曲を取り上げるセンスの良さには目を見張るものがある。ブライアン・エプスタイン*が経営するレコード店でジョージがそのシングルを見つけ出し、レパートリーに加えたそうだ。ビートルズを介して埋もれた曲を知る機会がこうして増えたことにも感謝、である。

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES' SECOND ALBUM」（US）「THE BEATLES'SECOND ALBUM」（JP）「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

---

*ブライアン・エプスタイン＝ビートルズのマネージャー。
61年11月9日にビートルズと出会い、62年1月24日に5年間の契約を結ぶ。62年4月にNEMSエンタープライズ設立。

031

ナット・ア・セカンド・タイム

Not A Second Time

Lennon/McCartney
1963.11.22（1963.9.11）［2'05］
『WITH THE BEATLES』

「プリーズ・プリーズ・ミー」に「ゼアズ・ア・プレイス」があるなら、『ウィズ・ザ・ビートルズ』には「ナット・ア・セカンド・タイム」がある。どういう意味かというと、ビートルズのデビュー間もないナンバーなのに、まるでジョンのソロのような作風であり、“個”を感じさせる風格のある曲である、ということだ。

「ゼアズ・ア・プレイス」はバンド・サウンドに耳がいく仕上がりだったが、こちらは違う。ジョージ・マーティンがピアノで加わったピアノ主体の曲で、いわゆる初期のビートルズ・サウンドとは一線を画す“音の隙間”を感じさせる仕上がりなのだ。スタジオでレコーディングされたのではなく、ジョンの自宅でのデモ・テイクに音を重ねて肉付けしていったかのようなサウンドと言ったらいいだろうか。

2013年12月にiTunesで限定配信された音源の中に、これに雰囲気がそっくりの曲があった。ジョンが書き、フォーモスト*が63年11月に発表したセカンド・シングル「アイム・イン・ラヴ」のジョンのデモである。まるで70年代後半にニューヨークのダコタ・ハウスの自宅で録音されたかのような曲調と音の空間を感じさせるものだった。もしかしてこの曲も、フォーモストのためのデモ音源か、それを下地に手を加えたものだったのかもしれない。ポールとジョージの不参加説は、それを裏付けるだけの信憑性はある。ほんとにジョンとリンゴとジョージ・マーティンのトリオ・レコーディングだったらすごい。

「エンディングはエオリア終止法だっていうのを読んだけど、
珍しい鳥の名前のように聞こえるね。どこにでもあるコードだよ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『MEET THE BEATLES』（US）　『THE BEATLES'SECOND ALBUM』（JP）

おススメのカヴァー

Robert Palmer『Clues』（1980）／Pretenders『Pirate Radio』（2006）

---

*フォーモスト＝59年9月に結成。63年6月にNEMSと契約し、フォーモストと改名。同年8月にジョン作の「ハロー・リトル・ガール」（英9位）でレコード・デビュー。

032

マネー

Money

J.Bradford/B.Gordy
1963.11.22（1963.7.18、7.30、9.30）［2'47］
「WITH THE BEATLES」

セカンド・アルバムで「ツイスト・アンド・シャウト」と対になる位置にくるのがこの「マネー」である。バレット・ストロングが59年8月に発表したシングル曲のカヴァーで、オリジナルはタンバリンやブラスを前面に出したファンキーなアレンジだが、ビートルズ・ヴァージョンは、最初のヘヴィ・メタルといってもいいような重厚なサウンドに仕上がっている。

ビートルズは、カヴァーに際して歌詞をところどころ変更することがあるけれど、この曲では、オリジナルが“I need money”（金が要るんだ）という言いまわしなのに対し、ジョンは“Now give me money”（いますぐ金をよこせ）と強要している。凄みを効かせたヴォーカルに呼応するかのように。そして、どんどん要求が強くなるかのように白熱するジョンのヴォーカルの凄まじさ！

ジョージ・マーティンも言うように、初期はモノラルのレコーディングを大事にし、ステレオ・ミキシングは重要視しなかったが、この曲に関してはステレオ・ヴァージョンのほうがいい。モノラルのイントロはリンゴがスティックでカウントを取る軽やかな音が入っているだけだが、ステレオのほうには重厚なエレキ・ギターがそこに藪から棒にかぶさってくるからだ。

もうひとつ、「ツイスト・アンド・シャウト」も「マネー」も、オリジナルはともにフェイド・アウトするのに、ビートルズは最後まできっちり演奏しきって、アルバムの幕を閉じている。さすがの構成力だ。

その他の主な収録アルバム

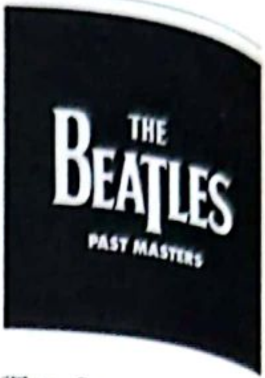
「THE BEATLES' SECOND ALBUM」（US）「THE BEATLES'SECOND ALBUM」（JP）「ANTHOLOGY 1」「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

033

抱きしめたい

I Want To Hold Your Hand

Lennon/McCartney
1963.11.29 (1963.10.17)〔2'25〕
シングル&『PAST MASTERS』



63年までのビートルズの代表曲は？と訊かれたら、まず頭に浮かぶのは「シー・ラヴズ・ユー」と「抱きしめたい」の2曲だろう。64年の"アメリカ制覇"のきっかけになったという意味ではこの曲のほうが一般的な印象は強いかも。

歌い出しのタイミングの難しい曲でもあるが、出だしの"Oh yeah I'll"の"Oh yeah"が効いている。それにしても初期は"イェー"とか"オーイェー"とか"イェーイェーイェー"など掛け声ばかりだが、歌詞が単純なポップスに掛け声はつきもので、聴き手を高揚させる効用がある。初の主演映画『A HARD DAY'S NIGHT』の邦題は『ビートルズがやって来る イェー！ イェー！ イェー！』でもよかったはずだが、それだとすごい違和感。馴染みとは恐ろしい。

開放的なロック調の「シー・ラヴズ・ユー」はポール寄りの曲だが、ゴスペル調の雰囲気を漂わせたこの曲はジョン寄りだろう。"And when I touch you..."などで始まるサビの、それ以前のエネルギッシュな展開に抑揚をつけた緩急自在の流れが絶妙。聴きどころはそのサビの最後の繰り返しだけポールが歌いまわしを変えているところだ。こういう小ワザがニクい。手拍子も抜群の響きだ。

当時東芝音工の担当ディレクターだった高嶋弘之氏が付けた邦題が素晴らしい。オリジナル・シングルの中では最も単語数の多い原題に、よくこの邦題を付けたと思う。次に単語数の多そうなシングル「We Can Work It Out」に「恋を抱きしめよう」と高嶋氏が付けたのは、この曲の邦題のもじりだったのだろうか。

「ジェーン*の家の地下室で、
ポールと睨み合わんばかりに鼻をくっつけて合って作った」(ジョン)

「"睨み合わんばかりに"——まさにそうだった。大切なNo.1ヒットだよ」(ポール)

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1962-1966』『THE BEATLES 1』『MEET THE BEATLES』(US) 『MEET THE BEATLES!』(JP)『ANTHOLOGY 1』『THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL』『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』『LOVE』

おススメのカヴァー

Sparks「I Want To Hold Your Hand」(Single) (1976)／東京ビートルズ『meet the 東京ビートルズ』(1993)

---

*ジェーン＝ジェーン・アッシャー。ポールの恋人。63年4月18日にポールと出会い、67年12月25日に婚約したが、68年7月20日に婚約破棄を公表。

034

ジス・ボーイ

This Boy

Lennon/McCartney
1963.11.29 (1963.10.17) [2'15]
シングル&「PAST MASTERS」

ビートルズのコーラスのうまさは、この曲を聴けばわかる。3部構成のコーラスが印象的で、低音部をジョン、中音部をジョージ、高音部をポールが受け持っているが、最も難しいのはジョージのパート。ビートルズのコーラス3部作「イエス・イット・イズ」「ビコーズ」と合わせて確認してみてほしい。

「シー・ラヴズ・ユー」と同じくホテルのベッドルームで書かれた曲で、ジョンのメロディメイカーとしての才能あふれる作品として人気が高い。映画『ハード・デイズ・ナイト』で「リンゴのテーマ」（演奏はジョージ・マーティン・オーケストラ）として親しまれている曲でもあるが、その後の「恋におちたら」や「グッド・ナイト」をはじめ、ポールが書きそうな曲なのに実はジョンの曲、というのがいくつかある。2人のいわゆるバラード曲の作風の違いは、大きく言うと、ポールは万人向け・開放的で、ジョンは個人向け・内省的だ。

この曲も歌詞を深読みすると面白い。“僕のあの娘を奪っていった”あいつと、“きみに戻ってきてほしいと思っている”こいつを同一人物として見てみると、そこにジョンの二面性――表面的な強さと内面的な弱さを併せ持つ嫉妬心や自虐性が感じ取れるからだ。その作風は「アイム・ア・ルーザー」やソロ以降の「ジェラス・ガイ」（71年）、さらに「アイ・ドント・ウォナ・フェイス・イット」（80年録音）まで続くのだから、案外“深読み”ではないかも。それにしても「抱きしめたい」のB面の当時の邦題が「こいつ」とは、これまたすごい。

「ストレートなR&Rしか書けないと思い込んでいたけど、最高のメロディだな」（ジョン）

「〈トゥ・ノウ・ハー・イズ・トゥ・ラヴ・ハー〉*から3パートを習ったんだよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「MEET THE BEATLES」(US)　「BEATLES NO.5」(JP)　「ANTHOLOGY 1」「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

おススメのカヴァー

The George Martin Orchestra「Off The Beatle Track」(1964)／The Swinging Blue Jeans「The Swinging Blue Jeans At Abbey Road - 1963 To 1967」(1998)

---

*〈トゥ・ノウ・ハー・イズ・トゥ・ラヴ・ハー〉＝フィル・スペクターが結成したテディ・ベアーズの曲（58年 全米1位）。原題は「トゥ・ノウ・ヒム・イズ・トゥ・ラヴ・ヒム」。

213をさらに楽しむ❶

作詞・作曲

John & Paul 162曲☆／George 22曲／Ringo 2曲／John, Paul & Ringo 1曲／
Paul, George & Ringo 1曲／Others 25曲
☆はドイツ語版2曲を含む

メイン・ヴォーカル

John 78曲／Paul 70曲／George 28曲／John & Paul 21曲／Ringo 11曲／John, Pa
& George 2曲／John & George 1曲／Instrumental etc. 2曲

録音年

1962年 4曲／1963年 30曲／1964年 35曲／1965年 33曲／1966年 19曲／1967年
25曲／1968年 36曲／1969年 30曲／1970年 1曲
※開始年に限定

演奏時間

長い曲

Revolution 9（1968）**8'21**／**I Want You (She's So Heavy)**（1969）**7'44**／**Hey Jude**
（1968）**7'07**／**It's All Too Much**（1967）**6'24**／**A Day In The Life**（1967）**5'05**／
Within You Without You（1967）**5'05**／**While My Guitar Gently Weeps**（1968
4'45／**I Am The Walrus**（1967）**4'34**／**Helter Skelter**（1968）**4'29**／**You Know**
My Name (Look Up The Number)（1967/1969）**4'19**／**Come Together**（1969）**4**
17／**Revolution 1**（1968）**4'15**／**Strawberry Fields Forever**（1966）**4'07**／**Let It**
Be（1969/1970）**4'03**／**You Never Give Me Your Money**（1969）**4'02**／**Yer Blues**
（1968）**4'00**

短い曲

Her Majesty（1969）**0'23**／**Maggie Mae**（1969）**0'38**／**Dig It**（1969）**0'50**／
Wild Honey Pie（1968）**1'01**／**Mean Mr. Mustard**（1969）**1'06**／**Polythene Pam**
（1969）**1'17**／**Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band (Reprise)**（1967）**1'18**／
Golden Slumbers（1969）**1'32**／**Carry That Weight**（1969）**1'35**／**Why Don't**
We Do It In The Road?（1968）**1'41**／**I'll Cry Instead**（1964）**1'44**／**Little Child**
（1963）**1'45**／**I Will**（1968）**1'45**／**Misery**（1963）**1'47**／**I'll Follow The Sun**（1964
1'47／**There's A Place**（1963）**1'49**
※（ ）内は録音年

2

1964

037

キャント・バイ・ミー・ラヴ

Can't Buy Me Love

Lennon/McCartney
1964.3.20（1964.1.29、2.25、3.10）［2'11］
シングル&「A HARD DAY'S NIGHT」

64年以前にポールが書いた曲のベスト5のひとつ。初期はジョンがリーダー格だったということは、イギリスで発売されたシングルのA面収録曲を見ればわかる。65年以前は、ジョンが（主体となって）書いた曲がポールを上回っているのだ。

しかし、3枚目のアルバム『ハード・デイズ・ナイト』からの先行シングルとなったこの「キャント・バイ・ミー・ラヴ」は、デビュー曲に次ぐポール作のA面シングル曲だ。ジョン作の「ユー・キャント・ドゥ・ザット」がシングルのB面にまわったということは、こっちのほうが“一般受け”しやすいという判断があったのだろう。ジョンとジョージの後追いコーラスを入れた音源も『アンソロジー1』（95年）で聴くことができるが、シングルA面にするためにより馴染みのいいアレンジにしようと考えたのかもしれない。63年以前にはジョンとポールが仲良く一緒に歌うシングル曲があんなにたくさんあったのに、64年以降は「デイ・トリッパー」（65年）しかない。

“愛はお金じゃ買えない”とポールが歌うビートルズ初のメッセージ・ソングだが、「マネー」で“いますぐ金をよこせ！”と欲をさらけだしたジョンへの返答、ではない。けれどもその主張は、後の「愛のことば」や「愛こそはすべて」へと繋がる架け橋となった。ブルース&ジャズ風味もあるダイナミックなロックは、ライヴでも迫力満点だ。

ポールが2015年4月28日に行なったソロ初の日本武道館公演は、この曲で幕を開けた。

「売春の歌だなんて…うなずけないな。あまりにもかけ離れているよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1962-1966」「THE BEATLES 1」「A HARD DAY'S NIGHT（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUNDTRACK）」（US）「THE BEATLES'SECOND ALBUM」（JP）「HEY JUDE」（US）「ANTHOLOGY 1」「THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL」「LIVE AT THE BBC」

オススメのカヴァー

Ella Fitzgerald「Hello, Dolly!」（1964）／Johnny Rivers「Here We à Go Go Again!」（1964）

038

ユー・キャント・ドゥ・ザット

You Can't Do That

Lennon/McCartney
1964.3.20（1964.2.25）［2'33］
シングル&「A HARD DAY'S NIGHT」

アルバム「ハード・デイズ・ナイト」は、ジョンのソロ作品と言ってしまってもいいぐらい、ジョンの書いた曲が目立っている。しかもジョンが書いた曲の多くは、モータウンをはじめとする黒人音楽を下地にしたR&B風の匂いを感じさせる曲が多い。

63年にもR&B色を感じさせるオリジナル曲はあったが、ブリティッシュ・ビート・バンドとしてのストレートなサウンドは保たれていた。しかし64年は違う。この曲のように、カウベルやボンゴなど、それまでにはあまり使用されていなかった楽器を加えたり、サウンドへの工夫をどこかに施したりと、一筋縄ではいかないサウンドに早くも変化しているのだ。

この曲の肝は、12弦ギターの音色。64年1月にパリでドイツ語版2曲と「キャント・バイ・ミー・ラヴ」をレコーディングした後、ビートルズは2月に初めてアメリカを訪れる。その時にジョージが手にしたのがリッケンバッカーの12弦ギターだった。使用効果はバツグン。イントロでいきなり聞こえてくるめくるめく音色は、ビートルズ・ナンバーで初登場した12弦ギターによるものだ。これを聴くと、ビートルズに影響を受けて12弦ギターを手にしたというバーズ[*1]の「ミスター・タンブリン・マン」のイントロが頭に浮かんでくる。

もうひとつ聴きどころがある。間奏前のジョンのなりふり構わぬシャウトと、それに続く同じくジョンの“リード・リズム・ギター”だ。続編（?）が「ジ・エンド」の後半で聴ける。

「ウィルソン・ピケット[*2]を目指した曲。
ミドルが今ひとつだけど、メロディはいい」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES' SECOND ALBUM」（US）　「ANTHOLOGY 1」「THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL」「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

おススメのカヴァー

Nilsson 「Pandemonium Shadow Show」（1967）／Ian Gomm 「Summer Holiday」（1978）

[*1] バーズ=65年にボブ・ディランの「ミスター・タンブリン・マン」（英米1位）でデビュー。

[*2] ウィルソン・ピケット=60年にファルコンズに加入。62年にソロ・デビュー。

039

ア・ハード・デイズ・ナイト

A Hard Day's Night

Lennon/McCartney
1964.7.10（1964.4.16）［2'29］
シングル&「A HARD DAY'S NIGHT」

これはジョンの、というよりビートルズの初期代表曲。レコード・デビューしてまだ1年半。映画撮影とレコーディングとツアーを一緒くたに行なわないといけなかったアイドル時代のビートルズ。結果的には時間がなかったからよかったのだろう。頭も体も常にフル回転。そりゃクタクタになる。しかもこの時は、アルバムの埋め草的な曲をでっちあげて作るというわけにはいかなかった。なにせ、映画の主題歌が撮影1ヵ月後になってもまだできていなかったのだから。しかし思わぬタイミングはあるものだ。何かないかと無意識にアンテナも張っていたに違いない。

連日連夜の撮影で疲れきったリンゴの何気ないつぶやき“It's been a hard day”──周りを見渡したらすでに夜だったので、“'s night”。すかさずジョンが“それだ！”と。お抱え運転手の一言が元になったとか、ほかにもいくつか説はあるが、それはそれとして、こうして映画主題歌の出来上がり。といってもタイトルだけで曲ができたわけじゃないわけで、“Help!”の心境で作ったジョンの傑作、である。

出だしの天才的アイディア＝不協和音一発に、ジョンにはキーが高くて歌えなかったポールのパートやら12弦ギターやら、あちこち聞こえるパーカッションやら、信じ難いほどの創意工夫が盛り込まれ、曲としても、アルバムのオープニングとしても、もちろん映画主題歌としても、最初の一音から最後の12弦ギターの音まで、息もつかせぬ展開が刺激に満ちている。

「リンゴのおかしな言い間違いがタイトルになった。
ルイス・キャロルの味わいがあるね」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1962-1966」「THE BEATLES 1」「A HARD DAY'S NIGHT（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUNDTRACK）」（US）「ANTHOLOGY 1」「THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL」「LIVE AT THE BBC」

おススメのカヴァー

Peter Sellers「A Hard Day's Night」（Single）（1965）／Diana Ross & The Supremes「Motown Sings The Beatles」（1991）

040

恋する二人

I Should Have Known Better

Lennon/McCartney
1964.7.10（1964.2.26）［2'41］
「A HARD DAY'S NIGHT」

「抱きしめたい」に続く名邦題。“もっとよく知ってりゃよかったのになあ”というジョンの想いを、「恋する二人」と、たぶんちょっとほろ苦く感傷的な曲調をイメージして付けたこれまた高嶋弘之氏の手腕である。しかも日本では64年の映画公開時期にシングルのA面曲としても独自に発売されたため、「抱きしめたい」に次ぐ大ヒットともなった。

映画『ハード・デイズ・ナイト』は、タイトル曲よりも、むしろこの曲がなければ始まらない。そんなことも思わせる初期ビートルズ・サウンドの魅力――ジョンのハーモニカ＋ジョージの12弦ギター＋軽く晴れやかなポップ・サウンドが詰め込まれている。

とくにこの曲の聴きどころとなるポイントは、まずはジョンの裏声だ。“And when I ask you to be mine”の“mine”に引っ掛けたまま続く“ア、ハ、ハイ（ン）”の箇所の艶やかさといったら。ついこの曲と比較したくなる「フロム・ミー・トゥ・ユー」の1番の“If there's anything I can do”の“I can do”のジョンの裏声もいいんだけれど、やっぱり、こっちの「恋する二人」のほうがグッとくる。

もうひとつは“Can't you see, can't you see?”のフレーズ。たとえば「ヘイ・ブルドッグ」の“You can talk to me”もそうだが、ジョンは聴き手に向かってこういう呼び掛けをたまにすることがある。それをあの声でやられるともうダメ。かなわない。

「何のメッセージも持たないただの歌さ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
「A HARD DAY'S NIGHT (ORIGINAL MOTION PICTURE SOUND TRACK)」（US）　「HEY JUDE」（US）

おススメのカヴァー
The Naturals「I Should Have Known Better」(Single) (1964)／She & Him「Volume One」(2008)

041

恋におちたら

If I Fell

Lennon/McCartney
1964.7.10（1964.2.27）［218］
『A HARD DAY'S NIGHT』

ジョンが書いた初期バラードの代表曲。ジョン自身は「イン・マイ・ライフ」の原型と言っているが、「ジス・ボーイ」を発展させた曲ともいえる。いきなり歌い出される出だしの掴みもばっちりだ。

このノスタルジックなバラードを、ジョンとポールがほとんど最初から最後までずっと一緒に歌っていること——それが何よりうれしい。主旋律を交互に取り合う展開も印象的だ。歌うのはちょっと難しいけれど。しかもレコーディングの時には2人の希望で1本のマイクを挟んで歌ったという。それはぜひ見てみたかった！　曲調はまるで違うが、「ユー・ノウ・マイ・ネーム」もきっと同じように歌ったに違いない。ちなみにレコーディング現場に最も立ち会いたかったのは、ジョンとポールが2人だけで演奏した「ジョンとヨーコのバラード」（その曲が出てきたらまた書きます）。

アメリカと日本では「アンド・アイ・ラヴ・ハー」とのカップリングによる独自のシングルが発売された。日本では、とくに64年から65年にかけて多数のシングルが生み出されたが、その中でも「アンド・アイ・ラヴ・ハー」とのカップリングは最強・最高・最良の組み合わせ。同じくもうひとつ最高なのは、67年の「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」と「ペニー・レイン」。どちらもジョンとポールが同じテーマで競いあったかのように見える。こっちはロマンチックなバラード対決で、67年のシングルは"リヴァプールの少年時代"がテーマ。

「ジョンがきれいなバラードをたくさん作っていることをみんな忘れがちだよね」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『A HARD DAY'S NIGHT（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUND TRACK）』（US）　『SOMETHING NEW』（US）
『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

オススメのカヴァー

Peter & Gordon『Somewhere』（1966）／竹内まりや（with BOX）『Turntable』（2019）

042

すてきなダンス

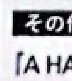
I'm Happy Just To Dance With You

Lennon/McCartney
1964.7.10（1964.3.1）［1'55］
『A HARD DAY'S NIGHT』

ジョンとポールは、セカンド・アルバム『ウィズ・ザ・ビートルズ』の「リトル・チャイルド」で“僕と踊ってくれないか”とリンゴに歌わせようとしたが、『ハード・デイズ・ナイト』収録のこの「すてきなダンス」では、ジョンが“君と踊るだけで僕は幸せなんだ”とジョージに歌わせている。ジョンは気恥ずかしくて自分では歌えなかったと言っているが、それは歌詞の内容についてそう感じたのだと思う。ジョージはまだ曲を書いていなかったので、アルバムと映画に活躍の場を与えようとしたのだろう。

普通にジョンとポールが一緒に歌ってもサマになったと思うが、この後にもあちこちに出てくる“ジョージの曲で張り切るポール”じゃなくて、この曲ではジョンの演奏がいい。8ビートのリズムに16ビートを正確に刻むコード・カッティングの妙は、「オール・マイ・ラヴィング」と並ぶ名演。これぞリッケンバッカーの音、である。映画『ハード・デイズ・ナイト』でその“醍醐味”を堪能できるが、耳でジョンのギターのカッティングだけを追ってみると、まるで目の前でジョンが弾いているような錯覚にとらわれる（気がする）。最後の“オー！”の一声がまたいい。

日本盤『ハード・デイズ・ナイト』は、曲目はオリジナルと同じだが、ジャケットにはジョージがこの曲を歌う映画の一場面が使われているので、マニアには人気が高い。「すてきなダンス」は日本独自のシングルA面曲にもなり、そこにも同じくジョージが歌う映画の一場面が使われている。



「自分たちで歌うつもりはなかったよ。ファンに取り入ってるみたいだろ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『A HARD DAY'S NIGHT（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUND TRACK）』（US）　『SOMETHING NEW』（US）

おススメのカヴァー

The Cyrkle『Neon』(1967)／Backman & Cummings『Jukebox』(2007)

043

アンド・アイ・ラヴ・ハー

And I Love Her

Lennon/McCartney
1964.7.10（1964.2.27）［2'28］
『A HARD DAY'S NIGHT』

　決してジョンが多作だったというわけではないけれど、64年まではビートルズのオフィシャル曲は圧倒的にジョンが書いた曲のほうが多い。『ハード・デイズ・ナイト』はほとんどジョンのアルバムだと言っていいぐらいだと先に書いたけれど、いやいや、ポールの書いたこの曲がある。

　ポールのアコースティック系のバラードはこの曲から始まったといってもいいだろう。しかし、『アンソロジー1』で聴けるように、当初のアレンジは、エレキとドラムを伴うビートの効いたバンド・ヴァージョンだった。それをジョージのガット・ギターとリンゴのボンゴへと最終的に置き換えることにしたのは、「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」が頭をよぎったからかもしれない。

　中盤の転調も見事だし、"Bright are the stars that shine/Dark is the sky"という倒置法を使った歌詞も素晴らしい。映画『ハード・デイズ・ナイト』でこの曲を歌うポールの横顔のシルエットが、歌詞の内容を噛み締めるのにも有効で、曲のイメージがさらに広がる。

　ポールはなぜか、89年にコンサートを再開するまではこの曲や「オール・マイ・ラヴィング」や「ヘイ・ジュード」などのビートルズ時代の代表曲を演奏していなかったが、91年のMTVの"アンプラグド・ショウ"（『公式海賊盤』として発売）でテンポを落としたアレンジで取り上げ、2013年以降の日本公演では当時のアレンジに忠実に披露した。

「星と空というイメージがいい。曲名に"And"と入るのが重要なポイントだね」（ポール）

「あの偉大な名曲〈イエスタデイ〉の前触れになる曲だな」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1962-1966』『A HARD DAY'S NIGHT（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUND TRACK）』（US）『SOMETHING NEW』（US）　『ANTHOLOGY 1』『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

オススメのカヴァー

Smokey Robinson & The Miracles『VA／Motown Sings The Beatles』（1991）／Terry Callier『Welcome Home』（2008

044

テル・ミー・ホワイ

Tell Me Why

Lennon/McCartney
1964.7.10（1964.2.27）［2'06］
『A HARD DAY'S NIGHT』

「ハード・デイズ・ナイト」にはジョン好みのR&B系の曲が多い。これはその代表的な1曲だ。ジョンにはやや珍しいシャッフル系の曲で、ジョンの1人多重ヴォーカルのエコーがやたらと深い（まだ4トラック・レコーディングの時代なので、ジョン、ポール、ジョージの3人で一緒に歌っている可能性も高い）。黒人女性グループを数多くプロデュースしていたフィル・スペクター[*1]は、だからたぶんこの曲を気に入ったはず。イントロのリンゴの畳み掛けるドラムだけで持っていかれちゃうスピード感あふれるハツラツとしたサウンドが、耳に実に爽快。

でも歌詞はそうじゃない。曲名が似ている「アスク・ミー・ホワイ」では"恋人"に対して優しく接していたジョンだが、この「テル・ミー・ホワイ」では、64年以降のジョンによく見られる攻撃的な姿勢へと変化している。ポールが言うように妻シンシア[*2]に対する心境の変化なのだろうか？

深読みすれば、この2曲は息子ジュリアンが生まれる前後の曲であり、64年にアメリカでいきなり人気が出て、「エド・サリヴァン・ショウ」でも"みんなゴメンネ、彼は結婚してるんだ"なんていうテロップまで出されちゃったジョンの心境を思うと、妻シンシアと息子ジュリアンの存在を隠さなきゃいけない"有名税"は大きなストレスになったはず。とはいえ、そうした逆境を曲作りへと転化していくのがプロの厳しさだし宿命だし業でもある、と思うけれど。そしてジョンは、その後65年の「ヘルプ！」で脱アイドル宣言をしてしまうわけだ。

「テンポの速い曲が必要で、さっとね。
ニューヨークの黒人女性グループのようだな」（ジョン）

「ジョンの浮気やシンシアとの口論などの実体験が元になっていたと思う」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『A HARD DAY'S NIGHT（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUND TRACK）』（US）　『SOMETHING NEW』（US）

おススメのカヴァー

The Beach Boys『Beach Boys' Party!』（1965）／Limelight（Brinsley Shwarz）「I Should Have Known Better」（Single）（1975）

[*1] フィル・スペクター＝"ウォール・オブ・サウンド"で知られるプロデューサー。

[*2] シンシア＝シンシア・パウエル。ジョンの妻。58年にジョンと出会い、62年8月23日に結婚。68年11月8日に離婚。

045

エニイ・タイム・アット・オール

Any Time At All

Lennon/McCartney
1964.7.10（1964.6.2）［2'10］
『A HARD DAY'S NIGHT』

アルバム「ハード・デイズ・ナイト」のA面トップはギターで始まるが、B面トップの出だしはスネア1発、である。ジョンが「イット・ウォント・ビー・ロング」をなぞって書いたと言うように、出会い頭にいきなり驚かせちゃおうという効果も狙ったのだろう。「ウィズ・ザ・ビートルズ」だったらこれがA面1曲目になりうる曲だった、ということだ。

時候の挨拶なしでいきなり本題に入る“ゴルゴ13的”な曲はほかにもたくさんあるけれど、これはとくに、いきなりジョンとポールが交互に話を始めたかのようなもの。出だしのヴォーカルが、ジョンに続いてなぜすぐにポールになるのかというと、「ハード・デイズ・ナイト」と同じく、ジョンにはキーが高くて歌えなかったから。ジョンが書いた曲でもポールが歌うと、その部分はポールが書いたのかと錯覚してしまう危険性（？）がある。声も然りで、2人の声が混ざる曲は、どっちか1人で歌っているのか、それとも一緒に歌っているのか、はたまたジョージもそこに絡んでいるのか、わかりにくいものがある。そのあたりは後々出てくる曲でも触れるが、レコーディング現場に立ち会っていないので、実際はどうだったのかは判断しづらい（声紋鑑定をする、なんていうのは野暮というものでしょう）。

「ハード・デイズ・ナイト」によく似た、間奏のジョージ・マーティンのピアノとジョージの12弦ギターとのオクターブの絡みも、この曲の聴きどころのひとつ。

「〈イット・ウォント・ビー・ロング〉と同じような曲を書こうとしたんだ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『SOMETHING NEW』（US）

おススメのカヴァー

Nils Lofgren『Night Fades Away』（1981）／嘉門雄三（桑田佳祐）『嘉門雄三 & VICTOR WHEELS LIVE!』（1982）

047

今日の誓い

Things We Said Today

Lennon/McCartney
1964.7.10（1964.6.2）［2'35］
シングル&「A HARD DAY'S NIGHT」

ジョージが名を連ねたトラヴェリング・ウィルベリーズはデル・シャノン*1の「悲しき街角」をカヴァーしたが、ビートルズはなぜかデル・シャノンの曲は取り上げていない。しかし、ジョンとポールがデル・シャノンの影響を受けてそれぞれ書いた曲がある。間違いなく2人は、マイナー調の曲を書こうと思ったはずだ。まずはポールのこれ。

映画撮影終了後の64年5月2日から27日にかけて、ヴァージン諸島に恋人ジェーン・アッシャーと休暇旅行に出かけた時に作った曲である。“僕がいなくなってもずっと思い続けてくれる”という“君”の「今日の誓い」。それを僕（たち）が思い出す日がいつか来るだろう――その時の2人の会話が元になっているのだろうか、マイナー調のメロディにふさわしいノスタルジックな歌詞は、ポールの初期の作品では「オール・マイ・ラヴィング」の上をいくかもしれない。

ポールは、恋人や妻の発言に感化されて曲を書くことも多いが、「今日の誓い」のこのやりとりから思い浮かぶのは、ナンシー*2との会話をヒントに書いた「マイ・ヴァレンタイン」（12年）である。そしてアルバム『ハード・デイズ・ナイト』の中のそれほど有名ではないこの1曲を、ポールは21世紀以降もライヴで演奏し続けている。2013年の日本公演でも「夢の人」と交互に演奏していたが、この曲を歌いながら、ポールの脳裏にはジェーンとの“あの日の誓い”が浮かんでいたのだろうか。

「未来に向けて歌われながら、
今この瞬間に郷愁を覚えるというちょっと感傷的な歌」（ポール）

「ポールの作品。いい曲だね」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
「SOMETHING NEW」「THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL」（US）　「LIVE AT THE BBC」

おススメのカヴァー
Jackie DeShannon 「Quick Touches」（1978）／Bob Dylan 「VA／The Art Of McCartney」（2014）

---

*1デル・シャノン＝58年に音楽活動を開始。61年に「悲しき街角」でデビュー。

*2ナンシー＝ナンシー・シェヴェル。ポールの3人目の妻。2011年10月9日（ジョンの誕生日）に結婚

047

今日の誓い

Things We Said Today

Lennon/McCartney
1964.7.10（1964.6.2）［2:35］
シングル&『A HARD DAY'S NIGHT』

ジョージが名を連ねたトラヴェリング・ウィルベリーズはデル・シャノン*1の「悲しき街角」をカヴァーしたが、ビートルズはなぜかデル・シャノンの曲は取り上げていない。しかし、ジョンとポールがデル・シャノンの影響を受けてそれぞれ書いた曲がある。間違いなく2人は、マイナー調の曲を書こうと思ったはずだ。まずはポールのこれ。

映画撮影終了後の64年5月2日から27日にかけて、ヴァージン諸島に恋人ジェーン・アッシャーと休暇旅行に出かけた時に作った曲である。〝僕がいなくなってもずっと思い続けてくれる〟という〝君〟の「今日の誓い」。それを僕（たち）が思い出す日がいつか来るだろう——その時の2人の会話が元になっているのだろうか。マイナー調のメロディにふさわしいノスタルジックな歌詞は、ポールの初期の作品では「オール・マイ・ラヴィング」の上をいくかもしれない。

ポールは、恋人や妻の発言に触発されて曲を書くことも多いが、「今日の誓い」のこのやりとりから思い浮かぶのは、ナンシー*2との会話をヒントに書いた「マイ・ヴァレンタイン」（12年）である。そしてアルバム「ハード・デイズ・ナイト」の中のそれほど有名ではないこの曲を、ポールは21世紀以降もライヴで演奏し続けている。2013年の日本公演でも「夢の人」と交互に演奏していたが、この曲を歌いながら、ポールの脳裏にはジェーンとの〝あの日の誓い〟が浮かんでいたのだろうか。

「未来に向けて歌われながら、
今この瞬間に郷愁を覚えるというちょっと感傷的な歌」（ポール）

「ポールの作品。いい曲だね」（ジョン）

その他のおもな収録アルバム
『SOMETHING NEW』『THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL』（US）　『LIVE AT THE BBC』
おススメのカヴァー
Jackie DeShannon『Quick Touches』（1978）／Bob Dylan『VA／The Art Of McCartney』（2014）

---

*1デル・シャノン＝58年に音楽活動を開始。61年に「悲しき街角」でデビュー

*2ナンシー＝ナンシー・シェヴェル。ポールの3人目の妻。2011年10月9日（ジョンの誕生日）に結婚

048

家に帰れば

When I Get Home

Lennon/McCartney
1964.7.10（1964.6.2）［2'15］
『A HARD DAY'S NIGHT』

デル・シャノンもそうだが、ビートルズにいっさいカヴァーされていなくても、ジョンとポールの曲作りに影響を与えた人はたくさんいる。ボブ・ディランはその最たる例だろう。ウィルソン・ピケットもそんな1人だ。これは「ユー・キャント・ドゥ・ザット」に続き、彼の影響を受けてジョンが書いた曲である。

"家"が出てくる曲がビートルズには多いが、これは"213曲"の中では最も地味な1曲で、人気もあまりない。けれども、『ハード・デイズ・ナイト』がジョンのアルバムだと言われるのはこういう曲があるからこそだ。地味にスゴイ。

いきなり聞こえる"ウォウウォア～"というジョンの凄まじいコーラス。とくに"ア～"のシャウトは「ツイスト・アンド・シャウト」に匹敵するガラガラ声の局地だが、こちらはそれを三重唱で聴かせているのだから、さらにダンゴ状態の騒音となって迫ってくる。ヘヴィ・メタルやヘヴィ・ロックならぬ"ヘヴィR&B"だ。

「恋におちたら」のところでは触れなかったけれど、あの曲に出てくる"you"がシンシア以外の女性だとすると、この曲にもこんな歌詞が登場する。"ダンナが戻るまで愛してやろう"の一節だ。64年のアメリカ公演中にジョンが作った思わせぶりな曲だが、"浮気娘"ならぬ"浮気男"の歌が64年から65年にかけてのジョンの曲には多い。「家に帰れば」を情景描写豊かにすると「ノルウェーの森」になる。

「これもウィルソン・ピケット風で、モータウン調の4拍子のカウベル・ソングだ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
『SOMETHING NEW』（US）

オススメのカヴァー
Yellow Matter Custard『One Night In New York City』（2003）／Ross Rice『VA／Fried Glass Onions Vol.3』（2006）

049

アイル・ビー・バック

I'll Be Back

Lennon/McCartney
1964.7.10（1964.6.1）〔2'20〕
『A HARD DAY'S NIGHT』

デル・シャノンに影響を受けたポールの曲が「今日の誓い」なら、ジョンが影響を受けて書いたのがこの「アイル・ビー・バック」である。マイナー調の作品で、歌詞は「マザー」パート2の趣だ。

ジョンを捨てた父親フレッドが、64年4月1日に映画撮影中のジョンの元を訪れた（65年の映画『ヘルプ！』撮影時という説もある）。17年ぶりの再会だった。2人がその時どんなやりとりをしたのかは知らないし、曲は曲として独立した作品として捉えるべきであることもわかるけれど、ジョンは自分の思いの丈を歌として表現することが多い。それだけに、その時の情景を思い浮かべながらこの曲を聴くと、切なさがさらに増す。アルバム最後の曲をきっちり締めずにフェイド・アウトさせたのも、寂寥感をより醸し出す余韻を残すためだったのかもしれない。

最初の2枚のアルバムは全部で14曲収録されていたのに、『ハード・デイズ・ナイト』は全13曲。もともとアルバム収録予定だったジョン作の「アイ・コール・ユア・ネーム」が、タイトル曲ができたためにEP『ロング・トール・サリー』に回されてしまったという話もあるので、当初から13曲にしようという心づもりだったのかもしれない。どうせなら、ポールの曲をもうひとつ、たとえばこの時期に他人に提供された「フロム・ア・ウィンドウ」（ビリー・J.クレイマー・ウィズ・ザ・ダコタス）や「イッツ・フォー・ユー」（シラ・ブラック＊）あたりを収録してもよかったのに。

「デル・シャノンの曲のコードに僕流に手を加えた。ポールも同じことをやった」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
『BEATLES '65』（US）『ANTHOLOGY 1』

おススメのカヴァー
Roger Nichols & The Small Circle Of Friends『Complete Roger Nichols & The Small Circle Of Friends』（1967）／The Buckinghams『Time & Charges』（1967）

＊シラ・ブラック＝63年にNEMSと契約し、同年9月にポール作の「ラヴ・オブ・ザ・ラヴド」でデビュー。4枚目のシングル「イッツ・フォー・ユー」（64年7月）にはポールがピアノで参加。

050

ロング・トール・サリー

Long Tall Sally

E.Johnson/R.Penniman/R.Blackwell
1964.6.19（1964.3.1）【202】
EP『LONG TALL SALLY』『PAST MASTERS』

ジョンがチャック・ベリーなら、ポールはリトル・リチャードである。213曲の中ではこの曲と「ヘイ・ヘイ・ヘイ・ヘイ」（「カンサス・シティ」の後半）しか取り上げていないものの、破壊力抜群のシャウトを盛り込みながら歌っている。

この曲はリトル・リチャードが56年3月に発表したロックンロールの古典で、ビートルズのライヴでも、64年と65年のヨーロッパ・ツアーや、66年8月のアメリカのキャンドルスティック・パークでのラスト・ライヴをはじめ、10年以上もコンサートの重要なレパートリーとして演奏され続けていた。

レコーディングはアルバム『ハード・デイズ・ナイト』セッションの後半に行なわれたが、3枚目にして初めてアルバムにはオリジナル曲しか収録しないことになったため、カヴァー曲を中心に、この曲をタイトルに冠したEPとしてアルバムに先がけて発売された。

やり慣れた曲ゆえにレコーディングもわずか1テイクで終了している。いきなりヴォーカルで始まる強烈なイントロには、ドスの効いたジョンとは対照的に高音でエネルギッシュに押し切るポールのロックンローラーとしての魅力が存分に表われている。リンゴの表情豊かなドラムと、ジョージ・マーティンの8ビートで突っ走るピアノも聴き逃せない。

ジョンが「アンナ」を元に「オール・アイヴ・ゴット・トゥ・ドゥ」を書いたように、ポールはこの曲を下敷きにして「アイム・ダウン」を書いた。その後ライヴのエンディングでは、そのどちらかを演奏するようになった。

その他の主な収録アルバム

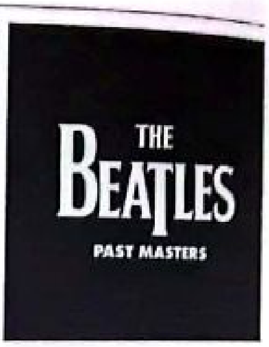
『THE BEATLES' SECOND ALBUM』(US)　『BEATLES NO.5』(JP)　『ANTHOLOGY 1』『THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL』『LIVE AT THE BBC』『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

051

アイ・コール・ユア・ネーム

I Call Your Name

Lennon/McCartney
1964.6.19（1964.3.1）［2'07］
EP［LONG TALL SALLY］『PAST MASTERS』



EP『ロング・トール・サリー』に収録された唯一のオリジナル曲で、ジョンが10代半ばにミミ伯母さんの家で試しに書いてみた最初期の曲のひとつ。63年にミドル・エイトを加えて完成させたという。そのミドル・エイトがスカのリズムになっているのが新鮮だ。

「ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット」に続いてジョンがビリー・J.クレイマー・ウィズ・ザ・ダコタスに贈った曲でもあり、同じくジョンがプレゼントした「バッド・トゥ・ミー」のシングルB面収録曲として63年7月に発売された。他人にあげた後にビートルズがオフィシャル曲としてレコーディングした唯一の作品でもある。

カウベルが耳に残るギター・サウンドは、『ハード・デイズ・ナイト』に収録されたジョンの曲と雰囲気がよく似ている。この曲をアルバムに加えなかったのは、昔の曲だったからだろうか。どうせならこの曲をアルバムに加え、EPはすべてカヴァー曲だけにしたほうがよかったのでは？ とも思う。90年代以降に発売されたビートルズのEPには4人のヴォーカル曲が平等に収められているので、それに倣って差し替えるとしたら、もう1曲は、この時期（64年5月）にBBCラジオでジョージが歌った「アイ・フォガット・トゥ・リメンバー・トゥ・フォゲット」がベストだっただろう。4人がそれぞれ歌うラリー・ウィリアムズ[*1]、リトル・リチャード、エルヴィス・プレスリー、カール・パーキンス[*2]のカヴァーEP集という趣も悪くない。

「ポールが〈ラヴ・ミー・ドゥ〉を書いている頃に作った。ブルースっぽいのを狙ってね。何年かしてアルバムに入れることになって、ミドル・エイトを書き加えたんだ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES' SECOND ALBUM』（US）『BEATLES NO.5』（JP）

おススメのカヴァー

Billy J. Kramer with The Dakotas『Listen...』（1963）／The Mamas & The Papas『If You Can Believe Your Eyes And Ears』（1966）

[*1] ラリー・ウィリアムズ＝57年に「ジャスト・ビコーズ」でデビュー。
[*2] カール・パーキンス＝55年3月に「ムーヴィー・マグ」でデビュー。

052

スロウ・ダウン

Slow Down

L.Williams
1964.6.19（1964.6.1、6.4）［2:55］
EP［LONG TALL SALLY］ 『PAST MASTERS』

ジョンお気に入りの黒人ロッカー、ラリー・ウィリアムズによる、同じくジョンが65年に歌った「ディジー・ミス・リジー」のシングルB面収録曲（58年2月発売）。

50年代のR&Bやロックンロールは、総じてブラスとピアノをフィーチャーしたジャズやビッグ・バンド寄りの賑やかなサウンド作りになっているが、ビートルズのカヴァーでは、ギターとピアノをいかに歯切れの良いサウンドへと変換させるか、そこが大きなポイントとして挙げられる。もちろんヴォーカルのメリハリやビートの強弱なども含めての話ではあるが。

この曲はどうか。ジョンのヴォーカルをダブルトラックにし、厚みと迫力を加えて音の幅を広げた結果、オリジナルが、ダンプやトラックが重い荷物を積んで轟音を上げながら東名高速道路を走っているとすると、ビートルズのカヴァーは、バイクやスポーツカーが真夜中に首都高速道路を150キロで突っ走っている印象だ。だから"スロウ・ダウンしたほうがいい"とキャロル（永ちゃん）がカヴァーしているのか——と妄想を拡げてみるのも悪くない。

二重唱が苦手なジョンが間違えて歌った2つの歌詞——オリジナルの"But now you got a boy friend down the street"（今では別の野郎と歩いてる）と"But now you don't care a damn for me"（今やオレにはお構いなしだ）がゴチャ混ぜにそのまま収録されているのが面白い。

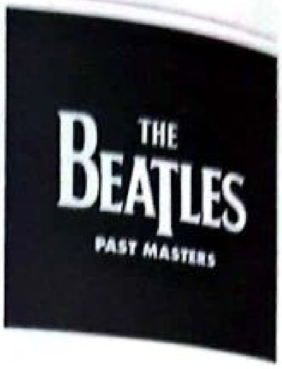
その他の主な収録アルバム
『SOMETHING NEW』（US） 『BEATLES NO.5』（JP） 『LIVE AT THE BBC』

053

マッチ・ボックス

Matchbox

C.Perkins
1964.6.19（1964.6.1）〔1'57〕
EP「LONG TALL SALLY」 「PAST MASTERS」



ジョージが敬愛するロカビリー・シンガー、カール・パーキンスが57年2月に発表した曲。同じくビートルズがカヴァーしたカール・パーキンスの「ハニー・ドント」もこの曲も、もともと前任ドラマーのピート・ベストの持ち歌で、その後をジョンが引き継ぎ、レコーディングではリンゴが歌った（ジョンのヴォーカル・ヴァージョンは、62年12月にハンブルクのスター・クラブで収録された"ハーフ・オフィシャル"のライヴ・アルバムで聴ける）。リンゴのカントリー調のほのぼのとした声は、まさに"ぬるま湯"の快感である。

仕上がりはオリジナルに忠実で、ヴォーカルがダブルトラックになっているのと、エンディングにジョージ・マーティンのピアノが加わっているぐらいしか、オリジナルとビートルズとの違いはない。2番の歌詞"If you don't want my peaches honey..."はオリジナルにはない。ただし27年に発表されたブルースをカールが改作したという説もあるので、そのブルースにはこの歌詞が含まれているのかもしれないけれど。

ちなみに、この曲が収録された64年6月1日のレコーディング・セッションでは、ちょうどイギリス・ツアー中だったカール本人がスタジオに顔を見せている。オリジナルに忠実なアレンジになっているのは、"オレのヴァージョンと同じようにやれ"とカールが言ったから、だったりして。この話は「ハニー・ドント」に続きます。

その他の主な収録アルバム
「SOMETHING NEW」（US） 「BEATLES NO.5」（JP） 「LIVE AT THE BBC」

054

アイ・フィール・ファイン

I Feel Fine

Lennon/McCartney
1964.11.27 (1964.10.18) [2'18]
シングル&「PAST MASTERS」

64年に“アメリカ制覇”を果たし、ジョンはビートルズに飽きちゃったのかもしれない。器用なのか不器用なのかわからないけれど、興味を持ったらハマりやすく染まりやすい。でも移り気なジョンは、ビートルズでいることと、ビートルズが作り出してきた“音”にも飽きてきたのではないか。そしてジョンが64年後半に興味を持ってのめり込んでいったのがボブ・ディランだった。

「アイ・フィール・ファイン」のイントロのフィードバックを改めて聴いてみて、そんな妄想が広がった。2週間ほど前に行なわれた「エイト・デイズ・ア・ウィーク」のセッションの際にジョンはすでにこの曲のギター・リフを練習していたそうだが、イントロのフィードバックはその時にはまだ試みていない。偶発的にという話も過去にはあったが、これは“狙った”結果だろう。といって、このフィードバック音を出そうと狙ったのではなく、何かそれまでにない斬新なアイディアはないかという狙いがあったということだ。この曲は、サウンドに飽きたジョンの実験的な音作りの始まりでもあった。

その結果、「ユー・キャント・ドゥ・ザット」や「家に帰れば」に見られたR&B調の曲が、さらに泥臭く力強く、しかもわかりやすく仕上がった。リンゴのラテン調のドラムも素晴らしい。64年のジョンの代表曲は「ハード・デイズ・ナイト」とこれ、である。8枚目のオリジナル・シングルとなったのも当然だ。「カム・トゥゲザー」へと繋がる“ファンキーなビートルズ”の第1弾である。

「ビートルズのために声を大にして言う。
フィードバック入りの最初のレコードだ」(ジョン)

「ドラムは〈ホワッド・アイ・セイ〉*スタイルだね」(ポール)

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1962-1966」「THE BEATLES 1」「BEATLES '65」(US) 「BEATLES NO.5」(JP) 「ANTHOLOGY 2」「LIVE AT THE BBC」「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

おススメのカヴァー

The Ventures 「Knock Me Out!」(1965)/Rudy Rotta Band 「The Beatles In Blues」(2001)

---

* 〈ホワッド・アイ・セイ〉＝レイ・チャールズの59年7月のシングル曲(米6位)。

055

シーズ・ア・ウーマン

She's A Woman

Lennon/McCartney
1964.11.27（1964.10.8）［3'02］
シングル&「PAST MASTERS」

パッと聴くと、ブルージーな曲調と物質主義を揶揄した歌詞は、「キャント・バイ・ミー・ラヴ」パート2の趣。だが、歌詞ではむしろ、ジョンも言うように“turns me on”（“ドラッグによって覚醒させる”の意）を使った点に注目したい（“turn you on”の歌詞が出てくる「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」より3年早い）。

「アイ・フィール・ファイン」のシングルB面に収録されたポールのこの曲も、裏拍子から入るイントロのジョンによるコード・カッティングから、聴き手の耳がそばだつような工夫が見られる。サビでシャッフル系になるリンゴのドラムも聴き逃せないところだ。

オーソドックスなロックやポップ・ソングやバラードを多く手掛けてきた初期のポールにしては、先に触れた「キャント・バイ・ミー・ラヴ」と並ぶ珍しいタイプの曲だという印象だ。でも、ギターを効かせたロックという視点で見ると、案外「ペイパーバック・ライター」のようなエッジの効いたギター・ロックや「ゲット・バック」のような南部ロックへの流れを感じることができるかもしれない。“アーシーなロック”をテーマにジョンとポールが書いたのが、「アイ・フィール・ファイン」と「シーズ・ア・ウーマン」のシングル2曲じゃないかと。

66年の日本公演でポールがこの曲名をもじって“シマウマ”とダジャレを言ったけど、誰も気づかなかったという笑える（笑えない？）逸話（都市伝説＝デマ）も有名。

「ブルースを目指した曲。オフ・ビートを刻んだジョンはさすがだね」（ポール）

「“turn me on”なんていう言葉を使うだけでワクワクした。思い切ったもんだ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「BEATLES '65」（US）　「BEATLES NO.5」（JP）　「ANTHOLOGY 2」「THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL」「LIVE AT THE BBC」

おススメのカヴァー

Jeff Beck「Blow By Blow」（1975）／Scritti Politti + Shabba Ranks「She's A Woman」（Single）（1991）

056

ノー・リプライ

No Reply

Lennon/McCartney
1964.12.4（1964.9.30）［2'14］
『BEATLES FOR SALE』

4枚目のオリジナル・アルバム『ビートルズ・フォー・セール』の1曲目も、いきなりヴォーカルで始まる。レイズの57年のヒット曲「シルエット」をモチーフに、『ハード・デイズ・ナイト』の時期にジョンが書いた玄人好みの1曲だ。

この曲にも、ジョンの"変化"や"脱却"がすでに表われている。「アイ・フィール・ファイン」でサウンドに手を加えたのとは異なり、ここでは歌詞に物語性が加わっているのだ。自分の曲の版権を管理している社長（ノーザン・ソングスのディック・ジェイムス）に評価されたことを公言しているぐらいだから、ジョンはよほどうれしかったのだろう。あるいは"変わったこと"に自信が持てたのかもしれない。

しかしジョンはこの曲を当初、63年にポールから「ティップ・オブ・マイ・タング」という駄作（失礼）を贈られたトミー・クイックリー[1]にプレゼントしたというから、新機軸をまず自分で試すのに気恥ずかしさがあったのかも。

『アンソロジー1』には『ハード・デイズ・ナイト』セッションの後半、リンゴが急病になった時に録られたこの曲のデモ・ヴァージョンが収録されている。ドラムはリンゴの代役となったジミー・ニコル[2]の可能性もあるが、おそらくポールじゃないかと思う。ポールがシラ・ブラックに贈った「イッツ・フォー・ユー」もその時に録られているので、ジョンのそのデモはトミー・クイックリー用だったのかもしれない。

電話をかけたが居留守を使われたという内容は、携帯電話のまだない時代の名残。

「自己流〈シルエット〉さ。出版社のディック・ジェイムスから『きちんとまとまっている最初の曲だ』と言われたんだ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『BEATLES '65』（US）　『ANTHOLOGY 1』

おススメのカヴァー

Shampoo『In Naples 1980/81』（1981）／The UnHerd『Looking For The Light』（1996）

---

[1] トミー・クイックリー＝63年にNEMSと契約。「ティップ・オブ・マイ・タング」はデビュー曲。

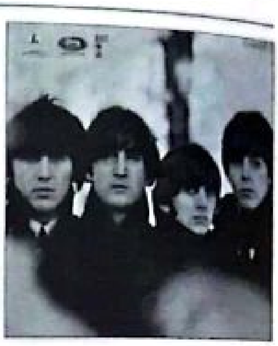
[2] ジミー・ニコル＝扁桃腺炎のリンゴに代わり、64年6月4日から13日までツアーに参加。

057

アイム・ア・ルーザー

I'm A Loser

Lennon/McCartney
1964.12.4（1964.8.14）［2'30］
「BEATLES FOR SALE」



ビートルズ〜ソロのジョンの自作曲の中で最も重要な最初の1曲。なんて言ったら大袈裟かもしれないけれど、64年8月のアメリカ公演中にボブ・ディランに出会い、すっかり虜となったジョンの“ディラン模写”（歌詞も曲調も外見も）は、この“負け犬宣言”から始まったのだ。

ジョンが書いた初期の諸作を、歌われている内容で追ってみると、ここまでで最も重要なのは3曲ある。63年の「ゼアズ・ア・プレイス」「ジス・ボーイ」と64年のこの「アイム・ア・ルーザー」だ。なぜ重要なのかというと、ふだんあんなに強がっているジョンが、自分の内面に目を向けた内省的な詞作をものにしているからだ。

この曲では、演奏こそディラン調のフォーク・ロック（もちろんハーモニカも加わる）だが、歌詞には強さと弱さを併せ持つジョンの二面性が表現されている。曰く“俺は負け犬／表向きとは違うのさ”“笑ったりおどけたりしていても／仮面の下にはしかめっ面が潜んでる”。

『ビートルズ・フォー・セール』のアルバム・ジャケットに写る4人がまた、それまでのアルバムとは全く異質で、疲れの見える物憂げな表情を浮かべているのだから、あの活きのいいビートルズ・サウンドはどこに行っちゃったの？と思ったファンも多かったに違いない。だからなのか、『ハード・デイズ・ナイト』でジョン（の輝き）は終わったと言っちゃう人もいるけれど、だとすると、これは『ジョンの魂』ビートルズ版の1曲目となるだろう。“ジョン・レノン”の始まりはここからだ。

「僕は2人いて、1人は負け犬で、別の1人は全能の神だと思っているんだ」(ジョン)

「あんなことを歌うなんてジョンは勇気があったなあと、
今になってみて思うよ」(ポール)

その他の主な収録アルバム

「BEATLES '65」(US)　「LIVE AT THE BBC」

おススメのカヴァー

Marianne Faithfull「Marianne Faithfull」(1965)／Ian & The Zodiacs「The Koppycats Recordings」(2000)

058

ベイビーズ・イン・ブラック

Baby's In Black

Lennon/McCartney
1964.12.4（1964.8.11）［2'04］
『BEATLES FOR SALE』

これは久しぶり。何が久しぶりかというと、ジョンとポールが2人で顔を突き合わせて一緒に書いた純然たる共作曲が、である。最初から最後まで2人で仲良く、ともに主旋律も歌うという珍しい曲の仲間入りとなった。しかも2人で書いた初のワルツである。歌詞のモチーフとなったのは、黒づくめの衣装を身に纏うことが多かったアストリット・キルヒヘル*だと言われている。

『ビートルズ・フォー・セール』はオリジナル・アルバムの中で最も地味な1枚となったが、それにはワケがある。年に2枚のアルバムを作るという契約上の理由と、64年のクリスマス商戦に間に合わせるという経営上の理由だ。そのため、ツアーの合間を縫って、時間もあまりかけずに制作せざるを得ず、前年の『ウィズ・ザ・ビートルズ』の時と同じく、オリジナル8曲にカヴァー6曲という構成となった。それでもなお、過去をなぞらないビートルズは、歌詞に工夫を凝らしたりテンポをひとひねりしてみたりと、新たな試みを積極的に推し進めていったわけだ。ありきたりなプロデューサーやバンドだったら、シングル2曲をアルバムに入れて、カヴァー2曲を外しただろう。キャピトルから出たアメリカ編集盤はそんな手を頻繁に使っていた。

「アイ・フィール・ファイン」もそうだが、この曲の“She thinks of him”と“I think of her”のように、人称を入れ替えた歌詞をジョンはたまに書くことがある。それって、ただでさえ歌詞を覚えるのが苦手なジョンが、ライヴで歌い間違える最大の要因でもあるわけだが。

「僕らが初めて作った4分の3拍子のワルツ。暗めのブルースっぽい曲をと。
楽譜を作る時にどっちが主旋律か訊かれたけど、
全くの共作だからどっちでもいいんだ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『BEATLES '65』『THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL』（US）

おススメのカヴァー

The Applejacks『The Applejacks』（1964）／The Hi-Fi's『Baby's In Black』（Single）（1965）

---

*アストリット・キルヒヘル＝ビートルズがハンブルクで知り合った女性写真家。
髪型、襟なし服、ハーフ・シャドウの写真など、ビートルズの洗練されたイメージ作りに貢献した。

ロック・アンド・ロール・ミュージック

Rock And Roll Music

C.Berry
1964.12.4（1964.10.18）［2:30］
［BEATLES FOR SALE］

「ロング・トール・サリー」に続くジョージ・マーティンのロックンロール・ピアノが印象的なカヴァー曲で、「レット・イット・ビー」と並び日本で最も売れたシングルとして知られている。日本で最も売れたビートルズのカヴァー曲というわけだが、日本公演のオープニング曲ともなり、当時の日本のファンにさらに強く印象付けたことだろう。

チャック・ベリーが57年9月に発表したシングルで、全米8位となるヒットを記録。これもオリジナルはもっさりした軽やかなR&B調だが、ビートルズ版は、出だしでちょこっと顔を出すギターに導かれ、あらくれジョンの絶唱が、間奏なしで最後まで続く。この曲の聴きどころがピアノとヴォーカルであるのは間違いないけれど、間奏もコーラスもなく最後まで突っ張り切って押し出してしまう力相撲の合間に、ちょっとだけいなしを効かせたラテン風味を挟み込んでいるあたりに、デビュー2年後に録音したカヴァー曲という余裕が感じられる。

ところで、67年の『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』まではオリジナルの歌詞がLPやシングルには掲載されていなかったので、この曲も聴き取りによる誤りがところどころある。たとえば冒頭の"To me that is a modern rock and roll music"は正しくは"Just let me hear some of that rock and roll music"だし、4番の"So give a rock and roll beat I know"は"So keep a rockin' that piano"である。だから歌詞に続いてすかさず"ロックンロール・ピアノ"が入るという構成になっているのだ。

[illegible]
［BEATLES '65（US）］［ANTHOLOGY 2］［LIVE AT THE BBC］

060

アイル・フォロー・ザ・サン

I'll Follow The Sun

Lennon/McCartney
1964.12.4（1964.10.18）［1'47］
『BEATLES FOR SALE』

ポールが16歳の時にリヴァプールの自宅で書いた曲だが、まだクォリーメンを名乗っていた60年に、ジョン、ポール、ジョージにスチュアート・サトクリフ*を加えた4人がポールの自宅に集まってこの曲を練習している貴重な音源の一部が、『アンソロジー』の映像版で流れる。それを聴くと、サビの歌いまわしが異なり、バディ・ホリーの影響をより受けたメロディになっていることがわかる。

「アンド・アイ・ラヴ・ハー」は「イエスタデイ」や「ミッシェル」など一連のアコースティック・バラードへと繋がっていったが、この「アイル・フォロー・ザ・サン」は、「アイ・ウィル」や「ブラックバード」など、明るさのあるちょっと感傷的なフォーク・バラードへと繋がっていった。ビートルズの"213曲"には含まれていないが、さらに曲調も歌われている内容もこれによく似た曲がある。それはポールが63年にビリー・J.クレイマー・ウィズ・ザ・ダコタスに贈った「アイル・ビー・オン・マイ・ウェイ」で、ビートルズもBBCラジオ出演時に演奏していた。

そんなに古い曲をどうしてこの時期に引っ張り出してきたのかというと、時間のない中でのアルバム制作となったため、収録するオリジナル曲が足りなくなってしまったからだ。ジョージの2番目の自作曲「ユー・ノウ・ホワット・トゥ・ドゥ」じゃ役不足だったというわけか。たまにポールの二重唱と間違われたりもするジョンのハーモニーが絶妙だ。

「居間で書いた。
インフルエンザの治りかけだったけどタバコを吸っていた。16だったけど」（ポール）

「ビートルズ以前に書いたんじゃないかな。たくさん書き溜めていたから」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『BEATLES '65』（US）　『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

おススメのカヴァー

Glyn Johns「I'll Follow The Sun」（Single）（1965）／The Brothers Four『The Brothers Four Sing Lennon/McCartney』（1966）

---

*スチュアート・サトクリフ＝59年にクォリーメンに加入。62年4月10日に逝去。

061

ミスター・ムーンライト

Mr. Moonlight

R.L.Johnson
1964.12.4（1964.10.18）［2'33］
『BEATLES FOR SALE』

「ロック・アンド・ロール・ミュージック」と並び、ビートルズの日本公演を語る上で最も欠かせない2曲のうちのもう1曲。当時テレビで放送された日本公演の特番の冒頭、首都高速道路を走るパトカーに先導されてビートルズを乗せた車が続く場面に、一瞬静寂を挟み、この曲のイントロのジョンの叫び“ンミスタア～～、アアアアア～、ムンラ～イッ”が唐突に登場する。その衝撃たるや、歌ってるジョン本人もびっくり（？）というほどの絶叫だが、「ツイスト・アンド・シャウト」の時のような悲壮感はない。むしろ「ロング・トール・サリー」でポールがあそこまで甲高い声を出せるなら俺も一丁やったるか、という肩の力の抜けた意気込みが感じられる。『アンソロジー2』にこの曲のイントロをやり直す場面が出てくるが、それを聴くと、ジョンの心境はそんな感じだったのだろうと思う。

オリジナルはドクター・フィールグッド＆インターンズが62年1月に発表したラテン・ポップスで、ビートルズも、冒頭の衝撃度の高さに反して、演奏自体はジョージのアフリカン・ドラムなども加えたほんわかハワイアン・ムードを漂わせたアレンジである。

ビートルズは、この曲も「マネー」と同じく、オリジナルの歌詞の“And from above you brought us love”の“brought”を“send”に変えて歌っている。“above”“brought”と“b”の音を続くのを避けたのかもしれない。

その他の主な収録アルバム
『BEATLES '65』（US）　『ANTHOLOGY 1』

062

カンサス・シティ／ヘイ・ヘイ・ヘイ・ヘイ！

Kansas City/Hey, Hey, Hey, Hey!

J.Leiber/M.Stoller//R.Penniman
1964.12.4（1964.10.18）〔2'31〕
「BEATLES FOR SALE」

ビートルズ初のメドレーは、リトル・リチャードが59年3月に発表したヴァージョンをお手本にしたもので、オリジナルは52年12月にリトル・ウィリー・リトルフィールドが発表した“K.C. Loving”である。オリジナルはカントリー・ブルース調の緩いアレンジで、「ザッツ・オール・ライト」と同じく、ジョンではなくポールに似合う曲調だ。実際ポールの十八番で、デビュー前のハンブルクのライヴ音源や映画『レット・イット・ビー』のほかに、ソロ以降も88年10月に旧ソ連で先行発売された『CHOBA B CCCP』などで取り上げていた。

ポールのリード・ヴォーカルにジョンとジョージが掛け合いコーラスを付ける曲はこの時期に多く、「アイム・ダウン」や「ザ・ナイト・ビフォア」などがある。やり慣れたカヴァー曲はたいてい1テイクか2テイクで終わらせてしまうが、これもわずか2テイクのみ。「ロング・トール・サリー」や「ロック・アンド・ロール・ミュージック」のところでも触れたように、この曲もジョージ・マーティンのピアノが肝で、曲をよりファンキーなサウンドへと見事に変身させている。

64年になると、いつの間にやら“イェー”という合いの手が減って、“ヘイ”という掛け声が登場。この後に“ヘイ”の一声が出てくる曲は、「悲しみはぶっとばせ」「ヘイ・ブルドッグ」「ヘイ・ジュード」「コンティニューイング・ストーリー・オブ・バンガロウ・ビル」などである。もう1曲、強烈な“ヘイ！”が聴ける曲も後で紹介します。

その他の主な収録アルバム

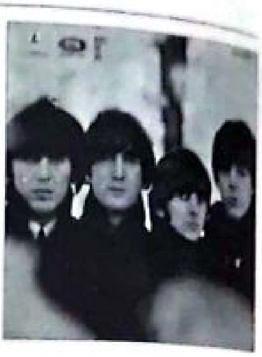
「BEATLES VI」(US)　「ANTHOLOGY 1」「LIVE AT THE BBC」「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

063

エイト·デイズ·ア·ウィーク

Eight Days A Week

Lennon/McCartney
1964.12.4（1964.10.6、10.18）〔2'42〕
『BEATLES FOR SALE』



ポールの2013年の日本公演のオープニング曲として、若いファンにも知名度が上がった曲、と今なら言うべきかもしれない。「アイ・フィール・ファイン」ができるまではシングルの候補になっていたというし、アメリカではアルバムからシングル・カットされ全米1位を記録する大ヒットにもなっているので、人気も高いし、曲の完成度も高い（日本でもシングル・カットされた）。それにしては、ビートルズのヒット曲として話題に上がることがそれほど多くはない不思議な存在ではある。

フェイド・インで始まるイントロといい、"週に8日"というまるでリンゴが言いそうな曲名といい、遊び心と実験精神が合わさったビートルズらしいポップ・ナンバーだ。イントロのフェイド・インについては、『アンソロジー1』に収録されているスタジオでのアウトテイクを聴いてみるとなおさら実感できるが、ジョンとポールのコーラスで曲を始めてみたり、そこにアコースティック・ギターを乗っけてみたり、あれこれ試行錯誤を重ねながら、時間がないなりにも丁寧に作業を続けている様子が伺える。スタジオでアイディアを煮詰めていった最初の曲だというから、その一端が垣間見られるのは貴重だ。

この曲もジョンとポールが仲良く2人で一緒に歌う共作曲だが、シングル候補になったからか、ジョンは映画『ヘルプ！』ができるまで主題歌になるはずだった仮題の「エイト・アームズ・トゥ・ホールド・ユー」とこの曲を混同していた。

「ジョンの家に車で向かう途中に
お抱え運転手が言った一言をそのまま曲名にしたんだ」（ポール）

「なんとかいっぱしの曲にしようとしたけど…出来損ないだな」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1962-1966』『THE BEATLES 1』『BEATLES VI』（US）『ANTHOLOGY 1』

おススメのカヴァー

Alma Cogan『Alma』（1967）／Procol Harum『Procol's Ninth』（1975）

064

ワーズ・オブ・ラヴ

Words Of Love

B.Holly
1964.12.4（1964.10.18）［2'12］
「BEATLES FOR SALE」

ビートルズの前身バンド、クォリーメンが最初にレコーディングした「ザットル・ビー・ザ・デイ」をはじめ、バディ・ホリーは、ジョンとポールにとって、エルヴィス・プレスリーに匹敵するアイドルだった。“ビートルズ”というバンド名も、バディ・ホリーのバック・バンドのクリケッツにイギリスの伝統的な競技クリケットとコオロギの二重の意味があるのに倣い、音楽のビートと甲虫（ビートル）に引っ掛けたものだった。“メガネをかけたロックンローラー”は、レコーディングではメガネをよくかけていた近眼のジョンの励みになっただろうし、ポールはポールで、曲の版権を自分の会社MPLで管理し、誕生日（9月7日）を祝って毎年9月上旬に、長年“バディ・ホリー・ウィーク”を開催していた。

デビュー前のライヴやBBCラジオ出演時には頻繁に取り上げていたが、オフィシャル曲ではこれがバディ・ホリーの唯一のカヴァーとなる。カヴァー曲については必ずなんらかのひねりを加え、さもオリジナルであるかのように、あるいはオリジナルを凌駕するような曲へと変貌させるのに、この曲は珍しく原曲に忠実だ。最も影響を受けた2人――プレスリーとホリーは、独自の色合いを付けづらかったのかもしれない。ハーモニー、曲調、テンポ、サウンドなどすべてが温かくまろやか。ジョンとポールはともに二重唱で音を厚くしたようだが、ジョージの声が聞こえる気もする。でも、とくに耳に残るのは、久しぶりに前面でパチパチ鳴り響く手拍子だ。余計に叩いているのは誰だろう。

その他の主な収録アルバム

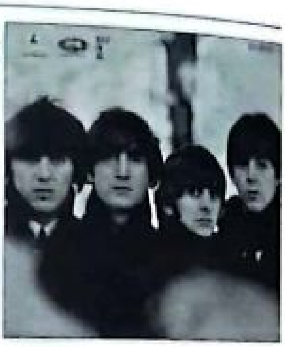
「BEATLES VI」（US）　「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

065

ハニー・ドント

Honey Don't

C.Perkins
1964.12.4（1964.10.26）［2'55］
『BEATLES FOR SALE』



「マッチ・ボックス」のところで書いたとおり、これもカール・パーキンスのカヴァー曲で、オリジナルは、代表曲「ブルー・スウェード・シューズ」のシングルB面に収録されて56年1月に発表されている。

この曲もテンポは少し落とされているものの、ドラムのリズムの取り方や楽器編成も含めてビートルズはオリジナルを忠実にカヴァーしている。しかも間奏の直前に、ポールやスティーヴ・ミラー*以上に思わず掛け声を発してしまうカールの"得意技"までリンゴは真似している。

ちなみに、63年のBBCラジオ・セッションで収録されたジョンが歌う、合の手も含めてさらにオリジナルに忠実なハード・ロッキン・ヴァージョンは、『ザ・ビートルズ・ライヴ!! アット・ザ・BBC』（94年）で聴ける。

ところで、カール・パーキンスをフィーチャーした特別番組『ブルー・スウェード・シューズ』が85年に制作された際に、ジョージとリンゴも顔を揃えたが、この曲の演奏後にカールがリンゴに向かってこんなことを言っている。"64年に君がこの曲をレコーディングした時、私もスタジオにいたんだよ"。すかさずリンゴは"みんなそう言うんだよね"とかわしていたけれど、実際にはこの曲ではなく「マッチ・ボックス」のレコーディング・セッションをカールは見学していた。実際に演奏に参加しているとは思わないが、リンゴがやたらとジョージにギターを弾いてくれと曲の中で声をかけているのは、もしかして…？

その他の主な収録アルバム

『BEATLES '65』（US）　『LIVE AT THE BBC』『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

＊スティーヴ・ミラー＝66年にスティーヴ・ミラー・バンドを結成。68年にグリン・ジョンズのプロデュースでレコード・デビュー。

066

エヴリ・リトル・シング

Every Little Thing

Lennon/McCartney
1964.12.4（1964.9.29）［2'01］
『BEATLES FOR SALE』

作者はジョンかポールか？　2人で仲良く最後まで一緒に歌っている曲なので、2人の五分五分の共作か、あるいはよりヴォーカルが目立つジョンの曲かと思いきや、実はポールの作品だ。少なくとも、ほとんどすべてポールが書いている。ポール自身、ソロを含む楽譜集『THE MUSIC OF PAUL McCARTNEY 1963-1973』（03年）にもこの曲を選んでいるぐらいだ。シングルにしようと頑張っただけあって、愛着があるのだろう。ぜひソロのライヴでやってほしい。

『ハード・デイズ・ナイト』以上に多彩な打楽器が使われるようになったのも『ビートルズ・フォー・セール』の魅力のひとつ。と同時にそこは、ビートルズ・サウンドの変化のポイントでもあるが、この曲ではピアノに合わせて"ドン、ドン"と鳴り響くリンゴのティンパニが目立っている。とはいえ、この曲の肝は、「エイト・デイズ・ア・ウィーク」の"ア、ラ〜ア〜ア〜ビュ"というサビのフレーズと同じく、あちこちに顔を出す"エヴリーロー、シンシダズ"というちょっと東洋風のフレーズだ。くねくねとゆれる節まわしが小粋だ。

間奏のギターはジョージじゃなくて、実はジョンが弾いている。なぜかというと、ジョージが寝坊してレコーディングに遅刻したから——それがデマだとわかったのは、88年にマーク・ルイソンの"The COMPLETE BEATLES recording sessions"が出てからのこと。誰だ、そんな適当なことを言ったのは！　70年代は好い加減な時代だった。

「シングル用に書いた曲。自分ではすごくキャッチーな曲だと思っていた」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『BEATLES VI』（US）

おススメのカヴァー

Yes『Yes』（1969）／レイカ＆ザ・ウェイターズ『Let It Be』（1995）

067

パーティーはそのままに

I Don't Want To Spoil The Party

Lennon/McCartney
1964.12.4（1964.9.29）〔2'32〕
『BEATLES FOR SALE』

「ぼくが泣く」の続編といってもよさそうなジョン作のカントリー&ウェスタンだが、こっちのほうがグッとくる場面が多い。なぜだろうか。またちょっと考えてみた。

たぶん、ジョンの二重唱が聴ける1番の"I will disappear"の"disappear"や2番"I've waited far too long"の"too long"のほろ苦い声とメロディと歌い方にやられてしまうのだろう（ジョンとポールの二重唱説もあり）。もうひとつ、陰りのある曲調やジョンのヴォーカルに、どことなく『ラバー・ソウル』の収録曲に近い匂いを感じるから、なのかもしれない。サビの"Though tonight she's made me sad"の箇所のみポールがハーモニーを付けているのもいいアクセントになっているが、曲はあくまでカントリー調だ。

と、そんな具合に、アメリカンなサウンドが目立つから、ブリティッシュ好きには『ビートルズ・フォー・セール』はちょっと距離がある。ビートルズのアルバムではちょっと異質な存在かなと。この曲のように、チェット・アトキンス奏法を取り入れたジョージが悪いのか？いやいや、そんなことはない。

伊藤銀次さんが黒沢秀樹さんや杉未来さんらと組んだuncle-jamが、ライヴでこの曲を取り上げているのを目にした時のこと。銀次さんがこの曲を演奏する前に"パブ・ロック好きにはたまらない"と言っていたのが"目からウロコ"だった。それならイギリス好きにもすぐに届くから。

「個人的な経験を歌った」（ジョン）

「仕事として作る曲もある。だからってつまらないわけじゃないよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『BEATLES VI』（US）

おススメのカヴァー

The Savoys『VA／All You Need Is Covers：The Song Of The Beatles』（1999）／MeeK『Sleeping With Big Ben』（2003）

068

ホワット・ユーアー・ドゥーイング

What You're Doing

Lennon/McCartney
1964.12.4（1964.10.26）［2'31］
『BEATLES FOR SALE』

213番目に好きな曲。もちろん、曲の好き嫌いは人それぞれだし、これはビートルズに限ったことではないけれど、嫌いというより、長年聴いていても全く「入ってこない」タイプの曲である。

実際、この曲は､64年9月に2回レコーディングしたがボツになり、10月にアレンジをやり直している。直して良くなる曲もあるから一概には言えないものの、曲が仕上がるまでの苦労の跡が窺える。しかも最初の演奏は、ジョンが低音でハーモニーを付けていて、それはそれで味わいがあるので、そっちで進めたほうがよかったのでは？と思ったりもする。時間的に余裕がなく、デビュー前に書かれた「アイル・フォロー・ザ・サン」まで引っ張り出してきたぐらいだから、本来はボツになる曲を埋め草的に入れざるを得なかったのかもしれない。

で、結論。ポールがピーター・アンド・ゴードン*にこの時期にあげた、たとえば「逢いたくないさ」とこの曲を入れ替えればよかったのに、と。試しにそうしてみると、ポールの意図が読み取れる。ビートの効いた曲がアルバム用に1曲ほしかったに違いない、と。だからリンゴの風変わりなドラム・ソロで曲を始めたり、後半にドラムでブレイクを入れた後にわざとらしくベースをブンブン唸らせたりしているのだろう。何より、ポールの“Look！”とか“I'm！”とかの気張った掛け声と、サビの“here for you”と“you're gonna do”のあまりにベタな歌いまわしに、英国的ビートルズ風味がいっさい感じられないのだ。どうやら、個人的に最も苦手なのはそこだ。

「希望的観測で作り続けて、結局、期待外れで終わってしまったそんな1曲。
でも、レコーディングの力で曲の出来以上に仕上がることもあるんだ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『BEATLES VI』（US）　『LOVE』

おススメのカヴァー

Lisa Lauren『Lisa Lauren Loves The Beatles』（2006）／Cuppa Joe『Cuppa Classics』（2008）

---

*ピーター・アンド・ゴードン＝64年2月にポール作の「愛なき世界」でデビュー。ピーターはジェーン・アッシャーの実兄。

069

みんないい娘

Everybody's Trying To Be My Baby

C.Perkins
1964.12.4（1964.10.18）〔2'23〕
「BEATLES FOR SALE」

「ビートルズ・フォー・セール」には、カール・パーキンスのカヴァーがもう1曲ある。57年に発売されたデビュー・アルバム「ダンス・アルバム・オブ・カール・パーキンス」の収録曲で、そのアルバムには既発売シングルの「ハニー・ドント」（56年）も「マッチ・ボックス」（57年）も含まれていた。でもこの曲はシングルとしては発売されていないので、アルバム収録曲をこうしてカヴァーしたということは、カールのそのアルバムを、少なくともリンゴを除く3人は聴き込んでいたのだろう。

BBCラジオ出演時のカヴァーも含め、カールの曲はどれもオリジナルに忠実だ。これもギター・フレーズは“完コピ”といってもいいほどよく似ている。バディ・ホリーの「ワーズ・オブ・ラヴ」もそうだが、オリジナルのサウンド自体、変える必要がないほどこの時期のビートルズにマッチしている、ということでもあるのだろう。変換しないで済んじゃうポイントは、たぶん“サウンドの歯切れの良さ”だ。

ジョージがいきなり歌い出す冒頭からこれぞロカビリーという明快な展開で、ジョージのヴォーカルには、エレキの音色に呼応するかのように深いエコーがかけられている。ジョージ・マーティンは、音程の不安定なビリー・J.クレイマーのヴォーカルを二重唱にしてごまかしたが、声量の足りないジョージの声も、同じようにエコーで細工しようとしたのかもしれない。「ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット」もそうだったのだろうか？

その他の主な収録アルバム
「BEATLES '65」（US）　「ANTHOLOGY 2」「THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL」「LIVE AT THE BBC」

3

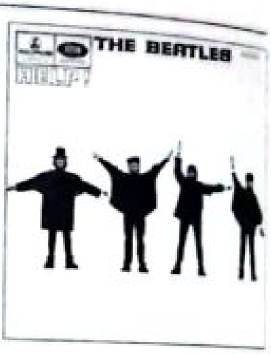
1965

070

涙の乗車券（ティケット・トゥ・ライド）

Ticket To Ride

Lennon/McCartney
1965.4.9（1965.2.15）［3'09］
シングル&『HELP!』



ヘヴィなギターのリズムにジョンは虜になったのか、「ユー・キャント・ドゥ・ザット」をさらにどっしり重たく、ギターの音が地面にめり込むような印象的なリフを生み出した。アルバム『ヘルプ！』に先がけて、イギリスでの9枚目のシングルとして65年4月に発売された曲である。本来ならアルバムには収録されずに終わるはずだったが、映画挿入歌になっているのでアルバムにも収められた。映画『ハード・デイズ・ナイト』の挿入歌として先にシングルとして発売された「キャント・バイ・ミー・ラヴ」と同じ扱いである。

映画に出てくるスキー場での演奏シーンが印象的だが、曲に関していえば、さらにひとつ新しい場面へと足を踏み出した様子が伝わる仕上がりだ。一言でいうと、ポールが前面に出てきた最初の曲だということ。サビの終わりやエンディングでチョーキングを多用したギターを弾き、ドラムのリズム・パターンのアイディアを出したのはポールである。ギタリストのジョージがシタールに出会ったのも、ドラマーのリンゴが俳優業に魅力を感じたのもこの『ヘルプ！』の時期。ちょうどポールがぐいっと前に出てきた時期と重なったのは偶然なのか、それとも必然だったのか。そしてその時ジョンは、“ヘルプ！”と叫んでいた。

ポールが後に明かしたところによると、“Ticket To Ride”の“Ride”は、「ホエン・アイム・シックスティ・フォー」の歌詞にも出てくるワイト島にある“Ryde”という町と掛けているとのこと。ただの乗車券じゃなかったわけだ。

「最も早いヘヴィ・メタルのひとつ。リンゴのドラミングはポールのおかげだ」（ジョン）

「おしまいのテンポをメロディだけ変えたのがすごい。最後で新たな展開になるというね」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1962-1966』『THE BEATLES 1』『HELP（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUNDTRACK）』（US）『ANTHOLOGY 2』『THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL』『LIVE AT THE BBC』

おススメのカヴァー

Vanilla Fudge『Vanilla Fudge』（1967）／Carpenters『Ticket To Ride』（1969）

071

イエス・イット・イズ

Yes It Is

Lennon/McCartney
1965.4.9（1965.2.16）［2'41］
シングル&『PAST MASTERS』

シングル「涙の乗車券」のB面収録曲だが、シングルの両面がジョンの曲になるのは、2枚目のシングル「プリーズ・プリーズ・ミー」以来のこと。その2枚しかない。

この「イエス・イット・イズ」は、同じくジョン作の「ジス・ボーイ」路線を狙ったものだが、サウンドはどんどん進化・変化していくのに、曲作りについてはジョンは過去をなぜかなぞることが多い。とはいえ「ジス・ボーイ」が映画音楽的なスタンダード曲っぽい仕上がりだったのに比べると、「イエス・イット・イズ」は、それをよりソウルフルにした曲調が味わい深い。この曲も低音部を主にジョン、中音部を主にジョージ、高音部をポールが担当した3声のコーラスが美しい。ビートルズのベスト・コーラス曲として、「ジス・ボーイ」「イエス・イット・イズ」「ビコーズ」、おまけとしてBBCラジオ出演時に歌った「トゥ・ノウ・ハー・イズ・トゥ・ラヴ・ハー」の計4曲を挙げておきたい。

ジョージがヴァイオリンのような音色でボリューム・ペダルを使ってアクセントを付けているのが新しい試みとして耳に残る。そういえば、95年にビリー・ジョエル*が日本に来た時に、ソニー仕切りの内輪の懇親会に招待してもらったので、いい機会だと思い、ビートルズの好きな曲は何かと訊いてみた。そうしたら、返ってきた答えはこの「イエス・イット・イズ」だった。ビリーはボリューム・ペダルの効用を含めて80年の「ロング・ナイト」（『グラス・ハウス』収録）で再現してみせた。

「〈ジス・ボーイ〉を書き直そうと思ったが、うまくいかなかった」（ジョン）

「ジョンには珍しい、素敵なバラードだ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『BEATLES VI』（US）　『ANTHOLOGY 2』

おススメのカヴァー

Scott McCarl『Play On...』（1997）／Leo Sayer『Restless Years』（2015）

---

*ビリー・ジョエル＝14歳で音楽活動を開始。エコーズ、ハッスルズ、アッティラを経て、71年に「コールド・スプリング・ハーバー」でソロ・デビュー。

072

ヘルプ！

Help!

Lennon/McCartney
1965.7.23（1965.4.13）［2'18］
シングル&「HELP!」

ビートルズの代表曲が、実はジョンの悲痛な叫びだったなんて、誰が想像し得ただろうか。なにせ“4人はアイドル”。コンサート・映画その他、ポピュラー音楽界だけでなく、文化もファッションも含め、時代の寵児として“60年代”を牽引している真っ只中、ビートルズ旋風がまだまだ延々と続く状況でもあったのだから。

2作目の主演映画『ヘルプ！』の主題歌としてイギリスの10枚目のシングルとして発売された曲だが、曲が出来上がるまでも“ヘルプ！”の連続だった。そもそも映画タイトルは“BEATLES PRODUCTIONS 2”という仮題から“EIGHT ARMS TO HOLD YOU”に本決まりになったけれど、ジョンとポールがそれにふさわしい曲を書けなかった。最初にプレスされた「涙の乗車券」と「ヘルプ！」のシングルのレーベルにも“From The United Artists Screenplay, 'Eight Arms To Hold You'”と表記されているので、土壇場でボツったのがわかる。でも書けなくてほんとによかった。「抱きしめたい」の出来損ないみたいなのになりそうな嫌な予感があるから。映画の悪役カイリの像、あるいはビートルズ4人の“腕”の合計をイメージしての曲名なんだろうけど、タイトルも長すぎるし。

ポールに言わせると、曲名を他人（監督）から与えられて書いた初めての曲だという。経緯はどうであれ、演奏・声・構成ほかこれぞビートルズ・サウンドと呼べる傑作であることに変わりはない。

「タイトルは監督が考えた。ジョンのメロディに相対するメロディが僕のアイディアだ」（ポール）

「かなり複雑な曲だ。ちょっと〈イット・ウォント・ビー・ロング〉に似ているね」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1962-1966』『THE BEATLES 1』『HELP（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUNDTRACK)』（US）『ANTHOLOGY 2』『THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL』『LOVE』

おススメのカヴァー

Deep Purple『Shades of Deep Purple』（1968）／RC サクセション『コブラの悩み』（1988）

073

アイム・ダウン

I'm Down

Lennon/McCartney
1965.7.23（1965.6.14）［2'31］
シングル&『PAST MASTERS』

ポールが書いたビートルズのシングルB面曲では最も有名な曲のひとつ。中期以降はジョンにそういう曲が多くなるが。ということで、「ヘルプ！」との両A面でもよかったのでは？と思わせるハード・ロックの傑作だ。

もともとポールが「ロング・トール・サリー」に代わるコンサートのラスト・ナンバーを目指して作っただけあって、その両者はよく似ている。というよりそっくり。65年夏の全米ツアーからその2曲のどちらかが演奏されるようになり、日本公演でもこの曲が最後に演奏された。どちらにするか決めかねていたポールに対し、"どっちでもたいして変わらないから、メドレーでやってみたいもんだ"と言い放ったのはもちろんジョンである。

いきなり歌い出されるイントロから続くポールのシャウトがとにかく耳に残る。とくにエンディングは「ヘルター・スケルター」の前哨戦のような凄まじさだ。ジョンがVOXのオルガンを初めて使ったのも特筆すべきポイント。ジョンの"肘弾き"は「ユー・キャント・ドゥ・ザット」の間奏の"リード・リズム・ギター"同様、荒くれだった音が暴力的で、この曲によく似合う。『アンソロジー』の映像版で観られる65年のシェア・スタジアムのライヴでのオルガンも印象深いが、適当なコーラスを付けるジョンは、間違いなく"ラリるレノン"状態である。

スティーヴン・タイラー*がアマチュアの時に最初にレコーディングした曲で、98年にエアロスミスでも正式にカヴァーした。

「自慢の作品だ。メロディがほとんどないR&Rは、バラードより難しいんだよ」（ポール）

「ポールの曲だよ。僕も少し手伝ったと思うけど」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『ANTHOLOGY 2』

おススメのカヴァー

Adrian Belew 『Twang Bar King』（1983）／Aerosmith 『Permanent Vacation』（1987）

＊スティーヴン・タイラー＝69年に音楽活動を開始し、70年にエアロスミスを結成。73年に『野獣生誕』でデビュー。

074

ザ・ナイト・ビフォア

The Night Before

Lennon/McCartney
1965.8.6（1965.2.17）［2'34］
『HELP!』

デビュー前からジョンよりもポールのほうが多作だったのに、ビートルズの前期は、ジョンのほうが耳に残る曲が多い気がする。こう言ってはなんだけど、駄作も少ない気がする。

ビートルズの音楽活動としては中期にあたる65年の『ヘルプ！』や『ラバー・ソウル』の時期はどうか。ポールが書いた曲を眺めてみると、「イエスタデイ」や「ミッシェル」のようなスタンダードになっている曲は別として、アルバムに収録された曲のいくつかは、ビートルズというよりも、ウイングスがやりそうな曲である。これがその最初だろうか（苦手な「ホワット・ユーアー・ドゥーイング」も、ウイングスの曲だと思って聴けば、少しは印象が良くなるかも？）。

この時期の特徴として、エレキ・ピアノを活用するようになったことがまず挙げられる。「アイム・ダウン」でオルガンを弾いたジョンは、この曲ではエレキ・ピアノを弾いている。単なるコード弾きなのに、不思議とその音色がこの曲の肝としてどっしり腰を下ろしている印象だ。そのキーボードの音色にウイングスに通じる匂いが感じられるのだろうか。リンゴのドラムも見事で、ミドル・エイトでは、「アイ・フィール・ファイン」のような、ちょっとシャッフル系のビートへと変化を付けている。

大空に向かって開放的な歌声を高らかに響かせるポール。映画『ヘルプ！』のソールズベリー平原での演奏シーンに登場する曲は、やはりこれしかない。

「これはほとんど僕の曲」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『HELP（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUNDTRACK）』（US）

おススメのカヴァー

Restless Heart『Still Restless』（2004）／竹内まりや（with BOX）『Turntable』（2019）

075

悲しみはぶっとばせ

You've Got To Hide Your Love Away

Lennon/McCartney
1965.8.6（1965.2.18）［2'08］
「HELP!」

ここまで感化されちゃうのか。ボブ・ディランへのジョンののめり込みようはハンパじゃなかった。曲調・歌詞・声・歌いまわし・サウンドのすべて、これぞ“ジョン・ディラン”の出来上がり、である。ジョンが、ディランの「時代は変る」をなぞって作ったのは間違いない。

いくつも見どころと聴きどころがある。まず、デビュー・シングル・セッション以来、久しぶりに外部のミュージシャンを招いたことで、ジョニー・スコット*1がアルト・フルートとテナー・フルートをオクターブで演奏している。またジョンが初めて12弦のアコースティック・ギター（フラマス社のフーテナニーというレアなギター）を弾いているのも、このフォーク・バラードには欠かせない味となっている。

ジョンの幼馴染みのピート・ショットン*2によると、これは、ジョンが目の前で作曲した最初の曲で、印象的な“ヘイ！”の掛け声はピートのアイディアだったという。ジョンが、ちょっと嗄れた低めの声でトーンを落として歌うその説得力がすごい。

「想いは心の中にしまっとけ」という原題に「悲しみはぶっとばせ」という邦題を付けた高嶋弘之氏のセンスもさすがの一言。とくに「悲しみを」じゃなくて「悲しみは」にしたところが素晴らしい。これ、「オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ」を「愛こそがすべて」とか「愛こそすべて」じゃなくて、「愛こそはすべて」としたのに近い。

「ディラン時代の曲。僕はカメレオンだから、流行になんでも染まっちゃうんだ」（ジョン）

「ディランの影響を受けた曲。
回りくどい言いまわしや詩がジョンの琴線に触れたんだ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1962-1966」「HELP（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUNDTRACK）」（US）　「ANTHOLOGY 2」

おススメのカウァー

The Silkie「You've Got To Hide Your Love Away」（1965）／Elvis Costello And The Attractions「You Tripped At Every Step」（Single）（1994）

---

*1ジョニー・スコット＝EMI専属の編曲家・指揮者。シラ・ブラックらのセッションに参加。
*2ピート・ショットン＝クォリーメンの結成時のメンバー（ウォッシュボードを担当）。

076

アイ・ニード・ユー

I Need You

Harrison
1965.8.6（1965.2.15、2.16）［2′28］
「HELP!」

64年にデモ録音した「ユー・ノウ・ホワット・トゥ・ドゥ」がボツったので、これが「ドント・バザー・ミー」に次ぐジョージの2曲目のオリジナルである。

遅咲きジョージは、65年の『ラバー・ソウル』までは、ジョンとポールが63年頃に書いていた“僕と君”＝2人称の単純なラヴ・ソングが多い。しかし66年の『リボルバー』収録の「タックスマン」からいきなり大きく変わっていくのだから、そんなところにもビートルズの面白さがある。ジョージの目を通してビートルズを見てみるという、本秀康さん（レコスケくん）的視点の楽しさだ。

「ドント・バザー・ミー」はビートの効いたロック・ナンバーだったが、「アイ・ニード・ユー」は、70年代後期以降のダーク・ホース時代のジョージの作風にも通じる、のほほんとしたマイルドなポップスだ。64年12月ぐらいに書き始め、『ヘルプ！』撮影中のバハマで完成したというから、南国風の匂いがするのかもしれない。ソロ・アルバム『ゴーン・トロッポ』（82年）に入っていても違和感がない。「イエス・イット・イズ」で使ったボリューム・ペダルをこの曲にダビングしたのも、丸みのある曲の雰囲気を後押ししている。ジョンがドラムを叩き（音が小さい）、リンゴが“ジャンボ・ギター”を弾き、カウベルをダビングしたという珍しい編成でのレコーディングだといわれるが、これも、ほんとならすごい。

歌詞はパティ＊に向けたといわれているけど、実はジョージの“浮気ソング”なのではないかと思う。ジョージは全くコメントを残していないし。真相はいかに？

その他の主な収録アルバム
「HELP（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUNDTRACK）」（US）

おススメのカヴァー
Cash「Jeff Sato Project／Something」（2002）／高橋幸宏「A Ray Of Hope」（2009）

＊パティ＝パティ・ボイド。ジョージの妻。映画『ハード・デイズ・ナイト』撮影中の64年3月にジョージと出会い、66年1月21日に結婚。77年6月9日に離婚

077

アナザー・ガール

Another Girl

Lennon/McCartney
1965.8.6（1965.2.15、2.16）［2'05］
「HELP!」

ポールがこれまでにライヴでいっさいやったことのない曲である。映画『ヘルプ！』で演奏シーンが出てくるのが救いといえば救いだけれど、なぜやらないのかな。これも「ザ・ナイト・ビフォア」と同じくウイングスの匂いがする。だったら2015年の日本公演でやればいいのに。いっそオープニングで。無理か。

…と本書の初版時（2015年2月）に書いたところ、2015年4月28日に行なわれたソロ初の日本武道館公演で、ポールは11曲目に“世界初公開”のMC入りでこの曲を初めて演奏した。

『ヘルプ！』以降ポールが前面に出てくるようになったと前に書いたが、この曲は66年以降、映画『レット・イット・ビー』でのポールとジョージの仲違いまで続く2人のバトルの長い道のりの始まり、と捉えることもできる。なぜかというと、65年2月15日のセッションでジョージが弾いていたリード・ギターを翌16日にポールがオーヴァーダビングし、しかもそっちが採用されちゃったという曰くつき（？）の曲だからだ。

すでに「涙の乗車券」でチョーキングを多用したギターを弾いていたポールは、それに味をしめたのか、この曲でも、チョーキングやトレモロ・アームを使ったタコのクネクネ踊りのようなギターを弾いている。ジョージがどんなギターを弾いたのかはわからないけれど、このポールの演奏は実にサマになっている。なんというか、感覚一発・感性の赴くままにやり通してしまったような、ジョンにも通じる魅力的な演奏で、これを聴いちゃうと、ジョージの出番はないかもという気になってしまう。これ、まだポールの曲だからいいけれども。

「繋ぎの曲と呼ぶのはちょっと酷かな。それ以上の曲だと思うよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「HELP（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUNDTRACK）」（US）

おススメのカヴァー

Affinity『Origins：The Baskervilles 1965』（2007）／チューリップ『すべて君たちのせいさ』（1976）

078

恋のアドバイス

You're Going To Lose That Girl

Lennon/McCartney
1965.8.6（1965.2.19）［2'18］
「HELP!」

「恋する二人」を進化させて後追いコーラスを加えた曲——というのが、「恋のアドバイス」ってどんな曲？って訊かれた時の、咄嗟の答え。

ジョンの、溌剌としているけれど、ナイーヴな雰囲気をどこかに隠し持っているかのようなヴォーカルがたまらない。ポールとジョージの後追いコーラスも爽やかで心地良く、まるで女性コーラス・グループの曲をビートルズ流にカヴァーしたかのようなサウンドになっている。そこがこの曲の大きな魅力だ。というよりも、ビートルズが長年そうした女性ポップス系グループのカヴァーを続けてきた結果、ここにひとつオリジナルの完成形ができた、といったほうがいいだろう。たとえば「デヴィル・イン・ハー・ハート」を自分たちで作ったらどうなるか？　その答えがこの曲である、というような。

ジョンのヴォーカルの艶やかさといったらない。“If you don't take her out tonight”の“out”のちょっと投げやりな歌いまわしをはじめ、ぞくっとする瞬間がたくさんある。『ビートルズ・フォー・セール』以降はパーカッションの多用が目につくが、この曲もリンゴのボンゴが隠し味として効いている。

映画『ヘルプ！』に出てくるスタジオでの演奏シーンがいい。最初に観た時、へえ、こんなふうにレコーディングしているのかと思ったけれど、デジタル処理されて綺麗になった映像を観た時、スタジオに浮かぶ紫煙はマリファナか？とちょっと思ってしまった。まさかね。

「6対4の割合でジョンが作った曲だったかな」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『HELP（ORIGINAL MOTION PICTURE SOUNDTRACK）』（US）

オススメのカヴァー
Five Man Electrical Band『Five Man Electrical Band』（1969）／Bertram Brown『VA／Fried Glass Onions』（2005

079

アクト・ナチュラリー

Act Naturally

V.Morrison/J.Russell
1965.8.6（1965.6.17）［2'29］
「HELP!」

バック・オーウェンス*が63年に発表したオリジナルがまず素晴らしい。カヴァーの仕方はカール・パーキンスと同じ位置付けだが、こっちのほうが鼻にかかった歌声が似ている分、オリジナルとの類似度が高い。

リンゴのヴォーカル曲がLPのB面トップに収録されたのはこれが初めて。アメリカ編集盤『ヘルプ！』は映画のサウンドトラック仕様で、そのアルバムにはイギリスのオリジナル・アルバム『ヘルプ！』のB面曲はいっさい収録されていなかったため、この曲はアメリカ編集盤発売の1ヵ月後に独自にシングルとして発売された。オリジナルがカントリー・チャートで1位を記録した名曲であり、映画の主役リンゴの曲を、というタイミングの良さもあったのだろう。当初B面に収録されていた「イエスタデイ」が途中でA面扱いとなり、全米1位を獲得したけれども。

リンゴのリード・ヴォーカルをポールがハーモニー・ヴォーカルで援助するというビートルズ唯一の曲だが、ソロ以降はポールがリンゴに贈った曲——たとえば「シックス・オクロック」(73年)や「アテンション」(80年) などでも見られるし、その後の「ウォーク・ウィズ・ユー」(2010年) や「グロウ・オールド・ウィズ・ミー」(2019年) での2人の“声の共演”へと繋がる流れとなる。89年のバック・オーウェンスとリンゴとの、この曲の再演も素晴らしかった。

ところで、アメリカのファンが喜ぶに違いないとポールが確信しているフシのある、リンゴを真似た鼻にかかったアメリカン・アクセントはどうなんだろう？

その他の主な収録アルバム

「"YESTERDAY"…AND TODAY」(US)

---

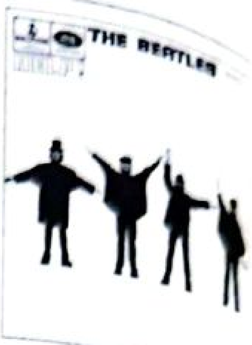
*バック・オーウェンス＝45年に音楽活動を開始し、56年にデビュー。アメリカのカントリー・チャートで21曲1位を獲得。

080

イッツ・オンリー・ラヴ

It's Only Love

Lennon/McCartney
1965.8.6（1965.6.15）［1'56］
「HELP!」



なぜジョンはこの曲を嫌うのだろうか？　ポールも言っているように、歌詞がひどいから。具体的に言うと、脚韻がベタすぎるからだ。韻を踏む歌詞だけ挙げてみると、歌詞は2番までしかないが、1番は“high-by-my/sigh-（inside-）flies-butterflies/shy（-besides）”、2番は“right-（I-）fight-night/sight-（nighttime-）bright-bright/right”と、カッコ内を除いてもこれでもかとばかりの韻の応酬である。

ジョンの手書きの歌詞が残っており、それを見てみると、どうやって韻を踏もうか、単語をあれこれ羅列している。しかもボブ・ディランの「To Ramona」の楽譜の裏に、である。思うに、ジョン・ディランたる者、いくらやっつけとはいえ、素人臭い歌詞を書いちゃだめだろ、という自分への戒めで、発表後に歌詞を見るたび、“穴があったら入りたい”状態に陥ったのかもしれない。

とはいえ、メロディとジョンのヴォーカルが実に素晴らしいのだ。もちろん、ジョンがいくら嫌いだからといって、こっちまで同調する必要はない。「アスク・ミー・ホワイ」なんかもそうだけど、ジョンのこの“泣く一歩手前の声”、これにやられちゃう。「アイム・オンリー・スリーピング」の輪郭も透けて見えるし。

もうひとつ、ここでもまた、と思うのが、“Just the sight of you makes night-time bright”の“bright”の発音。ジョンは「アンナ」と同じく巻き舌で歌っているのがわかる。

「本当に嫌いな曲のひとつ。歌詞がとにかくひどい」（ジョン）

「刺激のない歌詞しかできなくてもそこで諦めることがあった。文学じゃないからね」（ポール）

その他の主な収録アルバム
「RUBBER SOUL」（US）　「ANTHOLOGY 2」
おススメのカヴァー
Bryan Ferry「Let's Stick Together」（1976）／Dwight Twilley「The Beatles（A Tribute）」（2009）

081

ユー・ライク・ミー・トゥ・マッチ

You Like Me Too Much

Harrison
1965.8.6（1965.2.17）〔2'35〕
『HELP!』

ジョージは、オリジナル・アルバムに初めて自分の曲が2曲収録されて、さぞうれしかったに違いない。「アイ・ニード・ユー」の翌日（2月17日）にレコーディングされているので、曲を書いたのはほぼ同じ時期——64年末から映画『ヘルプ！』の撮影でバハマに行っている時だろう。

この曲も映画『ヘルプ！』の候補だったというが、使うとしたら、ジョージのどっちの曲がいいだろうか。たいていのファンは「アイ・ニード・ユー」を選ぶのではないだろうか。ポールとジョージ・マーティンが一緒に1台のアコースティック・ピアノを弾いたというけれど、2人が弾いたイントロのピアノに導かれて、全編ほとんどピアノしか聞こえない。ジョージはギタリストなのに…。ポールに前日、「アナザー・ガール」でギターを弾かれたのがトラウマになっていたのかも（?）。ジョージのヴォーカルのバックで聞こえるのは、ジョンがエレキ・ピアノをコード弾きしている音色だ。人気はないが個人的にはかなり好きな曲。

そしてこの曲も「アイ・ニード・ユー」と同じく、歌詞は"意味深"。ジョージのコメントもいっさいない。しばらく会えなかった恋人パティに捧げたと表向きには言われているが、"今朝飛び出していったけど、夜には戻ってくるさ"と歌われている相手は、64年にジョージと知り合い、ジョージが"二股"をかけていたと噂されるアメリカの女優ジョーイ・ヘザートンじゃないだろうか（あー、話が一気に下世話になった）。

その他の主な収録アルバム
『BEATLES VI』（US）
オススメのカヴァー
Chris Richards『VA／He Was Fab』（2002）／Les Fradkin『Love You 2』（2005）

082

テル・ミー・ホワット・ユー・シー

Tell Me What You See

Lennon/McCartney
1965.8.6（1965.2.18）［2'36］
「HELP!」

ジョージの「ユー・ライク・ミー・トゥ・マッチ」のような曲をポールが書いたらこうなった、という程度の曲。つまり、エレキ・ピアノの音色が耳に残る、特徴のあまりないただの曲、というわけだ。まだあまり曲作りをしていないこの時期のジョージだったらそれでもいいかもしれないが、ポールはそうはいかない。

ジョンのギロやリンゴのクラベスなど、ほかの曲ではほとんど使われていない珍しい楽器が導入されているのもこの曲の大きな特徴だ。いわゆるワールドミュージックに片足を突っ込んだ——というのは言い過ぎで、足の爪ぐらいは触れている摩訶不思議な音作りになっている。

タイトル・フレーズが歌われた後、エレキ・ピアノに続いてリンゴのズンドコ鳴り響くドラムが聞こえてくると、「ホワット・ユーアー・ドゥーイング」の悪夢が少し蘇ってくる。ポールのヴォーカルも、1番の"If you let me take your heart"の"If you"や、2番の"Big and black the clouds may be"の"Big and"でいきなり低音から高音へと跳ね上がるメロディに、ああポールまたこれをやっちゃったのかと、個人的にはちょっと残念な気持ちになる。全体的に、どことなく『ヘルプ！』のボツ曲「ザット・ミーンズ・ア・ロット」に似ているし。あっちが休場になってこっちが土俵際で残った、ということなのだろうか。これにするなら「ウェイト」を入れちゃえばよかったのに。といって、これが211番目に好きな曲、というわけではないんだけれども。

「取り立てて記憶に残る作品じゃない。
アルバムの埋め草やB面用の曲も必要なのさ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「BEATLES VI」（US）

おススメのカヴァー

Teenage Fanclub「VA／UNCUT - Why Don't We Do It In The Road ?」（2001）／Jeff Rolka「I'm Only Sleeping」（2007）

083

夢の人

I've Just Seen A Face

Lennon/McCartney
1965.8.6（1965.6.14）［2'04］
「HELP!」

　これはいい。76年以降、ポールがいまだにコンサートのアコースティック・セットで「ブラックバード」などと一緒に披露することの多いカントリー&ウェスタン調のポップ・ナンバーだ。何がいいって、ポールとジョンとジョージの3人がアコースティック・ギターを一緒に弾いた曲である、というのがだ。しかもアコースティック・ギターをさらに2本ダビングしているというから、音の厚みもあって、こりゃアメリカ人は喜ぶはずだ。実際、アメリカ編集盤『ラバー・ソウル』のA面トップを飾るのはこの曲である。キャピトルは売り方をよく心得ている。ポールも「アクト・ナチュラリー」と同じくアメリカン・アクセントで歌っているし。

　ところで「夢の人」と「イエスタデイ」が同じ日（65年6月14日）にレコーディングされたと聞いてもさほど驚かないと思うが、「アイム・ダウン」も同じ日だったと知ると、そりゃすごい、となるはず。ポールはほんとにすごい声の持ち主だ。

　ポールの叔母ジンのお気に入りの1曲だったので、“Auntie Gin's Theme” という仮題が付けられていた。ジョージ・マーティン・オーケストラが『ヘルプ！』収録曲のカヴァー・アルバムを発表した時もその曲名表記で、“It's Only Love” も “That's A Nice Hat（Cap）” になっていた。“Yesterday” もタイトルが違っていたが、それは次の項目で紹介します。

「C&W風なのにアップ・テンポ。出来にはけっこう満足したよ。
歌詞がいいんだ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「RUBBER SOUL」（US）

おススメのカヴァー

Arlo Guthrie『One Night』（1978）／Leon Russell With The Newgrass Rivival『Hank Wilson, Vol.4 Rhythm & Bluegrass』（2001）

084

イエスタデイ

Yesterday

Lennon/McCartney
1965.8.6（1965.6.14）〔204〕
「HELP!」

ビートルズ初のソロ・ナンバーで、主役は言わずもがなのポール。ジョージ・マーティンがこの名曲を初めて耳にしたのは64年1月のパリ公演の最中だったというから、"目覚めると頭の中でできていた"という説明不要のこのスタンダード曲を、ポールは1年以上も温めていたことになる。その間、"このメロディ、どこかで聴いたことない？"とか"この曲いいよね。知ってる？"などとポールは周囲の知り合いに訊いていたのかもしれない。実際、1カ月ぐらいは本当に訊いてまわったそうだ。

時間がかかったのはむしろアレンジのほうだった。このメロディを活かす最適・最高・最良の演奏形態とは？　今では世界中のありとあらゆるところでカヴァーされまくり、世界で最もカヴァーされた曲として「ギネスブック」にも掲載されているので、さまざまなアレンジで楽しむことができるが、最終的に弦楽四重奏団をバックにポールがアコースティック・ギターで1人で歌う、という形態に収まった。正解、だろう。発売当初は、ソロ曲ということもあって、いわゆる隠れた名曲扱いで、アメリカと日本ではシングル「アクト・ナチュラリー」のB面収録曲だったが、メロディがあまりに良すぎた。

当初は"Scrambled Eggs"（炒り卵）と呼ばれていて、ジョージ・マーティン・オーケストラも、そのタイトルで「ヘルプ！」のカヴァー・アルバムに収録していた。仮に書かれた冒頭の歌詞も、最初は"Scrambled Eggs/Oh, my baby how I love your legs"となっていた。

「よくできている。自分の曲だったらと思ったことは一度もないけど」（ジョン）

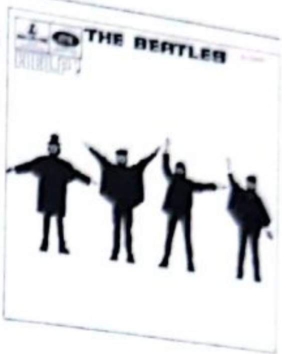
その他の主な収録アルバム
「THE BEATLES 1962-1966」「THE BEATLES 1」「"YESTERDAY"...AND TODAY」（US）「ANTHOLOGY 2」「LOVE」
オススメのカヴァー
Marianne Faithfull「Yesterday」(Single)（1965）／Marvin Gaye「VA／Motown Sings The Beatles」（1991）

085

ディジー・ミス・リジー

Dizzy Miss Lizzy

L.Williams
1965.8.6（1965.5.10）［2'54］
『HELP!』



これと「ユー・キャント・ドゥ・ザット」と「涙の乗車券」がベスト3かもしれない。イントロのギター・リフが耳にまとわりつく代表曲を挙げるとしたら。そのくらい印象的なギター・リフを持った曲だ。

58年2月に発売されたラリー・ウィリアムズのオリジナル・ヴァージョンも、ギターとピアノとブラスが暴れまくるパワフルな演奏だ。ラリー・ウィリアムズのカヴァーは「スロウ・ダウン」に続いて2曲目で、次の「バッド・ボーイ」も含めてオフィシャルでのカヴァー計3曲は、カール・パーキンスと並んで最も多い。ジョンはラリーをとにかく気に入っていた。ソロ・アルバム『ロックン・ロール』（75年）に収録された「ボニー・モロニー」もラリーの曲だが、ともに妙に粘っこいのにエネルギーが充満しているハード・ロック調のR&B風情がたまらなかったのだろう。ジョンの弾くハモンド・オルガンもいい味だし、何より、あちこちに入る“アーーーーー！”という叫びは「スロウ・ダウン」を凌駕する力強さで、曲のタイプとしては「マネー」に近い。

ジョージのギターをダブルトラックにするなど、音の厚みは「ハード・デイズ・ナイト」に匹敵するほど。シェア・スタジアムでのライヴで演奏されたり、69年にトロントで開催されたプラスティック・オノ・バンドのライヴでも演奏されたりと、あちこちで脚光を浴び、印象深いロックンロールとしてファンの記憶に残った。

その他の主な収録アルバム
『BEATLES VI』『THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL』(US)　『LIVE AT THE BBC』

086

バッド・ボーイ

Bad Boy

L.Williams
1965.6.14（US）（1965.5.10）［2'19］
「BEATLES VI」（US）　「PAST MASTERS」

なぜこんなにいい曲がオリジナル・アルバムから外されてしまったのだろうか。ビートルズのカヴァー曲がオリジナルをどれほど凌駕しているかはここまでさんざん書いてきたけれど、「ツイスト・アンド・シャウト」に匹敵するベスト・カヴァーはラリー・ウィリアムズが59年1月に発表したこの「バッド・ボーイ」だと思っている。外れた理由はただひとつ。アルバム『ヘルプ！』に収録するカヴァー曲を選ぶ際に、同じ日に録音された、作者も同じラリーの「ディジー・ミス・リジー」に敗れたから。悪ガキのツッパリを、リジー嬢がのらりくらりとかわしたわけか。

この曲は結局『ヘルプ！』の先に発売されたアメリカ編集盤『BEATLES VI』がおこぼれを預かった形になり、イギリスでは初のベスト盤『オールディーズ』に唯一の新曲として収まっただけだ。まあ、ベスト盤に入るだけの魅力的な曲だったという都合のいい解釈もできるけれども。67年にイギリスでシングルとして発売するという話もあったようだし。

とにもかくにも、ブラスとピアノをフィーチャーしたノヴェルティ・ソングをガサツなロックンロールに変換したビートルズのアレンジ力の凄さが際立っている。ロックンロール・ヴォーカリストここにあり、というジョンの絶唱が耳をビシバシ刺激する。

この曲も歌詞の聴き取りが甘いが、とくに“Junior's head is not enough”は“Junior's head is hard as rock”（ヤツの頭は岩のように固い／ロックのようにハードだ）じゃないとサマにならない。

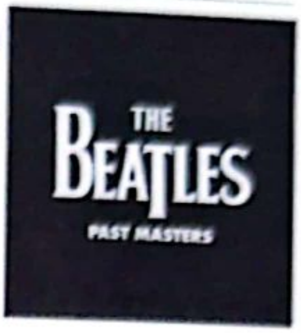
その他の主な収録アルバム
「A COLLECTION OF BEATLES OLDIES」

087

デイ・トリッパー

Day Tripper

Lennon/McCartney
1965.12.3（1965.10.16）［2'48］
シングル&『PAST MASTERS』



ギター・リフが印象的なビートルズ・ナンバーの代表格のひとつ。ビートルズとポールの日本公演でも演奏されたステージ映えする曲で、「バースデイ」同様、ポールが中心となって書いたようにも思えるが、“ポールが歌詞を手伝ってくれた”ジョンの作品である。

「恋を抱きしめよう」との両A面扱いのシングルとしてアルバム『ラバー・ソウル』と同時に発売されたが、実質的にはこちらが“表の顔”となった。イギリスのファン・クラブの月刊誌『ビートルズ・ブック』（通称『ビートルズ・マンスリー』）の66年1月号には、「恋を抱きしめよう」をメンバーはA面にしたがったが、周囲の関係者はこの「デイ・トリッパー」を推したという記載がある。より中心になって書いたジョンもこの曲を推したんじゃないの？ と思ったりもするが、結果は、イギリスでは両A面扱いで1位を記録し、アメリカではA面扱いの「恋を抱きしめよう」が1位で、こっちは5位止まりだった。チャート上ではメンバーの勝ち、である。

表向きには“日帰りの旅行者”を題材にしているが、もちろん“昼間にトリップするヤツら”（ジョン）との二重の意味を持たせたビートルズ初のドラッグ・ソングである。ピート・ショットンは、ジョンはセックスやドラッグを匂わせる歌詞をそれとなく盛り込むことがあると語っていて、“She's a big teaser”の“big”は“prick”（ペニス）との二重の意味を持たせているとのこと。ジョンらしいね。

「週末だけのヒッピーみたいなものさ。わかるだろ？」（ジョン）

「日曜画家みたいにちょっと手を出して
その気になっている人たちを皮肉った歌だよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1962-1966』『THE BEATLES 1』『“YESTERDAY”…AND TODAY』（US）

おススメのカヴァー

Sergio Mendes & Brasil'66『Herb Alpert Presents Sergio Mendes & Brasil'66』（1966）／Yellow Magic Orchestra『Solid State Survivor』（1979）

088

恋を抱きしめよう

We Can Work It Out

Lennon/McCartney
1965.12.3（1965.10.20、10.29）［2'14］
シングル&「PAST MASTERS」

「デイ・トリッパー」との両A面扱いで発表されたシングル。ジョンとポールのそれぞれの曲を組み合わせた〝分業曲〟の始まりである。ちなみに同じタイプの曲はほかに「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」「ベイビー・ユーアー・ア・リッチ・マン」「アイヴ・ガッタ・フィーリング」の3曲ある。

「ヘルプ！」に収録されていたジョージの「ユー・ライク・ミー・トゥ・マッチ」と同類の、キーボード主体のフォーク調の曲で、ジョンが弾くハーモニウムがいい味を出している。

65年にポールが書いた曲には、恋人ジェーン・アッシャーとの関係を綴った曲が目につく。これもその代表的な1曲だ。この曲では、こんなやりとりが目に浮かぶ。〝君みたいな考えじゃまずいと思うよ。このままじゃ終わっちゃうぜ。でもまあ、やってみればなんとかなるか〟――ジェーンに対するポールのそんな呼び掛けに対し、横からジョンが口を挟む。〝おいおい、人生は短いんだから、やりあってるヒマなんてないだろ〟と。さらにジョンとポールのやりとりを見たジョージが〝まあ、まあ、まあ〟と間を繋ぐ。大まかにいうとそんな構成の曲で、楽観的なポールと悲観的なジョンとの性格の違いが作風に表われた1曲でもある。

〝君〟と〝僕〟の対比や、〝I am right or I am wrong〟の〝right〟と〝wrong〟の使い方などは、その後の「ハロー・グッドバイ」をちょっと思い起こさせる。

「アップ・テンポのC&W。ドイツ・ワルツのようなアイディアはジョージだよ」（ポール）

「僕がミドル・エイトを付け加えた。ポールのは楽天的だろ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1962-1966」「THE BEATLES 1」「〝YESTERDAY〟…AND TODAY」（US）

おススメのカヴァー

Stevie Wonder「Signed, Sealed & Delivered」（1970）／Heather Nova「VA／I Am Sam - Original Soundtrack」（2002）

089

ドライヴ・マイ・カー

Drive My Car

Lennon/McCartney
1965.12.3（1965.10.13）［2′27］
『RUBBER SOUL』

過去をなぞらないビートルズの革新性についてはすでに触れたが、『ヘルプ！』と『ラバー・ソウル』には大きな開きがある。サウンド的には『ヘルプ！』の延長線上にあるといえるが、大きく異なるのは歌詞だ。ジョンが褒められて喜んだ「ノー・リプライ」の物語性とは比較にならないぐらい発展させたのが、『ラバー・ソウル』のオープニングを飾るこのファンキーなロック・ナンバーだ。

まずサウンドについては、モータウンのジェームス・ジェマーソン[*1]の影響を受けたイントロからの跳ねるベース・ラインが印象的。それに伴うリンゴのドラミングも複雑なリズム展開だし、ジョンのカウベルやポールのピアノもいいアクセントだ。擬音も最高。初めて真夜中（12時）を超えるセッションになったという成果が顕在化している。ポールが愛用のヘフナーではなくリッケンバッカーのベースを弾いているというのも特筆すべき点だ。

歌詞については、“私の運転手なんてどう？”という女優志願の女性の言葉を信じていた男性が“よっしゃ”と思っていたら、女性が実は車を持っていなかったというオチが最高。“運転する”にはもちろん二重の意味が含まれている。最後のひねりは、その後、録音時の偶発性も伴ったオチが最高の「オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ」へと受け継がれる。歌詞でのこうした遊び心も、ビートルズの大きな魅力のひとつだ。女性の言葉を直接話法で綴った歌詞も素晴らしい。話のやりとりを即座に思い浮かべさせる効果絶大、である。

「ジョンが“golden rings”の歌詞を“drive my car”に変え、棘のある内容になった」（ポール）

「オーティス・レディング[*2]の〈リスペクト〉みたいに単純なリフを弾いた」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1967-1970』『“YESTERDAY”…AND TODAY』（US）　『LOVE』

おススメのカヴァー

Humble Pie『Street Rats』（1975）／Dion『VA／The Art Of McCartney』（2014）

[*1] ジェームス・ジェマーソン＝モータウン・サウンドの要を担ったベーシスト。
[*2] オーティス・レディング＝60年に音楽活動を開始し、62年にソロ・デビュー。

090

ノルウェーの森（ノーウェジアン・ウッド）

Norwegian Wood (This Bird Has Flown)

Lennon/McCartney
1965.12.3（1965.10.21）［2'03］
『RUBBER SOUL』

「ドライヴ・マイ・カー」よりもはるかに物語性の高い名曲として知られているのが、この「ノルウェーの森」だ。村上春樹の本の書名にもなり、映画化されてこのオリジナル曲まで使われたことで、さらに多くの人に届いたはずだ。

アコースティック楽器をバックにした陰影のあるジョンのヴォーカルが味わい深い。ポールのハーモニーも印象的で、「悲しみはぶっとばせ」と曲調やテンポ、アレンジはよく似ている。ということは、これもまた"ジョン・ディラン"の曲、である。実際、それを感じ取ったボブ・ディランは、返答歌「フォース・タイム・アラウンド」を66年に発表した（『ブロンド・オン・ブロンド』に収録）。曲名は"仏の顔も三度"の意。"また真似しやがって"というわけである。他意はなかったとディランは言っているが。

それにしても思わせぶりな歌詞だ。ジョンもポールも"浮気の歌"であることを認めている。曲名の"Norwegian Wood"について、北欧のポゴ・ポップス*というバンドに90年代半ばにインタビューした際に訊いてみたところ、"Knowing She Would"（彼女がやらせてくれるとわかってる）の言葉遊びだと言っていた。"ジョンレノンセンス"発揮、というわけだ。"Wood"はノルウェー製のマッチとも家具とも言われたが、曲名の意味合いは、（安い）ノルウェーの木であつらえた部屋の内装、という説が今では有力。いずれにしても、ノルウェーの木は燃えやすいということだ。原題のイメージできぎり「ノルウェーの木」だけど、邦題は「森」じゃないとね。

「煙幕を張って情事を凝りに凝って書きたいと思ったんだ」（ジョン）

「ジョンの浮気の歌。
復讐としてノルウェーの材木に火をつけるのは僕が思いついた」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『THE BEATLES 1962-1966』『RUBBER SOUL』（US）『"YESTERDAY"…AND TODAY』（US）『ANTHOLOGY 2』

オススメのカヴァー
Jan & Dean『Filet Of Soul』（1966）／Marian Dacal『VA／The Beatles Chill Out Volume 1』（2005）

---

*ポゴ・ポップス＝87年にノルウェーで結成されたパワー・ポップ・バンド

091

ユー・ウォント・シー・ミー

You Won't See Me

Lennon/McCartney
1965.12.3（1965.11.11）［3'19］
『RUBBER SOUL』

アルバム『ヘルプ！』にはウイングスっぽい曲がいくつかあると書いたが、これは曲の長さも含めて、ウイングスだったらシングルになっていたかもしれない曲（もちろん、ウイングスのほうがビートルズよりもいい曲が少ない、という意味ではないです）。

マイルドな曲調に爽やかなヴォーカルを乗せながら、簡単に演奏しているように見えて実はベースがスゴイというポールの才能を感じさせる曲で、個人的にも好きな1曲。3人のソフトなコーラスもいいし、もっと知られていいように思う。

ちなみに66年以前に3分を超える曲は5曲しかなくて、「ユー・リアリー・ゴッタ・ホールド・オン・ミー」と「レイン」は3分ジャストの表示なので、実質的には「シーズ・ア・ウーマン」と「涙の乗車券」とこの曲だけ。でも、これが3分19秒もあるのはなぜかというと、サビが1回多いから。昔から気になっているのであえて書いてしまうが、より具体的に言うと、2分11秒から3分6秒までの2度目のサビは要らないんじゃないの？　そうすれば他と同じぐらいの2分24秒になるよ！　…まあ、それだけポールがこの曲のサビが気に入っていたということだろう。「ゲッティング・ベター」などに通じるサビでのジョンの“No I wouldn't, No I wouldn't”という合いの手が最高なので、2回も聴けると思っていたほうがいいかもしれない。

ステレオ・ヴァージョンで聴けるイントロのポールの“コホン”という咳払いに、耳がつい反応しちゃう。

「シンプルな2音符だけで作った。モータウン風の、ジェームス・ジェマーソンの趣がある。彼はメロディアスなベースを弾くすごいベーシストでね」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『RUBBER SOUL』(US)

おススメのカヴァー
Bryan Ferry『These Foolish Things』(1973)／Anne Murray『Love Song』(1974)

092

ひとりぼっちのあいつ

Nowhere Man

Lennon/McCartney
1965.12.3（1965.10.22）〔2'42〕
「RUBBER SOUL」

内省的というよりは自閉的なジョンの曲。いや、ジョンにしか書けない曲である。とくに歌詞がそうだ。“Nowhere”という言いまわしがまずいい。“Norwegian Wood”に引っ掛けて、あるいはそれをヒントにしたようなところがあるけれど、“Nowhere”は“Now + here”（ここにいる）とも“No + where”（どこにもいない）とも取れるというのは有名な話。それでいて、自分のことを歌っているようで、“Isn't he a bit like you and me”（君や僕にちょっと似てないかい？）と呼び掛けている必殺のフレーズを盛り込むあたりがジョンらしい。どこにもいない＝どこにでもいる（状態になれる）人に向けて、ここにいるジョンが悶々と空想しながら書いた曲、という解釈もできる。

『ラバー・ソウル』にはコーラスを多用した曲が多く、それが中期のビートルズ・サウンドの特徴にもなっているが、この曲はそれ以前の「ジス・ボーイ」や「イエス・イット・イズ」のようなコーラス中心に聴かせるだけではなくて、エレキ・ギターによるキラキラしたサウンド作りがより耳に残る作りになっている。ポールのベースも超絶技巧だ。日本のGS（グループサウンズ）への影響も多々あるだろう。この曲も高嶋弘之氏による邦題が絶妙。ポールが制作（脚本・音楽・出演）した映画“GIVE MY REGARDS TO BROAD STREET”（84年）の邦題が『ヤァ！ブロード・ストリート』で、主題歌“No More Lonely Nights”の邦題が「ひとりぼっちのロンリー・ナイト」だったというビートルズへのぶら下がり具合がすごかった、といま急に思い出した。

「パラノイア状態を5時間続けた後、歌詞と曲がいっぺんに浮かんできた」（ジョン）

「ジョンによるアンチ・ジョンの歌。どん詰まりの自分を歌ったと。いい作品だ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1962-1966」「YELLOW SUBMARINE SONGTRACK」

おススメのカヴァー

Randy Travis「VA／Come Together-America Salute The Beatles」（1995）／Paul Westerberg「VA／I Am Sam - Original Soundtrack」（2002）

093

嘘つき女

Think For Yourself

Harrison
1965.12.3（1965.11.8）［2'18］
『RUBBER SOUL』

「ドント・バザー・ミー」と並び90年代以降に再評価されそうなジョージの作品。ジョージの発言を汲むなら、「タックスマン」の前触れとなる曲である。息子ダニーのバンド、ザ・ニュー・ナンバー2（Thenewno2）がやってもよさそうな音作りになっている。聴きどころは、いきなり出だしからぶっとい音で耳に飛び込んでくるファズ・ベースだ。もちろん演奏はポール。これも愛用のヘフナーではなく、『ラバー・ソウル』から併用して使うようになったリッケンバッカーによるものだ。

ファズのかかったベースだけでなく、耳にまとわりつくのが、ちょっと変わったコーラス。ジョンとポールとジョージの3人がハーモニーを長々と練習している音源をブートレグで聴いてみると、ジョンがちょっと歌いまわしに苦労している様子が伺える。そのリハーサル・テープが、後に映画『イエロー・サブマリン』のプロデューサーに貸し出され、断片が映画に使われた。

ソロ以降も含めてジョージは曲名を付けるのが苦手で、レコーディング当初は仮題がとくに多かった。とりあえず付けといて、後で変えりゃいいだろうという魂胆だ。この曲はまだましな仮題——“Won't Be There With You”が付けられていた。もうひとつ、音符の譜割のわりには歌詞を詰め込みすぎる傾向があるのも、ジョージの曲作りに関する長年の特徴だ。ボブ・ディランの影響があるのかないのかはわからないけれど、いわゆる字余りが多いのがジョージ流。

「曲の感じだと“誰か”についての歌だ。たぶん政府や権力のことだろう」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム
『RUBBER SOUL』（US）　『YELLOW SUBMARINE SONGTRACK』
オススメのカヴァー
The Zinedines『VA／Harrisongs』（1999）／Yonder Mountain String Band『VA／This Bird Has Flown』（2005）

094

愛のことば

The Word

Lennon/McCartney
1965.12.3 (1965.11.10) [2'42]
『RUBBER SOUL』

これもジョンの重要な曲。こうして歌詞を見てくると、『ラバー・ソウル』は、次作『リボルバー』よりも歌われている内容の充実度がサウンド以上に高いことがわかる。群を抜いて名曲が多いのも、『ラバー・ソウル』の大きな特徴といえる。

ここで注目したいのは、これがビートルズが初めて愛の概念＝ラヴ＆ピースを歌い込んだ曲であるということだ。「愛こそはすべて」よりも2年近く早い。2年はあっという間かもしれないけれど、60年代の2年、とくにビートルズの2年は6年ぐらいの感覚がある。ジョンの初ソロ・アルバム『ジョンの魂』（70年）に収録された「ラヴ」はより簡潔に、俳句調で愛の概念を伝えた曲だけれど、ここにはひとつ必殺のフレーズ“Give the word a chance to say”がある。先に見えるのはもちろん“Give peace a chance”（「平和を我等に」）である。

個人的には「ドライヴ・マイ・カー」と同じ匂いを感じる――つまりモータウンやスタックスなどのR&Bやソウルの影響下にある跳ねたリズムが印象的な曲のひとつだと思っている。「ロング・トール・サリー」と同じくメロディに起伏のないワン・ノートでほぼ押し切ってしまった難解な曲でもあるけれど、個人的にはいつも上位10位以内に入れたくなる魅力がたっぷりある。マッシュアップ・アルバム『LOVE』（06年）が出た時に「ドライヴ・マイ・カー」と一緒になったのはうれしかった。でも、その2曲の間に割り込んできたのは「ホワット・ユーアー・ドゥーイング」だった。

「マリファナ時代の曲さ。言いたいのは“もっと賢くなれ”ってこと」（ジョン）

「マリファナを吸った後に色付きの歌詞カードを作った。初めてのことだったよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『RUBBER SOUL』（US）　『LOVE』

おススメのカヴァー
Helen Merrill 『Helen Merrill Sings Beatles』（1970）／Joan Jett 『VA／It's About Eve』（2002）

095

ミッシェル

Michelle

Lennon/McCartney
1965.12.3（1965.11.3）［2'40］
『RUBBER SOUL』

「アンド・アイ・ラヴ・ハー」と並ぶポールのアコースティック・バラードの名曲。"I love you"で始まる中間部のメロディは、ニーナ・シモン[1]の「アイ・プット・ア・スペル・オン・ユー」（65年）を参考にしている。ニーナ・シモンが"アイ・ラーヴ・ユー"と間延びした感じで歌っているのを聴いて、ジョンが中間部を思いついたそうだ。

63年にすでにメロディの断片が出来上がっていたというのは、64年1月に「イエスタデイ」のさわりが書き上げられていたのと同じ流れ。ということは「アンド・アイ・ラヴ・ハー」よりも前か同時期に、メロディアスな傑作をポールは作り始めていたことになる。その2曲がすぐに仕上がって、アルバム『ハード・デイズ・ナイト』に入っていたらどうなっていたか。そんなふうに妄想を広げてみるのも面白い。

フランス語の歌詞は、クォリーメンの元メンバーで2人の幼馴染みだったアイヴァン・ヴォーン[2]の妻ジャネット・ヴォーン（フランス語の先生だった）によるもの。でも、「シー・ラヴズ・ユー」や「抱きしめたい」のドイツ語版はドイツ人のクレジットがあるのに、オリジナル曲の歌詞を書いたジャネットの名前がクレジットされていないのはなぜだろう。ポールは御礼に小切手を送ったそうだが。

中盤から急に切り込んでくるジョージのギターの音色も聴きどころだ。ジョンがジャズっぽいギターを加えた「ハニー・パイ」も同じニュアンス。

「チェット・アトキンスのフィンガー・ピッキング・スタイルで書いてみた。
"I love you"の部分は最初はコーラスだった」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1962-1966』『RUBBER SOUL』（US）

オススメのカヴァー

The Overlanders「Michelle」(Single)（1965）／Matt Monro『For The Present』（1973）

---

[1] ニーナ・シモン＝58年にデビュー。「アイ・プット…」はスクリーミン・ジェイ・ホーキンスのカヴァー。

[2] アイヴァン・ヴォーン＝ジョンの幼馴染みでポールの同級生。57年に2人を引き合わせた。

096

消えた恋

What Goes On

Lennon/McCartney/Starkey
1965.12.3 (1965.11.4) [2'47]
「RUBBER SOUL」

『ヘルプ！』から2作続けてアルバムのB面トップにリンゴのヴォーカル曲がくるというのは快挙かも。しかもリンゴが作曲者としてクレジットされた最初の曲でもある。リンゴに言わせると5つの言葉を"作詞"しただけ、とのことだ。実際はジョンが62年頃に大部分を書き、63年3月5日の「フロム・ミー・トゥ・ユー」のセッションの時にレコーディングされる予定だったものの、時間切れで実現しなかった曲だ。『レット・イット・ビー』に収録された「ワン・アフター・909」の初期ヴァージョンもその時にレコーディングされているので、主にジョンがデビュー前に書いた曲をそのシングル・セッションで引っ張り出そうとしたのだろう。

曲調も『ヘルプ！』のB面トップの「アクト・ナチュラリー」とよく似たカントリー＆ウェスタン調のポップ・ナンバーだが、あっちはポールの援助が目についたが、こっちは作者のジョンが全編を通して印象的なギター・リフを弾いている。そこだけ耳をそばだてて聴いてジョンの存在を感じる、という効用もある。そこに絡みつく間奏のジョージのチェット・アトキンス風のギターもいい音色だし、リンゴのリズミカルなドラムも軽快な響きだし、ジョンとポールのコーラスも楽しげで効果的。

リンゴというと「イエロー・サブマリン」や「ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ」が一般的だが、この曲はもっと脚光を浴びていいと思う。4人が力を合わせるとどんなにステキか、それがすぐに伝わる曲なので。

「歌詞は書けるんだけど、
曲を聴かせると『どこかで聴いたなあ』と言われるんだ」(リンゴ)

「リンゴが3時間かけてすごい曲を書いたと思ったら、ディランの曲だった」(ポール)

その他の主な収録アルバム
「"YESTERDAY"…AND TODAY」(US)

おススメのカヴァー
Sufjan Stevens 「VA／This Bird Has Flown」(2005)／Boo Hewerdine & Eddi Reader 「VA／Rubber Folk」(2006)

097

ガール

Girl

Lennon/McCartney
1965.12.3 (1965.11.11) [2'30]
「RUBBER SOUL」

"213曲"のジョンのヴォーカル曲でどれが最高かと訊かれたら、まずはこれを挙げたい。2009年にオリジナル・アナログ・マスターを元にしたリマスターCDが発売された時の個人的ベスト・ヴォーカル曲でもあった（ベスト・サウンドは「ロング・トール・サリー」）。

いきなり始まる"Is there"の"Is"だけでもうやられてしまう。ポールの声は女性ファンをうっとりさせ、ジョージの声は母性本能をくすぐり、ジョンの声は男女をシビれさせる。ジョンとポールの対比で言うなら、「アスク・ミー・ホワイ」と「P.S.アイ・ラヴ・ユー」、「恋におちたら」と「アンド・アイ・ラヴ・ハー」、そしてこの「ガール」と「ミッシェル」の違いである。

この曲は、ビターな声に乗せたジョンの女性賛歌だ。ジョンに言わせると、『ダブル・ファンタジー』に収録された「ウーマン」は「ガール」の80年代版だそうだけど、「ウーマン」は、「ガール」から15歳年を重ねた"大人の女性"を扱った歌というわけでない。"Pain And Pleasure"というキリスト教関係の本にヒントを得て書かれたというこの曲に登場する女性は、十分に"大人"である。苦痛の後に喜びがやってくるという"教え"についてジョンは懐疑的で、その思いを持った"女性"に対してジョンは"僕"とその"女性"との関係を"君"つまり聴き手に直接伝える手法をとっている。だからこそ、冒頭での"僕の話を聞いてくれないかい？"という一節がなおさら効果的なのだ。ビートルズ中期のジョンの代表曲だと思う。

「歌詞はベストのひとつだ。理想の女性についての曲。
それはヨーコ[1]のことだった」（ジョン）

「最後のゾルバ[2]のような部分はジェーンとのギリシャ休暇後に
僕が作ったんだ」（ポール）

その他の主な収録アルバム
「THE BEATLES 1962-1966」「RUBBER SOUL」(US)　「LOVE」(Download)

おススメのカヴァー
Rhett Miller 「VA／This Bird Has Flown」(2005)／Paul Carrack 「Old, New, Borrowed And Blue」(2007)

---

[1] ヨーコ＝小野洋子。66年11月9日にジョンと出会い、69年3月20日に結婚。
[2] ゾルバ＝ギリシャの伝統的な舞踊ゾルバダンスの演奏スタイル。

098

君はいずこへ

I'm Looking Through You

Lennon/McCartney
1965.12.3（1965.11.10、11.11）［2'25］
『RUBBER SOUL』

「恋を抱きしめよう」に続いてポールがジェーンに向けて書いた曲。演劇関連の仕事でジェーンと一緒にいる時間が少なかった時のポールの思いを綴ったものだが、歌われている内容はけっこう辛辣だ。ポールは「恋を抱きしめよう」では"なんとかやれる"と思っていたのに、この時は離れてもしょうがないというふうに心境が変わってしまっていたのかもしれない。実体験と歌は別物ではあるけれど、曲が生まれる動機として、身近にいる女性への思いや女性との関係は不可欠なのだろう。ジェーンはもしかして思い込みが激しいか、確固たる考えを持っていたか、そのどちらかのタイプだったのではないだろうか。

アコースティックな佳作で、ポールのヴォーカルもまろやかに爽やかに進むのに、タイトル・フレーズになると激しくシャウトする展開へと変貌する。しかもそこにリンゴが担当したといわれるハモンド・オルガンをかぶせてさらに強調する徹底ぶりだ。ゆえに、ジェーンを最初はなだめすかしていたポールが、サビでは"昔の君はどこへいっちゃったんだよ！"と苛立つ様子が映し出されている。邦題の「君はいずこへ」は的を射ている。

久しぶりに手拍子が使われているのも聴き逃せないところ。2週間ほど前（10月24日）に収録されたリメイク前の最初のテイクはもっと全体的に柔らかい仕上がりで、ジョンのハーモニーとマラカスが色を添えていた。その時はまだポールもイライラしていなかったのかもしれない。

「ジェーンの関わりの浅さにがっかりした僕の恋愛エピソードを歌にしたものだ。心の中まで見抜いているんだよっていうね」（ポール）

[illegible]
『RUBBER SOUL』(UK)　『ANTHOLOGY 2』

[illegible]
The Wallflowers『I Am Sam - Original Soundtrack』（2002）／Billy Preston『Billy Preston's Beatles Salute』（2006）

[illegible]

イン・マイ・ライフ

In My Life

Lennon/McCartney
[illegible]
『RUBBER SOUL』

実際はどっち？　判断に迷う、あるいは嘘に振り回される曲がいくつかある。たとえば「ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン」の[illegible]はジョン1人か[illegible]か、「[illegible]」のハーモニーはポールかジョージか、「カム・トゥゲザー」の[illegible]ー・ヴォーカルはポールかジョンかなど。そしてこの曲の最大の謎は、メロディはジョンかポールか？である。

曲の成り立ちはこうだ。故郷リヴァプールに思いを馳せた曲を書こうと思い立ったジョンが、まずリヴァプールやロンドンの場所や地名を思いつく限り挙げていった。たとえば2番の出だしは"Penny Lane is one I'm missing"で始まっていたが、ジョンは気に入らず、具体的な地名を盛り込むのはやめて歌詞を書き直した。というように、歌詞はジョンであるのは間違いない。しかしメロディはというと、[illegible]の難問だ。ジョンは[illegible]などで自分の曲と言っているが、ポールはメロディは自分だと言っている。具体的な発言にもあるとおり、"サビだけはポール"という説もあるけれど、ジョンの曲を自分のだと、記憶力のいいポールが言い張るわけがないということも含めて、これは作詞＝ジョン、作曲＝ポールの珍しい共作曲というのが、この本での見解。

いずれにしてもイントロのジョージのギター、中間奏のジョージ・マーティンのピアノ、リンゴのドラムも含めて中期の代表曲だ。とくに21世紀以降、ビートルズ時代の"ジョンの代表曲"として人気急上昇である。

「自分の人生について意識的に書いた最初の曲。
中間部のメロディはポールが手伝ってくれた」（ジョン）

「ジョンのメロトロンで30分くらいで書き上げた。[illegible]（ポール）

[illegible]
『THE BEATLES 1962-1966』『RUBBER SOUL (US)』
[illegible]
Keith Moon『Two Sides Of The Moon』(1975) / Sean Connery『George Martin / In My Life』(1998)

100

ウェイト

Wait

Lennon/McCartney
1965.12.3（1965.6.17、11.11）[2:13]
『RUBBER SOUL』

88年に出たマーク・ルイソンの"The COMPLETE BEATLES recording sessions"は、ビートルズがどの曲をいつどこで何テイクどういう手順でレコーディングしていったのかを詳細にまとめた画期的なデータ本だった。アビイ・ロード・スタジオに管理されているビートルズの全音源を時間をかけて聴き込んでまとめただけあって、驚きや発見があちこちにたくさんあった。その中でもとくに驚いたのが、この曲のレコーディング日だった。それまでに読んだビートルズのどの本にも書かれていなかった——まさか「ウェイト」が『ヘルプ！』のアウトテイクだったとは！

サビをポールが書いた2人の共作曲で、『ヘルプ！』のセッションでは一番最後に手がつけられた曲でもあったので、未完成のまま放置されたのだろう。『ラバー・ソウル』の発売日が迫り、あと3曲が必要になったが、手元にある新曲はジョンの「ガール」とポールの「ユー・ウォント・シー・ミー」の2曲しかない。そこで急遽、引っ張り出されてきたのが「ウェイト」だったというわけだ。

一部ポールが歌っているほかはジョンとポールがヴォーカルをとった軽快な曲なので、まさか『ヘルプ！』の時の曲だったとは気づきにくい。『ラバー・ソウル』に収録する際、ボリューム・ペダルを使ったジョージのギターやタンバリン、マラカス、さらにジョンとポールのバック・ヴォーカルを加えて違和感をなくしたからだ。

「ブランドン・デ・ワイルド*と話をしながら作った。
興味深そうに見ていたなあ」（ポール）

[illegible]
『RUBBER SOUL』（'65）
[illegible]
Ben Kweller Featuring Albert Hammond Jr.『V.A.／This Bird Has Flown』（2005）／Cara Dillon & Sam Lakeman『V.A.／Rubber Folk』（2006）

＊ブランドン・デ・ワイルド＝アメリカの俳優。代表作は『シェーン』（53年）ほか。

101

恋をするなら

If I Needed Someone

Harrison
1965.12.3（1965.10.16、10.18）［2'21］
『RUBBER SOUL』

　イントロのキラキラした音がまず耳に強く残る。その音色は、ジョージが新たに入手し、久しぶりにレコーディングに使用したリッケンバッカーの12弦ギターによるものだ。そのリフやテンポ感は、その後に出てくるジョージ自作の「アイ・ウォント・トゥ・テル・ユー」や「オールド・ブラウン・シュー」にも受け継がれているような印象だ。『ラバー・ソウル』では「嘘つき女」に続くジョージのオリジナル2曲目――ということは、『ヘルプ！』に続きジョージの自作が2曲収録されたアルバムということになる。ホリーズ*がすぐさまカヴァーしたが、ジョージはその演奏を全く気に入らなかったようだ。なぜだろう。

　歌詞に出てくる"電話番号を壁に刻んでおいて"という言いまわしが、イギリスの日常的な風習だったのかどうかはわからないけれど、これも「ノー・リプライ」の歌詞と同じく携帯電話のない時代の名残だ。

　"If I Fell"が「恋におちたら」なら"If I Needed Someone"は「恋をするなら」。単純だけど、原題のイメージを踏まえた良い邦題だと思う。

　65年のイギリス・ツアーと66年のワールド・ツアーでのジョージのライヴ・レパートリーで、66年の日本公演では、『ラバー・ソウル』から演奏された2曲のうちの1曲となったが（もう1曲は「ひとりぼっちのあいつ」）、テンポをゆるめ、まったりというよりも間延びした気だるさが伝わる演奏に変貌していた。

「Dコードで書かれた数限りない曲と何ら変わらない。
この曲のギター・リフはさまざまな曲に登場しているな」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

『"YESTERDAY"…AND TODAY』（US）

おススメのカヴァー

The Hollies「If I Needed Someone」（Single）（1965）／Roger McGuinn『Limited Edition』（2004）

---

*ホリーズ＝63年にパーロフォンからレコード・デビュー。
ビートルズ4人の最後のセッション（69年8月20日）に立ち会った。

102

浮気娘

Run For Your Life

Lennon/McCartney
1965.12.3（1965.10.12）［2'18］
『RUBBER SOUL』

ジョン曰く"ジョージのための曲"。自分で歌う気すらしない嫌いな曲、というわけだ。出だしの"I'd rather see you dead, little girl, than to be with another man"はエルヴィス・プレスリーの「ベイビー・レッツ・プレイ・ハウス」*の歌詞をそのまま引用した手抜き曲だったので、その"やっつけ感"が気に入らなかったのだろう。この時期のジョンは、もはやプレスリー超えを目指していたロックンローラーではなくなっていた、ということもあったのかもしれない。

それでも、「ユー・キャント・ドゥ・ザット」を彷彿させる傍若無人で嫉妬深いジョンの性格が出た歌詞や、イントロほかで聴けるジョージのスライド・ギターなど、取り立ててひどいという印象はない。むしろ「スロウ・ダウン」の重みをなくし、軽快に高速道路をかっ飛ばすスポーツカーのような活きのいい軽快なロックとして、気楽に気軽に楽しめる。

こうして見てくると、『ラバー・ソウル』は、ビートルズのオリジナル・アルバムで最も邦題の多いアルバムだ。顔ぶれも実に豪華。「嘘つき女」や「浮気娘」がいるし、曲の内容も含めるとしたら、女優の卵やフランス女性や未来のオノ・ヨーコまで（?）出てくる。次の『リボルバー』では邦題がいっさいなくなってしまうのは、高嶋弘之さんによると"ビートルズよりも日本の歌謡曲に興味が出たから"とのこと。67年以降の邦題はわずかに2曲——「愛こそはすべて」と「ジョンとヨーコのバラード」だけである。そして「嘘つき女」と邦題が似通ったこの曲は、原題もよく似ている。

「好きになったことは一度もない。
プレスリーの古いブルースから歌詞を拝借した」（ジョン）

「ジョンは生き急いでいた。僕の歌では考えられない発想だよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『RUBBER SOUL』（US）

オススメのカヴァー
Gary Lewis & The Playboys 『She's Just My Style』（1965）／Nancy Sinatra 『Boots』（1966）

*「ベイビー・レッツ・プレイ・ハウス」＝55年にシングルとして発表
オリジナルは54年にアーサー・ガンターが発表

4

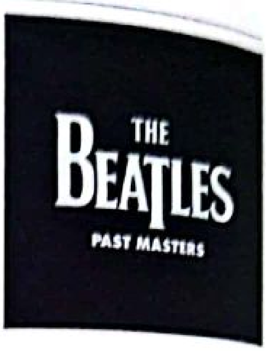
1966

103

ペイパーバック・ライター

Paperback Writer

Lennon/McCartney
1966.6.10（1966.4.13、4.14）［2'17］
シングル＆『PAST MASTERS』



「リボルバー」のセッションからエンジニアがノーマン・スミスからジェフ・エメリックに代わり、レコーディング・アーティストとして大きく踏み出した最初のシングル。ポールがビートルズの主導権を握った記念すべき最初の曲でもある。なぜなら、同じぐらい強力なジョンの「レイン」が、この12枚目のオリジナル・シングルのB面扱いになったからだ。「レイン」をA面に、ということではなく、両A面でよかったのでは？という意味だが、この傾向は以後のシングルでも頻発する。

イントロのギターは作者のポール。エピフォン・カジノの音色が、この曲の、重層構造になったギター・サウンドの印象をより強めている。それに負けず劣らず厚みのある塊として耳に迫ってくるのがポール、ジョン、ジョージによるコーラスだ。深いエコーがそれを増長させている。また、ポールとは生年月日が2日しか違わないビーチ・ボーイズ*のブライアン・ウィルソンに影響を受けたという動きまくるベースも凄まじい。

日本公演ほか66年のワールド・ツアーでも演奏された曲だが、ライヴはさすがにゆるい仕上がりで、『ビートルズ・フォー・セール』か『ヘルプ！』の収録曲に似通ったコーラス入りのギター・ロックといった展開だった。むしろ、オリジナルのエピフォン・カジノを抱えてポールがオリジナルどおりに演奏した2013年の日本公演のほうが印象深い。

大衆小説家になりたがっている人物がある編集長に送った手紙の文面をそのまま歌詞にする、という試みも斬新。

「手紙を書くような調子で歌詞を書き始めた。
本物の手紙のように“拝啓”とね」（ポール）

「〈デイ・トリッパー〉のポール版。いいギター・ソロの入ったR&Rってこと」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1962-1966』『THE BEATLES 1』『HEY JUDE』（US）

おススメのカヴァー

Tempest『Living In Fear』（1974）／Emmanuel Santarromana『Fab 4 Ever』（2006）

＊ビーチ・ボーイズ＝61年に結成。同年11月に「サーフィン」でデビュー。

104

レイン

Rain

Lennon/McCartney
1966.6.10（1966.4.14、4.16）〔3'00〕
シングル＆[PAST MASTERS]

「ペイパーバック・ライター」同様、ポールのベースとリンゴのドラムのコンビネーションが抜群にいい。90年代に発表された"新曲"「フリー・アズ・ア・バード」のイントロを聴いて、"これぞリンゴ、これぞビートルズ"と言う人は多いけれど、この曲もしかり。イントロの"ダダンッ、ダダダン"というドラムの連打だけでいきなり耳を引っ張られるような感覚に襲われる。後半のドラムのブレイクも見事な展開だし、リンゴ自身がこの曲をビートルズ・ナンバーの"ベスト・ドラミング"に挙げるのもよくわかる。

ジョンのかったるそうなヴォーカルも味わい深く、まるでドラッグをやっているんじゃないかと思わせる。概ねシングルになる曲は、オリジナルの演奏のテンポを幾分速めて発表することが多かったが、この曲は逆。テープ速度が早かったオリジナルを、あえて遅くして発表した。音の質感を変えて深みを出そうというジェフ・エメリックの試みだった。しかもエンディングにはヴォーカルを逆回転で収録するという凝りようだ。ジョンは後に、その革新的な試みについて、カルト曲"They're Coming To Take Me Away, Ha-Haaa!"*を例に挙げて語った。

楽器や声や構成の良さだけでなく、歌詞がとにかくいい。雨が降ったり陽が照ったりした時の人々の応対ぶりを綴りながら、心のありようを歌い込んだ滋味深い内容だ。"結局は気の持ちようなんだ"と。"Can you hear me？"（聞こえるかい）と聴き手に呼び掛けるジョン特有の"必殺フレーズ"も盛り込まれている。中期のジョンのベストだと思う。

「テープの逆回転が入った最初の曲。マリファナの神からの贈り物さ」（ジョン）

「自分でも驚くほどの演奏だよ」（リンゴ）

その他の主な収録アルバム
[HEY JUDE]（US）

おススメのカヴァー
Todd Rundgren [Faithful]（1976）／The Sunshine Company [The Sunshine Company]（1968）

---

* They're Coming To Take Me Away, Ha-Haaa! ＝「レイン」発売後の66年7月にジェリー・サミュエルズがナポレオン14世名義で発表したノヴェルティ・ソング（米3位・英4位）。邦題は「狂ったナポレオン、ヒヒ、ハハ……」

105

タックスマン

Taxman

Harrison
1966.8.5（1966.4.21、4.22、5.16）［2'37］
「REVOLVER」

　ビートルズの音楽活動は、ライヴ活動を軸にして、1962年から66年が前期で1967年から70年が後期というふうに2つに分けられることが多い。赤盤・青盤と呼ばれる2枚のベスト盤もその区分になっている。しかしスタジオ活動を軸にしてみると、後期は間違いなく66年の「リボルバー」から始まる。

　革新的なエンジニアに変わったことと、ビートルズ自身が当時ライヴでは再現不可能な領域へと一歩踏み出した音作りへと意識を変えたことがその理由となる。実際、『リボルバー』収録曲は、当時はライヴで1曲も演奏されていない。

　こうして見ると、ジョージの曲が初めてアルバムA面トップを飾った「タックスマン」の冒頭にカウントを入れたのは、革新的な音作りを意識した後期の始まりを、前期の最初のアルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』になぞらせたものだと取ることもできる。ジョージの普通のカウントを小さめにして、変なカウントを上にかぶせたのも意図的だろう。そのほうが耳に引っかかる始まりになるから。

　ジョンが作詞を手伝い、ポールが印象的なリード・ギターとベースで大活躍したジョージの傑作だ。税金の高いイギリス政府を実名まで挙げて皮肉ったジョージに、3年前に「すてきなダンス」を無邪気に歌っていたあどけない面影は全くない。目まぐるしく動き回るポールの"リード・ベース"が刺激的だが、インド風味たっぷりのポールのギターも感覚一発の凄みがある。シタールと出会って東洋思想に目覚めた"大人のジョージ"の始まり、である。

「どんなに稼いでも、
ほとんどを税金で持っていかれることを意識して書いた曲」（ジョージ）

「歌がうまく展開するように、いくつか気の利いたジョークを考えてやった」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
『REVOLVER』（US）　『ANTHOLOGY 2』

おススメのカヴァー
Bill Wyman's Rhythm Kings『Just For A Thrill』（2004）／Box『VA／Gentle Guitar Dreams』（2002）

106

エリナー・リグビー

Eleanor Rigby

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.4.28、4.29、6.6）[2:04]
シングル&【REVOLVER】

ビートルズが楽器をいっさい弾いていない初めての曲。ポールはヴォーカルのみで、ジョンとジョージはバック・ヴォーカルのみである。ソロ以降の再演では、ポールはアコースティック・ギターを弾きながら歌っている。マイク片手に歌うポールのカッコ悪さは、ポールが楽曲の権利を持つデビュー・シングル2曲を合体させた「P.S.ラヴ・ミー・ドゥ」の日本公演のステージ（90年）で証明済みだったが、人前ではやっぱり楽器が何かないとサマにならない。

バックを「イエスタデイ」の倍の弦楽奏にしたのはジョージ・マーティンのアイディアだが、ポールがヴァイオリンを取り入れることにしたのは、ヴィヴァルディをジェーン・アッシャーから教わったのがきっかけだったそうだ。切り刻むヴァイオリンの音色は、映画『サイコ』で知られるバーナード・ハーマン*1の影響だ。

この曲も、歌詞についてはジョンとポールの記憶違いがある。「70%は自分」とか「ポールは1番だけ」などと言うジョンに対してポールはこう返す——「手伝ったとジョンが言っているのは知っているよ。1行の半分ぐらいかな」。一方ポールは「ジョンの自宅に行って、ドラッグで朦朧とした意識の中、2人でゲラゲラ笑いながら書いた」とも言っているけど、「70%（以上）はポール」だと思う。孤独な人々の寂しい生活を盛り込んだ物語性豊かな歌詞は、映画『イエロー・サブマリン』でも見事に映像化された。"エリナー"の名前の由来が映画『ヘルプ！』で共演したエリナー・ブロン*2から、というのはちょっといい話。

「もう少しで"Father McKenzie"が"Father McCartney"になるところだった」（ポール）

「親父が知ったら腹を立てるとポールは思ったんだろう」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
【THE BEATLES 1962-1966】【THE BEATLES 1】【REVOLVER】（US）【YELLOW SUBMARINE SONGTRACK】【ANTHOLOGY 2】【LOVE】
おススメのカヴァー曲
Ray Charles【Eleanor Rigby】(Single)(1968) / P.P. Arnold【Kafunta】(1968)

---

*1バーナード・ハーマン＝映画音楽の作曲家。代表作はほかに『鳥』（63年）など。
*2エリナー・ブロン＝イギリスの女優。59年にデビュー。出演作は『アルフィー』（66年）ほか。

107

アイム・オンリー・スリーピング

I'm Only Sleeping

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.4.27、4.29、5.5、5.6）［2'58］
『REVOLVER』

ジョンは実はかなりの怠け者だったという話がある。思い立ったら即行動、誰もやらないことを臆することなくやってしまうという直感に頼った素早さがあるかと思いきや、のんべんだらりんとぐうたら街道まっしぐらに引きこもってしまうという両極端な性格だったようだ。オノ・ヨーコとの間にショーンが生まれて“主夫生活”が始まってからの5年間はそんな日々の繰り返しだったと、ホントかウソかはおいておくとして個人秘書が暴露している。80年の復活アルバム『ダブル・ファンタジー』に収録された「ウォッチング・ザ・ホイールズ」は、モノグサだと世間に見られているジョンからの返答歌でもあった。

「アイム・オンリー・スリーピング」もその曲に通じる趣がある。眠いだけというよりは、気だるさを伴う眠気。ドラッグによるまったりした気分が反映された曲であると考えるべきだろう。そんな「ひとりぼっちのあいつ」状態が逆回転によるギターで的確に表現されている。それだけでなく、ジョンのあくびまで加わり、さらにこの時期に新たに考案されたADT〈アーティフィシャル・ダブル・トラッキング〉*がジョンのヴォーカルにも施された。その結果、60年代前半の活きのいいジョンの声はすっかり様変わりした。一度聴いたら忘れられないほど特徴的な声なのに、なぜジョンは自分の声を嫌っていたのだろうか。この脱力感のある曲想・曲調は68年の「アイム・ソー・タイアード」へと受け継がれる。

曲名は、ボブ・ディランの“It's All Righ Ma, I'm Only Bleeding”のもじり。

「贅沢な気分の歌だね。逆回しのテープからすごいエフェクトが聞こえ、ジョージ・マーティンがそのアイディアを快く受け入れてくれた」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『“YESTERDAY”…AND TODAY』（US）　『ANTHOLOGY 2』

オススメのカヴァー
Stereophonics『Step On My Old Size Nines』（EP）（2001）／The Vines『VA／I Am Sam - Original Soundtrack』（2002）

＊ADT＝ジョージ・マーティンと同期入社のEMIのテクニカル・エンジニア、ケン・タウンゼンドがジョンの依頼により66年に考案。音声を自動的にダブル・トラック化する装置

106

エリナー・リグビー

Eleanor Rigby

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.4.28、4.29、6.6）［2'04］
シングル&『REVOLVER』

ビートルズが楽器をいっさい弾いていない初めての曲。ポールはヴォーカルのみで、ジョンとジョージはバック・ヴォーカルのみである。ソロ以降の再演では、ポールはアコースティック・ギターを弾きながら歌っている。マイク片手に歌うポールのカッコ悪さは、ポールが楽曲の権利を持つデビュー・シングル2曲を合体させた「P.S.ラヴ・ミー・ドゥ」の日本公演のステージ（90年）で証明済みだったが、人前ではやっぱり楽器が何かないとサマにならない。

バックを「イエスタデイ」の倍の弦楽奏にしたのはジョージ・マーティンのアイディアだが、ポールがヴァイオリンを取り入れることにしたのは、ヴィヴァルディをジェーン・アッシャーから教わったのがきっかけだったそうだ。切り刻むヴァイオリンの音色は、映画『サイコ』で知られるバーナード・ハーマン*1の影響だ。

この曲も、歌詞についてはジョンとポールの記憶違いがある。「70%は自分」とか「ポールは1番だけ」などと言うジョンに対してポールはこう返す――「手伝ったとジョンが言っているのは知っているよ。1行の半分ぐらいかな」。一方ポールは「ジョンの自宅に行って、ドラッグで朦朧とした意識の中、2人でゲラゲラ笑いながら書いた」とも言っているけど、「70%（以上）はポール」だと思う。孤独な人々の寂しい生活を盛り込んだ物語性豊かな歌詞は、映画『イエロー・サブマリン』でも見事に映像化された。"エリナー"の名前の由来が映画『ヘルプ！』で共演したエリナー・ブロン*2から、というのはちょっといい話。

「もう少しで"Father McKenzie"が"Father McCartney"になるところだった」（ポール）

「親父が知ったら腹を立てるとポールは思ったんだろう」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
『THE BEATLES 1962-1966』『THE BEATLES 1』『REVOLVER』（US）『YELLOW SUBMARINE SONGTRACK』『ANTHOLOGY 2』『LOVE』

オススメのカヴァー
Ray Charles『Eleanor Rigby』(Single) (1968)／P.P. Arnold『Kafunta』(1968)

---

*1バーナード・ハーマン＝映画音楽の作曲家。代表作はほかに『鳥』（63年）など。
*2エリナー・ブロン＝イギリスの女優。59年にデビュー。出演作は『アルフィー』（66年）ほか。

197

アイム・オンリー・スリーピング

I'm Only Sleeping

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.4.27、4.29、5.5、5.6）［258］
『REVOLVER』

ジョンは実はかなりの怠け者だったという話がある。思い立ったら即行動。誰もやらないことを臆することなくやってしまうという直感に頼った素早さがあるかと思いきや、のんべんだらりんとぐうたら街道まっしぐらに引きこもってしまうという両極端な性格だったようだ。オノ・ヨーコとの間にショーンが生まれて"主夫生活"が始まってからの5年間はそんな日々の繰り返しだったと、ホントかウソかはおいておくとして個人秘書が暴露している。80年の復活アルバム『ダブル・ファンタジー』に収録された「ウォッチング・ザ・ホイールズ」は、モノグサだと世間に見られているジョンからの返答歌でもあった。

「アイム・オンリー・スリーピング」もその曲に通じる趣がある。眠いだけというよりは、気だるさを伴う眠気。ドラッグによるまったりした気分が反映された曲であると考えるべきだろう。それは「ひとりぼっちのあいつ」同様、逆回転によるギターで的確に表現されている。それだけでなく、ジョンのあくびまで加わり、さらにこの時期に新たに考案されたADT「アーティフィシャル・ダブル・トラッキング」*がジョンのヴォーカルにも施された。その結果、65年までの活きのいいジョンの声はすっかり様変わりした。一度聴いたら忘れられないほど特徴的な声なのに、なぜジョンは自分の声を嫌っていたのだろうか。この虚脱感のある曲想・曲調は68年の「アイム・ソー・タイアード」へと受け継がれる。

曲名は、ボブ・ディランの"It's Alright Ma, I'm Only Bleeding"のもじり。

「贅沢な気分の歌だね。逆回しのテープからすごいエフェクトが聞こえ、ジョージ・マーティンがそのアイディアを快く受け入れてくれた」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『"YESTERDAY"...AND TODAY』（US）　『ANTHOLOGY 2』

おススメのカヴァー
Stereophonics『Step On My Old Size Nines』（EP）（2001）／The Vines『V.A.／I Am Sam: Original Soundtrack』（2002）

---

*ADT＝ジョージ・マーティンと同期入社のEMIのテクニカル・エンジニア、ケン・タウンゼンドがジョンの依頼により66年に考案。音声を自動的にダブルトラック

108

ラヴ・ユー・トゥ

Love You To

Harrison
1966.8.5（1966.4.11、4.13）［2'58］
『REVOLVER』

ジョージよ、何処へ行く。なんの情報もなくこの"新曲"に接した当時のファンは、そんなふうに思ったんじゃないだろうか。ジョージがここまで真っ当なインド音楽をビートルズ・ナンバーとして書き上げるなんてどうかしちゃったんだろうか。もしかしてポールにギタリストの座を脅かされて嫌になっちゃったのか。そんな声も聞こえてくる。

しかし、今ならわかる。これもビートルズの魅力だと。アルバム『リボルバー』の凄さだと。いわゆるポピュラー音楽の範疇に収まりきらず、表現の幅を貪欲に広げていった成果がたとえばこの曲であり、そうした革新的な音作りを、スタジオでのさまざまなアイディアを元に曲として昇華させた集合体が『リボルバー』となったのだから。

曲作りの最初からジョージはシタールを念頭に置いて作ったというから、普通のバンド・サウンドにしようという思いは全くなかったのだろう。ポールとリンゴも演奏に加わっているが、ほとんど目立たない（ジョンは不参加）。ジョージのソロ活動はこの曲が起点になったと捉えることもできる。そしてこの後ジョージは、インド音楽をさらに極めた「ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー」、そして「ジ・インナー・ライト」と、より哲学的な歌詞を盛り込んだ傑作をものにしていくのだ。

ちなみにこの曲も、録音時のタイトルはりんごの銘柄を元にした"Granny Smith"だった。曲調と全く結びつかないのは、間違いなく"適当に付けたから"。

「シタールとタブラを入れようと考えた最初の曲。歌とギターは後回しでね」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

『REVOLVER』（US）　『YELLOW SUBMARINE SONGTRACK』

おススメのカヴァー

Sukilove『VA／Mojo Presents Revolver Reloaded』（2006）／Cornershop『VA／Mojo Presents Yellow Submarine Resurfaces』（2012）

109

ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア

Here, There And Everywhere

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.6.16、6.17）〔2'23〕
『REVOLVER』

ポールにはいわゆるバラードの秀作が数限りないほどあるが、これはビートルズ時代の最高傑作のひとつ。個人的には「アンド・アイ・ラヴ・ハー」と同じ位置付けとなるロマンチックなバラードだと思っている。そして"彼女が手を振ってくれるだけで、僕の生活が変わる"ほどの"何か"がある、という言いまわしには、ジョージの「サムシング」との繋がりも見い出せるはずだ。

メロディの良さだけでなく、ジョンとジョージの貢献度の高さ――まろやかなギターとバック・コーラスがポールの声に混ざり合うことで生まれる甘酸っぱい空間が実に心地良い。4人全員で担当したといわれる最後のフィンガー・スナップ（指鳴らし）も効果的だ。

ポールは映画『ヤァ！ ブロード・ストリート』で再演した際、出だしの"I need my love to be here"を"I need a love of my own"に変え、より強い意思表示を見せている。同じくエンディングも"I will be there"を"I will be here, there"に変更している。その部分も曲名と同じにしたほうがよかったとポールは再演後のインタビューで語っていた。

発言にもあるとおり、ジョンの最も好きなポールの曲のひとつだが、ジョンの「ウーマン」（80年）は、間違いなくこの曲をお手本にしている。「オール・マイ・ラヴィング」のギターの3連符弾きなどと同じく、ジョン自身、会心の演奏ができた曲は愛着も長続きしたんだと思う。

「ジョンの家のプール・サイドで、
ジョンが起きるのを待つ間にほとんど1人で書き上げた」（ポール）

「完全にポールの曲。傑作だね。
ビートルズの曲の中でもお気に入りのひとつだよ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
『REVOLVER』（US）

おススメのカヴァー
Episode Six「Here, There And Everywhere」（Single）（1966）／Emmylou Harris『Elite Hotel』（1975）

110

イエロー・サブマリン

Yellow Submarine

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.5.26、6.1）［237］
シングル&『REVOLVER』『YELLOW SUBMARINE』

ビートルズの、というよりも、これはリンゴの代表曲。リンゴといえば「イエロー・サブマリン」である。ポールはよくぞこの曲をリンゴに歌わせたと思う。ポールの書くメロディって、どれだけ覚えやすいんだろうね。しかもこの曲をテーマにしたビートルズのアニメ映画まで制作されたのだから、色彩豊かな歌詞を盛り込んだポールのストーリーテラーとしての才能は、ジョンがしばしば卑下するようなものでもないはず。もし文学関係に進んでいたら、ジョンは私小説、ポールは児童文学、ジョージは哲学書、そしてリンゴは…なんだろう。

歌詞はポールだけではなく、メルヘンチックな曲を得意としたドノヴァン*が手伝い、ジョンも手を貸している。スタジオにいる時間が増えた分、音作りにも効果がすぐに出た。鎖や汽笛ほかスタジオには音の鳴る道具が用意され、ローリング・ストーンズのブライアン・ジョーンズはグラスを叩いたという。これはSE（サウンドエフェクト＝効果音）を多用した最初の1曲でもあるが、マーチング・バンドによるブラスの音が、まさかスタジオのライヴラリーから持ち出されたニセの音だったとは！

船長と船員とのやりとりは、ジョンとポールの"変顔"ならぬ"変声"の第一歩。そしてリンゴが書いた「オクトパス・ガーデン」は、この曲のテーマやSEを受け継いだ"弟分"である。当初は曲が始まる前に、航海に関するリンゴの物語風のセリフが長々と収録されていた。90年代の"新曲"「リアル・ラヴ」（95年）のカップリングで聴ける。

「眠りかけている時に子ども向けの歌を思い浮かべていたら、
黄色と潜水艦が浮かんだ」（ポール）

「戦争の歌だと解釈する人も多いけど、隠された意味なんてありゃしないよ」（リンゴ）

その他の主な収録アルバム
『THE BEATLES 1962-1966』『THE BEATLES 1』『REVOLVER』（US）『YELLOW SUBMARINE SONGTRACK』

オススメのカヴァー
Sebadoh『The Freed Man』（Reissue）（2007）／金沢明子「イエロー・サブマリン音頭」（Single）（1982）

＊ドノヴァン＝64年に音楽活動を開始し、65年3月に「キャッチ・ザ・ウィンド」（英4位・米23位）でデビューした"イギリスのディラン"。

111

シー・セッド・シー・セッド

She Said She Said

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.6.21）［2:34］
『REVOLVER』

どことなくソロのジョンを彷彿させる曲だ。とくにそう感じるのは、メタリックなギターの音色と、テンポ・チェンジの妙、エネルギーが充満した全体的な音の塊具合である。「ナット・ア・セカンド・タイム」のヘヴィ・ロック版というのが個人的イメージ。

実体験を元にした曲は多々あるが、これはジョンが全米ツアーの合間に俳優のピーター・フォンダ*とロサンジェルスでLSDをキメた時（65年8月24日）の2人の会話が元になっている。彼曰く"死ぬってどんなことか俺は知ってる"。その後のやりとりは歌詞を見てください。

発言にもあるように、ポールはこの曲に参加していないという。そうか、だから余計にジョンのソロっぽく感じられるのか。たしかに、エンディングの後追いコーラスはジョージの声だ。以前ならポール1人か、ポールとジョージの2人で間違いなくやったはずだ。しかしここで重要なのは、ジョージがベースを弾いたということ。言葉を足すと、ジョージがベースを弾くことをポールが許可したということだが、といって、これまでさんざんリード・ギターを弾かせてもらったからお返しにベースを弾いていいよ、とポールが言ったという話ではない。ジョンと口論してポールがスタジオを飛び出してしまったのだ。この曲がレコーディングされた『リボルバー』の最後のセッションが、日本を含む極東ツアー開始の3日前だったという切羽詰った状況だったため、ポールがベースを弾いたりコーラスを加えたりする時間もなかったんだと思う（ポール参加説もあり）。

「LSDのトリップの後に書いた。
ピーター・フォンダが囁くんだ。恐ろしかったな」(ジョン)

「とてもジョンらしい。僕は一切録音に参加せず、
ベースはジョージが弾いたと思う」(ポール)

その他の主な収録アルバム
『REVOLVER』(US)

おススメのカヴァー
Driscolls『VA／Revolution No.9』(1991)／The Black Keys『The Big Come Up』(2002)

---

*ピーター・フォンダ＝アメリカの俳優。代表作は『ワイルド・エンジェル』(66年)、『イージー・ライダー』(69年)ほか。

112

グッド・デイ・サンシャイン

Good Day Sunshine

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.6.8、6.9）［2'08］
「REVOLVER」

ジョンが雨ならポールは太陽である。"太陽"を題材にした曲はポールには多い。「アイル・フォロー・ザ・サン」やソロ以降の「ホット・アズ・サン」(70年)、「フィール・ザ・サン」(86年)、「ザ・サン・イズ・シャイニング」(08年) など、パッと思い浮かぶだけでもこれだけある。ビートルズだと、(ジョージの曲だが) やはり「ヒア・カムズ・ザ・サン」が代表だろう。

アルバムB面トップにしては知名度のそれほど高い曲ではない。A面の7曲がビート・ロック、クラシカル、サイケデリック、インド音楽、アコースティック、マーチ、メタリックとサウンドの表情をめまぐるしく変えてきた後に、さてどんな曲が出てくるのかとレコードに"針"を落としてみると、ポールとジョージ・マーティンのピアノが徐々に迫ってくるので、「エイト・デイズ・ア・ウィーク」に次いでフェイド・インで始まる曲かな？とちょっと思ってしまう。

曲調はというと、それまでの七変化だけでも十分なのに、これはソフト・ロック風のアプローチである。ビートルズがあらゆる音楽を飲み込んだバンドだと言われる所以はこういうところにある。その消化吸収力の高さと凄さは、感覚的なものも大きかったと思うが、それだけスタジオでああでもない、こうでもない、と曲に最もふさわしい表情を付けようと試行錯誤を繰り返した証でもあるだろう。

ピアノとリンゴのドラムとのコンビネーションも絶妙で、広く空が見渡せるような隙間のある音作りがとてもクール。センスも抜群だ。

「ラヴィン・スプーンフル*の〈デイドリーム〉を真似たトラッド・ジャズ系の曲。天気が良く、風が心地良い日に、ジョンの家の2階で生まれた夏の歌さ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「REVOLVER」(US)

おススメのカヴァー

The Tremeloes「Here Come The Tremeloes」(1967)／Claudine Longet「The Look Of Love」(1967)

---

*ラヴィン・スプーンフル＝65年に「魔法を信じるかい？」(米9位) でデビュー。3枚目のシングル「デイドリーム」は英米2位を記録。

113

アンド・ユア・バード・キャン・シング

And Your Bird Can Sing

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.4.26）［1'59］
「REVOLVER」

イントロからのツイン・リード・ギターが印象的なジョンの曲で、ビートルズの曲の中でもソリッドなロックとして裏ベスト的な人気がある。「アンド・アイ・ラヴ・ハー」と同じく、"アンド"を付けたのがセンスの良さ。

この手のストレートなロックは、『プリーズ・プリーズ・ミー』や『ウィズ・ザ・ビートルズ』などの初期のロックと比較してみると、バンドとしての上達ぶりやサウンドの成熟度がわかりやすい。初期だときっと、ベースやドラムはもっと単調で変化なく突っ走っていただろう。

ジョージもこの曲を気に入っている1人だが、ジョンは嫌悪している。ビートルズのCDの歌詞対訳を手掛けている奥田祐士さんに以前、こんな話を聞いたことがある。曲名の"Bird"は、アメリカのロック・バンド、バーズ（Byrds）のことじゃないか。そしてこの曲は、バーズを弟分として可愛がっていたボブ・ディランへの当てつけじゃないかと。"お前の子分のバーズはうまいって？ 俺にはちっとも届かないよ"というわけだ。だとするとジョンは、（ここでもまた）ディランを意識しすぎてやりすぎた、とでも思っていたのだろうか。

『アンソロジー2』での初期テイクを聴くと、ドラッグをやった直後に収録されたとしか思えないほど、ジョンとポールが終始笑いをこらえたり吹き出したりしながら1本のマイクに向かっているのがわかる。まさか歌いながらディランやバーズの顔が浮かんでた、なんてことは…。

「捨て曲のひとつ。ぞっとするね」（ジョン）

「ポールと、いやジョンとだったか、中間部でずっとギターでハモってるんだよ」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム
「"YESTERDAY"…AND TODAY」（US）　「ANTHOLOGY 2」

おススメのカヴァー
The Jam 「Extras」（1992）／Matthew Sweet And Susanna Hoffs 「Under The Covers Vol.1」（2006）

114

フォー・ノー・ワン

For No One

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.5.9、5.16、5.19）［1'58］
『REVOLVER』

「ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア」と並ぶポールのバラードの秀作で、この曲もジョンのお気に入りである。こんなに素敵な曲でも、広くあまねく知られているというわけではない。映画『ヤァ！ブロード・ストリート』でポールが再演して知名度は上がり、さらにこの曲によく似た「イングリッシュ・ティー」（05年）で、少し話題になった程度である。ポール自身、映画で再演した理由を訊かれた時に、スタジオでレコーディングしてからは一度も人前で演奏したことがなく、美術館の展示品のようにしておくのが嫌だったからだと語っている。

この曲もポールとリンゴしか参加していないという省エネ（？）のビートルズ・ナンバーだが、ほぼいきなりヴォーカルから始まるクラシカルな曲調がしっとりと味わい深い。ポールの弾くクラヴィコードをメインに静かに曲は進み、リンゴがドラム——といってもハイハット・シンバルとタンバリン——で同じく静かにアクセントを付けるという、曲調に合ったサポートぶりだ。ジョージ・マーティンの要請で参加したアラン・シヴィル*（外部のミュージシャンが単独で参加したのは3曲目）による間奏のフレンチ・ホルンも見事。

ポールが単独でこの後に制作した映画『ふたりだけの窓』のサウンドトラック（演奏はジョージ・マーティン・オーケストラ）の着想は、案外この曲やフレンチ・ホルンの響きがヒントになったのかもしれない。

「キャリア・ガールのことを歌った。ジェーンとの言い争いを歌ったものだろうね」（ポール）

「彼の曲の中で好きなやつ。これと〈ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア〉はいい」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
『REVOLVER』（US）

オススメのカヴァー
Cilla Black「A Fool Am I」（Single）（1966）／Rickie Lee Jones『It's Like This』（2000）

---

*アラン・シヴィル＝イギリスのホルン奏者。フィル・ハーモニー管弦楽団、BBC交響楽団の首席奏者を歴任。「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」にも参加。

115

ドクター・ロバート

Dr. Robert

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.4.17、4.19）［2'13］
［REVOLVER］

この時期のジョンには珍しく、具体的な人名を題材にした曲。主人公は、ニューヨーク在住のチャールズ・ロバーツ医師。"スピード・ドクター"とか"アシッド・ドクター"という異名をとるだけあって、どんな病気でも覚醒剤や鎮静剤を打って治してしまうというとんでもない医者で、ビートルズ（とくにジョンとポール）にLSDの服用を習慣づけさせた人物だった。

しかしドラッグ礼賛というわけではないのがビートルズらしいところで、当時イギリス政府が推し進めていたマリファナ禁止政策を皮肉った風刺曲である。

ドラッグで元気にしてくれる医者の存在は、ジョンやポールにとってありがたい存在だったのかもしれないが、私も同じく"ドクター・ロバート"には元気づけられたものだ。なぜかというと、初期を思い起こさせる、明朗快活なジョンが久しぶりに聴ける曲だからだ。とくにリズム・ギターの音色の心地良さといったらない。「消えた恋」にも登場したこの手の軽快な演奏は、リズム・ギタリスト＝ジョンの真骨頂だと思う。

そのままストレートに終われば65年までのビートルズ・サウンドの延長線上にある曲として捉えることもできたが、ポールが手掛けた"Well, well, well, you're feeling fine"で始まるサビではテンポもリズムも一転、ジョンのハーモニウムをバックに、かなり歌いづらいコーラスが繰り広げられる。そのキラキラしためくるめく展開は、まさにドラッギーなイメージの再現。緩急自在の流れが見事だ。

「ドラッグやピルがテーマさ。
ツアー先であらゆるドラッグを持ち歩いていたんだ」（ジョン）

「ドラッグで元気にしてくれる医者というおかしなアイディアをパロディにした」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「"YESTERDAY"…AND TODAY」（US）

オススメのカヴァー

Luke Temple「VA／Mojo Presents Revolver Reloaded」（2006）／Giacomo Bondi「Relounged - Giacomo Bondi's Homage To The Beatles」（2007）

116

アイ・ウォント・トゥ・テル・ユー

I Want To Tell You

Harrison
1966.8.5（1966.6.2、6.3）〔2'26〕
『REVOLVER』

1枚もののアルバムにジョージのオリジナルが3曲も収録されたのは『リボルバー』だけである。「グッド・デイ・サンシャイン」よりもはっきりとイントロからフェイド・インしてくるのがわかる曲だが、イントロで何より想い出深いのは91年に行なわれたジョージの日本公演。なにせソロ公演は74年以来17年ぶりのこと。ビートルズとソロを合わせてどんな曲構成にするのか。そんな期待の元に初日の横浜アリーナで、まず場内に鳴り響いたのがこの曲のイントロだった。意表を付かれて驚いた。もちろんうれしくて。それまでにどこでも一度もやったことのない曲をいきなりオープニングに持ってくるなんてね。その後も「タックスマン」や「ピッギーズ」や「オールド・ブラウン・シュー」など初披露の曲もたくさん演奏されたが、この曲のイントロを耳にして、こんなにライヴ映えする曲だったのかと体が痺れるほどだった。

「嘘つき女」や「愛のことば」などと同じくコーラスが耳に残るブギ・ウギ調のロックで、リンゴのドラムも力強い。曲の肝は不協和音を奏でるポールのピアノ。最後のポールのハーモニーも「アナザー・ガール」や「タックスマン」のギターのような東洋風のひねりが加わっていて面白い。

この曲も録音時のタイトルは、"Love You To"の"Granny Smith"と同じくりんごの品種"Laxton's Superb"で、翌日に"I Don't Know"になった。ジョージ・マーティンに訊かれてそう答えたからだというけど、それ、タイトルじゃないのでは？

「思いはあふれてくるのに、
書いたり話したりするのが難しいという状態を歌った曲」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム
『REVOLVER』(US)

おススメのカヴァー
Blue Cartoon 『VA／He Was Fab』(2002)／Thea Gilmore 『VA／Mojo Presents Revolver Reloaded』(2006)

117

ゴット・トゥ・ゲット・ユー・イントゥ・マイ・ライフ

Got To Get You Into My Life

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.4.8、4.11、5.18、6.17）［2'28］
『REVOLVER』

『リボルバー』にはポールの傑作が多いが、それをジョンも気に入っているというのが重要だ。この曲もそう。ポールがバンドの主導権を握ったことは前に書いたが、アルバムが発売され、ライヴ活動が終わった直後にジョンはオノ・ヨーコに出会って、ポール主導が徐々に加速していくのだから、“ビートルズ物語”はほんとによくできている。

曲としては「キャント・バイ・ミー・ラヴ」や「シーズ・ア・ウーマン」の流れを汲むもので、ややR&B寄りの快活なギター・ロックとしても満足のいく仕上がり。でも66年のポールは違った。旧知のサウンズ・インコーポレイテッド*のメンバーを呼び寄せ、ブラスを大々的に取り入れることで音楽性の幅を広げ、より洗練されたサウンドへと変化させたのだから、その先取り感覚がすごい。76年に編集アルバム『ロックン・ロール・ミュージック』からアメリカでシングル・カットされ、トップ10ヒットを記録したのがその証でもある。ポールは79年のウイングスのライヴでもオープニングで演奏したが、幻となった日本公演でもやるはずだったに違いない。ウイングスの「カミング・アップ」（ライヴ・ヴァージョン／80年）は、この曲の発展形と捉えることができる。

歌詞は一見“君”との生活を思い描いたように受け取れるが、発言にあるとおり、“君”＝“マリファナ”と置き換えると明快になる。“マリファナなしの生活なんて考えられない”というわけ。…なんて書くと、冗談じゃ済まなくなりそうだが。

「マリファナに手を出した頃に書いた。
この曲の相手は、人ではなくマリファナなんだ」（ポール）

「ポールのベスト・ソングのひとつ。歌詞がいい。
LSD体験の結果生まれたに違いない」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『REVOLVER』（US）　『ANTHOLOGY 2』

おススメのカヴァー

Cliff Bennett And The Rebel Rousers『Got To Get You Into Our Life』（1967）／Earth Wind & Fire『VA／Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band-Soundtrack』（1978）

＊サウンズ・インコーポレイテッド＝61年に結成。63年にNEMSと契約
62年4月にビートルズと知り合い、64年と65年のツアーに前座として同行

118

トゥモロー・ネバー・ノウズ

Tomorrow Never Knows

Lennon/McCartney
1966.8.5（1966.4.6、4.7、4.22）［2'57］
『REVOLVER』

『リボルバー』の最後を飾る曲は、実はセッションの一番最初にレコーディングされた曲だった。『アンソロジー2』にはまだ"Mark I"と呼ばれていた一番最初（テイク1）の演奏が収められている。それを聴くと、スタジオであまりにぶっとんだサイケデリック・ソングを収録していたビートルズは、その3ヵ月近く先に日本公演でゆるい演奏を聴かせていたビートルズとは全く別のバンドである。そう感じさせるぐらい両者の"音"はかけ離れていた。

しかし、テイク1に満足せずに、新たに作り直されたのがこのヴァージョン。無表情のまま淡々と曲は進むのに、感情は上下左右前後、どこに行くのか予測がつかないまま勝手に動き回るような、LSDでトリップした状態はこういうものかと想像させるようなサウンドに変貌している。

『アイ・フィール・ファイン』のイントロのギターのフィードバックが、ほんの出来心でやったお遊びかと思えるほど、今度は本気の本気。本格的な実験音楽を作ろうとハナから意図して臨んだということがわかる。たとえばかもめの鳴き声を模したテープ・ループはポールが自宅で録音したものを持ち寄ったものだった（笑い声を逆回転で収録）。

曲名はリンゴのつぶやきが元になったものだが、それが歌詞には全く出てこない珍しい曲でもある。ジョンの声質をいじったり、テープの逆回転を使ったり、ありとあらゆる実験を詰め込んだビートルズ版現代音楽の最高峰は間違いなくこの曲。歌詞もジョンの最高傑作のひとつだ。

「初めて書いたサイケデリック・ソング。
哲学的な詩の角を取るつもりで、"リンゴイズム"をタイトルに使ってみた」（ジョン）

[illegible]
『REVOLVER』（US）／『ANTHOLOGY 2』『LOVE』
[illegible]
Phil Collins『Face Value』（1981）／Monsoon『Third Eye』（1983）

213をさらに楽しむ❷

ライヴ演奏曲

1962年／30曲

Love Me Do／P.S. I Love You／Please Please Me／Ask Me Why／I Saw Her Standing There／Anna (Go To Him)／Boys／Baby It's You／A Taste Of Honey／Twist And Shout／Till There Was You／Please Mister Postman／Roll Over Beethoven／Hold Me Tight／You Really Got A Hold On Me／Devil In Her Heart／Money／Long Tall Sally／Slow Down／Matchbox／Rock And Roll Music／Mr. Moonlight／Kansas City - Hey, Hey, Hey, Hey!／Words Of Love／Honey Don't／Everybody's Trying To Be My Baby／Dizzy Miss Lizzy／Bad Boy／When I'm Sixty-Four／One After 909

※デビュー前も含む

1963-1966年／55曲

Love Me Do（1963）／P.S. I Love You（1963）／Please Please Me（1963-64）／Ask Me Why（1963）／I Saw Her Standing There（1963-64）／Misery（1963）／Anna (Go To Him)（1963）／Chains（1963）／Boys（1963-64）／Baby It's You（1963）／A Taste Of Honey（1963）／Do You Want To Know A Secret（1963）／There's A Place（1963）／Twist And Shout（1963-65）／From Me To You（1963-64）／Thank You Girl（1963）／She Loves You（1963-64）／All My Loving（1963-64）／Till There Was You（1963-64）／Roll Over Beethoven（1963-64）／Hold Me Tight（1963-64）／You Really Got A Hold On Me（1963）／I Wanna Be Your Man（1963-66）／Devil In Her Heart（1963）／Money（1963-64）／I Want To Hold Your Hand（1963-64）／This Boy（1963-64）／Can't Buy Me Love（1964-65）／You Can't Do That（1964）／Long Tall Sally（1963-66）／A Hard Day's Night（1964-65）／I Should Have Known Better（1964）／If I Fell（1964）／I'm Happy Just To Dance With You（1964）／Things We Said Today（1964）／I Feel Fine（1964-66）／She's A Woman（1964-66）／I'm A Loser（1964-65）／Baby's In Black（1964-66）／Rock And Roll Music（1963-66）／Mr. Moonlight（1963）／Kansas City - Hey, Hey, Hey, Hey!（1964）／Honey Don't（1963-65）／Everybody's Trying To Be My Baby（1964-65）／Ticket To Ride（1965）／Help!（1965）／I'm Down（1965-1966）／Act Naturally（1965）／Yesterday（1965-66）／Dizzy Miss Lizzy（1965）／Day Tripper（1965-66）／We Can Work It Out（1965）／Nowhere Man（1965-66）／If I Needed Someone（1965-66）／Paperback Writer（1966）

※（　）内は演奏年

5

1967

119

ストロベリー・フィールズ・フォーエバー

Strawberry Fields Forever

Lennon/McCartney
1967.2.17（1966.12.8、12.9、12.15、12.21）［4'07］
シングル&「MAGICAL MYSTERY TOUR」（US）

66年8月のライヴ活動停止後に発売された最初のシングル。これもジョンの最高傑作のひとつだ。「イン・マイ・ライフ」の歌詞に最初「ペニー・レイン」など具体的な地名を入れようとしていたジョンは、その後1年ほどして、自宅（ミミ伯母宅）の近くにある孤児院を曲名に盛り込んで別の曲を作った。同じく故郷リヴァプールへの郷愁をテーマにしているが、内容も音作りも両者は全く異なる。ジョンは遊び場だった“ストロベリー・フィールド”をひとつの理想郷として捉えた。懐古趣味的な曲ではなく、時代の寵児となったビートル・ジョンが“現実はいかに非現実か”を悟って“思えば遠くへ来たもんだ”（というほど軽くはないけど）という視点から振り返ったもの、という超訳も不可能ではないだろう。

サウンドも、歌詞同様“非現実的”なイメージに満ちている。出だしのメロトロンによるフルートの音色に導かれ、前半は叙情的だが、後半はブラスやチェロやパーカッションが加わり攻撃的な展開へと様変わりする。アレンジの異なる2曲をジョンの要望でジョージ・マーティンが繋ぎ合わせた成果でもあるが、前半が“非現実”で後半が“現実”という対比を狙ったものなのかもしれない（ジョンにとってはその逆だったのかも）。

最後のフェイド・アウトからフェイド・インへと繋がる手法も斬新。すべてがすべて、サイケデリック・ソングの範疇を超えたもうひとつのビートルズ版現代音楽は、4分を超える初めての曲ともなった。

「『ナルニア国物語』＊の秘密の花園だとジョンは思っていた。
ジョンにとっての隠れ場だったのさ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1967-1970」「ANTHOLOGY 2」「LOVE」

おススメのカヴァー

Todd Rundgren「Faithful」（1976）／Ben Harper「VA／I Am Sam - Original Soundtrack」（2002）

＊「ナルニア国物語」＝イギリスの文学者C.S.ルイスが50年から56年にかけて出版した全7巻からなる児童小説

120

ペニー・レイン

Penny Lane

Lennon/McCartney
1967.2.17（1966.12.29、12.30、1967.1.4、1.5、1.6、1.9、1.10、1.12、1.17）[3'00]
シングル&『MAGICAL MYSTERY TOUR』(US)

同じリヴァプールが題材でも2人のアプローチはこんなに違う。すでに65年11月にポールは「詩的な名前が気に入っているので、“Penny Lane”についての曲を書こうと思っている」と語っていた。「イン・マイ・ライフ」の歌詞にジョンが盛り込まなくてよかったとも思うけれど、その言葉どおり、ポールは郷愁の地として、ペニー・レイン周辺で生活を営む理容師、銀行員、消防士、看護士などの日常を情景豊かに浮かび上がらせている。

しかしポールは、リヴァプールの人にはわかるジョークを歌詞に潜り込ませることも忘れていない。“Four of fish and finger pie”の“finger pie”と“keeps his fire engine clean”の“fire engine”は、それぞれ“女性器”と“男性器”のこと。こういうやんちゃな遊び心も、ビートルズ流の“わかる人にはわかるだろう”というくすぐりだ。

サウンドも、ジョンの「ストロベリー・フィールズ…」とは対照的に、これぞポールという陰りの全くない明快な仕上がりだ。ポールのベースも抜群だが、とりわけ間奏のピッコロ・トランペットの高らかな音色が、開放的なイメージを決定付ける。バッハの「ブランデンブルク協奏曲」*で使われている楽器を、というポールの要望で最後の最後にダビングされたものだという。66年以前だったらピアノで代用したはずだが、音色へのちょっとしたこだわりが実は重要だ。

イギリスでは「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」との両A面シングルとして発売されたが、アメリカではこちらがA面扱いとなり1位を記録した。

「“青く澄み切った空”みたいな素敵な場所についての事実と郷愁が合わさった歌」(ポール)

「4歳まで僕が住んでいた一画をテーマにしたポールの曲」(ジョン)

その他の主な収録アルバム
『THE BEATLES 1967-1970』『THE BEATLES 1』『ANTHOLOGY 2』
おススメのカヴァー
Kenny Rankin『The Bottom Line Encore Collection』(1999)／The Bootles『A Tribute To The Beatles』(2010)

---

*「ブランデンブルク協奏曲」＝バッハが1721年に発表した6部からなる合奏協奏曲。

121

サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド

Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band

Lennon/McCartney
1967.6.1（1967.2.1、2.2、3.3、3.6）［2'02］
「SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND」

ライヴ活動停止後のアルバム制作は66年11月に始まった。66年に録音が開始されたのは、シングルとなった2曲と「ホエン・アイム・シックスティ・フォー」だった。過去を回想した曲が先に録音されたのにはワケがある。『リボルバー』に続く新作は、当初は“少年時代”をテーマにしたものだったからだ。バンド活動の一区切りとして、一旦“ゲット・バック”しようとしたのかもしれない。

しかし、67年2月1日にテーマは変更となる。この曲の録音終了後にポールはこう言ったそうだ。「ペパー軍曹が本当にレコードを作ってるみたいにやってみるのはどうかな？」――ロード・マネージャーのマル・エヴァンスのアイディアだという話もあるが、それはそれとして、ジョージ・マーティンが気に入り、3月6日、ライヴの臨場感を出すためにイントロのざわめきや拍手、笑い声などのSEがスタジオのテープ・コレクションから引っ張り出された。また、エンディングの観客の叫び声には、当時未発表だったビートルズのハリウッド・ボウル公演のテープが使われている。

ライヴ活動をやめたビートルズに代わり、別のバンドに扮した4人がライヴ仕立てのスタジオ・アルバムを作る…と書いてみただけでも、すごいコンセプトを思いついたものだと感嘆してしまう。ラトルズ*を超えるパロディ・バンドはペパー軍曹のバンドだけ、である。この曲は、リーダーとなったポールの独壇場。エレキもベースもヴォーカルもすべてが一級の強力なロックだ。間髪入れずバトンをリンゴに渡した流れも完璧。

「ビートルズであることに僕らはうんざりしていた。
で、分身が作ったアルバムをってね」（ポール）

「アメリカ公演の後にポールが書いた。
西海岸の長ったらしい名前のバンドの影響さ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1967-1970」「YELLOW SUBMARINE SONGTRACK」

おススメのカヴァー

Jimi Hendrix「Jimi Hendrix Experience」(2000)／The Bee Gees, Paul Nicholas「VA／Sgt Pepper's Lonely Hearts Club Band - Sound Track」(1978)

---

*ラトルズ＝エリック・アイドル（モンティ・パイソン）とニール・イネス（元ボンゾ・ドッグ・バンド）がテレビ番組「ラトランド・ウィークエンド・テレビジョン」（75年5月）から生まれたビートルズのパロディ・バンド

122

ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ

With A Little Help From My Friends

Lennon/McCartney
1967.6.1（1967.3.29、3.30）［2'44］
『SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND』

「イエロー・サブマリン」と並ぶリンゴの代表曲。司会者の“ビリー・シアーズ！”の呼び掛けに応えてやってきたリンゴがステージ脇から小走りに出てきて、マイク1本で歌う。そんなイメージが現実となったのが、2014年1月の『第56回グラミー賞授賞式』。ビートルズが特別功労賞を受けたためポールとリンゴが出席し、ポールのバンドが「サージェント・ペパーズ…」を演奏した後、ステージ右手後方からリンゴが曲のエンディング間際にやってきて、メドレーでこの曲を歌った。

アルバム『サージェント・ペパーズ…』にもドラッグ・ソングがたくさんあるが、この曲はどうか。発言にあるとおり作者のポールはそうだと認めているが、歌詞の一部を手伝ったジョンは“ただハイになる気分を歌った真面目なメッセージ・ソングだ”と否定している。“友達の助けを借りてハイになる”という言いまわしが元で放送禁止になりかけたり、歌手のメル・トーメ*1が“ドラッグを広めるために書かれた”とテレビで発言したりといった“言いがかり”がジョンの反発を買ったということだと思う。ということで、ポールの発言を踏まえ、個人的にはドラッグ・ソングと認定。

『サージェント・ペパーズ…』はポールのベースを聴くためのアルバムといってもいいほどだが、この曲でのリンゴのドラムとのコンビネーションは、「レイン」と並ぶ素晴らしさだ。最初の曲名は“Bad Finger Boogie”。“ビートルズの弟バンド”としてアップルからデビューしたアイヴィーズ*2は、その曲名を参考にバッドフィンガーに改名した。

「リンゴのために職人のようにジョンと作った。
リンゴ用の曲ではこれがベストじゃないかな。マリファナ時代の作品だから、
“I get high”という言葉は入れておきたかった」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1967-1970』『YELLOW SUBMARINE SONGTRACK』

おススメのカヴァー

The Beach Boys『Rarities』（1983）／Joe Cocker『With A Little Help From My Friends』（1969）

---

*1メル・トーメ＝4歳で音楽活動を開始したアメリカの歌手兼俳優。
*2アイヴィーズ＝68年11月にアップルからデビュー。69年11月にバッドフィンガーと改名。

123

ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ

Lucy In The Sky With Diamonds

Lennon/McCartney
1967.6.1（1967. 3.1、3.2）〔3'27〕
『SGT PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND』

ドラッグの影響なのだろうか、ジョンが67年に書いた曲は"音"を視覚化したものが多い。この曲はその最たるものだろう。"タンジェリンの木""マーマレードの空""万華鏡の瞳""セロファンの花""新聞紙のタクシー""粘土のポーター""鏡のネクタイ"——。歌詞をいくつか拾っただけでカラフルなイメージが浮かんでくる。

有名な話ではあるけれど、ジョンが曲想を得たのは3歳の息子ジュリアンの1枚の絵だった。保育園の友達ルーシーが、ダイアモンドと一緒に宙に浮かんでいる絵——ジュリアンから説明を受けたジョンが、そのまま曲名にも引用し、ビートルズで最も幻想的な作品に仕上げた。

サウンドもジョンのヴォーカルも、「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」に匹敵する最も幻想的な雰囲気がある。ポールが手掛けたイントロからのハモンド・オルガンの響きも独特。ジョンは後年、曲はいいのにサウンドはクズだと酷評していたけれど、たとえばジョージの「オンリー・ア・ノーザン・ソング」などと同じく90年代以降にむしろ評価されそうな曲じゃないかと思う。シューゲイザー好きでこの曲を気に入っている人も多いし。

もうひとつ有名なのは、曲の頭文字が"LSD"になること。BBCでもそれが理由で放送禁止処分となったが、ジョンはジュリアンのエピソードをやたらと出して否定している。否定しているのはジュリアンを思う親心かも。ルーシーは09年に亡くなり、ジュリアンは追悼シングル"Lucy"を発表した。

「曲のイメージは『不思議の国のアリス』*からさ。そいつを視覚化したんだ」（ジョン）

「"ジュリアンの絵を見てくれよ。タイトルがすごいんだ!"とジョンに見せられて、僕らはトリップを連想した」（ポール）

[illegible]
『THE BEATLES 1967-1970』『YELLOW SUBMARINE SONGTRACK』『ANTHOLOGY 2』『LOVE』

[illegible]
Elton John『Lucy In The Sky With Diamonds』(Single)（1974）／Puffy『V.A.／Happy Birthday, John』（2005）

*『不思議の国のアリス』…イギリスの作家・詩人・数学者のチャールズ・ラトウィッジ・ドジソンがルイス・キャロル名義で1865年に発表した児童小

124

ゲッティング・ベター

Getting Better

Lennon/McCartney
1967.6.1（1967.3.9、3.10、3.21、3.23）［2'47］
『SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND』

アルバム『サージェント・ペパーズ…』はライヴ仕立てのコンセプト・アルバム（トータル・アルバムとも言われる）なので、曲と曲との間に無音がほとんどない。曲が繋がっているように聞こえる効果を狙ったもので、実際、冒頭のメドレーや後半のクロスフェイド（曲がフェイド・アウトする前に次の曲がフェイド・インしてくる）など、さまざまな工夫が凝らされている。

この曲も、前の曲がフェイド・アウトして音が消えた途端、イントロの"カッカッカッカッ"と切り込んでくるギターが耳にすぐさま飛び込んでくる。それに続くベタっとしたメロディは、ポールのこれ以前に紹介してきた"あの曲"などにちょっと似ているので、個人的にはそれほど魅力的には感じられないけれど、サウンドと歌詞はそれに反して抜群にいい。

サウンドはジョージのタンブーラを絡ませたところがいい味で、掛け合いコーラスも面白い。しかもそこでのジョンとのやりとり——ポールも言っているように"だんだん良くなるよ"に対して"これ以上悪くなりようがない"という即座の返し。"さすがジョン！"と思わせる場面だ。実際のレコーディングでもおそらくポールがタイトル・フレーズを歌った瞬間、何の前触れもなくジョンがそう返したのだろう。そういうところがポールの言う"very John"である。ちなみに"It's getting better"は、リンゴが急病で64年のツアーの代理ドラマーとなったジミー・ニコルの口癖だったそうだ。

「女性に対して残酷だったんだ。
平和を求めるのはこういう経験があったからだ」（ジョン）

「"It's getting better"に
"It can't get much worse"と応じるなんてすごいよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

—

おススメのカヴァー

Davy Graham『Hat』（1969）／Lon And Derrek Van Eaton『Black & White』（1998）

125

フィクシング・ア・ホール

Fixing A Hole

Lennon/McCartney
1967.6.1（1967.2.9、2.21）［2'35］
「SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND」

67年2月9日の最初のセッションはロンドンのリージェント・サウンド・スタジオで行なわれた。これ以前にロンドンのEMI以外のスタジオでレコーディングされたのは、64年1月29日の「抱きしめたい」「シー・ラヴズ・ユー」のドイツ語版と「キャント・バイ・ミー・ラヴ」（パリのEMIパテ・マルコーニ・スタジオ）、65年5月下旬にモノ・ヴァージョンのヴォーカルを入れ直した「ヘルプ！」（C.T.S.スタジオでリンゴ以外のメンバーで収録）の計4曲。以後、EMIスタジオ以外でのセッションがたびたび実現する。

これもポールの曲だが、これはメロディも歌詞もいい。と書いて思ったけれど、「ゲッティング・ベター」がベタだと感じるのは、どことなく過去にある曲のメロディをなぞっていると感じるからだ。これは新機軸。緩急とりまぜた展開もいいし、ポールが弾くハープシコードの音色もサウンドとの相性はばっちり。「ラバー・ソウル」以降のビートルズは、ギター・ロック・バンドとはもはや言えない曲がほんとに増えた。とはいえ、間奏で聴けるジョージのメタリックなギターはロック・バンド的だけれども。

“雨漏りする穴を直している”という冒頭の歌詞にはドラッグの香りが漂うが、ポールは“心が自由にさまよっていける状態にするための喩えだ”と説明している。そう解釈すると、曲の印象が一気に変わる。“マインド・ゲームス”好きのジョンは、ゆえにこの曲を高く評価しているのだろう。ロード・マネージャーのマル・エヴァンスが曲作りを一部手伝ったという。

「君の心のどこかに穴が開き、雨が入り込む。
でも邪魔しているのは実は君自身なのさ」（ポール）

「またしてもポールはいい歌詞をものにしたってわけ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

—

おススメのカヴァー

Connie Evingson「Let It Be Jazz - Connie Evingson Sings The Beatles」（2003）／The Helium Kids「VA／It Was 40 Years Ago Today」（2004）

126

シーズ・リーヴィング・ホーム

She's Leaving Home

Lennon/McCartney
1967.6.1（1967.3.17、3.20）［3'35］
『SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND』

ジョージとリンゴが参加していないビートルズ・ナンバーは？と訊かれたら、マニアは「ジョンとヨーコのバラード」を挙げるに違いない。でも、先にこの曲を挙げられたらかなりのビートルズ通だろう。しかもジョンとポールはヴォーカルだけの参加で、楽器はヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、ダブル・ベース、ハープだけのセミ・クラシックである。

イギリスの大衆紙『デイリー・ミラー』に出ていた家出少女の記事をヒントにポールが書いた曲で、ジョンは、ミミ伯母さんからよく聞かされていた小言をそのまま使ってコーラスを付けている。これを聴くと「エリナー・リグビー」にもジョンがコーラスの合いの手を入れたら面白かったかもとちょっぴり思わせる。そのくらいジョンの声が魅力的。ポールの『フラワーズ・イン・ザ・ダート』（89年）に収録された「ユー・ウォント・ハー・トゥ」のエルヴィス・コステロの合いの手は、間違いなくこの曲を参考にしているはずだ。

しかし、過去のクラシカルな2曲に比べてストリングスのアレンジには大きな違いがある。ジョージ・マーティンがシラ・ブラックの録音で手が離せなかったため、ポールは急遽、ローリング・ストーンズの「アズ・ティアーズ・ゴー・バイ」などを手掛けたマイク・リーンダーにスコアを依頼してしまったのだ。マーティンが気分を害したのは言うまでもない。アルバムの50周年記念盤（2017年）に収録された別テイクを聴くと、2番と3番の直前に1小節分、当初は余分なスコアが加えられていたことがわかる。

「ジョンが、音を長く伸ばしたギリシャ風コーラスを加えてくれた」（ポール）

その他の主な収録アルバム

—

オススメのカヴァー

David & Jonathan「She's Leaving Home」(Single)（1967）／Annie Haslam『One Enchanted Evening』（2005）

127

ビーイング・フォー・ザ・ベネフィット・オブ・ミスター・カイト

Being For The Benefit Of Mr. Kite!

Lennon/McCartney
1967.6.1（1967.2.17、2.20、3.28、3.29、3.31）[2'36]
「SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND」

“サイケ走った”ジョンの魅力全開の曲。裏を返せばサウンドに懲りすぎて、思索的な方向にはいかなかった曲ということだ。“ジョン・ディラン”は何処に？である。この曲の歌詞の大きなヒントになったのは、「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」のビデオ・クリップをケントで撮影した時（67年1月31日）に、ジョンが骨董品屋で買った1843年2月14日開催のサーカスの宣伝ポスターだ。ジョンの家に飾られていたが、それを見ると、歌詞はほとんどそこからの引用に過ぎない。ポールとは正反対に、この時期のジョンは曲作りの意欲がほとんどなかったんじゃないかと思う。

自ずと曲調はサーカス風になる。ジョージ・マーティンによると、ポールは具体的な音のイメージを持ち合わせていたのでスコアに書き写すだけで済んだが、ジョンは抽象的で、この曲も“おがくずの匂いが床に充満するようなサウンドにしたい”とか“サーカスのリングみたいな感じがほしい”と言ってきたという。すでに現存しないスティーム・オルガンの音も欲しがったので、ヴィクトリア朝時代の古いテープを探し出し、それを30センチごとに切って空中に放り投げ、適当に繋ぎ合わせ、さらにそれを逆回転でSEとして使用した。間奏やエンディングでその音色が登場するが、見事なサーカス風サウンドだ。しかもカラフルでドラッグの香りもたっぷり。おがくずの匂いはしてこないけれども。「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」と並ぶ労作のひとつである。

「“Henry The Horse”がヘロインのことだなんてね」（ジョン）

「ジョン宅の居間の壁に飾ってあったポスターを書き写して
単語を繋げてみた」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「ANTHOLOGY 2」「LOVE」

おススメのカヴァー

Billy Connolly「George Martin／In My Life」(1998)／Spongetones「VA／It Was 40 Years Ago Today」(2004)

128

ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー

Within You Without You

Harrison
1967.6.1（1967.3.15、3.22、4.3、4.4）［5'05］
「SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND」

「リボルバー」では3曲も採用されたのに、「オンリー・ア・ノーザン・ソング」がボツになったので、「サージェント・ペパーズ…」にはジョージのオリジナルは1曲しかない。しかしその1曲が、このアルバムの価値をどれだけ高めただろうか。この曲が収録されたことで"ビートルズ"のアルバムになったといってもいいぐらい、ジョージの存在感が際立っている。ジョンとポールとの"個性"の違いも顕著だ。

「ラヴ・ユー・トゥ」でインド音楽に挑んだジョージは、それを発展させ、歌詞もメロディもより魅力的な作品として仕上げた。この曲の聴きどころは、シタールとストリングスの絡みだ。録音時は3パート計6分25秒あった曲を最後の最後に短縮した（それでも初の5分超え）。後に「アイ・ウォント・ユー」や「ユー・ノウ・マイ・ネーム」でも同じ手法が採用されている。曲の雰囲気を明るくするためにジョージが考えたというエンディングの笑い声も、後で加えられたもの。空気を緩和させる絶妙なアイディアだ。

歌詞も素晴らしい。ジョンが書いた「アクロス・ザ・ユニバース」や「イマジン」（71年）を思い起こさせる愛と平和のメッセージは、同時に、ソロ以降の「オール・シングス・マスト・パス」（70年）や「リヴィング・イン・ザ・マテリアル・ワールド」（73年）で見せたジョージの思想へと結びつくその始まりでもある。"金に目がくらんで魂を売った人"に言及した歌詞の後に、"君もそうなのかい？"と呼び掛けるあたりも、まるでジョンの作風のようだ。

「瞑想を体験した後にクラウス・フォアマン*宅で書いた。
間奏のカウントがいいね」（ジョージ）

「ジョージのベスト・ソングのひとつ。
インド音楽がアメリカに入ったのは彼の功績だ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
「ANTHOLOGY 2」「LOVE」

おススメのカヴァー
Sonic Youth「VA／Sgt.Pepper Knew My Father」（1988）／Big Head Todd And The Monsters「VA／Songs From The Meterial World - A Tribute To George Harrison」（2003）

＊クラウス・フォアマン＝60年にドイツでビートルズと出会う。パディ、クラウス&ギブソンを経て66年にマンフレッド・マンに加入。「リボルバー」と「アンソロジー」シリーズのジャケットを担当。

129

ホエン・アイム・シックスティ・フォー

When I'm Sixty-Four

Lennon/McCartney
1967.6.1（1966.12.6、12.8、12.20、12.21）［2'37］
『SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND』

この曲を書いた15、16歳の頃、ポール自身もまさか64歳（2006年）に現役ロック・ミュージシャンを続けているなんて思いもしなかっただろう。そもそもロック・ミュージシャンになっていたかどうかもわからない頃の話でもあるし。

なぜポールはこんなに古い曲を引っ張り出してきたのだろうか。ひとつは、「サージェント・ペパーズ…」のところにも書いたように、アルバムが当初"少年時代"をテーマにしたものだったからだ。もうひとつは、トラッド・ジャズ系のミュージシャンだった父ジェームズが66年7月で64歳（当時、イギリスでの男性の定年退職年齢だった）を迎えたからで、この曲のサビの部分は66年9月――ライヴ活動休止の翌月に書き加えられている。

ポールのヴォーカルと、演奏に花を添えるクラリネットの音色が軽やかで心地良い。この手のディキシーランド・スタイルのポップスはポールの得意とするところで、この後にも「ハニー・パイ」やソロ以降の「幸せのアンサー」（75年）ほかいくつも作られている。曲のテンポが実際のレコーディングよりもかなり速められているが、エンジニアのジェフ・エメリックによると、ポールが16歳の時に64歳の自分を夢見るような若々しいヴォーカルにしたかったから、とのことだ。

64歳になった実際のポールはどうだったかというと、4人の子どもと3人の孫が「ホエン・アイム・シックスティ・フォー」をレコーディングし、ポールに披露したそうだ。これまたいい話。

「15か16の頃にリヴァプールの自宅の
ピアノで作った一種のキャバレー・ソング」（ポール）

「キャヴァーンに出ていた頃、アンプが壊れるとピアノをバックに歌ったな」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『YELLOW SUBMARINE SONGTRACK』

おススメのカヴァー

Cliff Richard『Cliff Live At The Talk Of The Town』（1970）／Barry Gibb『VA／The Art Of McCartney』（2014）

130

ラヴリー・リタ

Lovely Rita

Lennon/McCartney
1967.6.1（1967.2.23、2.24、3.7、3.21）［2'42］
『SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND』

　個人的にはかなり好きなのに、一般的には人気のない曲がある。まあ213曲もあるから。「ユー・ノウ・マイ・ネーム」はその最たる曲だと思うけれど、これもそう。ポールが2013年の日本公演で演奏してくれたおかげで知名度は上がったと思うものの、曲の人気が増したかどうかはわからない。曲調はちょっと異なるかもしれないが、「ユー・ウォント・シー・ミー」が好きなら、この曲もいけると思う。

　好きなポイントはいくつかある。まずイントロでポールが"これから始まるよ"と伝えるかのような高音の一声。歌い出されてからの躍動感のある展開。間奏のジョージ・マーティンのホンキー・トンク調のピアノ。延々と続くジョンとジョージのコーラス。さらにしつこくエンディングで繰り返されるジョンとジョージの合いの手。その裏で絶妙なフレーズを奏でるポールのベース。…と、こんなにたくさんある。

　67年初めに駐車違反で捕まった時の実話を元に、担当の交通婦警リタ・デイヴィスをモデルにして書いたというポールらしい曲だ。ジョージ・マーティンのピアノは「イン・マイ・ライフ」と同じくテープの回転数を落として録音し、再生時に普通の速度に戻したもの。メンバー全員で風呂場にこもり、満足のいく音が録れるまで櫛でトイレット・ペーパーを破いたそうだ。サウンドの創意工夫はあちこちに見られる。オチを付けた歌詞もさすがの仕上がりだ。開放的で躍動感のある強力なポップ・ソングだと改めて思う。

「"take some tea with me"の"tea"はマリファナのことじゃないよ」（ポール）

「ポップ・ソングはポールだ。秘書や交通婦警のことなんか何も知りゃしないよ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

—

おススメのカヴァー

Fats Domino『Fats Is Back』（1968）／Roy Wood『VA／All This And World War II - Original Soundtrack』（1976）

131

グッド・モーニング・グッド・モーニング

Good Morning Good Morning

Lennon/McCartney
1967.6.1（1967.2.8、2.16、3.13、3.28、3.29）［2'41］
『SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND』

ジョンの曲作りの意欲がどれだけ低下していたか。それを具体的に描写したかのような曲だ。会社をサボり学校の周辺をぶらぶらし、会社が終わる5時頃に女の子を眺めていると次第に元気がもりもり湧いてくる…。そんな、ある男の朝から晩までの日常生活を追った、いわば「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」の“ぐうたらヴァージョン”である。

曲調としては、ブラス・ロックとしてのカッコ良さはもちろんある。でも、これじゃ、同じくサウンズ・インコーポレイテッドが参加した「ゴット・トゥ・ゲット・ユー・イントゥ・マイ・ライフ」の二番煎じだと思われてもしょうがない。『アンソロジー2』に入っているストレートなロック・ヴァージョンのほうが潔い。

動物の鳴き声などを盛り込んだ音作りを含めて、「…ミスター・カイト」とともにサイケデリック時代の賑やかなサウンドを代表するジョンらしい作品だとは思う。けれども、『アビイ・ロード』のB面メドレーの一部になった「ポリシーン・パン」や「ミーン・ミスター・マスタード」と同じように、ジョンらしいけど、何かが足りないと思わせるところが正直ある。たぶんジョンにしか出せないエキスのようなものが足りないんじゃないだろうか。

この曲で目立つのは、ディストーションを効かせたポールのリード・ギター。「タックスマン」や「サージェント・ペパーズ…」と同じように、いきなり懐を直撃されてしまうのだ。

「曲を作る時、テレビをつけっ放しにしておくんだ。
で、コーンフレークのCMが流れたんだろう」(ジョン)

「当時の彼の退屈な生活を歌っている。
ジョンはメロドラマ“Meet The Wife”*を観ていたんだよ」(ポール)

その他の主な収録アルバム

『ANTHOLOGY 2』

おススメのカヴァー

Big Daddy『Sgt. Pepper's』(1992)／The Lolas『VA／It Was 40 Years Ago Today』(2004)

---

*“Meet The Wife”＝64年4月から66年12月にかけてイギリスで放送されたテレビ番組

132

サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド（リプライズ）

Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band (Reprise)

Lennon/McCartney
1967.6.1（1967.4.1）〔1'18〕
『SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND』

同一アルバムに別アレンジで同じ曲が2回収録されるのは初めてのこと。アイディアはポールとも、ロード・マネージャーで後にアップル社長になったニール・アスピノールとも言われている。"サージェント・ペパー"の名前の由来は、ポールが機内で目にした塩と胡椒（ソルト・ン・ペパー）からだという。『サージェント・ペパーズ…』のここまでの演奏時間が、ビートルズの実際のライヴと同じ30分程度になっているのが面白い。

「グッド・モーニング…」のおしまいの鶏の鳴き声と、この曲の出だしのギターの音色を違和感なく（ちょっとあるけど）繋げたのはジョージ・マーティン（実際はジェフ・エメリックかな）。

オープニング曲に比べると、このリプライズのほうが、ブラスも登場せず、ポール、ジョン、ジョージの3人が最初から最後まで一緒に歌うストレートなロック仕立てになっている。とくにリンゴのリズム感の良さが際立っている。

この曲から20年後となる87年、"It was twenty years ago today…"という歌詞にも符号する記念としてポールはこの曲と、新たに書き下ろしたトリビュート曲「リターン・トゥ・ペパーランド」を、一緒にレコーディングした。ぜひシングルのカップリングで出してほしかったが、時代が悪かったのか、そのままオクラ入りとなった。後者はブートレグで聴けるが、これがポールのすべてのソロ曲の中でも（大袈裟じゃなく）ベストの出来なのだ。人気のない『プレス・トゥ・プレイ』（86年）のアーカイヴ・コレクションが出た時にはぜひ加えてほしい。

「子どもの頃、ラジオでトミー・クーパー*が何も言ってないのに
会場が笑い出す瞬間があった。だから、
なぜ観客が笑ったのかわからないという場面を作ってみたくてね」（ポール）

本曲の他の主な収録アルバム
『ANTHOLOGY 2』『LOVE』

おススメのカヴァー曲
Peter Frampton, The Bee Gees『VA／Sgt.Pepper's Lonely Hearts Club Band－Sound Track』（1978）／Cheap Trick『Sgt. Pepper Live』（2009）

---

*トミー・クーパー＝40年から84年まで活躍したイギリスの喜劇役者・魔術師。

133

ア・デイ・イン・ザ・ライフ

A Day In The Life

Lennon/McCartney
1967.6.1（1967.1.19、1.20、2.3、2.10、2.22／4.21※アウトロ）
［5'05／0'28※アウトロ］
「SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND」

ライヴ仕立てのコンセプト・アルバムの最後、アンコールに応えてペパー軍曹のバンドが披露する。今だったら、前の曲とこんなに重ねず、もう少し余韻を残すと思うが、ともあれ、ジョンの起死回生の曲だ。とはいえ、これもジョンがイギリスの『デイリー・メール』紙の記事をヒントに書いたもので、「恋を抱きしめよう」とは逆に中間部にポールの小品を挟み込んで完成させた曲でもあるので、ビートルズのサイケデリック・ソングの最高峰という位置付けが妥当だろう。

それにしても、息を呑むほど凄まじい曲だ。ポールの指揮によるオーケストラが徐々に不均衡に盛り上がっていく場面から、トリップして夢見心地になったようなポールの曲を挟み、また我に返って現実を直視し、もう一度盛り上がってピアノの残響音が鳴り響く――「サージェント・ペパーズ…」がロックの金字塔と言われるのは、コンセプトもさることながら、この曲が最後に収められているからだ。もちろんジャケットのデザインその他、見るべき点は多々あるけれど、この曲がすごすぎた。

この曲には、マニアの間での話題（論争？）がひとつある。中間部のポールの曲からジョンの曲に戻る（夢から醒める）箇所の「ア～」はジョンかポールか？――俗に言う「アー問題」である（ジョンに似た声で歌うポール説が有力）。また、50周年記念盤には、最後をピアノではなくハミングでやってみた風変わりな音源も収録されている。イントロの1音から普通に聴きたい時は、『ビートルズ1967－1970』（通称"青盤"）のCDで。

「新聞で読んだ2つの記事から。"I'd love to turn you on"の部分はポール」（ジョン）

「オーケストラのクレッシェンドは
シュトックハウゼン*などの理論をヒントにした」（ポール）

その他の主な収録アルバム
「THE BEATLES 1967-1970」「ANTHOLOGY 2」「LOVE」

おススメのカヴァー
Wes Montgomery「A Day In The Life」（1967）／Big Daddy「Sgt. Pepper's」（1992）

---

*シュトックハウゼン＝カールハインツ・シュトックハウゼン。1950年から2007年まで活動したドイツの作曲家。前衛音楽の大家

134

オンリー・ア・ノーザン・ソング

Only A Nothern Song

Harrison
1969.1.17（1967.2.13、2.14、4.20）［3'23］
『YELLOW SUBMARINE』

『サージェント・ペパーズ…』に「ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー」じゃなくて、そのセッションで収録されたこのジョージの曲が収められていたらどうだったか。案外そのままB面1曲目に入っていたかもしれない。あるいは「ゲッティング・ベター」と「フィクシング・ア・ホール」の間に入れて、B面トップは「シーズ・リーヴィング・ホーム」あたりか。そんな勝手な妄想も楽しくはあるが、サイケ色のさらに強まったアルバムになったものの、それじゃ物足りない。

ビートルズの楽曲の版権を持っているノーザン・ソングスからの収入はジョンとポールに比べてジョージははるかに低い。ジョージ自身もこの時には、版権を管理する“Harrisongs（ハリソングス）”という会社を設立していたから、強気に、もちろんユーモアも交えてこの曲を書いたのだろう。歌詞は、それでもなお皮肉たっぷりだ。

ジョージはギタリストなのに、ギターではなくキーボードをメインに据えた自作曲が不思議と多い。“Only A Harrisongs”なのに。これもハモンド・オルガンがサウンドの要で、後半のハメを外したようなポールのトランペット（！）の音色がトリップ感覚を音で表現しているかのように響く。アルバムからのボツ曲とはいえ、「ルーシー・イン・ザ・スカイ…」に迫るようなキラメキのあるドラッギーな香りの充満したカラフルなサウンドには捨て難い魅力がある。最初から映画『イエロー・サブマリン』用にとって置かれたかのような幸運な曲だ。

「曲の版権はノーザン・ソングスが所有していて、僕のものじゃない。
だから“It doesn't really matter”となる」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

『YELLOW SUBMARINE SONGTRACK』『ANTHOLOGY 2』

おススメのカヴァー

The Blue Meanies『VA／Harrisongs』(2000)／Jamie Hoover『VA／He Was Fab』(2002)

135

愛こそはすべて

(オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ)

All You Need Is Love

Lennon/McCartney
1967.7.7（1967.6.14、6.19、6.23、6.24、6.25）［3'48］
シングル&「MAGICAL MYSTERY TOUR」（US）　「YELLOW SUBMARINE」

67年6月25日にイギリスBBCテレビの生中継番組「アワ・ワールド」*が世界24ヵ国で同時放映された。当時の世界中のビートルズ・ファン4億人が観たという。ビートルズが新曲を披露するからだ。演奏されたのは、この「愛こそはすべて」。2週間後に15枚目のオリジナル・シングルとして発売されたが、ジョンの曲がA面に収録されたのは久しぶりだった。

"世界の人々に向けてメッセージ・ソングを書いてほしい"という依頼がブライアン・エプスタインにあったのだろう。マーク・ルイソンの"The COMPLETE BEATLES recording sessions"にはポールの「ユア・マザー・シュッド・ノウ」も候補だったとあるけど、ふさわしくない。待てよ、"All"縛りで3人で競い合い、ポールの「オール・トゥゲザー・ナウ」とジョージの「イッツ・オール・トゥー・マッチ」との3曲の中から、ジョンのこれが選ばれたんじゃないか——そんな妄想を「レコード・コレクターズ」の2012年11月号に書いたが、どうやら本当にそれが事実だったようだ。

メッセージの重要性を鑑みても代表曲のはずなのに、なぜかあまり浸透していない。"歌いにくいから"かな。ジョン以上にうまく歌えた人はいないし。歌詞は2通り解釈できる。冒頭だけ挙げると、"やろうと思えばなんでもできる"と取るか、"できないものはハナから無理"と取るか。ヨーコと出会った時に"イエス"の文字に救われたと振り返ったジョンなのだから、前者の肯定=イエスの意味に受け取りたい。その条件として"愛さえあれば"という意味だと思う。

「コーラスは単純でヴァースは複雑。君に何が必要かなんて僕にはわからないな」（ポール）

「ジョンは驚くべきリズム感を持っている。ごく自然にやっているんだけどね」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム
「THE BEATLES 1967-1970」「THE BEATLES 1」「YELLOW SUBMARINE SONGTRACK」「LOVE」

おススメのカヴァー
Echo & The Bunnymen「Crystal Days 1979-1999」（2001）／John Wetton & Robby Krieger「VA／Top Musicians Play The Beatles」（2009）

---

*「アワ・ワールド」－日本でもNHKで早朝3時55分から6時05分まで生放送された。

136

ベイビー・ユーアー・ア・リッチ・マン

Baby, You're A Rich Man

Lennon-McCartney
1967.7.7（1967.5.11）［3'01］
シングル&『MAGICAL MYSTERY TOUR』（US）

ジョンとポールは、初期は同じ部屋やバスの中などで顔を突き合わせて曲を書いていたが、『ヘルプ！』以降は、片方が書いた曲にもう片方が追加のアイディアを出したり手を加えたりという機会が増えた。そしてたまに、2人の曲の断片を合わせて1曲にしてしまうという場合もあった。これもそんな1曲だが、曲名はポールのほうを採用。

もともと映画『イエロー・サブマリン』用に書かれた曲で、後に映画にも使われたが、「愛こそはすべて」が急遽シングルで発売されることになったので、そのB面曲となった。映画には出だしの数秒しか使われなかったが、映画使用曲をまとめたリミックス・アルバム『イエロー・サブマリン・ソングトラック』（99年）にも収録されている。

イントロにヒョロヒョロとうねるように入ってくるアラブ風の音が印象的だ。これはビートルズでは初登場となる、ジョンの弾くクラヴィオラインの音色。アンプ内蔵の電子キーボードで、シンセサイザーの始祖のような楽器である。

歌詞も痛烈だ。ロサンジェルスのヒッピーを揶揄しつつも、“金持ち”云々の箇所は明らかに同性愛者ブライアン・エプスタインへの皮肉だ。最後でジョンが歌いまわしを変えて“Baby you're a rich fag jew”（金持ちのユダヤ人ホモ）とからかっていることでもわかる。同時に自分たちも茶化しているのがビートルズ流。

「愛こそはすべて」と同じくオリンピック・サウンド・スタジオで収録されたが、ミキシングもEMI以外のスタジオで行なわれたのはこの曲が初めてだった。

「ポールのと僕の“One Of The Beautiful People”を無理やりくっつけた」（ジョン）

「あの頃はビューティフル・ピープルに関する記事をよく見かけたよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『YELLOW SUBMARINE SONGTRACK』

オススメのカヴァー
Fat Boys 『All Meat No Filler!』（1997）／SAS Band 『SAS Band』（1998）

137

オール・トゥゲザー・ナウ

All Together Now

Lennon/McCartney
1969.1.17（1967.5.12）［2'10］
『YELLOW SUBMARINE』

「イエロー・サブマリン」に続く、ポールが書いた子ども向けの曲。2013年の日本公演でも演奏されたたわいのない"数え歌"で、「ビートルズ・フォー・セール」に入っていてもよさそうな軽やかなアコースティック・ナンバーだ。ジョンの合いの手と、久しぶりに聴けるハーモニカが効いている。

「愛こそはすべて」のところで書いたように、「アワ・ワールド」でのメッセージ・ソング争いに敗れた（?）ポールは、ただでは引き下がらなかった。この曲のメッセージが届く場所がまだあった。映画「イエロー・サブマリン」のエンディングである。しかも映画のテーマは皮肉にも（?）「愛こそはすべて」だった。そして世界に向けて"みんな一緒に"の字幕が各国語（日本語は"それでは皆さん御一緒に"）で表示される。

そう考えると、「愛こそはすべて」のエンディングのコーダ部分はこんなふうにも解釈できる。ジョンがちょっと口ずさむ「イエスタデイ」や普通に歌う「シー・ラヴズ・ユー」にまじってポールが「オール・トゥゲザー・ナウ」と声を掛けるのは、"Love, love, love"のフレーズをみんなに歌ってもらいたいだけではなく、この「オール・トゥゲザー・ナウ」が念頭にあって、つい口をついて出てきたんじゃないかと。世界中の"みんな一緒に"歌ってほしいと思った誰でも歌えるポールの歌は、歌いにくくて歌詞も難解なジョンの歌にメッセージの力で負けた、ということだ。

「コード2つくらいのシンプルな曲」（ポール）

「サッカー場で観衆がよく歌っていたもんだ。楽しかったね」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『YELLOW SUBMARINE SONGTRACK』

おススメのカヴァー

Vicki Neville『Vicki Neville Sings Music For Families』（2006）／Joy Unlimited『Joy Unlimited』（1970）

139

ハロー・グッドバイ

Hello Goodbye

Lennon/McCartney
1967.11.24（1967.10.2、10.19、10.20、10.25、11.2）［3'28］
シングル&「MAGICAL MYSTERY TOUR」（US）

16枚目のオリジナル・シングルとして発売されたポールの傑作。ポップなメロディ、覚えやすい歌詞、凝った音作り——ビートルズ・サウンドの魅力がわかりやすい形で表現されている。

この曲なら『アワ・ワールド』でのジョンの「愛こそはすべて」に対抗できただろう。サビでの“ドレミファソラシド”の音階の使い方もそうだが、誰にでもわかる反意語を多用することで“君”と“僕”とのすれ違いを歌いつつ、そこには普遍的な意味合いを込めることもできる曲だからだ。テレビ映画『マジカル・ミステリー・ツアー』のエンディングに音だけちょこっと使ったのはポールの仕返しじゃないとは思うけれども。4人が“ペパー軍曹のバンド”に扮したプロモーション・フィルム（67年11月10日撮影）が、映画の最後に映像としても入っていたらなお最高だった。

ポールは曲の最後などに、発音の紛らわしい合いの手を入れることが多い。「ヘイ・ジュード」も“da, da, da”じゃなくて“na, na, na”だったり。この曲もわかりにくい。“heba, heba, hello”か、“hela, heba, hello”か、それとも“Hela, hey aloha”か、いくつかの説がある。そこで思い浮かぶのが、上記のプロモ映像でフラダンスの女性が出てくる場面だ。ということで、この曲のエンディングは、“Hela, hey aloha”である。…とすぐには断言できないのもビートルズの面白さ。ポールはたぶん“Hela, hey aloha”をイメージしつつ、“hela, heba, hello”と歌ったんじゃないかと思う。

「最後のタムタムに思いっきりエコーをかけたら曲が生きたね」（ポール）

「エンディングが抜群だ。お気に入りの〈涙の乗車券〉と同じようにね」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1967-1970」「THE BEATLES 1」「ANTHOLOGY 2」

おススメのカヴァー

Son Volt「Hello Goodbye」（Single）（2007）／The Cure Featuring James McCartney「VA／The Art Of McCartney」（2014）

139

ハロー・グッドバイ

Hello Goodbye

Lennon/McCartney
1967.11.24（1967.10.2、10.19、10.20、10.25、11.2）［3:28］
シングル&『MAGICAL MYSTERY TOUR』（US）

16枚目のオリジナル・シングルとして発売されたポールの傑作。ポップなメロディ、覚えやすい歌詞、凝った音作り——ビートルズ・サウンドの魅力がわかりやすい形で表現されている。

この曲なら「アワ・ワールド」でのジョンの「愛こそはすべて」に対抗できただろう。サビでの“ドレミファソラシド”の音階の使い方もそうだが、誰にでもわかる反意語を多用することで“君”と“僕”とのすれ違いを歌いつつ、そこには普遍的な意味合いを込めることもできる曲だからだ。テレビ映画『マジカル・ミステリー・ツアー』のエンディングに音だけちょこっと使ったのはポールの仕返しじゃないとは思うけれども。4人が“ペパー軍曹のバンド”に扮したプロモーション・フィルム（67年11月日撮影）が、映画の最後に映像として入っていたらなお最高だった。

ポールは曲の最後などに、発音の紛らわしい合いの手を入れることが多い。「ヘイ・ジュード」も“da, da, da”じゃなくて“na, na, na”だったり。この曲もわかにくい。“heba, heba, hello”か、“hela, heba, hello”か、それとも“Hela, hey aloha”か、くつかの説がある。そこで思い浮かぶのが、上記のプロモ映像でフラダンスの女性が出てくる場面だ。ということで、この曲のエンディングは、“Hela, hey aloha”である。…とすぐには断言できないのもビールズの面白さ。ポールはたぶん“Hela, hey aloha”をイメージしつつ、“hela, heba, hel”と歌ったんじゃないかと思う。

「最後のタムタムに思いっきりエコーをかけたら曲が生きたね」（ポール）

「エンディングが抜群だ。お気に入りの〈涙の乗車券〉と同じようにね」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1967-1970』『THE BEATLES 1』『ANTHOLOGY 2』

おススメのカヴァー

Son Volt「Hello Goodbye」（Single）（2007）／The Cure Featuring James McCartney『VA／The Art Of McCartney
（2014）

140

アイ・アム・ザ・ウォルラス

I Am The Walrus

Lennon/McCartney
1967.11.24（1967.9.5、9.6、9.27、9.28）〔4'34〕
シングル&『MAGICAL MYSTERY TOUR』（US）
EP『MAGICAL MYSTERY TOUR』

こんなヘンな曲、ジョンにしか書けない。「レイン」同様、なぜシングル両A面じゃないの？ と思ってしまうジョンの傑作だ。「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ」と並ぶナンセンスな内容は、歌詞だけで“現代詩”としても成立するもので、ジョンの頭の中を覗き見してみたいと思ってしまうほどだ。造語をたっぷり使いながら、覚醒されたイメージを、“意味なし語”を繋げて“レノンセンス”としてぶっきらぼうに吐き出した。

ジョンが耳にしたというパトカーのサイレンを模した出だしのエレキ・ピアノの音色に導かれて曲は始まる。連帯を呼び掛ける冒頭の“I am he as”からの1行目は週末のLSD体験時に書き、2行目は翌週のLSD体験時、残りはオノ・ヨーコと出会ってから書いたとジョンは言っている。ヨーコの影響を受けた曲だとジョンは言いたいのだろうが、『鏡の国のアリス』[*1]に出てくる「セイウチと大工」（“The Walrus And The Carpenter”）がインスピレーションの元にある。

ジョージ・マーティンが加えたストリングスも、BBCラジオ番組のシェイクスピアの『リア王』[*2]（第4場第6景）の台詞も実に効果的。テレビ映画『マジカル・ミステリー・ツアー』での演奏シーンはハイライトのひとつとなっただけでなく、“セイウチ”はその後「グラス・オニオン」と「カム・トゥゲザー」やソロの「ゴッド」（70年）、「スターティング・オーヴァー」（80年）のオリジナル歌詞にも登場するジョンのお気に入りの代名詞ともなった。

「“The Walrus”が悪玉だったとは！」（ジョン）

「“sitting on a cornflake”なんて、かなり混乱した状態の歌詞だよね」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1967-1970』『ANTHOLOGY 2』『LOVE』

おススメのカヴァー

Frank Zappa『Beat The Boots III』（2009）／Jim Carrey『George Martin／In My Life』（1998）

[*1]『鏡の国のアリス』＝ルイス・キャロルが1871年に発表した児童小説。
[*2]『リア王』＝イギリスの劇作家・詩人のシェイクスピアが1604年から1606年頃に手掛けた四大悲劇のひとつ。

141

マジカル・ミステリー・ツアー

Magical Mystery Tour

Lennon/McCartney
1967.11.27（1967.4.25、4.26、4.27、5.3、11.7）[2'49]
「MAGICAL MYSTERY TOUR」(US)　EP[MAGICAL MYSTERY TOUR]

ポール主導で自主制作したビートルズのテレビ映画『マジカル・ミステリー・ツアー』の主題歌。なぜポールは『サージェント・ペパーズ…』の制作直後に、すぐにこの曲のレコーディングを始めたのか。答えは2つある。ポールがせっかちだったことと、バンドの分裂・解散を恐れていたことの2つだ。

67年4月11日、ロサンジェルスからイギリスに戻る飛行機の機内で、ポールはこの曲のメロディと冒頭の歌詞——“Roll up, roll up for the mystery tour”が思い浮かんだという。そして、すかさず他の3人に声を掛け、4月25日に早くもスタジオにメンバーが顔を揃える。『サージェント・ペパーズ…』のアルバムの最後で聴ける4人の“声”が収録されたのは4月21日のことだったので、まだ制作が終わったばかり。ポールの呼び掛けがいかに早かったかがわかる。しかもスタジオ入りした時には、変わらず冒頭の歌詞とメロディしかできていなかったという。しかしポールはその場でそこにトランペットを入れる案を考えたり、他のメンバーと歌詞を考えたりと、素早く作業を進めていき、数日で曲を完成させた。

“テレビ・コマーシャルみたいに派手にしよう”というポールの最初からの目論見どおり、出だしのトランペットから耳を引く仕上がりで、力強いサウンドとメロディはすぐに覚えられる安心のポール印だ。1分半程度でもよかったと思うが、きっともう少し長くトリップしていたかったんだろう。

「ドラッグのトリップのことだよ。
“roll up”には“ジョイントを巻く”という意味も掛けられるしね。
ドラッグやトリップを暗示する言葉にもこだわったんだ」(ポール)

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1967-1970」

おススメのカヴァー

Cheap Trick「The Greatest Hits」(1991)／BONNIE PINK「Water Me」(Single)(2007)

142

ユア・マザー・シュッド・ノウ

Your Mother Should Know

Lennon/McCartney
1967.11.27（1967.8.22、8.23、9.29）［2'27］
「MAGICAL MYSTERY TOUR」(US)　EP［MAGICAL MYSTERY TOUR］

「ラヴリー・リタ」とは逆に、これは一般的にはかなり人気があるのに、個人的にはそれほどいいとは思わない曲。"You say yes, I say no"である。わかってないねーと言われたら、ごめんなさいと言うしかない。なぜかというと、未完成だと思うからだ。

もう10年ぐらい前（2010年頃）になるだろうか、ミュージシャンの松尾清憲さんとデザイナーの秋田和徳さんと神保町でカレーを食べていた時のこと。"最後に"ダダッ、ダダッ、ダダー"というコーラスが入るところは歌詞ができなくて、ポールがごまかしたんじゃないかと思う"と言ったら、"そりゃすごい解釈だ！"と笑いながらびっくりされたけど、間奏の部分も、ピアノでごまかすんじゃなくて、なんでそこに歌詞を入れないの？と思ってしまうのだ。それに、未使用に終わったけれど、9月16日にリメイクされたというのは、これじゃダメかもとポールが思ったからじゃないのか？

…と、辛口になってしまうのは、メロディがいいだけに、"ポール、もっとできるのに、なんでやらないの？"という残念な思い＝期待の裏返しである。テレビ映画『マジカル・ミステリー・ツアー』のエンディングでメンバーが階段を下りてくる場面に使われたのを見ると、まあ、このくらいでちょうどよかったのかなとも思うけれども。

8月23日のチャペル・レコーディング・スタジオにブライアン・エプスタインも姿を見せたが、その日が最後の顔合わせとなったという曰くつきの曲でもある（エプスタインは8月27日に死去）。

「母と子が簡単に憎み合うようになる。
だから世代間の平和な関係を訴えたんだ」（ポール）

「誰って？　ポールに決まってるさ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
「ANTHOLOGY 2」

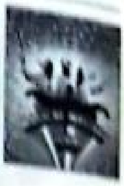
おススメのカヴァー
Mike Batt「Your Mother Should Know」(Single)（1969）／竹内まりや（with BOX）「Turntable」（2019）

143

フール・オン・ザ・ヒル

The Fool On The Hill

Lennon/McCartney
1967.11.27（1967.9.25、9.26、9.27、10.20）［2'57］
『MAGICAL MYSTERY TOUR』（US）
EP『MAGICAL MYSTERY TOUR』



ジョンが目立つせいか、ポールの歌詞が評価されることはあまりない。"作詞・作曲：レノン＝マッカートニー"となっているから、70年代ぐらいまでは作詞がジョンで作曲がポールだという、今では信じ難い誤解もあったし、ジョンが80年に亡くなった時に「イエスタデイ」を流すテレビ局もあったほどだ。しかしポールにももちろん歌詞の秀作はある。ジョンよりは少ないが、ベストは「エリナー・リグビー」とこの「フール・オン・ザ・ヒル」だろう。

地動説を唱えて処刑されたガリレオ※1をヒントにしたともいわれる曲で、歌詞は67年3月、ジョンと2人で「ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ」の作詞をしている時にポールが聴かせたのが最初だったという。その後9月6日にポールが1人でデモ・テイクを収録し（『アンソロジー2』で聴ける）、9月25日からの本番に臨んだ。その初日の模様を「ミュージック・ライフ」の編集長だった星加ルミ子さんが取材し、長谷部宏氏が写真に収めた。ポールが座るピアノの周りにメンバーが集まり、この曲の肝となるリコーダーを吹いている様子などが見られるが、とくにびっくりしたのはオノ・ヨーコもすでにスタジオにいることだ。ヨーコが最初に聴いたのは「ヘイ・ブルドッグ」だという話も昔はあったが、この曲か「アイ・アム・ザ・ウォルラス」あたりが最初だろう。

ジョンとジョージのハーモニカの音色も味わい深く、『ラバー・ソウル』に入っていてもいいようなフォーキーな曲調は絶品である。

「マハリシ※2のような人物を想起したと思う。"perfectly still"の部分がいいね」（ポール）

「行儀良くしていれば、彼にも完璧な歌詞が書けるという証明さ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
『THE BEATLES 1967-1970』『ANTHOLOGY 2』『LOVE』（Download）
おススメのカヴァー曲
Sergio Mendes & Brasil'66『Fool On The Hill』（1968）／Shirley Bassey『The Fool On The Hill』（Single）（1970）

※1ガリレオ＝ガリレオ・ガリレイ。イタリアの物理学者、天文学者、哲学者
※2マハリシ＝マハリシ・マヘーシュ・ヨーギー。55年に超越瞑想（TM）を創設

144

フライング

Flying

Harrison/Lennon/McCartney/Starkey
1967.11.27（1967.9.8、9.28）［2'14］
［MAGICAL MYSTERY TOUR］（US）
EP［MAGICAL MYSTERY TOUR］

"213曲"の中で唯一のインスト曲。映画のBGM用に作られたものだが、この曲もカルト的な人気がある。

『マジカル・ミステリー・ツアー』は、イギリスは2枚組6曲入りのEP、アメリカは同時期のシングルを含む11曲入りの編集盤のLPとして発売されたが、本書はイギリス盤を優先しているため、アメリカ編集盤を元にしたCDとは曲の並び順が異なる。EPのクレジットは"Harrison/Lennon/McCartney/Starkey"の順になっているが、ただアルファベット順に並べただけのようだ。アメリカ編集盤は"Lennon/McCartney/Harrison/Starr"と、順番だけでなくリンゴは"芸名"表記になっている。

出だしに入っているアコースティック・ギターはポールがメリー・ホプキン*に贈った「グッドバイ」の出だしのフレーズに、弾き方も含めてよく似ている。ジョージ説もあるが、おそらくこの曲の"メロディを書いた"というポールによるものだろう。

ハモンド・オルガンとトロンボーン風のメロトロンの音色が全編にわたってゆらゆらとサイケデリックに揺れ動くドラッグ・ソングだ。インスト曲だが、"ラー、ララー、ララー"という4人の詠唱がところどころに入り、幻想的な雰囲気がさらに増している。映画でも空や雲を写したサイケデリックな場面で使われたが、2012年に画質が向上した新装版が出て、ようやく絵と音のピントが合った。

録音時には、エンディングに、雰囲気の全く異なるジャズっぽいインストが入っていた。

「インストゥルメンタルが必要で僕がメロディを書いた。
で、メロトロンをトロンボーンの音色にセットして演奏した。
歌のない曲のクレジットは4人全員の作品になるんだよ」（ポール）

その曲の主な収録アルバム

—

オススメのカヴァー

Frank Sidebottom『VA／Revolution No 9』（1991）／四人囃子「ゴールデン・ピクニックス」（1976）

---

*メリー・ホプキン＝15歳で音楽活動を開始。68年8月に「悲しき天使」（英1位・米2位）でアップルからデビュー。2枚目のシングル「グッドバイ」（69年3月）は英2位・米13位。

145

ブルー・ジェイ・ウェイ

Blue Jay Way

Harrison
1967.11.27（1967.9.6、9.7、10.6）［3'54］
「MAGICAL MYSTERY TOUR」（US）
EP［MAGICAL MYSTERY TOUR］

これもギタリストのジョージが書いたギターレスの曲。66年から67年にかけて、作品でいうと『リボルバー』から『マジカル・ミステリー・ツアー』までのビートルズは、スタジオで過ごす時間が長くなった影響もあるし、ジョージがギターに飽きてしまったというのもあるのかもしれないけれど、音楽性の幅を広げた結果、ビートの効いたロック・バンドではなく、キーボード主体のサイケデリックなロック・バンドへと大きく変貌した。もちろんロック調の曲やバラード調の曲もあるにはあるが、写真でいうと、4人均等に焦点が合った白黒の鮮明な写りではなく、全体的に膜がかかったセピア調か、赤青緑などのセロファンをかけたうすぼんやりした色調に変わった印象が強まったのである。

ハモンド・オルガン主体の、メロディに起伏のないこの曲は、その好例といえるだろう。なぜそういう曲調になったのかというと、ジョージのこんな実体験に基づいて書かれた曲だからだ。67年8月1日、ロサンジェルスの“ブルー・ジェイ通り”に家を借りたジョージは、デレク・テイラー*夫妻が来るのを待ちわびていた。しかし道に迷ってなかなか辿り着かない。2人を待つ間にジョージはこの曲を書いた。夜も更け、外には霧が立ち込める中、家の隅っこにあったハモンド・オルガンをいじりながら…。

テレビ映画『マジカル・ミステリー・ツアー』でも、地面に書かれた鍵盤を、あぐらをかいたジョージが弾く不鮮明な映像で見事に視覚化されていた。

「EとFを同時に弾くという変わった曲でね。〈アイ・ウォント・トゥ・テル・ユー〉や〈シーズ・ソー・ヘヴィ〉と同じように」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

「LOVE」

おススメのカヴァー

Colin Newman「Not To」（1982）／Dee Long「VA／It Was 40 Years Ago Today」（2004）

---

*デレク・テイラー＝64年にブライアン・エプスタインの自伝「ビートルズ神話」を代筆したのをきっかけにNEMSに入り、ビートルズの広報を担当（65年退社、68年復帰、

6

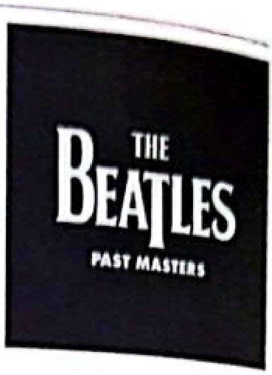
1968

146

レディ・マドンナ

Lady Madonna

Lennon/McCartney
1968.3.15（1968.2.3、2.6）［2'16］
シングル&「PAST MASTERS」



68年最初のシングル（通算17枚目）となったポールの作品。67年までのサイケデリックなサウンドから一転、ジャズ系のサックス奏者を4人起用し、50年代のニューオーリンズ風ロックンロール調の曲へと転換している。ハンフリー・リトルトン・バンドの「バッド・ペニー・ブルース」[*1]を参考にしているので、それに近い音になった。とはいえ、69年の"ゲット・バック・セッション"での原点回帰に比べると、サウンドがそこまで回帰しているかというと、さにあらず。音作りは変わらず凝っているし、細かいアイディアは、『リボルバー』以降の曲と変わりない。

このシングル・セッションは68年2月3日から11日にかけて行なわれ、全部で4曲が収録された。ジョンが2曲、ポールが1曲、ジョージが1曲。当初はジョンの書いた「アクロス・ザ・ユニバース」がA面に収録される予定だったという。でも、68年前半ならば、これがA面で正解。曲の骨格がしっかりしているし、サウンドは力強く、メロディも覚えやすい。「ドライヴ・マイ・カー」や「ペイパーバック・ライター」のような、中期のポールの曲に通じるダイナミックな演奏が実に心地良い。

コンプレッサーとリミッターをかけたポールのピアノは言うに及ばず、ファズをかけたジョージのギターもいいし、シャッフル系のリンゴのドラムも見事。ポール、ジョン、ジョージが唇に薄い紙を当てて歌うコーラスも小技が効いている。ところで、歌詞に登場しない曜日がひとつあるが、何？

「すべての女性に捧げた歌だ。ファッツ・ドミノ[*2]を想定して書いたんだ」（ポール）

「オフ・ビートを使い、ポールがエルヴィス（・プレスリー）風に歌うことに決めた」（リンゴ）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1967-1970」「THE BEATLES 1」「HEY JUDE」（US）　「ANTHOLOGY 2」「LOVE」

おススメのカヴァー

Caetano Veloso「Qualquer Coisa」(1997)／Allen Toussaint「VA／The Art Of McCartney」(2014)

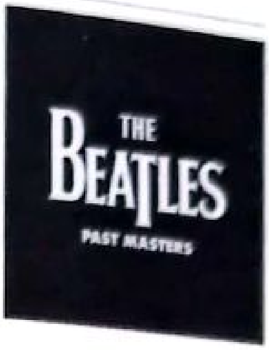
[*1]「バッド・ペニー・ブルース」＝56年に発売。プロデューサーはジョージ・マーティン。

[*2]ファッツ・ドミノ＝49年にデビュー。代表曲は「エイント・ザット・ア・シェイム」（55年）ほか。

147

ジ・インナー・ライト

The Inner Light



Harrison
1968.3.15（1968.1.12、2.6、2.8）［2'35］
シングル&「PAST MASTERS」

68年2月のシングル・セッションで収録されたジョージの作品。だがこの曲は、それ以前の1月12日、インドのボンベイにあるEMIスタジオで、ジョージ初のソロ・アルバムとなった映画『不思議の壁』のサントラ用のセッション時にベーシック・トラック（歌なし）は録音済みだった。

2014年にジョージの妻オリヴィアにインタビューする機会があり、この曲がそもそも映画用だったのか、それともビートルズ用に考えていたものをインドでバック・トラックだけ録ったのかを確認したところ、“レコーディングできるチャンスに恵まれたからかもしれない。ちょっと調べてみるわ”との返答だった。たぶん、メロディが書き上がっていたので、インドの楽器でやってみたらどんな音色になるのか知りたかったのではないかと思う。そして2月にヴォーカルを加えたという流れだ。その結果、初めてオリジナル・シングルに収録されたジョージの曲となった（B面だけど）。

「ラヴ・ユー・トゥ」「ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー」に続くインド色の強い曲だが、メロディの良さはこれがベスト。インド音楽を無意識に低く見ているポールの天然発言はいつ読んでも笑える。ほぼそのままの引用だが、老子*の言葉を元に書かれた歌詞も素晴らしい。“The farther one travels/The less one knows/The less one really knows”（遠くへ行けば行くほど／真理を知ることが少なくなる）は、「イッツ・オール・トゥー・マッチ」の“The more I learn, the less I know”（学ぼうとすればするほど、真理が遠のいていく）と同義。

「西洋のポピュラー音楽に興味を失っていたんだ。
言葉がすべてを物語っている。いい曲だ」（ジョージ）

「インド音楽ってことを忘れてメロディを聴くと最高だよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「LOVE」

おススメのカヴァー

Jimmy McGriff & Junior Parker「Good Things Don't Happen Every Day」（1972）／Jeff Lynne「VA／Concert For George」（2003）

---

*老子＝古代中国の思想家で「老子道徳経」の著者。ケンブリッジ大学の教授ジュアン・マスカロが、老子の詩を英訳して引用した自著「ランプス・オブ・ファイア」をジョージに贈呈。

148

ヘイ・ブルドッグ

Hey Bulldog

Lennon/McCartney
1969.1.17（1968.2.11）〔3'09〕
『YELLOW SUBMARINE』

68年2月のシングル・セッションで録音されたジョンの作品は、「アクロス・ザ・ユニバース」とこの「ヘイ・ブルドッグ」の2曲。しかし最終的にはどちらもシングルには収録されなかった。この曲は映画『イエロー・サブマリン』用に書かれたもので、「レディ・マドンナ」のジョン版の趣。ポールのピアノをギターに置き換えた攻撃的なロックというわけだ。それにしても、すごいベース！

レコーディングは偶発的に行なわれた。インドでマハリシの講義を受ける直前、「レディ・マドンナ」のプロモーション・フィルムを撮影することになった。ということは、2月9日か10日にはシングルのA面曲は決まっていたのだろう。で、準備の合間に1曲やってしまおうというポールの提案で、ジョンの書きかけの曲にその場で歌詞を追加し、1日で完成させた。撮影用に準備された楽器を使ったわけだから、「レディ・マドンナ」に似るわけだ。そのプロモ映像では、たしかにジョンが“You can talk to me”と歌っているのがわかる。ジョンとポールによるエンディングの犬の鳴き声の真似も、2人の反射神経の良さの証だ。それで曲名が“Hey Bullfrog”（牛蛙）から変更になったという話もあるが、何度聴いても笑える。リミックス・アルバム『イエロー・サブマリン・ソングトラック』が発売された時にリード曲となり、知名度が一気に上がった。

この曲は映画『イエロー・サブマリン』のアメリカ公開版にしか使用されなかったが、最終調整をしなかったのか、絵がこの曲だけ下手。

「スタジオで1曲作ってくれないかと言われて、思いついた言葉をぶち込んだ」（ジョン）

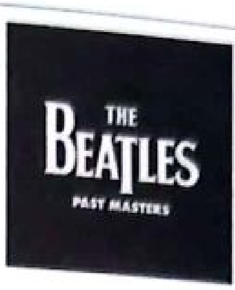
「テーブルや荷箱を叩いたりした。“同じことをしなかった”と言われる所以だ」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『YELLOW SUBMARINE SONGTRACK』
おススメのカヴァー
The Gods「Hey Bulldog」（Single）（1969）／奥田民生『VA／Happy Birthday, John』（2005）

149

アクロス・ザ・ユニバース

Across The Universe



Lennon/McCartney
1969.12.22（1968.2.4、2.8）／1970.5.8（1968.2.4、2.8、
1970.4.1）［3'48／3'46］
「PAST MASTERS」／「LET IT BE」

フィル・スペクター編集の『レット・イット・ビー』に収録されてよかった。世界野生動物保護基金のためのチャリティ・オムニバス・アルバム『NO ONE'S GONNA CHANGE OUR WORLD』（69年）収録の、テンポの速い"バード・ヴァージョン"しか発表されていなかったら、こんなに歌い継がれる曲にならなかっただろうし、ジョンの名曲としての位置付けも後退しただろうから。映画『イエロー・サブマリン』収録の5曲とともに69年3月にEPで出る寸前までいったのも、そのヴァージョンだったし。

芭蕉*にヒントを得たとも言われる詩的で簡潔な歌詞にはオノ・ヨーコの影響も当然あったはずだ。なにせ"Nothing's gonna change my world"と歌われるのだから、その"my"にはヨーコも当然含まれていたはずだ。

ジョンによると、冒頭の"言葉がよどみなく出てきて、降り止まぬ雨のように紙コップに注がれる"という"詩人かくあるべし"ともいえそうなフレーズは、妻のシンシアが無駄話を延々としていたことにイライラしたジョンが、曲が書き終わるまで眠れないという心境でいた時に出てきたという。またジョンは、"この曲や〈ストロベリー・フィールズ・フォーエバー〉のような傑作をポールは実験の場にしてだめにしてしまう。ポールの曲は何時間もかけて細かいところまで修正するのに"などとも言っていたが、そうまで言われてポールはよく黙っているなあと思う。「イン・マイ・ライフ」でのポールの発言は、だからなおさら信憑性が高いと思うわけだが。

「歌詞は最高のもののひとつ。詩として独立しているのがいい」（ジョン）

「ジョンの最高傑作のひとつだね。歌詞も格別だし」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「VA／NO ONE'S GONNA CHANGE OUR WORLD」「THE BEATLES 1967-1970」「LET IT BE...NAKED」「ANTHOLOGY 2」

おススメのカヴァー

David Bowie「Young Americans」（1975）／Fiona Apple「VA／Pleasantville - Original Soundtrack」（1998）／Rufus Wainwright「VA／I Am Sam - Original Soundtrack」（2002）

---

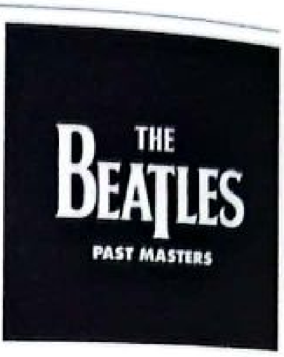
*芭蕉＝松尾芭蕉。17世紀後期（江戸時代前期）の俳諧師。

150

ヘイ・ジュード

Hey Jude

Lennon/McCartney
1968.8.30（1968.7.31、8.1）〔7'07〕
シングル&「PAST MASTERS」



ビートルズとポールの代表曲。過去最高の7分を超える長尺であったにもかかわらず、ビートルズ最大のヒット曲となった（全米9週1位）。

ジョンがヨーコと出会ってシンシアと別居していたので、息子ジュリアンを案じたポールが"ヘイ・ジュリアン"と呼び掛けて元気づけようとしたのが曲の発想の始まり。ジョンに言わせると"ヘイ・ジョン"になってしまうが。

「イエスタデイ」をはじめアコースティック・ギターのバラードの名曲はいくつもあったポールの、ピアノのスタンダードになる曲はこれが初めてと言ってもいいかもしれない。次はもちろん「レット・イット・ビー」だ。

タイトル・フレーズに応える形でエコーを効かせたギターをジョージは入れたがったが、ポールはそれを拒絶した。理由は"自分の曲だから"。ポールは80年になってもその話を蒸し返していたが、その逸話が"ゲット・バック・セッション"での2人の口論のきっかけにもなった。ということで"Paul McCartney with The Beatles"はこの曲から始まった。

こんなエピソードもある。レコーディングでポールが歌い始めた時、まだトイレにいたリンゴは足を忍ばせてドラムに座り、何事もなかったかのように叩き始めたそうだ。たしかに最初はドラムがしばらく入らない。というより、リンゴがいないことに気づかずに始めるポールはどうなの？ という話。

『ザ・ビートルズ』の50周年記念盤収録のテイク1では、合間でポールが「セントルイス・ブルース」を即興で披露している。

「〈ラスト・ダンスは私に〉*をギターで弾いていて思い浮かんだんだ」（ポール）

「ジュリアンをシンシアのところに残すのをポールは知っていたんだよ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
「THE BEATLES 1967-1970」「THE BEATLES 1」「HEY JUDE」（US）　「ANTHOLOGY 3」「LOVE」

おススメのカヴァー
Wilson Pickett 「Hey Jude」（1969）／ザ・リード「サウンド・オブ・サイレンス リード・ゴーズ・トップ・ヒット」（1969）

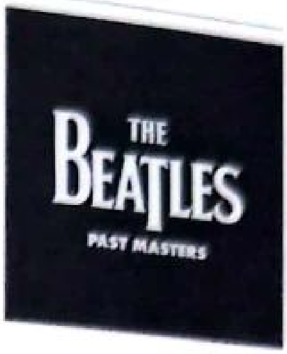
＊〈ラスト・ダンスは私に〉＝ドリフターズの60年のヒット曲（米1位・英2位）。

151

レボリューション

Revolution

Lennon/McCartney
1968.8.30（1968.7.10、7.11、7.12）［3'23］
シングル&「PAST MASTERS」



「ヘイ・ジュード」がビートルズをバックにしたポールの曲だとするなら、そのシングルB面に収録された「レボリューション」は、ジョンのソロ活動の始まりの曲といっていいだろう。いわゆる社会的なメッセージ・ソングはソロ以降のジョンに多いが、ビートルズではこれが初めてのことだった。ゆえにジョンは、これよりもゆったりしていて歌詞が聴き取りやすい「レボリューション 1」をシングルにしたがった。

ディストーションを目一杯効かせた冒頭のギターは、「ディジー・ミス・リジー」の出だしが普通のギター音に聞こえてしまうほど暴力的で破壊的。しかしジョンは暴力が平和を生むとは思っていない。『ジョンの魂』に収録された「しっかり、ジョン」でも歌われた"It's gonna be alright"という言いまわしを使って、破壊や憎しみによって革命を起こそうとしている人々に対して"世の中よくなっているじゃないか"と呼び掛けている。

ニッキー・ホプキンス*がエレキ・ピアノで参加しているのも見逃せない。同年代のロック系のセッション・ミュージシャン起用はこれが初めてだった――それだけバンド内部の"解体"が進んでいたということだろう。そんな時期にライヴ活動をしていたらどんなふうになっていたか？『ザ・ビートルズ』のセッション時期にレコーディングされた「ヘイ・ジュード」と「レボリューション」のプロモーション・ビデオは、それが実感できる秀逸な映像だ。撮影されたのは9月4日。8月22日に一時脱退したリンゴが再び3人と顔を合わせた日でもあった。

「政治や過激派への考え方がわかるはず。
すべてを破壊した後に何を？ということ」（ジョン）

「革命についてのとても政治的で素晴らしい曲」（ポール）

その他の主な収録アルバム
「THE BEATLES 1967-1970」「HEY JUDE」（US）「LOVE」

おススメのカヴァー
Jools Holland And Stereophonics「Jools Holland And Friends - Small World Big Band」（2001）／Grandaddy「VA／I Am Sam - Original Soundtrack」（2002）

---

*ニッキー・ホプキンス＝ジェフ・ベック・グループを経て、セッション・ピアニストとして活躍。

152

バック・イン・ザ・U.S.S.R.

Back In The U.S.S.R.

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.8.22、8.23）［2'43］
『THE BEATLES』

真っ白なジャケットから“ホワイト・アルバム”と呼ばれる初の2枚組『ザ・ビートルズ』のオープニング曲。歓声や動物の鳴き声その他、とくに『サージェント・ペパーズ…』以降頻繁に使われることになる効果音（ここではジェット音）からアルバムは始まる。

ロシア（旧ソ連）に戻ってきたことを告げる効果音に続いてタイトなドラムが入ってくる。まさかこれをポールが叩いているとは！ リンゴが8月22日に一時的にバンドを抜け、その日にすかさずポールがドラムを叩いたわけだが、リンゴがドラムを叩いた後にポールが勝手に自分でドラムを加えることがとくに『サージェント・ペパーズ…』以降は多かったようだ。この曲もリンゴに指示を出して機嫌を損ねたとポールも話しているので、まあ自分の曲に関しては真剣すぎる、ということなんだろう。ラジオ番組『リンゴのイエロー・サブマリン』（83年）で、リンゴはこの曲を紹介する時にポールの腕前を褒めていたけれども。

曲はチャック・ベリーの「バック・イン・ザ・U.S.A.」（59年）、コーラスはビーチ・ボーイズのパロディである。コーラスは、インドに同行したビーチ・ボーイズのマイク・ライヴの提案だったそうで、“本物”を、という話も出たようだ。物語性の高い歌詞を含めアメリカを茶化した快作で、今やビートルズの代表曲のひとつ。ジョンの6弦ベースもいい。

ジョンとジョージもドラムを叩いていたことと、実はかなりテンポを落としてレコーディングされていたことが、50周年記念盤（2018年）で明らかになった。

「ジェリー・リー・ルイス*のように歌おうとした」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『THE BEATLES 1967-1970』『LOVE』

おススメのカヴァー

Cliff Bennett「Back In The U.S.S.R.」（Single）（1968）／パワー・ハウス「バック・イン・ザ・U.S.S.R.」（Single）（1969）

---

*ジェリー・リー・ルイス＝54年に音楽活動を開始し、56年にデビュー。代表曲は「ホール・ロッタ・シェイキン・ゴーイング・オン」（57年）ほか。

153

ディア・プルーデンス

Dear Prudence

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.8.28、8.29、8.30）［155］
『THE BEATLES』

「サージェント・ペパーズ…」と同じく『ザ・ビートルズ』も曲と曲との間の無音がほとんどなく、そのまま繋がるか、クロスフェイド風に編集された曲が多い。これも前の曲のジェット音が消えていくのに重なるように徐々に始まる。

ジョンの曲作りも大きく変わった。サウンドも歌詞も、それ以前のナンセンスでサイケデリックな色合いから簡潔な歌詞を乗せた飾らないストレートな曲調へと変化している。インドでの出来事を綴った曲で、「悲しみはぶっとばせ」や「ノルウェーの森」のような、ジョンのクールな佇まいが久しぶりに感じられる。インドで引きこもっていたプルーデンス・ファロー（女優ミア・ファローの妹）を表に引っ張り出そうとしたジョンは、この曲で自分自身をも解放しようとしたのかもしれない。それ以前の停滞気味のジョンはもういない。

再三紹介しているマーク・ルイソンのレコーディング本でもうひとつ驚いたのが、この曲。16ビートを刻むハイハットの使い方がリンゴにしては珍しいと70年代には言われていたが、何のことはない、これもポールのドラミングだった。言われてみれば、たしかに。ジョンの曲なんだから、リンゴが戻ってくるのをもう少し待てなかったのだろうか。ポールがドラムを叩いたジョンの曲はこの後もう1曲出てくる。あれです。

ジュリアンの好きな曲で、ジョンとヨーコの息子ショーンも、91年にヨーコと細野晴臣とこの曲を録音している。

「ミア・ファローの妹は、長く瞑想し過ぎておかしくなっちゃったんだ」（ジョン）

「ジョンが歌って聴かせたらよくなった。
瞑想より誰かと話す必要があったんだ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『LOVE』

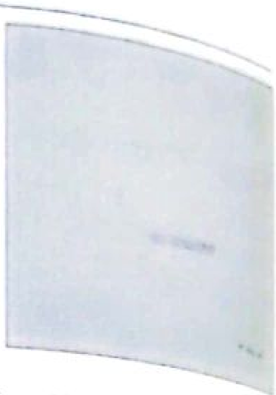
おススメのカヴァー

Siouxsie & The Banshees『Nocturne』（1983）／Sean Lennon With The Friends Of Earth『VA／Happy Birthday, John』（1991）

154

グラス・オニオン

Glass Onion



Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.9.11、9.12、9.13、9.16、10.10）［2'17］
「THE BEATLES」

ジョンの率直な歌詞の曲が増えたとはいえ、これはアルバムで最もナンセンスな内容だ。以前に発表されたビートルズの曲――「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」「アイ・アム・ザ・ウォルラス」「レディ・マドンナ」「フール・オン・ザ・ヒル」「フィクシング・ア・ホール」の曲名や歌詞の一部を盛り込んだジョンの意図はどこにあったのだろうか。

個人的にはジョンのメッセージをこんなふうに受け取っている。「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」や「アイ・アム・ザ・ウォルラス」のようなナンセンスな曲をこれまでに作ってきたけど、これが最後。ウォルラスは僕じゃなくてポールのこと、「レディ・マドンナ」「フール・オン・ザ・ヒル」「フィクシング・ア・ホール」などのいい曲をありがとう。後はポールに任せるよ、と。それでも言い足りないジョンが、ガラスの割れる音と“It's a goal”のSEをエンディングに加えて、ナンセンス詩人としてもビートル・ジョンとしても一区切りをつけたかったのではないかと（その未発表に終わったSEの入ったヴァージョンは『アンソロジー3』で聴ける）。曲名にはルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』（原題：Through The Looking Glass）のイメージもあったはずだ。

76年にFM東京（当時）の『ビッグ・スペシャル』*でビートルズの全曲が放送され、この曲のイントロは“ダダン、ダダン”じゃなくて“ダンダンダンダン”とドラムがダブ処理されたようなミックスになっていた。その後、全くその音源にお目に、いやお耳にかかったことがない。

「“The walrus was Paul”は、
みんなを混乱させてやれと思っただけのことさ」（ジョン）

「みんな、僕らの歌詞を深読みするから、
こちらから種を蒔いてみることにした」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「ANTHOLOGY 3」「LOVE」

おススメのカヴァー

Gabriel Carambula & Los DuraBeat「Los DuraBeat／Homenaje A Los Beatles」(2005)／Marshmallow「VA／Beatles Mania」(2012)

＊「ビッグ・スペシャル」＝土曜日深夜1時～3時に放送された番組で、ビートルズは76年6月5日～7月31日の全9回。番組表には米盤LP (Capitol SWBO-101) 使用とある。

155

オブ・ラ・ディ，オブ・ラ・ダ

Ob-La-Di, Ob-La-Da

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.7.8、7.9、7.11、7.15）［3'08］
「THE BEATLES」

ポールがアルバムからシングル・カットしたがったのもわかる。日本でも小学校のフォーク・ダンスなどでいまだに使われるほど浸透しているのは、メロディが覚えやすく、踊りやすく、呪文のような曲名が面白いからだろう。

だが、レコーディングは難航した。ポールの完全主義にとくにジョンとジョージがうんざりした、というのが正確な物言いだろう。「アンソロジー 3」で聴けるように、当初はもっとテンポが遅かったが、最初からやり直し、スカのリズムをさらに強調した仕上がりとなった。何度も何度も繰り返し曲をやり直させられるジョンが頭に来て、“これでいいだろ！”と思いっきり叩きつけた力強いピアノがそのままイントロに使われることになったというのだから、何が功を奏するのかはわからない。やればやるほどダメになる曲はポールにも過去にあったが、これはリメイクされてよかった。曲を聴いている限りでは、ジョンの“arm”という一声にジョージが“leg”と返していたり、“sweet home”とポールが歌った後にジョンが“H-O-M-E”と低い声でつぶやいたり、和気藹々としたレコーディング風景が目に浮かぶけれども。

主人公を2人設定したポールの歌詞も面白い。市場に屋台を出して商売をしているデズモンドと、家事に精を出し、夜にはおめかししてバンドで歌うモリー。しかしポールは最後にデズモンドとモリーの名前を、間違えて逆に歌ってしまう。“両刀遣いか女装趣味かみんな不思議がるからそのままにした”（ポール）というオチはこうして生まれた。

「ジミー・スコット*の口癖“Ob-la-di, Ob-la-da life goes on”を元にした。
“Nothing too much just out of sight”とか
そういう言いまわしに長けた奴だった」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1967-1970」「ANTHOLOGY 3」

おススメのカヴァー

The Marmalade「Ob-La-Di Ob-La-Da」（Single）（1968）／Youssou N'Dour「Ob-La-Di, Ob-La-Da」（Single）（1996）

---

*ジミー・スコット＝この曲に参加したナイジェリアのコンガ奏者。ポールは「Nothing Too Much Just Out Of Sight」も書き、ザ・ファイアーマン名義のアルバム「エレクトリック・アーギュメンツ」（08年）に収録した。

156

ワイルド・ハニー・パイ

Wild Honey Pie

Lennon/McCartney
1968.11.22/1968.8.20【[illegible]】
【THE BEATLES】

デビュー以来、ビートルズのプロデューサーとして支え続けてきた"先生"的存在のジョージ・マーティンは、『ザ・ビートルズ』制作途中で休暇に出てしまった。バンドとしての集合体ではもはやなく、ジョンも言うような"ソロとバック・バンド"の関係に見えたのかもしれない。"付き合いきれなくなった"ということだろう。

マーティンは『ザ・ビートルズ』は曲を厳選して1枚にしたほうがいいとも提言していた。しかし、メンバーは聞き入れなかった。それも離脱の一因なのかもしれない。とはいえ、よくぞ2枚組にしてくれたと思っているファンは世界中にいる。個人的にも『ザ・ビートルズ』がビートルズのアルバムの中で最も好きな1枚（2枚）である。で、もし2枚組になっていなかったら絶対に入らなかったのがこの曲だ。ほかにもいくつかあるけど、「ハニー・パイ」をポールがアコースティック・ギターでアドリブでやったお遊び的な1曲だが、レコーディングは「ハニー・パイ」より早い。

『ザ・ビートルズ』はレコーディング期間が長いので、セッションの合間にこの手のちょっとした息抜きの時間も増えた。「クライ・ベイビー・クライ」が終わった後に、クレジットはないが、ポールが"Can you take me back where I came from, can you take me back"とアドリブで歌う曲もアルバムには収められている。

それにしても、パティはこの曲のどこが気に入ったのだろうか。

「「ヤー・ブルース」を物置で録音したばかりでまだ実験的な気分に浸っていた。インストゥルメンタルの断片だけど、パティが気に入ったんで入れることにした」（ポール）

[illegible]

[illegible]

Pixies『Pixies At The BBC』（1998）／The Suppliers『VA／Mojo Presents The White Album Recovered [illegible]』（2008）

157

コンティニューイング・ストーリー・オブ・バンガロウ・ビル

The Continuing Story Of Bungalow Bill

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.10.8）［3'14］
『THE BEATLES』

初めて女性ヴォーカルが加わったビートルズの曲。“女性”とはもちろんオノ・ヨーコのことだ。68年10月8日に収録された「アイム・ソー・タイアード」に続けて、日付が変わってから録音されたというから、10月9日＝ジョンの誕生日にヨーコが“声”で参加してジョンを祝福したということだったのかもしれない。

ジョンは、人名を曲名に使った曲はポールよりはるかに少ないけれど、『サージェント・ペパーズ…』以降はいくつかあり、これは“ルーシー”“ミスター・カイト”“プルーデンス”“セディ”に続く5曲目となる。後は、この時期に書かれた「ミーン・ミスター・マスタード」「ポリシーン・パン」「ホワッツ・ザ・ニュー・メリー・ジェーン」「ジュリア」と、69年「ジョンとヨーコのバラード」だけである。68年に突出しているのはなぜだろう。

この曲はインドでのマハリシのキャンプで知り合ったリック・クックという男性の実話を元に、西部開拓の伝説的人物バッファロー・ビルとジャングル・ジムという50年代のテレビ番組のキャラクターを合わせて“典型的なアメリカ人”を揶揄したもの。“見かけだけで殺せるなら、殺されるのは虎じゃなくて僕らのはずだろ”という歌詞が痛烈。ジョンとヨーコのソロ・アルバム『サムタイム・イン・ニューヨーク・シティ』（72年）に入っていてもよさそうな曲だ。

イントロの超絶フラメンコ・ギターはメロトロンにプリセットされている音源で、キング・クリムゾン*もライヴでそれとわかるように使っていた。

「ティーンエイジャーの社会風刺ソングみたいなもんだ」（ジョン）

「お気に入りの曲。リシケシュで歌ったことを思い出すな」（ポール）

その他の主な収録アルバム

―

おススメのカヴァー

Young Blood「The Continuing Story Of Bungalow Bill」（Single）（1969）／Dawn Kinnard & Ron Sexsmith『VA／Mojo Presents The White Album Recovered No.0000001』（2008）

---

*キング・クリムゾン＝68年に結成。69年に『クリムゾン・キングの宮殿』でデビュー。

158

ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス

While My Guitar Gently Weeps

Harrison
1968.11.22（1968.9.5、9.6）［4:45］
『THE BEATLES』

ジョンの"Eh up!"という掛け声に導かれて始まるジョージのビートルズ時代の代表曲。「レボリューション」でのニッキー・ホプキンスに続いて、さらに知名度の高いエリック・クラプトン*を今度はジョージが連れてきた。なぜ声を掛けたのかというと、ジョージに言わせると"いい曲だと思っていたのに、何度レコーディングしても他の3人が興味を示してくれなかったから"。69年の"ゲット・バック・セッション"でジョージがビリー・プレストン*を連れてきたのは、これがうまくいったからだと思う。倦怠感の蔓延やマンネリを打破するのにこれほどの特効薬はない。"部外者"が入ると、"ビートルズ"としての'まともな'顔を見せようとみんなも"よそ行き"の表情になるからだ。9月5日はリンゴ復帰後の最初のレコーディングともなったが、クラプトンも初参加したその日のセッションでは、合間にポールが「レット・イット・ビー」の、誰も知らなかった最初期（ブラザー・マルコム）ヴァージョンを披露した（50周年記念盤に収録）。そして、この後、ジョンとクラプトンが親密になっていくのだ。

チョーキングを多用したクラプトンの演奏もさることながら、ポールのピアノも、後から加えたベースも、「サムシング」ほどではないが十分にメロディアスだ。

『アンソロジー3』に収録されたジョージのソロの弾き語りによるアコースティック・ヴァージョン（68年7月25日収録）は、「レボリューション」と「レボリューション1」ぐらいの趣の違いがある。

「両親の家で、どんな本でもいいから最初に目にしたものを歌にしようと決め、"gently weeps"という言葉を見つけて、書き始めた」（ジョージ）

[illegible]
『THE BEATLES 1967-1970』『ANTHOLOGY 3』『LOVE』

[illegible]
The Jeff Healey Band「While My Guitar Gently Weeps」(Single)（1990）／TOTO『Through The Looking Glass』（2002）

＊エリック・クラプトン……45年生まれ。音楽活動を開始。66年7月、クリームを結成（68年11月に解散）。
＊ビリー・プレストン……46年生まれ。[illegible]ビートルズと知り合う。69年に[illegible]

159

ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン

Happiness Is A Warm Gun

Lennon/McCartney
1968.11.22 (1968.9.24、9.25) [2'43]
『THE BEATLES』

『ザ・ビートルズ』がなぜ最も好きかというと、この変態的（失礼）な名曲が入っているから。ほかにももちろん理由はあるけれど、「アイ・アム・ザ・ウォルラス」同様、こんなヘンテコな曲はジョンにしか書けない。"あらゆるタイプのロックンロールを盛り込もうとしただ"とジョンは言っていたが、タイプの異なる3つのパートを混ぜ合わせた展開は「アイ・ウォント・ユー」などに似ている。テンポやリズムの定型がジョンの頭にはハナからないかのような構成にもかかわらず、曲として違和感なくひとつにまとまっている。それがすごい。

ジョージ・マーティンが持っていた銃雑誌の記事にあった"撃ったばかりの銃"というフレーズをヒントに書かれた曲だが、曲名がドラッグとセックスを匂わせるという理由でBBCでは放送禁止になった。曲が3重構造なら、歌詞も思わせぶり。ジョンによると"Mother Superior（女子修道院長）"はオノ・ヨーコのイメージだそうだ（『アンソロジー3』収録のデモ・テイクでジョンは、"Yoko Ono, oh no, Yoko Ono, oh yes"と呟いている）。

ところでこの曲、昔から謎がひとつある――コーラスは3人なのか、それともジョン1人なのか？　67年以前だったら3人で間違いなくやったと断言してしまえるが、『ザ・ビートルズ』のセッションはそれぞれが時間を見つけて別々にスタジオに入ることも多かったし…。ポールとジョージもお気に入りの曲として挙げているので、やはり3人なのだろうか？　ジョン1人に聞こえるのだが。

「ベスト・ソングのひとつ。〈ゴッド〉のように違った曲を一緒にした」（ジョン）

「温かい銃を撃って幸福だと思っている連中を揶揄した曲。ジョンらしいな」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『ANTHOLOGY 3』
おススメのカヴァー
World Party『Thank You World』(1991)／Gilby Clarke『The Hangover』(1997)

160

マーサ・マイ・ディア

Martha My Dear

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.10.4、10.5）［2'28］
『THE BEATLES』

ポールのソロ曲、という説が根強い。となると、これもドラムはポール。A面もB面も、1曲目はポールがドラムを叩いたポールの曲である。しかも1テイクだけで終了し、その後ヴォーカルを録り直して手拍子を加え、翌日にベースとリード・ギターを加えて完成させたという。“すごい！”と思う。

曲の構成・使用楽器・アレンジなどのイメージが最初からポールの頭の中にあったのだろう。69年にバッドフィンガー用に1人で録音した「カム・アンド・ゲット・イット」と構成や録音の方法はよく似ているが、こちらはその後にジョージ・マーティンのアレンジで、さらにホーンとストリングスが加えられている。

“マーサ”はポールが長年飼っていたシープドッグの名前で、ウイングスの「ジェット」（73年）もマーサが生んだ子犬をテーマにしたものだ。68年7月20日にポールとの婚約を解消したジェーン・アッシャーとの破局の影響で曲が生まれたという説もある。『ザ・ビートルズ』の制作時期にポールが付き合っていたフランシー・シュワルツとの関係をマーサに置き換えて書いたという可能性もあるのだろうか。

「ブラックバード」はアコースティック・ギターで一度は弾きたいビートルズ・ナンバーの筆頭だと思うが、この「マーサ・マイ・ディア」はピアノで弾きたい1曲じゃないかなと。難しすぎるのか、ポールはリハーサルを除き、いまだに公に披露していない。カーネーションの直枝政広さんに10年ほど前に聴かせていただいた“完コピ”は最高だった。

「ピアノのレッスンで習うような曲として生まれた。
僕のピアノの演奏レベルを超えたものだったから、弾くのはかなり難しい」（ポール）

その他の主な収録アルバム

—

オススメのカヴァー

Slade『Beginnings』（1969）／Sugarpie And The Candyman『Let It Swing』（2015）

161

アイム・ソー・タイアード

I'm So Tired

Lennon/McCartney
1968.11.22 (1968.10.8) [2'02]
「THE BEATLES」

「ザ・ビートルズ」は2枚組LPのそれぞれの面に、大まかなテーマのようなものがある。A面はベスト＝バンドの表向きの顔、B面は主に動物をテーマにした曲、C面は主にハード・ロック、D面はそのほか（？）というまとまりだ。この曲は動物をテーマにしたものではないけれど、「ザ・ビートルズ」収録曲の中では、「セクシー・セディ」と並びビートルズとしてのバンド・サウンドを最も感じさせる曲だと思う。「リボルバー」以前のビートルズが好きな人にも安心してお勧めできる"ビートルズ"の曲という意味である。不思議とポールの曲にはそう感じさせるものがない。強いて言えば「バースデイ」ぐらいだろうか。

「アイム・オンリー・スリーピング」はジョンの無気力状態が歌い込まれていたが、この曲ではインドでの瞑想の日々に疲れきったジョンの心情が歌われている。後の"「カム・トゥゲザー」問題"でも触れるが、ジョンとポールがハモる後期の曲では、2人の声の混ざり具合が、前期のたとえば「恋におちたら」ほどはうまくいっていない。ジョンの声の質が変わってしまったということも理由になりそうだが、この曲もそう。ポールがたまに出す太い声がけっこう曲者で、昔はよくリンゴの声と間違えられたりした（たとえば「マギー・メイ」や「ユー・ノウ・マイ・ネーム」など）。

最後のジョンのつぶやきは"Monsieur, Monsieur, how about another one？"。次の曲への繋ぎに入れているということは、"もう1曲いかが？"ということか。

「昼間はずっと瞑想しているから、夜は眠れないんだ。好きな作品だ」（ジョン）

「世界に向けたジョンのコメントだね」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「ANTHOLOGY 3」

オススメのカヴァー

Aaron Sutcliffe 「Wavertree」(2007)／Fascinoma 「Don't Let Me Down：A Beatles Cover Album」(2016)

162

ブラックバード

Blackbird

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.6.11）［2'19］
『THE BEATLES』

『ザ・ビートルズ』には、ポールのアコースティック・ギターによる秀作が多い。そうした中でも、これはポールの代表曲のひとつに挙げられる。2013年の日本公演の際、ポールがMCでも言っていたが、アメリカで公民権運動が盛んになり、人権問題で苦しんでいる黒人女性を励ますために書いた曲である。ただの"黒つぐみ"の歌じゃなくて、ブラックバードが黒人女性を擬人化したものだという曲作りの背景が、今では多くの人に伝わったはずだ。

この曲が、ジョージが弾いていたバッハの『リュート組曲第1番』の「ブーレ」*をヒントに書かれたということは、80年代以前には知られていなかったはず。ポールは2000年代のライヴでバッハの曲の出だしを弾きながら説明したが、たぶんその時期に初めて明かしたんじゃないかと思う。そして、ポールがライヴその他で再演している様子を見ていると、もしかしたら「イエスタデイ」よりも大事にしているんじゃないかとも思う。イントロのアコースティック・ギターの爪弾きは、この曲のほうが印象的でもあるし。ちなみにポールは、この曲と同じ手法を用いて「ジェニー・レン」（05年）を書いた。

ジョンが"とびきり重要な1行を書いた"と言っているが、どこだろう。"You were only waiting for this moment to arise"（飛び立つ瞬間だけを今かと待ちわびていた）かな。あるいは"Take this sunken eyes and learn to see"の"sunken eyes"（落ち窪んだ目）という言いまわしもどことなくジョンっぽい。

「黒人女性を歌った。黒人の公民権運動を僕らは支援していたからね」（ポール）

「ポールはこの手のギターものがうまい」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
『ANTHOLOGY 3』『LOVE』
おススメのカヴァー
Denny Laine『The Rock Survivor』(1995)／Corinne Bailey Rae『VA／The Art Of McCartney』(2014)

---

*「ブーレ」＝バッハが1740年頃に作曲した『リュート組曲第1番』（BWV996）の5曲目。

163

ピッギーズ

Piggies

Harrison
1968.11.22（1968.9.19、9.20、10.10）［2'04］
『THE BEATLES』

ジョージの曲は『ザ・ビートルズ』の各面に1曲ずつ入っているが、B面に収められているのが、動物をテーマにしたこの「ピッギーズ」。でも、豚といっても"豚"を歌っているわけじゃない。人間を豚に見立てて皮肉っているのだ。ジョンは"フォークとナイフで自分のベーコンを食ってる"という痛烈な1行を提供した。また"What they need is a damn good whacking"の歌詞は母ルイーズが考えたそうだ。

休暇に入ったジョージ・マーティンに代わってセッションに立ち会うようになったクリス・トーマス（68年9月9日から10月1日にかけて代理プロデューサーを務めた）の弾くハープシコードがこのバロック調の格式高い（だから皮肉もよく効いた）曲に色を添えている。ジョージがクリス・トーマスとハープシコードをいじっていた時に新曲の「サムシング」を弾き始めたそうで、代わりにそれをやろうというクリスに対してジョージは、「サムシング」はアップルからデビューした新人のジャッキー・ロマックス[*1]にあげるつもりだと答えたという。結局ジョー・コッカー[*2]にプレゼントしたが、ジョージは「マイ・スウィート・ロード」もビリー・プレストンにあげたので、いい曲を大盤振る舞いしすぎてしまう優しさ（？）があったようだ。

91年の日本公演でも演奏され、曲の良さが少しは伝わったかもしれない。ジョージは未発表のオリジナルの歌詞も加えて演奏していた。大袈裟なエンディングの盛り上がりや曲調を思うと、イギリス王室を茶化しているような気もする。

「社会的なメッセージ・ソングだ」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

『ANTHOLOGY 3』

おススメのカヴァー

Luis Eduardo Aute『VA／Harrisongs2』（2003）／Pumajaw『VA／Mojo Presents The White Album Recovered No.0000001』（2008）

[*1] ジャッキー・ロマックス＝62年にビートルズと知り合う。68年にアップルから再デビュー。

[*2] ジョー・コッカー＝64年にビートルズのカヴァー曲「ぼくが泣く」でデビュー。

164

ロッキー・ラックーン

Rocky Raccoon

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.8.15）［3'32］
「THE BEATLES」

「ブラックバード」や「アイ・ウィル」は、もちろん『ザ・ビートルズ』に収録されたアコースティックの名曲だが、それよりも個人的に妙に好きなのが、このブギ・ウギ調のカントリー＆ウェスタン。何がいいって、イントロのアドリブ・ヴォーカルがまず素晴らしい。ビートルズ時代のポールの曲で、最も歌いにくいとは思うけれども。

歌われる内容はどこを切ってもポール節。そんなロッキー少年の物語をジョンは気に入るはずはないかと思いきや、ビートルズとしては最後となるハーモニカでポールを援助。ジョージ・マーティンまで間奏でホンキー・トンク調のピアノを弾くという、68年にしては豪華な（？）顔ぶれだ。ジョージは参加していないが。ドラムもリンゴだけかどうかちょっと怪しい。リンゴが一時脱退するちょっと前に録られた曲でもあるし。

この曲もまた昔からの謎がひとつある。エンディングで“ローッ、キーッ”と高音でコーラスを聴かせているのは誰なんだろう？　ジョンやポールが声音を変えて出したのだろうか。リンダ[*1]じゃないかと思っているのだが…。ポールと付き合い始めたのはこの曲のレコーディング後の9月からのようだが、5月のアップル設立の記者会見でポールと再会しているし、『ザ・ビートルズ』に付けられたポスターにもクレジットが入っているし。2009年のリマスターCDを手掛けたエンジニアにインタビューをする機会があり、細かい話なのは承知で訊いてみたが、“どうかな？”という反応だった（P.274-279参照）。

「好きなトーキング・ブルースで始めて、ウェスタンを皮肉ってパロディにした」（ポール）

「ギデオンの聖書[*2]について、あんな凝った歌詞を僕が書くと思うかい？」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「ANTHOLOGY 3」

オススメのカヴァー

Andy Fairweather Low「Be Bop 'n' Holla」（1976）／Lonesome Strings And Mari Nakamura「フォークロア・セッション」（2011）

[*1] リンダ＝リンダ・イーストマン。ポールの妻。67年5月15日にポールと出会い、69年3月12日に結婚。

[*2] ギデオンの聖書＝1899年に発足された国際ギデオン教会が無料配布する聖書。

165

ドント・パス・ミー・バイ

Don't Pass Me By

Starkey
1968.11.22（1968.6.5、6.6、7.12、7.22）［3'51］
「THE BEATLES」

リンゴ初の自作曲。63年のラジオ・インタビューですでに半分ぐらい作っていると話していたが、その5年後にやっとレコーディングにこぎつけた。これ以前にリンゴの名前がクレジットされているのは、共作曲「消えた恋」「フライング」の2曲だけだった。苦労して書いただけに、ザ・バンドのリヴォン・ヘルムの最も好きな曲だとゲット・バック・セッションの2日目（69年1月3日）にジョージから聞かされたリンゴは、さぞうれしかったに違いない。

曲はいかにもリンゴ好みというカントリー&ウェスタン調で、ジャック・ファロン*によるフィドルがフィーチャーされている。「ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ」を地で行くリンゴのことだから、この曲も残りの3人が全面的に協力したのかと思いきや、手伝ったのはポールだけだった。

その後、リンゴの自作曲についてはとくにジョージが頻繁に手を貸すようになる。たとえば映画『レット・イット・ビー』で未完成の「オクトパス・ガーデン」をリンゴがピアノで弾いている時に、一緒に横にいるジョージが基本のコード進行など、曲の流れがスムーズになるようにリンゴに親切に教えている場面が出てくる。ソロ以降も、リンゴの最初のヒット曲「明日への願い」（71年）のレコーディングの際、プロデューサーをつとめたジョージが懇切丁寧にガイド・ヴォーカルを披露しているヴァージョンがある。

50周年記念盤には、当初の意図どおり、イントロ用にジョージ・マーティンが書いたオーケストラの小品（「ア・ビギニング」と題され、「アンソロジー3」に収録）とのメドレーで収録されている。

「気に入ってるね。僕の最初の曲なんだ。完成させるのにどきどきしたよ」（リンゴ）

その他の主な収録アルバム
「ANTHOLOGY 3」

おススメのカヴァー
The Georgia Satellites「Shaken Not Stirred」(1997)／T-Bone Walk「VA／The Blues White Album」(2002)

---

*ジャック・ファロン＝プロモーター、ジャズ・ベーシスト。ブライアン・エプスタインと契約したビートルズの最初のライヴ（62年3月31日）を手掛けた。

166

ホワイ・ドント・ウィ・ドゥ・イット・イン・ザ・ロード

Why Don't We Do It In The Road?

Lennon-McCartney
1968.11.22／1968.10.9、10.10（1:41）
『THE BEATLES』

『ザ・ビートルズ』のC面収録曲には、アコースティック主体の比較的おとなしいものが多い。その中で、これだけは最もハードな1曲。ローリング・ストーンズの「ストリート・ファイティング・マン」への返答歌とも言われたが、ポールは、インド滞在時に猿が"おおっぴらにやってる"のを見て思いついたというから、十分に性的意味合いの強い曲ということだ。

ジョンとジョージが「グラス・オニオン」の仕上げの真っ最中だったので、ポールはリンゴだけを誘ってレコーディングしたが、その仕打ちにジョンは傷ついたそうだ。"なぜ声を掛けてくれなかったのか"というジョンの思いは、俺はこういう曲を作りたかったというポールの才能への嫉妬でもあるに違いない。

ポールは"ジョンが飛び火してできた曲"とも語っているが、ポールのソロ以降の、たとえば「オウ・ウーマン・オウ・ホワイ」（71年）のようなシャウトを聴かせた曲に通じる荒々しさがある。この激しいシャウトをさらに押し進めたのが「オー！ダーリン」だろう。そしてそれもジョンのお気に入りだった。「オー！ダーリン」は、『アビイ・ロード』収録ヴァージョンはポールが1人で歌ったが、その前の"ゲット・バック・セッション"ではジョンも一緒に歌っていた。同じくジョンはそのセッション時にアドリブで"Why don't you put it on the road"などとも口ずさんでいた。この曲をよっぽど気に入っていたのだろう。

「アイディアがジョンっぽくて、ジョンになりかわって僕が作ったんだよ」（ポール）

「ドラムもピアノもヴォーカルもポール。
そうすれば彼のやりたいようにできるのさ」（ジョン）

[illegible]
『ANTHOLOGY 3』
[illegible]
Jimmy Thackery & The Drivers『V.A.／The Blues White Album』（2002）／Lowell Fulson『American Gangster』（2007）

167

アイ・ウィル

I Will

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.9.16、9.17）［1′45］
「THE BEATLES」

アップルからデビューしたメリー・ホプキンにポールが贈った「グッドバイ」もそうだが、ポールはこの手のアコースティック・バラードはお手のものだ。アルバム『ザ・ビートルズ』の中では「ブラックバード」と並ぶ傑作だが、レコーディングは難航して、67テイクも数える。ポールなら簡単にできそうな気はするが、たぶん、“名曲”に仕上げるためにじっくり時間をかけたのだろう。歌詞に関しても、ポールは最後の一節をジョンに手伝ってもらおうと思っていたが（そのほうが良くなるから）、自分1人で書くことになったと語っている。

とはいえ、そうした長いセッションは、プラスを生むことが多い。この時も、合間に「ステップ・インサイド・ラヴ」（ポールが68年初めにシラ・ブラックに贈った曲）や「ロス・パラノイアス」をアドリブで演奏している（ともに『アンソロジー3』で聴ける）。もう1曲、「クライ・ベイビー・クライ」のエンディングに収められた小品（「キャン・ユー・テイク・ミー・バック？」）も、だ（50周年記念盤には「ブルー・ムーン」も追加された）。

このセッションがよかったのは、ジョンがパーカッションで参加していることだ（ジョージは不参加だが）。この時期のこの手の曲は、ポールが1人でささっとやってしまうことが多かったから。それにしてもポールの“マウス・ベース”がすごい。普通にベースを弾けばいいのに、そうしないセンスの良さ。口で楽器の真似をするのはポールの得意技でもある。「フォー・ノー・ワン」と並ぶ1分台の名曲だ。

「メロディだけで完璧な作品。たまには運良く素晴らしいメロディができることがある。インドでドノヴァンが気に入ってくれた」（ポール）

その他の主な収録アルバム
「ANTHOLOGY 3」
おススメのカヴァー
Art Garfunkel「Songs From A Parent To A Child」（1997）／原田知世「music & me」（2007）

168

ジュリア

Julia

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.10.13）［2'54］
「THE BEATLES」

ジョンが17歳の時に交通事故で亡くなった母ジュリアへの思いを、歌詞に出てくる"Ocean Child"ことオノ・ヨーコへの思いと重ね合わせたアコースティックの名曲。ビートルズでのポールのソロ・レコーディング曲はあんなにたくさんあるのに、ジョンのソロ・レコーディング曲はこれだけである。

それを思うと、ポールの「イエスタデイ」と対にしたくなる気にちょっとなるけれど、「アイ・ウィル」と対にするほうが自然だ。ジョンの曲では、詩的な歌詞と優しいメロディを持つ「アクロス・ザ・ユニバース」とこの「ジュリア」に、ジョンのナイーヴな面がよく表われていると思う。ジョンがこの時期に書き、ソロ・アルバム『ジョンの魂』に収録した「ルック・アット・ミー」も、歌詞は簡潔だが、同じくジョンの優しさが垣間見られる曲だ。

歌詞の一部をヨーコが手伝ったとジョンは言っているが、レバノン生まれの詩人ハリール・ジブラン*の影響のほうが強い。少なくとも冒頭の"Half of what I say is meaningless. But I say it just to reach you"と"seashell eyes, windy smile, calls me"の歌詞は彼の詩をほぼそのまま引用している。

演奏では、インド滞在時にドノヴァンに教えてもらったスリー・フィンガー・ピッキングを『ザ・ビートルズ』以降ジョンはたびたび披露するようになる（たとえば「サン・キング」や前述の「ルック・アット・ミー」など）。

「ヨーコと母のまさにコンビネーション。ブレンドしてひとつの曲にした」（ジョン）

「フォークのピッキング・スタイルがちゃんとできたのはジョンだけだった」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「ANTHOLOGY 3」「LOVE」

おススメのカヴァー

Waltari「Blood Sample」（2005）／A Girl Called Eddy「VA／Mojo Presents The White Album Recovered No.0000001」（2008）

＊ハリール・ジブラン＝レバノン生まれの詩人、画家、彫刻家（英語読みはカリール・ジブラン）。ジョンが「ジュリア」に転用したのは、1923年に英訳された『預言者』収録の詩。

169

バースデイ

Birthday

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.9.18）［2'42］
『THE BEATLES』

LPでいうと『ザ・ビートルズ』のC面——2枚組の2枚目の1曲目もポールの曲である。ビートルズのストレートなロック・ナンバーとして人気の高い1曲で、「デイ・トリッパー」と同じく一度聴いただけで覚えられてしまうギター・リフが快調だ。知名度も両者はほぼ同じぐらいだろう。

これも「ヘイ・ブルドッグ」と同じくスタジオであっという間に仕上げられた即席の1曲だった。こんなふうにできたそうだ——セッションの合間にEMIスタジオの近くに住んでいるポールの家に4人で行き、映画『女はそれを我慢できない』[1]をテレビで観た。その時に、リトル・リチャードやジーン・ヴィンセント[2]など往年のロックンローラーをフィーチャーしたその映画にポールが触発され、スタジオに戻って一気に完成させたという。68年春のインド滞在中にパティの誕生日（3月17日）を祝って書いたという話もあるが、セッションに立ち会ったクリス・トーマスは"ポールが最初にスタジオに来てギターのリフを弾き始め、一気に完成させた"と言っている。たまたまその時スタジオにいたパティとヨーコがコーラスで参加しているので、パティのために、というのも可能性がないわけではない。

「オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ」よりもこれをシングルに推してもよかったかなと思うが、「デイ・トリッパー」を作った65年じゃもうなかった。ビートルズのロックもそれだけ変わったということだろう。

「ポールは、50年代にヒットした（チューン・ウィーヴァーズの）〈ハッピー・バースデイ・ベイビー〉のような曲をと思ったんだろう」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

—

オススメのカヴァー

Swingle Singers『Ticket To Ride』（2000）／Sammy Hager『VA／The Art Of McCartney』（2014）

---

[1] 『女はそれを我慢できない』＝ジェーン・マンスフィールド主演の米映画（56年12月公開）。

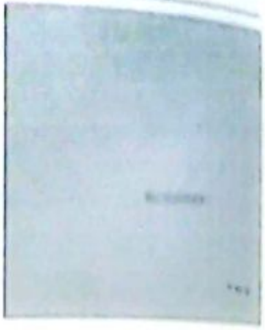
[2] ジーン・ヴィンセント＝56年にデビュー。代表曲は「ビー・バップ・ア・ルーラ」（56年）ほか。

170

ヤー・ブルース

Yer Blues

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.8.13、8.14、8.20）［4'00］
『THE BEATLES』



リンゴのカウントに導かれて久しぶりにジョンの絶叫が聴けるブルース・ロック。ジョンの絶叫は「ヘルプ！」と同じ位置付け。“魂の叫び”である。ヨーコとの出会い、ブライアン・エプスタインの死、シンシアとの別居、そしてビートル・ジョンの現在——67年以降、環境が目まぐるしく移り変わる中、インドでの瞑想中に不安が一気にジョンにのしかかってきたのだろう。

当時流行していたブリティッシュ・ブルースを茶化した曲ではあるが、ジョンの心情を表現したらブルース調になった、と言ったほうがより曲の意図が伝わるかもしれない。ジョンがこの曲で、過去に影響を受けたボブ・ディランの曲（「やせっぽちのバラード」*）や「ロックンロール」を歌詞に盛り込みながら、自殺したくなった気分を表現している。この“死にたいブルース”は、ジョンのベスト・ロックのひとつでもある。

ポールは、もっとストレートな曲名——“Your Blues”をジョンに勧めたが、あまり深刻に受け取ってほしくなかったので“Yer Blues”にしたそうだ。珍しくタイトルが歌詞に登場しない1曲である。「トゥモロー・ネバー・ノウズ」のほかに、まだあるだろうか？

リンゴのカウントは、わざわざ8月20日に追加録音して編集で加えたもので、「アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア」と同じアプローチである。だったらジョンのこの曲をC面の1曲目にすればよかったのに、と思う。

「インドで神に近づこうと努力したが、自殺したくなってしまった」（ジョン）

「物置のような狭いテープの保管倉庫で肩をくっつけ合いながら演奏した」（ポール）

その他の主な収録アルバム

オススメのカヴァー

The Jeff Healey Band『Cover To Cover』（1995）／椎名林檎『唄ひ手冥利～其の壱～』（2002）

---

*「やせっぽちのバラード」＝ボブ・ディランの6枚目のアルバム『追憶のハイウェイ61』（65年8月）収録曲。歌詞に登場する「ミスター・ジョーンズ」をジョンが引用。

171

マザー・ネイチャーズ・サン

Mother Nature's Son

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.8.9、8.20）［2'47］
『THE BEATLES』

これもポールのアコースティック・ギターの弾き語りによるソロ作品。ビートルズ時代のポールのソロ作品はいったい何曲あるのだろうか。

この曲には、こんなエピソードがある――ジョージ・マーティンや、演奏に加わったトランペット奏者とトロンボーン奏者と一緒にポールはアレンジを考えていた。でも、その和気藹々とした雰囲気の中、ジョンとリンゴがスタジオにふいに入ってきて、一瞬にして張り詰めた空気になった、と。エンジニアをつとめたケン・スコットはそう証言している。他のメンバーからしたら、また1人でやってるのかという苛立った気持ちだっただろう。ポールはドラムの音をボンゴに似たようなサウンドにするためにあれこれ工夫して、ティンパニも叩いたというけれど、そりゃリンゴは面白くないはずだ。ポールがこの曲の追加録音を行なった2日後にリンゴはビートルズを一時脱退した。

ポールの発言によると、リンダと親しくなった後にナット・キング・コール[*1]の曲を参考にして書かれたようなので、ジョンの言うインドでの影響はないのかもしれない。けれども、"自然"をテーマにした曲であるのは間違いない。

「ユア・マザー・シュッド・ノウ」を未完成だと前に書いたが、この曲もそう思っている。また怒られちゃうかもしれないが、後半の"トゥトゥトゥトゥ…"というハミングは、歌詞を書けずにポールはごまかしているんじゃないかと思うのだ。これも、才能の出し惜しみと受け取っていただければありがたい。

「〈ネイチャー・ボーイ〉の影響。
リンダとは自然を愛する者同士だとわかってね」（ポール）

「マハリシの講義をヒントに僕は〈I'm Just A Child Of Nature〉[*2]を書いた。
ポールのがこれさ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

『ANTHOLOGY 3』

おススメのカヴァー

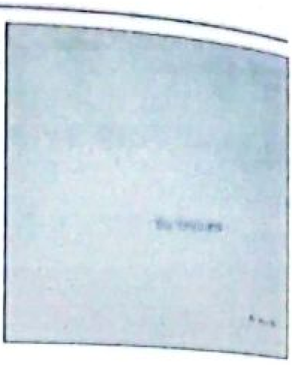
Nilsson『Harry』（1969）／John Denver『An Evening With John Denver』（1975）

[*1] ナット・キング・コール＝35年に音楽活動を開始。「ネイチャー・ボーイ」は48年の曲。
[*2] 〈I'm Just A Child Of Nature〉＝68年5月の未発表曲。「ジェラス・ガイ」（71年）の元歌。

172

エヴリボディーズ・ゴット・サムシング・トゥ・ハイド・エクセプト・ミー・アンド・マイ・モンキー

Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey



Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.6.27、7.1、7.23）〔2'24〕
「THE BEATLES」

曲名の最も長いビートルズ・ナンバー。「バースデイ」に続いて『ザ・ビートルズ』のC面のロック・サイドを象徴するヘヴィ・ロックである。

それにしても、曲名に出てくる“モンキー”とは何を意味しているのか。ジョンは“ヨーコ”と言い、ポールは“ヘロイン”だと言う。どちらもきっと正しいのだろう。レコーディングにまで同行し、セッションにも参加し、音作りにも協力してしまうヨーコの存在を他のメンバーが疎ましく思ったのもわかるし、それに対して疑心暗鬼になってより強いドラッグに手を出し、さらに意固地になってしまうジョンの心境も理解できる。そしてこの曲のテーマ――“ヘロインとヨーコ”は、麻薬の禁断症状を歌った「コールド・ターキー」(69年)や“ヨーコと自分だけは信じる”と歌った「ゴッド」(70年)へと繋がっていく。

イントロからの、ディストーションのかかったギターの性急な響きが耳を奪う。「レボリューション」と同じく「ディジー・ミス・リジー」のギターがおとなしく聞こえるほどの破壊力で、後半のジョンの“ヘイ！”という強烈なシャウトと、その後に切り込んでくるポールのぶっといベースも強烈だ。ハンド・ベルの甲高い音も気持ちを前のめりにさせる効果がある。

ジョンの“ヘイ！”の掛け声は、「悲しみはぶっとばせ」では“終わった恋は隠せ”という戒めだったが、ここでは“始まった恋を公にして何が悪い”という苛立ちのように響く。

「僕とヨーコについての曲。僕ら以外はみんなパラノイアのように見えたんだ」(ジョン)

「“monkey”のようなヘロイン用語が出てくるようになった。
これ以上ひどいことになりませんようにと願うしかなかったな」(ポール)

その他の主な収録アルバム

—

おススメのカヴァー

Fats Domino「Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey」(Single)(1969)／森高千里「Step By Step」(1994)

173

セクシー・セディ

Sexy Sadie

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.8.13、8.21）［3'15］
『THE BEATLES』

64年の「ハード・デイズ・ナイト」の頃に"4年後の68年にビートルズはどんなふうになっているのか"と想像したら、こんなサウンドを思い浮かべるのではないか。ここまで紹介してきた曲を見てみると、ビートルズ・サウンドはその後どんどん幅広いものになっていることがわかる。そうした中でも「セクシー・セディ」は、『ザ・ビートルズ』収録曲中、バンドとしてのまとまりが最も感じられる1曲だ。ジョンかポールのどちらかが目立つこともなく、4人の持ち味が均等に、バランス良く収まっていると思うからだ。ジョンのヴォーカルも、ポールとジョージのコーラスも、ジョージのギターも、リンゴのドラムも、"基本"に忠実というか、安心して聴ける充実ぶりだ。リンゴの一時脱退直前に収録された曲とは思えない。

歌詞は、インド哲学の師として崇めていたマハリシの、女優ミア・ファロー強姦容疑という実はガセネタに躍らされてジョンが書いた強烈な内容だ。ポールの発言にもあるように、"無実の容疑者"を守るために、"Maharishi"を"Sexy Sadie"に変えたほうがいいとジョージが提案したという。とはいえ、たとえば"微笑みだけですべてが明るくなった"など、いつも笑顔を絶やさないマハリシへの皮肉っぽい言いまわしなどがあちこちに盛り込まれているので、"マハリシの歌"だとすぐにわかってしまうが、「セクシー・セディ」はその後、リンゴの「デヴィル・ウーマン」（73年）や、その名前をもじったジョージの「シンプリー・シェイディ」（74年）にも登場するほどの人気者となった。

「インドを発つ時にできた。"Maharishi what have you done"ってね」（ジョン）

「ジョージが"Sexy Sadie"にしたほうがいいと。
マジック・アレックス*のでっち上げだったからね」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『ANTHOLOGY 3』

オススメのカヴァー

Paul Weller「Out Of The Sinking」（Single）（1994）／Rachel Unthank & The Winterset『VA／Mojo Presents The White Album Recovered No.0000002』（2008）

---

*マジック・アレックス＝ジョン・アレクシス・マルダス。
ビートルズが68年1月に設立した会社アップル・コープス傘下のアップル・エレクトロニクスを担当。

174

ヘルター・スケルター

Helter Skelter

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.9.9、9.10）[4'29]
『THE BEATLES』

“最も早いヘヴィ・メタルのひとつ”とジョンが言う「涙の乗車券」を凌駕するビートルズ随一のヘヴィ・メタル。「ヘルター・スケルター」とはイギリスの郊外などにある滑り台のことだが、ポールはそれをモチーフにして、ジョンの「ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン」のように性的なニュアンスを持たせた曲に仕上げた。ザ・フー*を超えるさらに“ダーティーな曲”というわけだ。

最初のアレンジは『アンソロジー 3』で聴けるようなアコースティック・ブルース調だったが、その後、ディストーションをかけた暴力的なギターに導かれ、ポールがすさまじいシャウトを聴かせるけたたましいロックへと変貌した。そのリメイク版に臨む前にポールは、景気づけに（？）プレスリーの「ベイビー・アイ・ドント・ケア」を即興で激しく歌っている（50周年記念盤に収録）。

7時間半に及ぶレコーディングで18テイクが録られ、それらを編集してひとつにまとめたので、「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」に続いてエンディングはフェイド・アウト〜フェイド・インの手法が取り入れられた（モノ・ヴァージョンはフェイド・アウトのまま終了）。ポールのエレキ・ギターに勝るとも劣らない“リズム・ベース”（ジョンが弾いたあとポールがダビングか？）の凶暴な響きもたまらない。

「イエスタデイ」や「レット・イット・ビー」だけがビートルズ時代のポールの代表曲ではない。ポールのその振れ幅の広さがすごい。2013、15、18年の3回の日本公演のアンコールでポールは、オリジナルに負けない激しいシャウトを聴かせていた。

「最もやかましくダーティーな曲を作ったというフーの記事を読んで“よし、やるか！”と。曲名は、てっぺんから真っ逆さまに落ちるシンボルとして使ってみた」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『ANTHOLOGY 3』『LOVE』

おススメのカヴァー
U2『Rattle And Hum』（1988）／Roger Daltrey『VA／The Art Of McCartney』（2014）

＊ザ・フー＝64年に結成。ポールが触発されたのは、「アイ・キャン・シー・フォー・マイルズ」（67年10月／英10位・米9位）に言及したピート・タウンゼントのコメント。

175

ロング・ロング・ロング

Long, Long, Long

Harrison
1968.11.22（1968.10.7、10.8、10.9）［3'03］
「THE BEATLES」

アルバム「ザ・ビートルズ」のC面のジョージ作品は、アコースティック・ギターによるメロディアスなワルツ。10月7日のレコーディングでは、マル・エヴァンスがインドから持ち帰った線香の匂いが充満する中で行なわれたという。表面的には恋人へのラヴ・ソングのように受け取れるが、“'You'は神のことだ”とジョージが言うように、神への信仰心を綴った曲だ。

「マイ・スウィート・ロード」（70年）をはじめ、ビートルズ解散後は“宗教臭い”などとも揶揄されたヒンディー教への信仰心を綴った曲が大幅に増える。これはその初っ端の1曲といってもいいだろう。74年のダーク・ホース・ツアーで「イン・マイ・ライフ」の歌詞“I love you more”を“I love God more”と一部変えてしまったのはさすがにやりすぎだと思ったけれど、ジョージの信仰心は、現世の物質社会の批判とも表裏一体のもので、「リヴィング・イン・ザ・マテリアル・ワールド」（73年）や「ブレインウォッシュト」（02年）などへと結びついていったことが大事なんだと思う。その上で、「ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー」や「ジ・インナー・ライト」の歌詞に立ち返るのがいいかもしれない。

エンディングはもっとさらっと終わらせてもよかったけれど、ちょっとおどろおどろしい展開になるのは、ポールがハモンド・オルガンを弾いた時に、レズリー・スピーカーの上に乗っていたワインの瓶がカタカタ鳴った音の響きがいいとクリス・トーマスが思ったから、とのこと。

「この曲のコードはディランの〈ローランドの悲しい目の乙女〉* からだと思う」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

—

おススメのカヴァー

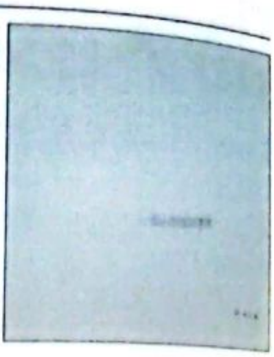
Ranko And His Social Skills 「VA／Harrisongs」（2000）／Tom Hooper 「VA／It Was 40 Years Ago Today」（2004）

---

* 〈ローランドの悲しい目の乙女〉＝ボブ・ディランの7枚目のアルバム「ブロンド・オン・ブロンド」（66年5月）収録曲。

176

レボリューション 1



Revolution 1

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.5.30、5.31、6.4、6.21）[4'15]
「THE BEATLES」

この曲を聴くと、こんなことがまず頭に浮かぶ。67年以降、ソロ時代も含めてジョンは、シングル・ヒット狙いのサウンド作りに興味がなく、曲のメッセージを伝えることをより大事に考えていたんじゃないか、と。ビートルズとしての表看板を大事にするならシングルはテンポの速い「レボリューション」が圧倒的にいいと思うし、最初からB面狙いなら（?）こっちもいいと思う。70年のインタビューでジョンが「ヘルプ！」をピアノのスローなアレンジでやり直したかったと言っていたのも、この曲と同じジョンの志向を表わしている。68年だったらスローな"Help！ 1"も発表できたと思うが、発表済みの曲を再録音するのは"ビートルズ流"とは言えない。

ジョンはサウンドで遊びすぎたりメッセージ性を重視したりすると、メロディの良さが伝わりにくくなったり曲の普遍性が損なわれたりすることが多い。しかも優柔不断なところもあるので、「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」のようにアレンジの異なる2つのテイクを1つにしたりする。この曲では歌詞にそうした迷いが出た。1番の最後の"Don't you know that you can count me out"に「レボリューション1」では"in"を加えて"僕を仲間から外してくれ。いや入れてくれ"と、"破壊的な活動"についてどっちつかずの返答をしている。

この曲の大きなポイントは、もともと10分17秒あった演奏の前半を編集して収録し、後半を「レボリューション9」の"下地"に使ったことだ。

「ジョージとポールはテンポが遅すぎると。
毛沢東*は入れるべきじゃなかったな」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

—

おススメのカヴァー

Heiko Effertz「VA／Wish We Were The Beatles - A TributeTo White Album」（2009）／Tok Tok Tok「Revolution 69」（2010）

＊毛沢東－中華人民共和国の初代主席。"毛沢東主義"は、中国の共産党が掲げた政治思想。

117

ハニー・パイ

Honey Pie

[Lennon/McCartney]
1968.11.22／1968.10.1、10.2、10.4 [illegible]
『THE BEATLES』

「ザ・ビートルズ」のレコーディングでは、シングルも含めてEMIスタジオだけでなく、トライデント・スタジオで収録された曲が5曲ある。まず8月上旬に「ディア・プルーデンス」、続けて8月下旬に「ヘイ・ジュード」、そして10月上旬にこの「ハニー・パイ」と「サボイ・トラッフル」（一部）と「マーサ・マイ・ディア」が収録された。この曲の4人のレコーディングは10月1日の1テイクだけで終了し、残る2日はサックス奏者やクラリネット奏者のダビング作業などに当てられた。最終日の4日はポールが1人で「マーサ・マイ・ディア」も録音した日だ。トライデント・スタジオのピアノの響きをポールは気に入ったのだろう。ということは、この曲のドラムはポールが後で手を加えた可能性もある。

「ホエン・アイム・シックスティ・フォー」の続編的な曲調で、これも64年に書かれた。ソロ以降に発表された「スーサイド」（70年）や「アイル・ギヴ・ユー・ア・リング」（82年）など、ヴォードヴィル調の曲をポールはデビュー前に書いていた。でも10代半ばの曲はなかなか表舞台に上げることがなかった。ポールらしい明るい曲だが、ジョンが気に入らないというのを知っていたからか？

「ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット」と同じく出だしのヴァース（語り風のヴォーカル）がいいアクセント。20年代のジャズっぽい雰囲気を出すために、そこに78回転のレコードのノイズを加えているのも面白い。ジョンのジャズっぽいギター・ソロも、短いけれど印象的だ。

「フレッド・アステア*の影響で64年に作った。
ヴォードヴィルへのオマージュだ」（ポール）

「ジョンが見事なソロをやった。まるでジャズのソロのようなね」（ジョージ）

[illegible]
『Anthology 3』
[illegible]
Mock『Sleeping With Big Ben』（2003）／貴里フジコ『VA／りんごの子守唄（赤盤）』（2005）

---

*フレッド・アステア＝アメリカの俳優、ダンサー、シンガー。代表作は『ロバータ』（35年）、『有頂天時代』（36年）、『踊るニュウ・ヨーク』（40年）など。

178

サボイ・トラッフル

Savoy Truffle

Harrison
1968.11.22（1968.10.3、10.5、10.11、10.14）[2'54]
「THE BEATLES」

『ザ・ビートルズ』のD面に収録されたジョージの4曲目。「ロング・ロング・ロング」とは歌詞もサウンドも全く異なるけれど、これもまたソロ以降のジョージ・サウンドの基本となる1曲といえる。どこがそうかというと、ホーン・セクションをフィーチャーしたロックが、である。ということは、ジョージもまたソロ活動の出発点は68年のここからとなるのだろう。

ジョージの曲に関していえば、『ザ・ビートルズ』は「ホワイル・マイ・ギター…」が入っているからではなく、「ピッギーズ」と「サボイ・トラッフル」が入っているからいいのだと個人的には思っている。それくらいこの曲も魅力的。イントロからのファズのかかったギターとクリス・トーマスのエレキ・ピアノの絡みがまず最高だ。ジャッキー・ロマックスにジョージがあげた「サワー・ミルク・シー」にどことなく雰囲気が似ている。と同時に、ジョージが初めて書いた「ドント・バザー・ミー」を派手で強力なロックに生まれ変わらせたような印象もある。チョコレートの箱に書いてあった言葉を羅列した歌詞も面白い。ジョンは「ロング・ロング・ロング」にもこの曲にも参加していない。「ピッギーズ」は歌詞の一部を書いたもののSE（テープ・ループ）を手伝っただけだった。

ポールの「ゴット・トゥ・ゲット・ユー・イントゥ・マイ・ライフ」、ジョンの「グッド・モーニング・グッド・モーニング」、そしてジョージの「サボイ・トラッフル」——ビートルズ版ブラス・ロックも三者三様だ。

「エリック・クラプトンが僕の家に来た時に“Good News”のチョコレートの箱があった。彼は虫歯だらけだったのに、チョコレートが大好きでね」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

—

おススメのカヴァー

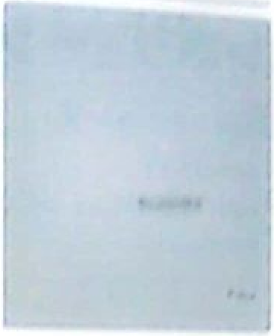
They Might Be Giants「VA／Songs From The Material World」（2003）／Dahni Harrison「VA／George Fest：A Night To Celebrate The Music Of George Harrison」（2016）

179

クライ・ベイビー・クライ

Cry Baby Cry

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.7.16、7.18／9.16※アウトロ）［2'33／0'28※アウトロ］
［THE BEATLES］



ジョンは67年以降、絵やポスターやCMや新聞や雑誌などの情報をヒントに曲を書いてきたが、この曲もしかり。ある雑誌の広告記事"Cry baby cry, make your mother buy"を元にしている。

ジョージ・マーティンも参加し、まとまりのある演奏になってはいるものの、ジョンの色合いが強いせいか、「ナット・ア・セカンド・タイム」の延長線上にあるというか、どことなく主夫時代のジョンのデモ音源に雰囲気が近い。実際、「クリーンアップ・タイム」（80年）にはこの曲の歌詞の影響が見られる。ジョン自身"つまらない曲だ"と言っているが、そうは思わない。ジョンは「レディ・マドンナ」の二番煎じだと感じたのかもしれない。歌詞にはイギリスの童話「マザー・グース」*の影響があるし、メロディもどことなく似ているから。

「アイ・ウィル」のところで書いたように、この曲が終わった後、ポールのアドリブによる28秒の小品が収められている。"Can you take me back where I came from, can you take me back..."と繰り返し歌われる、「アイ・ウィル」をもじったような曲だが、歌われている内容が興味深い。"元いた場所に戻してくれる？"——「ゲット・バック」の前触れのような歌詞が、しかも「レボリューション9」への繋ぎの曲として挟まっている。ポール得意のワン・フレーズの先出しなのか？　しかも呼び掛けている相手は"brother"である。その前にポールは、未収録ながらヨーコに向けたと思われる"Are you happy living here, honey?"とも歌っているのだ。

「スタジオに入ってから初めてジョンの曲を聴かされることがあった。
それまでは事前にチェックしていたのに」（ポール）

[illegible]
【ANTHOLOGY 3】【ロウ】
[illegible]
Throwing Muses 【Chains Changed】(EP)(1987)／Fool's Garden 【Once In A Blue Moon】(1993)

---

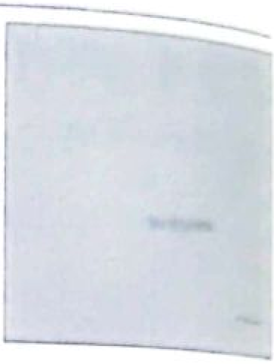
*1 マザー・グース

180

レボリューション 9

Revolution 9

Lennon/McCartney
1968.11.22（1968.6.4、6.6、6.10、6.11、6.20、6.21）[8'21]
「THE BEATLES」



一般的に“213番目に好きな曲”はこれだろう。そのくらい“ビートルズ”のイメージからは程遠いが、これもまた“ビートルズ”である。これがジョンとヨーコの共同作品であったとしても、だ。

とはいえ、この手の実験的なサウンド・コラージュには、ジョンよりもポールのほうが早くから興味を持っていた。オノ・ヨーコに出会ったのはポールのほうが早かったという話もあるし、実際『サージェント・ペパーズ…』制作時期の67年1月5日、ロンドンのラウンドハウス・シアターで1月28日と2月4日に開催された電子音楽イベント『カーニヴァル・オブ・ライト』用にポール主導で13分48秒にも及ぶアヴァンギャルドな作品をレコーディングしていた。これ、いつ公になるのだろうか。そう思うと、この曲はジョン版「カーニヴァル・オブ・ライト」ともいえる。この時期のジョンにはもう1曲、同じくヨーコとジョージと制作した実験作品「ホワッツ・ザ・ニュー・メリー・ジェーン」がある（『アンソロジー3』に収録）。

ジョンは30本以上のエンドレス・テープを用いて、そこにメロトロンやピアノなどを加えた。そのテープには、「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」のオーケストラや67年のクリスマス・レコードの音源も含まれているという。“No.9”のアナウンスはジョンの声のようにちょっと聞こえるが、王立音楽アカデミーの試験テープからのもの。ジョンがこのテープ・ループのSEをEMIの第3スタジオで作っている時、ポールは第2スタジオで「ブラックバード」を1人で録音していた。

「革命を絵にしたようなものだ。これこそ未来の音楽だよ」（ジョン）

「テープ・ライヴラリーから“No.9”の箱をリンゴと探し、
僕がジョンに渡したんだ」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

—

おススメのカヴァー

Phish『Live Phish 13』(2002)／Neil Cowley Trio『VA／Mojo Presents The White Album Recovered No.000002』(2008)

181

グッド・ナイト

Good Night

Lennon/McCartney
1968.11.22 (1968.7.22) [3'11]
「THE BEATLES」

ジュリアンのためにポールは「ヘイ・ジュード」を書いたが、ジョンはこの子守歌を息子にプレゼントした。しかし「ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット」をジョージに歌わせたのと同じ心境だったのだろうか、自分では歌わずにリンゴにあげてしまった。ジョンはヨーコとの結婚記念盤『ウェディング・アルバム』(69年) の中でこの曲のさわりをアコースティック・ギターで披露したが、ジュリアンからしたら、そんなおどろおどろしい演奏じゃなくて、ストリングスをバックにビートルズのアルバムの中で歌ってほしかっただろう。

メロディが流暢で、まるでスタンダード曲のようなので、ジョンじゃなくてポールの曲だと70年代ぐらいまでは誤解されることがあった。歌っているのはリンゴだし。当初は「イエロー・サブマリン」の初期テイクと同じように、イントロにリンゴの台詞が入り、ジョンのアコースティック・ギターをバックに歌うというアレンジだったが、「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」に次ぐ大人数のオーケストラと男女計8人のコーラスをバックにリンゴが1人で歌うというアレンジへと変更された。

決してうまくはないけれど、鼻にかかったヴォーカルは味わい深く、エンディングの語りも素晴らしい。リンゴの最初のソロ・アルバム『センチメンタル・ジャーニー』(70年) に入っていても全く違和感がない。「レボリューション9」の後にこの静かで落ち着いた、映画音楽のような曲で"グッド・ナイト"、というアルバムの構成も見事だ。

「リンゴにあげた。僕には凝り過ぎだったんじゃないかな」(ジョン)

「ジョンの優しい一面を表わした曲だ。リンゴに優しく歌ってあげていたよ」(ポール)

その他の主な収録アルバム

「ANTHOLOGY 3」

おススメのカヴァー

Linda Ronstadt「Dedicated To The One I Love」(1996)/細野晴臣「VA/りんごの子守唄 (青盤)」(2006)

213をさらに楽しむ③

録音テイク数

多い曲

Happiness Is A Warm Gun（1968）(70)／I Will（1968）, Long, Long, Long（1968）(67)／Polythene Pam - She Came In Through The Bathroom Window★（1969）㊴／Something（1969）, You Never Give Me Your Money（1969）㊱／Sun King - Mean Mr. Mustard★（1969）, I Want You (She's So Heavy)（1969）㉟／Glass Onion（1968）㉞／All You Need Is Love（1967）㉝／Blackbird（1968）, Octopus's Garden（1969）㉜／While My Guitar Gently Weeps（1968）㉘／Oh! Darling（1969）㉖／Mother Nature's Son（1968）㉕／Because（1969）㉓／Birthday（1968）⑳／I Should Have Known Better（1964）, I Don't Want To Spoil The Party（1964）⑲／Love Me Do☆（1962）, Please Please Me（1962）, Little Child（1963）, Helter Skelter（1968）⑱／It Won't Be Long（1963）, I Want To Hold Your Hand（1963）⑰／I Am The Walrus（1967）, Revolution 1（1968）, Maxwell's Silver Hammer（1969）, I Me Mine（1970）⑯／Love Me Do＊（1962）, This Boy（1963）, If I Fell（1964）, Strawberry Fields Forever（1966）, Golden Slumbers - Carry That Weight★（1969）⑮

少ない曲

Boys☆（1963）, Long Tall Sally☆（1964）, Everybody's Trying To Be My Baby☆（1964）, Rock And Roll Music☆（1964）, Another Girl（1965）, If I Needed Someone（1965）, Michelle（1965）, What Goes On（1965）, I'm Looking Through You（1965）, Think For Yourself（1965）, Within You Without You（1967）, Wild Honey Pie（1968）, Dear Prudence（1968）, Honey Pie（1968）, Savoy Truffle（1968）, Martha My Dear（1968）, Dig A Pony☆（1969）, Maggie Mae☆（1969）, One After 909☆（1969）, Dig It☆（1969）①

Twist And Shout☆（1963）, Kansas City - Hey, Hey, Hey, Hey! ☆（1964）, The Night Before（1965）, Ticket To Ride（1965）, Yesterday（1965）, We Can Work It Out（1965）, You Won't See Me（1965）, Girl（1965）, Paperback Writer（1966）, I've Got A Feeling☆（1969）②

☆は一発録り　★は1曲として換算　＊はシングル・ヴァージョン

※編集用パートなどを除くベーシック・テイクで算出

※5パートに分けて計37テイク録音された「You Know My Name (Look Up The Number)」(1967/1969)は除く

※（　）内は録音年

7

1969-1970

182

ゲット・バック

Get Back

Lennon/McCartney
1969.4.11（1969.1.27, 1.28）／1970.5.8（1969.1.27※イントロ,
1.28, 1.30※エンディング）［3'11／3'07］
シングル&「PAST MASTERS」／「LET IT BE」

この曲を作った時のポールの心境は、「サージェント・ペパーズ…」録音直後と同じだったはずだ。アルバム「ザ・ビートルズ」で4人のソロ活動が始まってしまったことを実感したポールは、バンドの一体感をもう一度深めようとする。「マジカル・ミステリー・ツアー」をレコーディングした時と同じように。

ジョンが「ザ・ビートルズ」発売直後の68年12月11日に新曲「ヤー・ブルース」を、ビートルズではなく、オノ・ヨーコやエリック・クラプトンやキース・リチャーズらとローリング・ストーンズのテレビ映画「ロックン・ロール・サーカス」*で演奏したのは、ポールにはかなり堪えただろう。しかもバンド名は"ダーティ・マック"。ダーティ・レノンである。

ポールはすかさず"ゲット・バック・セッション"――いわば映画「マジカル・ミステリー・ツアー」のスタジオ――を提案。69年1月2日から当てのないレコーディングが始まる。しかしすさまジョンとポールと衝突したジョージがビートルズを一時脱退する。

そして、そのセッションの中から69年4月に19枚目のオリジナル・シングルとして最初に発売されたのがこの「ゲット・バック」である。ポールの思いがストレートに反映されたスワンプ・ロックで、ビリー・プレストンがキーボードで参加した。歌詞はジョンにもヨーコにも向けていると取れる。リード・ギターをジョンに任せたのも、ジョンに脱退してほしくないポールの気遣いだろう。

「スタジオで作り始めた。ローラー・コースター向けの曲に仕上がったね」（ポール）

「〈レディ・マドンナ〉の改良版さ。金儲け用のね」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1967-1970」「THE BEATLES 1」「LET IT BE...NAKED」「ANTHOLOGY 3」「LOVE」

オススメのカヴァー

Ike & Tina Tuner「The World Of Ike & Tina」（1973）／Rod Stewart「VA／All This And World War II Original Soundtrack」（1976）

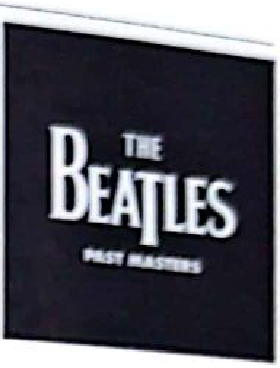
●「ロックン・ロール・サーカス」＝96年に公開。監督は「ヘイ・ジュード」「レボリューション」のプロモーション・フィルムと映画「レット・イット・ビー」を手掛けたマイケル・リンゼイ・ホッ

183

ドント・レット・ミー・ダウン

Don't Let Me Down

Lennon/McCartney
1969.4.11（1969.1.28）［3'33］
シングル&『PAST MASTERS』



ジョンがヨーコへの想いを率直に綴った曲で、「ゲット・バック」のシングルB面に収録された。これも「ヘイ・ジュード」のシングルと同じく両A面で発表すべき曲だと思う。アルバム『レット・イット・ビー』にも収録されていないとは…。

当初“ゲット・バック・セッション”はテレビ・ショウとして公開する予定で、“スタジオのありのまま”を見せるというコンセプトで始まったものだったが、リハーサルなどを含めて四六時中監視されているかのような撮影状況に、ポール以外は我慢の限界となった。ジョージが「アイ・ミー・マイン」や「ワー・ワー」を書けたのはよかったとは思うが。

ジョージは現場復帰の条件として、旧知のビリー・プレストンの参加とテレビ・ショウの中止、フィルム・スタジオ（トゥイッケナム・スタジオ）からアップル・スタジオへの移動を挙げた。おかげで、ビリー・プレストンがエレキ・ピアノで花を添える流暢な音色をこの曲でも耳にできるわけだが、むしろビリーがメンバーを繋ぎ留めたから、その後「アビイ・ロード」で無事にバンドの終焉を迎えることができたともいえる。ビリーに声を掛けたジョージの功績大、である。

さてこの曲。ジョンとポールの微妙なハモリは後期ビートルズの特徴といえば特徴ではあるものの、演奏は一体感のある見事なビートルズ・サウンドだ。そこにジョンの本気を見る。そして、こう言ってはなんだが、この曲が日本人受けするのは、お涙頂戴のちょっと演歌調だからなのかな？とも思う。

「いい歌だよ。助けを求めたジョンの心の叫びだと思う。
ジョンとヨーコはヘロインに手を出してパラノイアになって、危うい状態にあった」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『THE BEATLES 1967-1970』『HEY JUDE』（US）　『LET IT BE...NAKED』

オススメのカヴァー
Dillard & Clark『Through The Morning Through The Night』（1969）／忌野清志郎 & 仲井戸麗市『VA／抱きしめたい』（1988）

184

トゥ・オブ・アス

Two Of Us

Lennon/McCartney
1970.5.8（1969.1.21※イントロ／1.31）［3'35］
『LET IT BE』

"ゲット・バック・セッション"は、新作『ゲット・バック』として、ポールの依頼で加わったグリン・ジョンズ*1のプロデュースで69年5月28日に完成。ジャケットには、『プリーズ・プリーズ・ミー』と同じ構図で6年後のビートルズがEMI本社の階段から見下ろす写真（69年5月13日撮影）が予定されていたが、発売中止となる。さらに70年1月5日の再編集盤も未発表に終わり、アラン・クライン*2の依頼と、ジョンとジョージの推薦によりフィル・スペクターが登場。新たに作り直されたのが、70年5月、最後のオリジナル・アルバムとして発売された『レット・イット・ビー』である。

これはその冒頭を飾る1曲で、もともとアップルの新人としてデビューする予定だったモーティマー用に68年5月に書かれたものだった（曲名は「オン・アワ・ウェイ・ホーム」／2017年に発売）。

ジョンとポールが仲良く歌う軽快な曲だが、「トゥ・オブ・アス」の"トゥ"は誰を指すのか。ポールはリンダだと言うが、「ゲット・バック」で"元いたところに帰ってこい"と歌ったポールは、ジョンの気持ちがビートルズから離れているのを肌で感じていたのだろう。"僕ら2人"は"ポールとジョン"に置き換えたほうがしっくりくる。ポールが過去を回想し、あの仲の良かった時期をもう一度、とジョンに問いかけているように思えるからだ。

ジョンは最後に口笛で応えるが、ポールはアドリブでこう返す――"僕らは家に戻るんだ。信じたほうがいいぜ、じゃあな"と。この"僕ら"はポールとリンダのことかもしれない。

「リンダと付き合い始めた時期に、ギターを持ってリンダとドライヴしている時に作った。僕らの自由な生き方を思い出せるから大好きな曲だ」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『LET IT BE...NAKED』『ANTHOLOGY 3』
オススメのカヴァー
Mortimer『On Our Way Home』（2017）／Aimee Mann And Michael Penn『VA／I Am Sam - Original Soundtrack』（2002）

---

*1グリン・ジョンズ＝『アラウンド・ザ・ビートルズ』（64年4月）がビートルズとの初仕事。
*2アラン・クライン＝69年4月7日にビートルズの2代目のビジネス・マネージャーに就任。

185

ディグ・ア・ポニー

Dig A Pony

Lennon/McCartney
1970.5.8（1969.1.30）［3'53］
『LET IT BE』

ジョンがヨーコに向けて作った曲。“ゲット・バック・セッション”ではまとまりのない演奏をだらだらと繰り返す散漫な光景が多かったのに、映画『レット・イット・ビー』でも観られるように、69年1月30日にアップル・ビルの屋上で行なわれた“ラスト・ライヴ”では見事なまとまりを見せるのだから、“4人”以外の人間がいると何かが変わるのだろう。バンドの終焉はそんなものなのかもしれないけれど。

これも屋上でレコーディングされた1曲だ。これから演奏を始めようとジョージがカウントを取り始めた途端、タバコを吸っていたリンゴがそれを捨てるためにあわてて“Hold it！”（待った）と言っているのがおかしい。演奏後にはジョンが寒い屋上での演奏がきつくて“手がかじかんでコードが押さえられないよ”と言っている。

出だしは「シー・セッド・シー・セッド」を彷彿とさせるようなジョンとジョージのギターのユニゾンにポールのベースがブンブン唸りながら絡む展開で、“おおっ！ これはカッコいい”と思わせる。だが、ジョンが猫なで声で歌い出すと、“おや？ 案外ゆるい曲だぞ”と曲の印象ががらっと変わる。どこを切ってもジョンの曲であるのは間違いないけれど、この曲を聴くと、映画『ヤァ！ ブロード・ストリート』でポールが倉庫でリンゴやデイヴ・エドモンズ[1]やクリス・スペディング[2]らと演奏した「ノー・バリュース」や「悲しきバッド・ボーイ」をなぜか思い出す。

「どうしようもない曲だな」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
『LET IT BE...NAKED』『ANTHOLOGY 3』
オススメのカヴァー
Laibach『Let It Be』（1988）／Screaming Headless Torsos『Live!』（2001）

---

[1] デイヴ・エドモンズ＝68年にラヴ・スカルプチャーを結成。70年にソロ・デビュー。
[2] クリス・スペディング＝69年にデビュー。セッション・ギタリストとして活躍。

186

アイ·ミー·マイン

I Me Mine

Harrison
1970.5.8 (1970.1.3、4.1) [2'25]
「LET IT BE」

70年代に録音されたビートルズの曲は？ 答えはジョージが書いたこのヘヴィ・ワルツである。70年1月3日、スタジオに集まったのは、ジョンを除く3人。映画『レット・イット・ビー』でも観られたように、ギターの細かいフレーズにまで口を出す"オレオレ"なポールに閉口したジョージが、「目の上のたんこぶ」的な兄貴分（？）のジョンも含む2人への当てつけで書いた曲なのに、ポールはよく加わったものだ。

『アンソロジー3』収録のオリジナル・ヴァージョンを聴くと、ジョージがわざとデイヴ・ディー・グループ*のメンバーになぞらえて、仰々しくこう"宣言"してから演奏を始めている——"You all will have read that Dave Dee is no longer with us. But Micky and Tich and I would just like to carry on the good work that's always gone down in number two"（すでに目にされているとおり、デイヴ・ディーはもういません。でもミッキーとティッチと私は、この次になっていた秀作の作業を今後も続ける所存です）。69年9月にメンバーに脱退を伝えたジョン（デイヴ・ディー）以外の3人は、たしかにこの曲のレコーディングに参加しているということだ。

フィル・スペクターは1分34秒しかないそのオリジナル演奏のサビを2度繰り返すように水増しし、『レット・イット・ビー』に収録した。ジョージのソロ・アルバム『オール・シングス・マスト・パス』に入っていても違和感のない曲だ。どうせなら「ワー・ワー」と一緒に聴きたい。

「エゴについての永遠の問題を歌った。
目に入るものは何でも利己心と結びついていることに気がついたんだ」(ジョージ)

その他の主な収録アルバム

「LET IT BE...NAKED」「ANTHOLOGY 3」

おススメのカヴァー

Marc Ford「VA／Songs From The Material World」(2003)／Britt Daniel「VA／George Fest：A Night To Celebrate The Music Of George Harrison」(2016)

---

*デイヴ·ディー·グループ=デイヴ·ディー、ドジー、ビーキー、ミック&ティッチが正式なバンド名。6
年に結成され、65年にデビュー。69年9月にデイヴ·ディーが脱退

187

ディグ・イット

Dig It

Lennon/McCartney
1970.5.8（1969.1.26／1.24※エンディング）〔0'50〕
『LET IT BE』

いきなり細かい話になるけれど、発売当時のイギリス盤の作曲クレジットは"Lennon-McCartney"で、アメリカ盤は"Lennon-McCartney-Harrison-Starkey"。CDは"Lennon-McCartney-Starkey-Harrison"である。ジョンとポールの2人ならわかるが、なぜ4人の共作扱いになっているのだろうか。『レット・イット・ビー』のわずか50秒の演奏を聴くと、"ジョンの独壇場"としか思えないのに。もともと12分25秒ものジャム・セッションにはジョージとポールのアドリブ・ヴォーカルのほかにリンゴの娘ヘザーの声も入っていて、ジョージ・マーティンもマラカスで参加している。そうしたバンド一体の演奏は、映画「レット・イット・ビー」で観られる。

"ゲット・バック・セッション"の膨大な未発表音源の中で真っ先に公表してほしいのが、この曲の完奏版である。ジョンの言葉感覚とポールのアドリブ感覚の鋭さとジョージの両方の拙さ（失礼！）が伝わる最高の演奏だからだ。

しかしフィル・スペクターはアルバムに収録する際に、長尺版の8分52秒から9分41秒の間を抜き取り、そこに入っていたポールのアドリブ・ヴォーカルをすべてカットした。しかも最後はフェイド・アウトし、その部分にセッションの合間にジョンが喋った台詞——"That was 'Can You Dig It ?'by Georgie Wood, and now we'd like to do'Hark The Angels Come'"をかぶせるように編集した。その台詞を次の「レット・イット・ビー」の絶妙な導入部としたのがスペクターのすごいところではあるけれども。

その他の主な収録アルバム
—

オススメのカヴァー
Laibach『Let It Be』(1988)／Beth Orton『VA／Let It Be Revisited』(2010)

188

レット・イット・ビー

Let It Be

Lennon/McCartney
1970.3.6（1969.1.31、4.30）／
1970.5.8（1969.1.31、4.30、1970.1.4）［3'50／4'03］
シングル&「PAST MASTERS」／「LET IT BE」

ビートルズとポールの代表曲。「イエスタデイ」と同じく、夢が元でできた曲である。「ヘイ・ジュード」と同じくピアノの弾き語りによるもので、それぞれプロモーション・フィルムと映画でポールがピアノを弾きながら歌うカメラ・ワークや表情もそっくりだ（監督も同じ）。自分に酔いしれている表情も（失礼！）。

14歳の時に他界した母メアリーの励ましは、解散間際のポールの心に強く残ったのだろう。とはいえ、「恋を抱きしめよう」で“やってみよう。なんとかなるさ”と“積極的楽観主義”の構えだったポールは、この曲では“あるがままに”様子を見ようという“消極的楽観主義”へと変化している。その対象が前者は恋人ジェーンで、後者がビートルズであるという違いはあるけれど。

最後のオリジナル・シングルとして70年3月に発売されたが、「ゲット・バック」と同じくシングルとアルバム『レット・イット・ビー』ではミックスが異なる。大きく異なるのはジョージの間奏のリード・ギターだ。ジョージ・マーティン（現場作業はクリス・トーマス）がプロデュースしたシングルには69年4月30日の演奏が使われ、フィル・スペクターがプロデュースしたアルバムには70年1月4日の演奏が加えられている。両者の違いをすぐに見極めるなら、リンゴのハイハットのエコーが深いのがアルバム・テイクである。シングル・テイクにリンダとメリー・ホプキンのコーラスが入っているのも見逃せない。メリー・ホプキンが参加しているビートルズ・ナンバーがあるなんてね！

「夢で母が“大丈夫”と。楽観主義と希望の象徴のような歌があってよかった」（ポール）

「〈明日に架ける橋〉*からインスピレーションを受けたんじゃない？」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「LET IT BE...NAKED」「ANTHOLOGY 3」

おススメのカヴァー

Aretha Franklin「This Girl's In Love With You」（1970）／Nick Cave「VA／I Am Sam - Original Soundtrack」（2002

---

*〈明日に架ける橋〉＝サイモン&ガーファンクルの代表曲（70年／米英1位

189

マギー・メイ

Maggie Mae

Traditional (Arrange:Lennon/McCartney/Harrison/Starkey)
1970.5.8 (1969.1.24) [0'38]
[LET IT BE]

アルバム『ヘルプ!』の時期にレコーディングされた「ディジー・ミス・リジー」「バッド・ボーイ」以来、久しぶりのカヴァー曲。カヴァーといってもリヴァプールの伝承歌（トラディショナル・ソング）で、"ゲット・バック・セッション"で大量に演奏されたカヴァー曲の断片のひとつである。フィル・スペクターが"グリン・ジョンズ版"の曲順を変え、アルバムのA面最後にそのまま残した。おかげでこうして"213曲"の仲間入りを果たしたが、公表しようという4人の意欲を思うと、「シー・ラヴズ・ユー」と「抱きしめたい」のドイツ語版と同じぐらい存在意義の薄いオフィシャル曲といってもいいだろう。

57年7月6日にジョンとポールがリヴァプールのウールトン教会で出会った時に、クォリーメンのジョンが歌った曲のひとつだったという。ジョンのお気に入りで、79年に自宅のダコタ・ハウスでもアコースティック・ギターを弾きながら歌っていた（『ジョン・レノン・アンソロジー』に収録）。

マギー・メイという娼婦を題材にしたいわゆる春歌で、ジョンのリヴァプール訛りのヴォーカルとそれを太い声で支えるポールのハーモニーを聴くと、2人で歌えば険悪な雰囲気も即座に吹き飛ぶ相性の良さを実感できる。昔から歌い慣れている曲だということもあるけれど、ナーク・ツインズ*1もこんなふうに演奏していたのかと、デビュー前のジョンとポールがアコースティック・ギターを抱えながらエヴァリー・ブラザーズ*2のように歌う姿が目に浮かぶ。

[illegible]

---

*1 ナーク・ツインズ＝60年4月にジョンとポールが2日間名乗ったデュオ。
*2 エヴァリー・ブラザーズ＝56年にデビュー。代表曲は「バイ・バイ・ラヴ」（57年）ほか。

190

アイヴ・ガッタ・フィーリング

I've Got A Feeling

Lennon/McCartney
1970.5.8（1969.1.30）［3'36］
『LET IT BE』

アルバム『レット・イット・ビー』のB面トップを飾るギター・ロック。「ベイビー・ユーアー・ア・リッチ・マン」以来のジョンとポールの合作だ。この時期の2人の共作は意外な気もするが、組み合わせてみたらたまたまうまくいったのだろう。ただし、“ゲット・バック・セッション”の初日（69年1月2日）にはまだ手探り状態で、演奏はぎこちない。ここでも、ジョンが68年秋に書いた「エヴリワン・ハド・ア・ハード・イヤー」ではなく、ポールの曲がタイトルになった。

イントロのギターは「涙の乗車券」風のややもっさりしたフレーズだが、「オー！ダーリン」の前触れとも言えそうなポールの野太い声が聞こえてきてからは、ブルース・ロック調の展開へと変わる。そしてポールがタイトル・フレーズを歌った後に、ジョージがチョーキングしてその音をゆっくり下降させていく。

中盤に出てくるジョンの曲はポールと違って淡々とした無表情な展開だが、2人の声が混ざり合うだけで味わいは格別。これも69年1月30日のアップル屋上で演奏されたものだが、2度演奏されたうちのひとつが使われた。フィル・スペクターの存在をどうしても消したかったポールの願いで制作された（と言っていいかな）『レット・イット・ビー...ネイキッド』（03年）には、もうひとつの未発表の演奏とを組み合わせた新しいヴァージョンが作り出された。ポールの歌いまわしやギターのフレーズやリンゴのドラムなどがところどころ微妙に異なるので、一瞬“おおっ！”となる。

「僕らはまだ一緒に仕事をしていたんだ。お互いの曲を気に入ってなかったら、あんなに簡単に一緒に録音できないよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『LET IT BE...NAKED』『ANTHOLOGY 3』

おススメのカヴァー
Billy Preston『Encouraging Words』(1970)／KGB『KGB』(1976)

191

ワン・アフター・909

One After 909

Lennon/McCartney
1970.5.8（1969.1.30）【2'52】
『LET IT BE』

グリン・ジョンズが編集した2種類の「ゲット・バック」のA面トップはこの曲だった。ジョンが中心になってデビュー前に書いた曲を引っ張り出してきたものだ。ほかにも「トゥー・バッド・アバウト・ソロウズ」や「シンキング・オブ・リンキング」などその手の曲が演奏されたが、そうした古い曲をアルバムの最初に持ってきたのは「ゲット・バック」のコンセプトとしてはわかりやすい。

「消えた恋」のところでも書いたように、63年3月5日の「フロム・ミー・トゥ・ユー」のセッション時にも一度レコーディングされ、その時はジョンが主旋律を歌うもっとストレートなロックンロールになっていた（『アンソロジー1』に収録）。アップル・ビルの屋上で演奏されたこのヴァージョンは、63年版よりもややテンポを落とし、汽笛をもじったギターの音色に導かれた、余裕を感じさせるまったりとした展開となった。アップル・ビル屋上では自作は全部で5曲——「ゲット・バック」「ドント・レット・ミー・ダウン」「アイヴ・ガッタ・フィーリング」が各2テイクと「ワン・アフター・909」「ディグ・ア・ポニー」が各1テイク演奏されたが、バンドのまとまりはこの曲がベスト。ビリー・プレストンのエレキ・ピアノはどの曲でも光っているが、とくにジョージのチョーキングを多用したギターが心地良い。

“9”は9日生まれで9番地に住んだジョンのラッキー・ナンバーで、「レボリューション9」や「#9ドリーム（夢の夢）」（74年）など、ジョンには“9”をタイトルに使った曲がいくつかある。

「17歳の頃に書いた。〈ハロー・リトル・ガール〉*の前後だったな」（ジョン）

「ずっと好きだった曲を再発見した。
ジョンとのブルース調の貨物列車の歌だ」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『LET IT BE...NAKED』『ANTHOLOGY 1』
オススメのカヴァー
Helen Reddy『We'll Sing In The Sunshine』（1978）／Steve Forbert And The Rough Squirrels『Here's Your Pizza』（1997）

---

*〈ハロー・リトル・ガール〉＝ジョンが57年に書いた初の自作曲。『アンソロジー1』に収録。

192

ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード

The Long And Winding Road

Lennon/McCartney
1970.5.8（1969.1.26、1970.4.1）［3'37］
［LET IT BE］

今では「レット・イット・ビー」と並ぶポールのピアノの代表的なバラードとして有名だが、70年代はAMラジオなどで"ポールの隠れた名曲"と紹介されたりしていた。アメリカではシングル・カットされて1位になっていたけれど。

ここで言う"長く、曲がりくねった道"とは何か。"ビートルズの音楽活動"がひとつの解釈だ。「ゲット・バック」や『アビイ・ロード』に収録された「ゴールデン・スランバー」をはじめ、この時期のポールには"家"を題材にした曲が多い。思うにポールは"家"を、ビートルズやジョンとの結びつきの象徴として使ったのではないか。そして「ゲット・バック」では元いた所＝ビートルズに戻ってほしいとジョンに呼び掛けつつ、「トゥ・オブ・アス」ではリンダとの生活を優先すると暗示し、この「ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード」では、バンド活動の終わりを意識し、"解散への覚悟"を心に決める。

諦めの境地に至った人間に、大袈裟な感情は似合わない。フィル・スペクターが無断で加えたオーケストラと女性コーラスにポールが激怒したのはあまりに有名な話（そのわりにはポールはソロで安易なサックスを加えて再演したりしているけれど）。ちなみにスペクターが手を加えた70年4月1日は、この曲と「アクロス・ザ・ユニバース」と「アイ・ミー・マイン」にリンゴが1人でドラムを追加録音した日でもあった。これが"ビートルズ"の最後のセッションとなった。

「レイ・チャールズ*を想定した。辿り着けないドア、行き着けない道を歌った」（ポール）

「ヨーコと僕のことがショックで創造的な作品が次々と生まれた。彼の最後の輝きだ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1967-1970」「THE BEATLES 1」「LET IT BE...NAKED」「ANTHOLOGY 3」

おススメのカヴァー

Nancy Wilson「Now I'm A Woman」（1970）／Yusuf（Cat Stevens）「VA／The Art Of McCartney」（2014）

---

*レイ・チャールズ＝47年に音楽活動を開始。代表曲は「アイヴ・ガット・ア・ウーマン」（55年）、「ホワッド・アイ・セイ」（59年）、「我が心のジョージア」（60年）など。

193

フォー・ユー・ブルー

For You Blue

Harrison
1970.5.8（1969.1.8※イントロ／1.25、1970.1.8）［2'30］
『LET IT BE』

『レット・イット・ビー』に収録されたジョージの2曲目。カントリー・ブルース調のこの曲が、未発表アルバム『ゲット・バック』のB面1曲目の予定だったというのはちょっと意外。ソロ以降の作風の骨格を成すちょっとニヒルな佇まいは“これぞジョージ！”とファンには両手を挙げて受け入れられるとは思うけれども、曲としては地味だ。そこが“very George”な魅力なんだけれども。

曲が始まる前に、ジョンの台詞が入っている。“Queen says no to pot-smoking FBI members”（女王はFBIにマリファナが蔓延していることに対しダメだと言っている）――音量をわざとかなり落としてほとんど聞こえないようにしたのはフィル・スペクターの仕業、いや小技だ。

アルバム『ヘルプ！』収録の「アイ・ニード・ユー」を大人っぽくしたような、ハワイアン調の開放的なサウンドの心地良さは、ジョンが弾いたヘフナーのラップ・スティール・ギターの音色ゆえだろう。ポールのピアノは高音部をミュートさせた不思議な音色で、パーカッションのように響く。ピアノにわざと紙か何かを乗せて妙ちくりんな音響を生み出している。『アンソロジー3』収録ヴァージョンは出だしがポールのピアノから始まる仕上がりで、これよりも背筋が伸びた印象だ。もうひとつこの曲のポイントは、ジョージのヴォーカルが70年1月8日――「アイ・ミー・マイン」よりも後に録り直されたということ。間奏を弾く1年前のジョンの演奏を聴きながら“Go, Johnny, Go”と励ますジョージが最高！

「12小節の原則に則ったシンプルな曲だよ。楽天的なところを除いてね」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム
『LET IT BE NAKED』『ANTHOLOGY 3』
オススメのカヴァー
Morti Beton『VA／Harrisongs2』(2003)／Paul McCartney『VA／Concert For George』(2003)

194

ジョンとヨーコのバラード

The Ballad Of John And Yoko

Lennon/McCartney
1969.5.30（1969.4.14）［2'58］
シングル&「PAST MASTERS」

レコーディングに絞ってみると、69年は67年と同じぐらい面白い。まさに激動。曲がいつどういう形で公表されるのか、その時には皆目見当がつかないという状況なのだ。

この曲はどうか。そもそも69年3月20日に結婚式を挙げたジョンとヨーコの曲を、ビートルズとして、しかもシングルA面で発表するとはどういうことか。演奏もジョンとポールの2人だけ？　だったらジョンとヨーコの『ウェディング・アルバム』に入れちゃえばいいのに——そんな声が聞こえてくる。ではなぜそれが実現したのか？　答えを一言でいうと、ポールはそれでもなおジョンにビートルズをやめてほしくなかったから。もちろんポールがそう言っているわけではないけれど、2月に「アイ・ウォント・ユー」を録音したジョンはヨーコへの想いが募るばかり。焦ったポールの歩み寄りがこの異例のビートルズのシングルA面曲として形になったんだと思う。この後ポールはさらにジョンへの懐柔策を施す。

ジョージはアメリカ旅行中で、リンゴは映画『マジック・クリスチャン』*の撮影中。でも書いた曲をジョンがすぐに録音したいと言うので、ポールと2人でミキシングも含めて69年4月14日の1日ですべてを仕上げたという。そんな状況にもかかわらず、これが素晴らしい仕上がりなのだ。まるで初期を彷彿させるような正のパワーに満ちあふれている。ポールのドラムを含めてすべてがいい。タイムマシーンがあったら最も覗き見したいのがこのセッションである。

「“ジョニー・B・ペイパーバック・ライター”だな」（ジョン）

「“結婚式の曲を”とジョンがね。“イエス・キリスト！　誰か怒るぜ”って」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「THE BEATLES 1967-1970」「THE BEATLES 1」「HEY JUDE」（US）

おススメのカヴァー

Teenage Fanclub「Deep Fried Fanclub」（1995）／The Persuasions「The Persuasions Sing The Beatles」（2002）

---

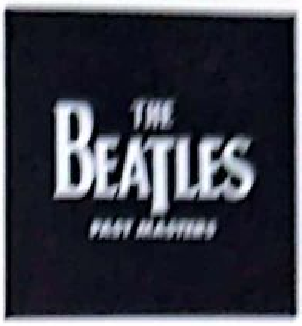
*「マジック・クリスチャン」＝69年2月3日から5月2日に撮影されたイギリス映画（12月12日公開）。主題歌はバッドフィンガーの「カム・アンド・ゲット・イット」（ポール作）。

195

オールド・ブラウン・シュー

Old Brown Shoe

Harrison
1969.5.30（1969.4.16、4.18）［3'17］
シングル&『PAST MASTERS』



20枚目のオリジナル・シングル「ジョンとヨーコのバラード」のB面には、「ジ・インナー・ライト」以来となるジョージの曲が収められた。これも曲調は70年代前半のジョージに通じるようなリズミカルな展開が印象的だが、とくに耳に残るのがメロディアスなベースだ。こんな速弾き、誰もがポールだと思うだろう。でもジョージは87年などのインタビューで、ベースは自分が弾いたと言っていて、「…バンガロウ・ビル」もベースは自分だったと、そちらはちょっとあやふやに答えている。

ジョージが派手なベースを弾いた「愛に気づいて」（82年）を初めて聴いた時にこの曲が頭に浮かんだが、A面の「ジョンとヨーコのバラード」はジョンとポールの録音曲で、B面の「オールド・ブラウン・シュー」は実はジョージとリンゴの録音曲——つまりシングル両面合わせて「ビートルズ」、そんな妄想を楽しんだこともある。ところが、「アビイ・ロード」の50周年記念盤に収録された別テイク（テイク2）のクレジットを見て驚いた。ジョージがギターとオルガンで、ジョンがピアノで、ポールがドラムスとベースとあるのだ。ドラムはポールにしては上手すぎるようにも思うが、ポールのドラムの腕前を知ることのできる曲はほとんどないし、スネアとハイハットの叩き方や音色もリンゴとは異なる。そうしたら、その後、"ゲット・バック・セッション"でジョージがこの曲をピアノで初披露した際に、ブラシを使ってドラムを叩くポールの写真が出てきた。ということで、オフィシャル・テイクも、ピアノはジョージでドラムはポールとみて間違いないだろう。

「コード進行はピアノでやった。それから反意語を書き留めていったんだ」（ジョージ）

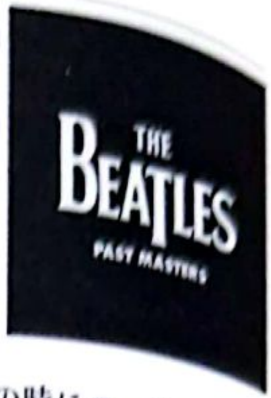
その他の収録アルバム
『THE BEATLES 1967-1970』『HEY JUDE』（US）　『ANTHOLOGY 3』
おすすめカヴァー
Leslie West『VA／Songs From The Material World』（2003）／Gary Brooker『VA／Concert For George』（2003）

196

ユー・ノウ・マイ・ネーム

You Know My Name (Look Up The Number)

Lennon/McCartney
1970.3.6（1967.5.17、6.7、6.8、1969.4.30）[4'19]
シングル&「PAST MASTERS」



最初に紹介したデビュー・シングル「ラヴ・ミー・ドゥ」の冒頭に“一言でいって、ヘンな曲、である。”と書いた。それはそのままオリジナル・ラスト・シングル「レット・イット・ビー」のB面に収録されたこの“冗談音楽”にも当てはまる。「レット・イット・ビー」が“ビートルズ”だと思っている一般的な人に向けてのまさに“裏の顔”である。個人的にも最も好きな曲のひとつだ。

“213曲”に入るまでにも最も“ヘンな”経緯をたどっている。これもジョンが電話帳の惹句をヒントにタイトル・フレーズを繰り返す歌詞を書いたものだったが、まず『マジカル・ミステリー・ツアー』制作時期の67年5月から6月にかけて断片的に全5パートのリズム・トラックだけが録られ、それが6分8秒の1曲となった。その時にローリング・ストーンズのブライアン・ジョーンズが、なぜかサックスで参加している。そして2年後の69年4月30日に未発表のインストにジョンとポールがヴォーカルと手拍子、マル・エヴァンスがシャベルで砂利を掬う音を加えた。ここで重要なのは、わざわざこの曲を引っ張り出して「ジョンとヨーコのバラード」の2週間後にジョンとポールが2人でヴォーカルを加えたことだ。その間にジョンが「アイ・ウォント・ユー」の続きの録音を行なっているのも見逃せない話。

しかしオクラ入りとなり、ジョンは「コールド・ターキー」に続くプラスティック・オノ・バンドのサード・シングルとして出そうとしたが却下されたため、“213曲”に収まったというわけだ。

「ポールとコメディ・レコードに仕上げた。
フォー・トップス*風になるはずだったんだけどね」(ジョン)

「ヨーコに宛てたシグナルだったのかな。
ビートルズで最も好きな曲かもしれないね」(ポール)

その他の主な収録アルバム

「ANTHOLOGY 2」

おススメのカヴァー

Gerard St Paul 『VA／La France Et Les Beatles Vol.2』(2006)／The Revolver Road Band 『A Salute To The Beatles』(2009)

---

*フォー・トップス＝53年に結成され、56年にデビュー。代表曲は「リーチ・アウト・アイル・ビー・ゼア」(66年)ほか。

197

カム・トゥゲザー

Come Together

Lennon-McCartney
1969.9.26（1969.7.21、7.22、7.23、7.25、7.29、7.30）〔4'17〕
『ABBEY ROAD』&シングル

最後のスタジオ録音アルバム『アビイ・ロード』のA面トップを飾るジョンの傑作。ジョンの曲が最初にくるのは、65年の『ヘルプ！』以来のこと。しかもアルバムから「サムシング」との両A面シングルとしても発売された。ポールが譲歩したように見えるのは、先に触れた理由もあると思うけれど、アルバムの片面はジョンが主導で、もう片面はポールが主導という取り決めが前もってあったからかもしれない。

ファンキーなサウンドだけを聴いていると、ジョンのカッコ良さが際立つ曲という印象だけで終わってしまうかもしれない。でもこの曲の肝は、「アイ・アム・ザ・ウォルラス」と並ぶ奇妙奇天烈な歌詞だ。これぞジョン節。“ウォルラス”や“ヨーコ”も歌詞に紛れ込ませ、“レノンセンス”を駆使して聴き手をケムにまいた一種のドラッグ・ソングとみなすこともできそうだ。選挙のキャンペーン曲を依頼されたものの、選挙運動のスローガン “Come together, join the party” を盛り込んだ曲がうまく書けずに代わりにこれができた、という経緯もすごい。

演奏は「セクシー・セディ」と並ぶ一体感のあるサウンドで、ポールのベースは舌を巻く凄さだが、リンゴのドラムも素晴らしい。そして個人的に長年未解決の難問もひとつ。ハーモニーはポールかジョンか？　ジョージ・マーティンはポールと言っているが、ポールは“やったけどうまくハモれなかった”のか、“やろうとしたけどハモれずに断念したのか”。ポールがジョンを真似て歌った、というのが、現時点での見解。

「ファンキーでブルージー。買いだね」（ジョン）

「〈ユー・キャント・キャッチ・ミー〉*に似ていると指摘したらジョンもわかっていたよ」（ポール）

その他の主な収録アルバム
『THE BEATLES 1967-1970』『THE BEATLES 1』『ANTHOLOGY 3』『LOVE』

オススメのカヴァー
Aerosmith『VA／Sgt Pepper's Lonely Hearts Club Band - Sound Track』(1978)／The Smokin' Mojo Filters『Come Together』(EP) (1995)

---

*〈ユー・キャント・キャッチ・ミー〉＝チャック・ベリーの56年の曲。
[illegible]映画『ロック・ロック・ロック』の挿入歌。ジョンが『ロックン・ロール』でカヴァー。

198

サムシング

Something

Harrison
1969.9.26（1969.5.2、5.5、7.11、7.16、8.15）[illegible]
『ABBEY ROAD』&シングル

初めてシングルA面となったジョージの曲。後期の代表曲は「ホワイル・マイ・ギター…」だけだったが、いきなり視界が開けた印象だ。「イエスタデイ」に匹敵するバラードの傑作で、カヴァーもその次に多い。アップルからデビューしたジェイムス・テイラー*のアルバム収録曲に「サムシング・イン・ザ・ウェイ・シー・ムーヴス」があり、その曲名はそのまま歌詞にも盛り込まれているが、タイトルは一言「サムシング」となった。

この曲も、よく言われるのはポールのメロディアスなベースだ。ベースだけ取り出しても曲になってしまうぐらいのスゴ技。微妙に異なるフレーズや間の取り方などを含めて感覚一発で決めたかのような、常人には想像もつかない演奏はさすが天才肌。サビでのリンゴの、ハイハットとタムを絡ませた演奏も、ポールのベースと同じく表情豊か。長年愛用してきたラディック・ブルーノートを、『アビイ・ロード』からラディック・ビッグビートに変えたのも大きいけれど、リンゴも"4人でいい音を出すほうが重要だった"と言うように、有終の美を飾るために集まっただけある。そう、『アビイ・ロード』はポールがジョンの機嫌を損ねずに地ならしをしたうえでジョージ・マーティンにもう一度プロデュースを依頼し、"最後のアルバム"という意識の元に4人が集まって制作されたものだった。最初の2曲は流れも完璧。

パティへの想いを歌ったと言われるが、パティに向けたものではないという説もある。ジョージもケムに巻くのが得意だったのだろうか。

「レイ・チャールズが歌うのを念頭に置いて書いた。過去最高のメロディだと思う」（ジョージ）

「ジョージのベスト・ソングだと思う」（ポール）

[illegible]
E BEATLES 1967-1970』『THE BEATLES 1』『ANTHOLOGY 3』『LOVE』
[illegible]
Sinatra「Something」(Single)(1970)／Elvis Presley『Aloha From Hawaii Via Satellite』(1973)

*ジェイムス・テイラー＝66年にダニー・クーチマーらとフライング・マシーンを結成。ダニー、ピーター・アッシャーを介して68年4月にアップルと契約。12月にソロ・デビュー。

199

マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー

Maxwell's Silver Hammer

Lennon/McCartney
1969.9.26（1969.7.9、7.10、7.11、8.6）［3'26］
『ABBEY ROAD』

3曲目以降にポールの曲が初めて出てくるのは『ビートルズ・フォー・セール』以来のこと。ポールが68年の中頃に書き、『ザ・ビートルズ』の候補になり、69年の“ゲット・バック・セッション”でも演奏されたがまとまらなかった曲だ。

“「ハニー・パイ」のようなノヴェルティ・ソング”（ジョージ）はポールの独壇場だが、発言にもあるとおり、メンバーの受けがかなり悪い。解散間際だったにせよ、散々な言われようだが、それもそのはず、自分の曲になると俄然はりきっちゃうポールはこの曲だけで『アビイ・ロード』セッションの3日も“独り占め”にし、かなりの顰蹙を買ったようだ。他のメンバーにとっては「オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ」の悪夢の再現だったに違いない。

ポールのモーグ・シンセサイザーが耳に新鮮だが、ほのぼのとした曲調とは打って変わって、歌詞はまるでその後の解散訴訟を予期していたかのような“意味深”な内容である。“すべてが順調に進んでいる時にマックスウェルがぶち壊すんだ”（ポール）と、順風満帆だったビートルズの活動を暗示しているかのような発言もあるけれど、登場人物4人の名前をこんなふうに置き換えると、それはそれで面白い。マックスウェルはマッカートニー（ポール）、「ゲット・バック」のジョ・ジョと同じくここに出てくるジョーンはジョン、ローズはジョージ、そしてヴァレリーはリッチー（リンゴ）であると。そして、殺人の罪で被告席に立たされたマックスウェルは、ローズとヴァレリーに“彼は無実よ”と言わせているのだ。

「僕らに100万回も繰り返させた。シングルになんて最初からムリな話だ」（ジョン）

「マックスウェルはみんなを殺し続けるわけだから、かなり病的だよ」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム
『ANTHOLOGY 3』
おススメのカヴァー
Tommy Wallach『Tommy Wallach』(2005)／Let's Wrestle『VA／Mojo Presents Abbey Road Now!』(2009)

200

オー！ダーリン

Oh! Darling

Lennon/McCartney
1969.9.26（1969.4.20、4.26、7.23、8.8、8.11）［3'26］
「ABBEY ROAD」

「アイム・ダウン」の69年版と言ってしまってもいいだろう。ポールのシャウトが炸裂するオールド・スタイルのロックンロールだ。「ホワイ・ドント・ウィ・ドゥ・イット・イン・ザ・ロード」と同じく自分で歌いたがったジョンも、"傑作だ"と認めている。ポールがソロ以降のライヴで歌っていないのは、最もキーの高い自作曲だからかもしれない。

バンド解散に危機感を覚えたポールは、「ジョンとヨーコのバラード」をジョンと2人でやった直後の4月20日、この新曲に再び手をつけ始める。5月5日以降の『アビイ・ロード』のセッションにはすべてジョージ・マーティンが立ち会っているので、ポールがマーティンに新作のプロデュースを依頼したのは遅くとも4月後半だろう。ということは、アルバム収録を念頭に置いてポールはこの曲の作業を続けていたはずだ。"ゲット・バック・セッション"ではジョンと仲良く歌っていたが（『アンソロジー3』収録）、ポールは自分1人で歌いきることにした。その際、1日1回、この曲に合う太い声にしようと録音直前の1週間スタジオで歌い続けた。"5年前なら難なくやれた"とポール。

表面的には自分の元を去った恋人に"見捨てないでほしい"と訴えかけた内容だが、"ダーリン"をジョンに読み換えると、現実味が増す。"もう用がないと言われた時は落ち込んで死にそうだった"なんて、ポールがジョンに、ほんとにそう言ったかのようだ。

50周年記念盤に収録されたラフな別テイク（テイク4）のベースは、ジョンとジョージのどちらだろうか。

「毎朝早めにスタジオに入り、歌い続けた。ステージのような声にしたくてね」（ポール）

「僕ならもっとうまく歌えたよ。彼にセンスがあったらきっと僕に歌わせたさ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム

「ANTHOLOGY 3」

オススメのカヴァー

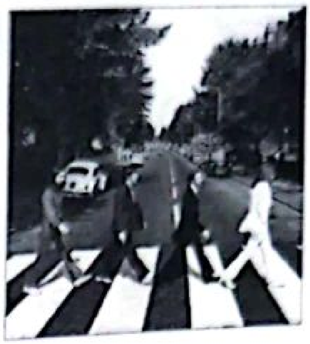
George Benson「The Other Side Of Abbey Road」（1970）／Graham Bonnet「The Day I Went Mad」（2001）

201

オクトパス・ガーデン

Octopus's Garden

Starkey
1969.9.26（1969.4.26、4.29、7.17、7.18）［2'49］
『ABBEY ROAD』



「イエロー・サブマリン」の二番煎じと言ってはリンゴが可哀想か。「ドント・パス・ミーバイ」に続くリンゴの2番目の自作曲である。“ピース&ラヴ”なリンゴらしいほのぼのとした内容は「イエロー・サブマリン」によく似ている。アルバム『ザ・ビートルズ』のセッション中に一時脱退したリンゴがイタリアのサルデーニャ島に家族旅行をした際、現地の知人の借りたボートの船長がタコ料理を出してくれて、タコにまつわる話をあれこれしてくれたそうだ。その時に聞いた話を元にして書いたという。曲作りも、何がきっかけになるかわからないから面白い。

ジョージによると、リンゴはピアノもギターも3コードしか知らなかったそうで、「ドント・パス・ミー・バイ」のところで書いたように、映画『レット・イット・ビー』では、ジョージが曲作りを手伝っている場面が観られる。“We would be warm below the storm”（嵐が来たって暖かい）の歌詞を褒めたジョージは、演奏面でもイントロや間奏をはじめ、印象的なギターでリンゴを援助している。コップの水をストローで吹いて出した泡みたいな効果音も最高だ。ジョンは耳に残るギターを弾いてはいるものの、コーラスには参加せず。自分以外の曲はやる気がなくなってしまったのだろう。

「イエロー・サブマリン」はアニメ映画になったが、「オクトパス・ガーデン」はリンゴが監修した子ども向けのCD付き絵本として2013年に刊行された。

「海に潜って、逃げ出したい気分だったからね」（リンゴ）

「魅力的な曲。
リンゴは自分では意識せずに宇宙的な広がりのある歌を書いた」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム
『THE BEATLES 1967-1970』『ANTHOLOGY 3』『LOVE』

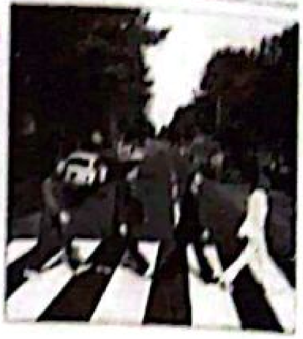
オススメのカヴァー
Roy Zimmerman『VA／In My Room』(2010)／Doris Day『Music, Movies & Memories』(2014)

202

アイ・ウォント・ユー

I Want You (She's So Heavy)

Lennon/McCartney
1969.9.26（1969.2.22、4.18、4.20、8.8、8.11）［744］
『ABBEY ROAD』



「ヤー・ブルース」と並ぶジョンの真骨頂ともいえるヘヴィ・ワルツ。ヨーコのことを歌っているのと、たぶん暑苦しいという理由で敬遠するファンは多いと思うが、個人的にはいつもベスト10入りする好きな曲。そして「ジョンとヨーコのバラード」がジョンの言う"ジョニー・B・ペイパーバック・ライター"だとしたら、こちらは"ジョニー・B・ヨーコ"となるだろう。ジョンはそのくらいヨーコと一心同体になりたかったに違いない。でなければこんなに簡潔な言葉だけで想いを直接伝えようとは思わなかったはずだから。曲名以外、歌詞には"（I want you） so bad"と"It's driving me mad"しか出てこない。ここまで歌詞のない曲を書きたくなったのはヨーコの影響だとジョンは言っている。中盤の"イェェェェェェェェ！"の叫びがスゴイ。唐突なエンディングも。ベースだけのセパレート音源を聴くと、"テケテケ"ベースも含めてあんなに超絶なベースを実はポールはかなり適当に弾いているのがわかる。それもスゴイ。

これもジョンのどっちつかずの性格が反映された1曲だった。2月に録られた35テイクの3つを繋げたものをベースに、前半の4分37秒まではジョンとジョージのギターなど（4月）と"She's so heavy"のコーラス（8月11日）を加えたテイクで、後半の3分7秒はジョンのモーグとリンゴのドラム（8月8日）を加えたテイクの合わせ技だ。ジョンがそう決めた8月20日は、ビートルズがスタジオに顔を揃えた最後の日となった。

「〈ウォルラス〉や〈エリナー・リグビー〉のような歌詞中心の曲よりいい。僕にとっては進歩だから」（ジョン）

「古いブルースのリフだけど、見事にジョンの曲になっている」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム
『LOVE』

オススメのカヴァー
Alvin Lee『Nineteen Ninety Four』（1994）／Robyn Hitchcock『V/A／Mojo Presents Abbey Road Now!』（2009）

203

ヒア・カムズ・ザ・サン

Here Comes The Sun

Harrison
1969.9.26（1969.7.7、7.8、7.16、8.6、8.11、8.15、8.19）〔3'05〕
『ABBEY ROAD』

「アイ・ウォント・ユー」がモーグ・シンセによる“白い煙幕”（ホワイト・ノイズ）で視界が徐々に遮られ、唐突に真っ暗になった後はどうなるのかと思ったら、晴れ間が覗いてきた。この曲は、そんな冬から春へと季節が移り変わる中での、ポカポカ陽気の気分の良さを歌ったアコースティックな佳作だ。ジョージの晴れやかな気分の元には、アップルの重役として会議に出て、実業家のように書類にあれこれサインをする憂鬱な思いから解放された喜びがあった。アップルの会議をサボってエリック・クラプトンの家に向かい、アコースティック・ギターを借りて庭を散歩している時にできたというのだから、顔を見るのも嫌だったというアップルの会計士に感謝しないといけないかもしれない。

「サムシング」に続き、ジョージの代表曲が『アビイ・ロード』に2曲も収録されているとなると、“ビートルズはジョージを成長させるために存在したバンド”だという本秀康さん独特の見立ては、まさに至言。

聴くたびに思うが、サビの“Sun, sun, sun, here it comes”は、なんでこんなにしつこいのか？　なかなか陽が昇らなかったのか、それとも出てきた喜びをじっくり味わいたかったのか。そこに絡まるジョージのシンセサイザーとリンゴのドラムが絶妙。リンゴも会心の演奏だと言っているので、ベスト・ドラミングは“雨”と“太陽”ということになる。ポールのリズミカルなベースも印象的で、リンゴのドラムとの相性も抜群にいい。ということで、この曲にもジョンはいない。

「バーズの〈リムニーのベル〉*風で、
リフは〈恋をするなら〉にちょっと似ている」（ジョージ）

「バディ・ホリーを思い起こさせる。ジョージの成長を示しているな」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
『THE BEATLES 1967-1970』『LOVE』
おススメのカヴァー
Nina Simone『Here Comes The Sun』（1971）／森高千里『TAIYO』（1996）

---

*〈リムニーのベル〉＝『ミスター・タンブリン・マン』（65年6月）収録曲。
オリジナルは、アイドリス・デイヴィスの詩（38年）にピート・シーガーが曲を付けて58年に発表。

204

ビコーズ

Because

Lennon/McCartney
1969.9.26 (1969.8.1、8.4、8.5) [2'45]
「ABBEY ROAD」

ジョンがいくらやる気がなかったといっても、『レット・イット・ビー』よりも『アビイ・ロード』に収録された曲のほうが圧倒的にいい。「ジス・ボーイ」「イエス・イット・イズ」に続く、ジョン、ポール、ジョージの美しい3声が久しぶりに味わえるバラードの佳作だ。しかも入念にリハーサルを行ない、3声を3回重ねて計9声のハーモニーとして仕上げた。

イントロから鳴り響く印象的な音は、ジョージ・マーティンによるエレクトリック・ハープシコードで、そこにジョンのアルペジオによるギターや、ホルンの音を模したモーグ・シンセサイザーがかぶさってくる。ビートルズがモーグを使ったのはこれが初めてだった（8月4日）。持ち込んだのはもちろんジョージだ。実験音楽作品を発表するために設立されたアップルの関連レーベル、ザップルからジョージはソロ・アルバム『電子音楽の世界』を69年5月に発表したが、“タンス”と呼ばれたまだバカでかい初期型シンセに他のメンバーも興味津々。シタール以上に扱いやすい楽器だったので、『アビイ・ロード』ではジョンもポールも“演奏”している。

ジョンとポールの発言にあるとおり、歌詞もメロディもヨーコの存在があったからこそ生まれたもので、ソロ・アルバム『ジョンの魂』収録の「ラヴ」にも通じるような平易なのに含蓄のある言いまわしが素晴らしい。「アクロス・ザ・ユニバース」と同じぐらいに、とは言わないまでも、もっと広く知られていい曲だと思うのに、なぜか地味な印象である。

「ヨーコがピアノで弾くベートーヴェンの〈月光〉*1を聴いて、
逆に弾いてもらったんだ」（ジョン）

「風・空・大地が循環しているなんて、
ヨーコの『グレープフルーツ』*2そのままだ」（ポール）

その他の主な収録アルバム

「ANTHOLOGY 3」「LOVE」

おススメのカヴァー

Elliott Smith 「VA／American Beauty-Soundtrack」(1999)／Gerry Rafferty 「Life Goes On」(2009)

---

*1〈月光〉＝ベートーヴェンの「ピアノ・ソナタ第14番」（1801年作曲）の通称。
*2「グレープフルーツ」＝オノ・ヨーコが64年に出版した初の著作集。

235

ユー・ネヴァー・ギヴ・ミー・ユア・マネー

You Never Give Me Your Money

Lennon/McCartney
1969.9.26（1969.5.6、7.1、7.11、7.15、7.30、7.31、8.5）〔4'02〕
『ABBEY ROAD』

いよいよこの曲から「ジ・エンド」まで、当初"The Long One/Huge Medley"と呼ばれていた"アビイ・ロード・メドレー"の始まりだ（50周年記念盤に「ザ・ロング・ワン」として収録）。この1曲だけですでに組曲仕立てである。プログレッシヴ・ロック好きに勧めたいビートルズ・ナンバーの筆頭といえるだろう。「ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン」のポール版といってもいいかもしれない。

曲名は説明的で長ったらしいが、これは、"金をよこさないお前"をあからさまに非難するためにポールはわざとそうしたに違いない。"お前"の正体は、ポールが発言で明かしているとおり。68年に自分たちの会社アップルを設立したけれど、マネージャー不在では素人にビジネスは無理。そこに、よりによってジョンの紹介で入ってきたローリング・ストーンズのマネージャーだった"お前"が、ジョンの信頼を後ろ盾にアップルの"リストラ"を敢行。顔見知りが減り、ジョージの嫌いな会計士が幅を利かせるようになったというわけだ。ピーター・アッシャーもアップルを去ったが、ジェイムス・テイラーとともにアメリカに向かい、その後、華々しく活躍することになる。人生いろいろだ。

この曲はそうしたアップルの激動の内幕を綴ったものだ。とくに"I never give you my number/I only give you my situation"——"曲（電話）はやらないけど、現状（居場所）は教えてやるよ"という歌詞は強烈だ。「マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー」もこの曲も、曲調とは裏腹に、ジョンの曲のような棘がある。

「アラン・クラインの態度をけなした。全く信用できない人間についての曲だ」（ポール）

「僕らのことだ。自分たちが稼いだ金を実際には手にできないように思えた」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

—

オススメのカヴァー

Sarah Vaughan『Songs Of The Beatles』（1981）／Glenn Tilbrook with Nine Below Zero『VA／Mojo Presents Abbey Road Now!』(2009)

206

サン・キング

Sun King

Lennon/McCartney
1969.9.26（1969.7.24、7.25、7.29）〔2'26〕
「ABBEY ROAD」

ジョンが書いた、捉えどころのない摩訶不思議な曲。前曲とのメドレーにするために、ポールがSEを作って強引にくっつけている。ビートルズには珍しく「フライング」のように妙な浮遊感の漂った曲調で、ゆえにカルト的な人気がある。個人的には「ロング・ロング・ロング」のジョン版の趣がある癒しの1曲。ビートルズとしては異色の曲だが、『アンソロジー2』に収録された「アイム・オンリー・スリーピング」のラウンジ風のインストゥルメンタルが最も近いかもしれない。

ジョージによると、フリートウッド・マック*1のトロピカル風のインストゥルメンタル「アルバトロス」を聴いて、リヴァーブを効かせたギター・インストをちょっとやってみようと思ったようだ。仮タイトルは「ロス・パラノイアス」。「アイ・ウィル」のレコーディングの合間にポールがアドリブで披露したオリジナルと同じ曲名だが、こちらはスペイン民謡から取ったという。だからなのか、後半はスペイン語とイタリア語とポルトガル語のように聞こえるジョンならではの造語を取り入れて、白昼夢のようなヘンテコなイメージをさらに広げている。

特徴のなさそうな曲ではあるけれど、コーラスは侮れない。シルク・ドゥ・ソレイユ*2とのコラボレーション・アルバム『LOVE』では、オリジナルを逆回転で収録し、幻想的な雰囲気を出した。ご丁寧に曲名まで欧文を逆さまに"Gnik Nus"（グニック・ナス）にしたのが笑える。邦題を「グンキ・ンサ」にしたのもしかり（P.264-273参照）。

「歌い始めの短いインスト部は〈サン・リフ〉っていうんだ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
『LOVE』

おススメのカヴァー
Gomez『VA／Mojo Presents Abbey Road Now!』（2009）／Rock4『Abbey Road』（2017）

---

*1フリートウッド・マック＝67年に結成され、68年にデビュー。
*2シルク・ドゥ・ソレイユ＝サーカスやミュージカルを元にしたカナダのエンターテインメント集団

207

ミーン・ミスター・マスタード

Mean Mr. Mustard

Lennon/McCartney
1969.9.26（1969.7.24、7.25、7.29）［1'06］
「ABBEY ROAD」

「サン・キング」とこの「ミーン・ミスター・マスタード」が“Here Comes The Sun-King”の仮タイトルでメドレーで演奏されていたということ――これもマーク・ルイソンのレコーディング・セッション本で知った新事実だった。ジョージを茶化したような仮題のいい加減さもオカシイけれど、それだけでなく、「ポリシーン・パン」以下も2曲ずつメドレーで録音されていたとは！

ジョンが68年にインドで書いた曲で、69年1月の“ゲット・バック・セッション”でも演奏されていた。2月から断続的に新曲のレコーディング（“ゲット・バック・セッション”パート2）は行なわれていたが、『アビイ・ロード』のために、という目的が決まってからは1ヵ月半しかかけられていない。そのため、“ゲット・バック・セッション”でも演奏されていた曲が半数以上『アビイ・ロード』に収録されることになった。ソロ以降に発表された曲も多い。

公園で寝泊まりする年老いた“マスタード”氏を描写したこの曲には、妹の“パン”も登場する。“ゲット・バック・セッション”では妹は“シャーリー”という名前だったが、メドレーに合わせて“改名”している。具体的な人名を出したジョンの曲は、ジョンに言わせるとたいてい“ゴミ箱行き”である。また、ジョンがドラッグとは関係ないと否定する曲は、むしろドラッグ・ソングであることが多い。この曲も無関係だとは思えない。当初は次に“別の曲”が挟まっていたというのも驚きの事実だった。それについては後で紹介します。

「ケチな男が5ポンド紙幣を隠していた記事を読んでね。
コカインとは関係ないよ」（ジョン）

「とてもジョンらしいね。好きだよ。でも何を歌ったのかはわからない」（ポール）

その他の主な収録アルバム
「ANTHOLOGY 3」
オススメのカヴァー
The Punkles「For Sale」(2006)／Cornershop「VA／Mojo Presents Abbey Road Now!」(2009)

208

ポリシーン・パン

Polythene Pam

Lennon/McCartney
1969.9.26（1969.7.25、7.28、7.30）［1'17］
『ABBEY ROAD』

これもジョンがインドで書いた、人名をタイトルにした曲。ジョンによると、実話を元にしたという。まとめると、こんな話だ――。63年のツアーの合間に"イギリスのギンズバーグ"とジョンの言う新進作家ロイストン・エリス（60年6月にビートルズと知り合ったらしい）のアパートに、ジョンのデビュー前からの追っかけだったパット（ポリエチレンをよく噛んでいたので"ポリシーン・パット"と呼ばれていた）と一緒に行った。そこでジョンとロイストンと彼女のステファニーの3人でポリ袋にくるまってベッドに入ったそうだ。…何をやってんだか、という話だけれど、ヨーコとの"バッグ・イン"などでジョンはその時のことを思い出したりしたのだろうか。

それはさておき、"マスタード"の妹"パン"をジョンは革長靴とキルトを纏ったリヴァプールの売春婦に見立てたが、いかんせん未完成の1曲。それをメドレーとして組み込んだアイディアはすごいが、イメージ不足は否めない。初期に戻ったかのような歯切れの良いバンド・サウンドが聴けるので、1曲として完成させてアルバムのA面に収録してほしかった。そのくらいB面のジョンの曲は投げやりな印象だ。この曲は好きだけれども。

曲調は「ノット・フェイド・アウェイ」*1や「サマー・タイム・ブルース」*2風だとジョンは言っていたが、サウンドの切れ味以上に耳に残るのはジョンのリヴァプール訛りと、曲の合間や最後のジョンのアドリブの喋りだ。ソロ・アルバム「ロックン・ロール」のジョンを思わせるカッコ良さである。

「きついリヴァプール訛りを使った。
リヴァプールの売春婦という設定だったから」（ジョン）

「ジョンのアパートで女の子がポリエチレンを身に纏ったって。
異常な光景だな」（ポール）

その他の主な収録アルバム

『ANTHOLOGY 3』

オススメのカヴァー

Roy Wood『VA／All This And World War II - Original Soundtrack』（1976）／The Bee Gees『VA／Sgt.Pepper's Lonely Hearts Club Band - Sound Track』（1978）

---

*1ノット・フェイド・アウェイ＝クリケッツの「オー・ボーイ」（57年10月）の[illegible]
*2サマー・タイム・ブルース＝エディ・コクランの58年のシングル曲[illegible]

209

シー・ケイム・イン・スルー・ザ・バスルーム・ウィンドー

She Came In Through The Bathroom Window

Lennon/McCartney
1969.9.26（1969.7.25、7.28、7.30）［1'52］
「ABBEY ROAD」

“シー”は誰を指すのか？　諸説ある。曲が書かれたのは、アップル設立の記者会見でジョンと一緒にニューヨークに行った68年5月にポールがリンダと再会した後のことなので、ジョンの言うとおりのリンダ説。ポールがリンダと結婚した69年3月以降に、ポールの自宅に行ったら文字どおり浴室の窓が開いていたので、そこから侵入したという追っかけファン説。もうひとつは、「ゲット・バック」でジョンが思い込んだヨーコ説。冒頭の“育ちの良さに守られて／窓から入ってきた”という歌詞などは、“裕福な家庭に育ったヨーコがスタジオにやってきた”という比喩に思えなくもない。

この曲も“ゲット・バック・セッション”ですでにピアノの弾き語りによるスロー・ヴァージョンで披露されていたが（『アンソロジー3』に収録）、「ポリシーン・パン」とのメドレーでレコーディングされたスピード感あふれる演奏は、当初の仮タイトルのようにジョンの曲とポールの曲を合わせた“Polythene Pam/She Came In Through The Bathroom Window”の1曲として考えると、良さがさらに際立つ。“アビイ・ロード・メドレー”の1曲としてつい見てしまいがちだが、とくに中盤のポールのベースがすごすぎる。そのベースだけ聴いていると、初ソロ・アルバム『マッカートニー』（70年）の質感がすでにあるような錯覚にとらわれる。ちなみにポールは、この曲をジョー・コッカーに先にレコーディングさせようと思っていたそうだ。

「窓から入ってきたのは、たぶんリンダだろう」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
「ANTHOLOGY 3」
オススメのカヴァー
Joe Cocker「Joe Cocker!」(1969)／Youngbloods「High On A Ridge Top」(1972)

210

ゴールデン・スランバー

Golden Slumbers

Lennon/McCartney
1969.9.26（1969.7.2、7.3、7.4、7.30、7.31、8.15）［1'32］
「ABBEY ROAD」

『アビイ・ロード』の最後を飾るメドレー。ポールの2013年以降の日本公演でも最後の最後に演奏されたが、イントロのピアノ2音の連なりだけで“終わりの始まり”をすぐに実感させられてしまうのは、この曲にそれだけの重みがあるからだろう。これも当初は「キャリー・ザット・ウェイト」と2曲合わせて“Golden Slumbers”のタイトルで演奏されていた。

この曲は、リヴァプールの父の家にポールが遊びに行った時、ルース（腹違いの妹）の童謡集に16世紀に書かれたトーマス・デッカー*の“Golden Slumbers”というトラディショナル・ソングがあるのを見つけ、気に入ってそれをヒントに書いたもの。サビの部分にその歌詞が踏襲されているが、そこにはないオリジナルの歌詞に、ポールの心情が綴られている。そこで歌われるのは「ゲット・バック」の続編といっていい内容だ。“かつて家へと続く道があった”――過去形にしているのは、ジョンにはビートルズを続けていく気持ちがすでにないことを悟ったポールの想いの反映だと読み取ることができる。そしてサビのタイトル・フレーズでポールは、「オー！ダーリン」を超えるほど情感たっぷりのヴォーカルを聴かせる。ビートルズを眠りに就かせる子守歌であるかのように（子守唄にしては声が大きいけれども）。

ジョージ・マーティンがアレンジしたオーケストラも重厚なアレンジで応えている。この曲にさえ参加しなかったジョンに、ポールのメッセージはどのように届いたのだろうか。

「ポールがストリングスを重ねた。まじめなバッキングがほしかったんだろう」（ジョン）

「とてもメロディックなポールの曲。いいね」（ジョージ）

その他の主な収録アルバム

―

おススメのカヴァー

Jackson Browne & Jennifer Warnes「VA／Disney：For Our Children」（1991）／Ben Folds「VA／I Am Sam・Original Soundtrack」（2002）

---

*トーマス・デッカー＝16世紀後半から17世紀にかけて活躍したイギリスの劇作家。〈Golden Slumbers〉は1603年に喜劇「ペイシェント・グリッシル」用に書いた詩。

211

キャリー・ザット・ウェイト

Carry That Weight

Lennon/McCartney
1969.9.26（1969.7.2、7.3、7.4、7.30、7.31、8.15）［1'35］
「ABBEY ROAD」

「ゴールデン・スランバー」の最後のピアノが終わると、リンゴのドラムに導かれていきなりタイトル・フレーズが歌われる。これもまた重いメッセージだ。重荷を背負えと言うんだから。でも、「キャリー・ザット・ウェイト」の“ザット”は何だろう。

“アップルはすべてがおかしくなる一方だった。重荷を背負い続けたんだよ、延々に”とポールが言っているように、この曲を作った時は、アップルの財政などの失敗が“重荷”だったはずだ。でも、ジョンとの関係を含めて解散へと徐々に向かっていくその後のビートルズの状況を踏まえてみると、この重荷は“元ビートルズ”という足枷ではないかという気もしてくる。

曲の中盤に「ユー・ネヴァー・ギヴ・ミー・ユア・マネー」の一節を、歌詞を変えて挟み込むあたりがポールの優れたセンス。「ピカソの遺言」（73年）などでも見せた、別の曲を間に潜り込ませる技だ。ここでも“ユー”は、アラン・クラインのことだろう。タイトル・フレーズにまた戻る時のとくにホルンの響きは、70年代以降にも増えるジョージ・マーティンならではのオーケストラ・アレンジだ。

この曲にもジョンは参加していないので、コーラスは3人。“〈アクト・ナチュラリー〉風の曲”だとポールが言うように、最後のスタジオ・アルバムじゃなかったらリンゴに歌わせていたかもしれない。実際リンゴのヴォーカル曲だと間違えられることがあるのは、コーラスでリンゴの太い声がよく目立つから。

「〈アクト・ナチュラリー〉風の曲。核となる1行が何度も登場するんだ」（ポール）

「ポールがピリピリしていた頃の曲だ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
―

おススメのカヴァー
Carmen McRae「Just A Little Lovin'」（1970）／Phil Collins「George Martin／In My Life」（1998）

212

ジ・エンド

The End

Lennon/McCartney
1969.9.26（1969.7.23、8.5、8.7、8.8、8.15、8.18）［2'05］
「ABBEY ROAD」

ついにここまできた。

発売こそ『レット・イット・ビー』が最後になったけれど、なんとかジョンを繋ぎ留め、4人の最後のアルバムだと意識しながら制作した『アビイ・ロード』の最後を「ジ・エンド」という曲名で締め括るなんて、まるで最初から仕組まれていたかのようだ。ポールはそういうふうにしようと考えていたんだろうけれど。今はこれが最後のアルバムだということはみんな知っているが、現役世代のビートルズ・ファンは、この後に出た『レット・イット・ビー』のタイトル曲を鎮魂歌のように聴いたのだと思う。

最後はやはり強い。長いドラム・ソロをやるドラマーを嫌っていたリンゴにドラム・ソロを叩かせ、やる気のなかったジョンにギター・ソロを弾かせてしまったのだから。サウンドも歌われている内容も、まさに絶品。リンゴのその初のドラム・ソロからポール、ジョージ、ジョンの順で3回ずつ交互に弾くギター・バトル、そしてピアノに導かれてポールが最後のメッセージ――"結局、君が得る愛は与える愛に等しい"――を歌い、デビューから解散まで"ボーイズ"を見守ってきたプロデューサーのジョージ・マーティンによるオーケストラで大団円を迎える。"ビートルズ物語"は最後の最後まで劇的だ。

アルバムの最後は、こうして4人の顔が均等に浮かび上がる。いや、やっぱりポールがちょっと目立つか。「愛こそはすべて」のメッセージをより簡潔に詩的にまとめたポール。"ビートルズの最後の曲"にジョンも最大限の賛辞を贈った。

「シェイクスピアを真似て、意味のある2フレーズで締めくくりたかった」（ポール）

「とても普遍的で哲学的な詩。ポールはやればできるのさ」（ジョン）

その他の主な収録アルバム
「ANTHOLOGY 3」
おススメのカヴァー
Phil Collins「George Martin／In My Life」（1998）／Dread Zeppelin「The Fun Sessions」（1996）

213

ハー・マジェスティ

Her Majesty

Lennon/McCartney
1969.9.26（1969.7.2）［0'23］
『ABBEY ROAD』

普通は「ジ・エンド」でジ・エンド。でも、最後の最後まで、ビートルズは「ビートルズ」だった。

もともと「ミーン・ミスター・マスタード」と「ポリシーン・パン」の間に入っていてメドレーの一角をなしていた「ハー・マジェスティ」だったが、曲の流れが悪いからと外して「ミーン・ミスター・マスタード」と「ポリシーン・パン」を直接繋げてみたら、こりゃいい感じだと。それで、外された「ハー・マジェスティ」を、エンジニアのジョン・カーランダーがテープのおしまいに、そのまま入れると最後の曲だと間違えられてしまう可能性があるから20秒ぐらいの空白時間を作って置いといた。そして最終確認の前にプレイバックしてみたら、それを聴いたポールが、その空白時間も含めて面白いじゃないかと。

その偶発性が何を引き起こしたか。イントロの"ジャーン"の響きは、本来は普通に終わるはずだった「ミーン・ミスター・マスタード」のエンディングだが、それがまるで「ジ・エンド」で有終の美を飾った後にポールが1人アコースティック・ギターを抱えてひょっこりやってくる合図のようになった。そしてポールがアンコールに応えるかのように爪弾きながら歌う。しかも口から出る言葉は、ワインをたらふく飲まなきゃ、あの娘（女王陛下）に大好きだなんて言えないよ、というあまりに"ビートルズ"的なフレーズだ。それもエンジニアがテープを切ったままの状態で収録されているから、最後の1音がない尻切れトンボ状態で唐突に終わっちゃうのだ。最高の幕引きだと思う。

「不遜でありながら君主制主義の歌っていうのがおかしいよね。
でも、かなりの皮肉だよ。女王に捧げるラヴ・ソングなんだから」（ポール）

その他の主な収録アルバム

—

オススメのカヴァー

Tok Tok Tok『50 Ways To Leave Your Lover』（1999）／The Low Anthem『VA／Mojo Presents Abbey Road Now!』（2009）

213をさらに楽しむ❹

ソロでの演奏曲

ジョン・レノン／12曲

I Saw Her Standing There★／Money／Matchbox☆／Honey Don't☆／Dizzy Miss Lizzy／Lucy In The Sky With Diamonds★／Yer Blues／Revolution／Get Back☆／I've Got A Feeling☆／Maggie Mae☆☆／Come Together

★は"Elton John featuring Reggae guitars of Dr. Winston O'Boggie"および"The Elton John Band featuring John Lennon and the Muscle Shoals Horns"名義のスタジオ＆ライヴ音源
☆はスタジオ音源／☆☆は自宅録音

ポール・マッカートニー／87曲

Love Me Do／P.S. Love Me Do ☆／Please Please Me／I Saw Her Standing There／From Me To You／I'll Get You／All My Loving／Till There Was You／I Wanna Be Your Man／Money／Can't Buy Me Love／A Hard Day's Night／And I Love Her／Things We Said Today／Long Tall Sally／Matchbox／She's A Woman／I'll Follow The Sun／Kansas City - Hey, Hey, Hey, Hey!／Eight Days A Week／Honey Don't／Help!／I'm Down／The Night Before／Another Girl／I've Just Seen A Face／Yesterday☆☆／Day Tripper／We Can Work It Out／Drive My Car／You Won't See Me／The Word／Michelle／I'm Looking Through You／Paperback Writer／Eleanor Rigby☆☆／Here, There And Everywhere☆☆／Yellow Submarine／Good Day Sunshine☆☆／For No One☆☆／Got To Get You Into My Life／Strawberry Fields Forever／Penny Lane／Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band／With A Little Help From My Friends／Lucy In The Sky With Diamonds／Getting Better／Fixing A Hole／She's Leaving Home／Being For The Benefit Of Mr. Kite!／When I'm Sixty-Four＊／Lovely Rita／Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band (Reprise)／A Day In The Life／All You Need Is Love／All Together Now／Hello Goodbye／Magical Mystery Tour／Your Mother Should Know／The Fool On The Hill／Lady Madonna／Hey Jude／Revolution／Back In The U.S.S.R.／Ob-La-Di, Ob-La-Da／Blackbird／Why Don't We Do It In The Road?／I Will／Birthday／Mother Nature's Son／Helter Skelter／Get Back／Two Of Us／Let It Be／Maggie Mae／I've Got A Feeling／One After 909／The Long And Winding Road☆☆／For You Blue／Come Together★／Something／You Never Give Me Your Money／She Came In Through The Bathroom Window／Golden Slumbers／Carry That Weight／The End／Her Majesty

☆は「Love Me Do」と「P.S. I Love You」をメドレーにしたスタジオ＆ライヴ音源
☆☆はスタジオ＆ライヴ音源／★は"The Smokin' Mojo Filters"名義のスタジオ音源
＊はファンのヴォーカルとポールのベースのみのライヴ音源

ジョージ・ハリスン／12曲

Roll Over Beethoven／Everybody's Trying To Be My Baby★／In My Life／If I Needed Someone／Taxman／I Want To Tell You／While My Guitar Gently Weeps／Piggies／For You Blue／Old Brown Shoe／Something／Here Comes The Sun

★は"Carl Perkins And Friends"名義のスタジオ・ライヴ音源

リンゴ・スター／12曲

ove Me Do☆／Boys／I Wanna Be Your Man／I Call Your Name☆☆／Matchbox★／Honey on't／Act Naturally★★／What Goes On／Yellow Submarine／With A Little Help From My iends／Don't Pass Me By☆／Octopus's Garden☆

はスタジオ＆ライヴ音源／☆☆はスタジオ音源／★はライヴ音源および"Carl Perkins And Friends"名
のスタジオ・ライヴ音源／★★はライヴ音源および"Buck Owens & Ringo Starr"名義のスタジオ音源

印はライヴ演奏曲／ラジオ出演、プライヴェートなイヴェントなどでの演奏は除く

準オリジナル全74曲

1958-1995

214

ザットル・ビー・ザ・デイ

That'll Be The Day

J.Allison/B.Holly/N.Petty
1995.11.20（1958.7.14）［2'07］
［ANTHOLOGY 1］

最古のオフィシャル音源。ビートルズの前身クォリーメンが58年7月に録音した初の自主制作盤で、バディ・ホリー＆ザ・クリケッツの57年のヒット曲を早速取り上げたもの。ジョン（17歳）がヴォーカル、ポール（16歳）がハーモニー、ジョージ（15歳）がコーラスを担当。ジョン・ロウ（ピアノ）とコリン・ハントン（ドラムス）を加えた5人編成での演奏だが、"ファブ・スリー"の原型がすでに出来上がっている。

215

イン・スパイト・オブ・オール・ザ・デインジャー

In Spite Of All The Danger

McCartney/Harrison
1995.11.20（1958.7.14）［2'44］
［ANTHOLOGY 1］

同じくクォリーメンの自主制作盤のカップリング曲。こちらはポールが14歳の時に書いたオリジナル曲で、ギター・フレーズをジョージが手掛けたことで2人の唯一の共作扱いとなったカントリー風の曲。なのにリード・ヴォーカルをジョンが担当しているのは、リーダーだから、だろう。ハーモニーはポールでコーラスはジョージ。ポールは2014年のツアーで初披露し、2017年と18年の日本公演でも演奏した。

216

カイエンヌ

Cayenne

McCartney
1995.11.20（1960.4）［1'13］
［ANTHOLOGY 1］

クォリーメン時代、リヴァプールのポールの自宅で行なった練習曲のひとつ。演奏がどうのこうのというよりも、これがポール自作のインストゥルメンタル曲で、スチュアート・サトクリフがベースを弾いているという歴史的価値こそ貴重。ちなみにこの時期にポールが作ったインスト曲に、後に他人に提供した「キャッツウォーク」や、最初のソロ・アルバムに収録された「ホット・アズ・サン」などがある。

217

ハレルヤ, アイ・ラヴ・ハー・ソー

Hallelujah, I Love Her So

R.Charles
1995.11.20 (1960.7) [1'12]
[ANTHOLOGY 1]

再びポールの自宅に集まってのセッション。56年にレイ・チャールズが発表した曲だが、ここでは60年2月にヒットしたエディ・コクラン版をお手本に、ポールが歌っている。メンバーはジョン、ポール、ジョージ、スチュの4人。60年から62年までのステージでの演奏曲でもあった。『アンソロジー』の映像版では、この時のセッションから「アイル・フォロー・ザ・サン」や「ワン・アフター・909」なども聴ける。

218

ユール・ビー・マイン

You'll Be Mine

McCartney/Lennon
1995.11.20 (1960.7) [1'38]
[ANTHOLOGY 1]

これもポール宅でのセッションより。リード・ヴォーカルをポール、サビの部分のセリフとバック・ヴォーカルをジョンが担当した2人の共作曲。実質的にはポールの作品で、クレジットもポールの名前が先にある。ポールのほうが曲作りが早いし曲も多かったことが、デビュー以前の音源を聴くとわかる。ジョンとポールの掛け合いは、ラスト・シングル「ユー・ノウ・マイ・ネーム」や「テディ・ボーイ」に通じる趣。

219

マイ・ボニー

My Bonnie

C.T.Prat-Traditional.arranged by T.Sheridan
1995.11.20 (1961.6.22、6.23) [2'41]
[ANTHOLOGY 1]

ビートルズ初のオフィシャル・レコーディング曲。61年4月1日から7月1日にかけて2度目のハンブルク・ツアーを行なった際、当時地元で人気のあったイギリス出身のトニー・シェリダンのバックでレコーディングしたもので、名義はビート・ブラザーズ。ドラムはピート・ベストだった。トニーのヴォーカルよりもポールのバック・ヴォーカルについ耳がいってしまうのは、リンゴが歌う「ボーイズ」と同じ効用？

220

クライ・フォー・ア・シャドウ

Cry For A Shadow

Harrison/Lennon
1995.11.20（1961.6.22、6.23）［2'22］
「ANTHOLOGY 1」

同じくトニー・シェリダンとのセッションより。こちらはジョージとジョンの共作という、唯一の顔合わせによるインスト曲（録音時の曲名は“Beatle Bop”だったが、著作権管理時に変更）。なぜインストかというと、当時人気のあったシャドウズ（クリフ・リチャードのバック・バンド）を茶化した曲だから。でも、ギターのチープな音色は茶化したものじゃないはず。インストなのに、ポールのシャウトが随所に登場。

221

エイント・シー・スウィート

Ain't She Sweet

M.Ager/J.Yellen
1995.11.20／1996.10.28（1961.6.24／1969.7.24）［2'12／2'06］
「ANTHOLOGY 1」／「ANTHOLOGY 3」

トニー・シェリダンとのセッションでは、バック・バンドとして起用されたにもかかわらず、“ビートルズだけ”の曲も収録された。曲が足りなかったのだろうか。ジーン・ヴィンセントの曲をジョンのリード・ヴォーカルでアップ・テンポに改変。声だけで聴き手の耳をそばだてる魅力がすでに顕在化している。69年の『アビイ・ロード』のセッションでもラフに再演されたが、ジョンの声の変わりようがすごかった！

222

ライク・ドリーマーズ・ドゥ

Like Dreamers Do

Lennon/McCartney
1995.11.20（1962.1.1）［2'35］
「ANTHOLOGY 1」

62年1月1日のデッカのオーディションで演奏されたポールの自作曲。ライヴでも57年から演奏されていた。『ハード・デイズ・ナイト』あたりに入っていてもいいような軽快な曲だが、実際その時期（64年6月）に、アップルジャックスの2枚目のシングルとして提供された（英17位を記録）。その時のプロデューサーが、デッカのオーディションでビートルズを落としたマイク・スミスだったというのも何かの縁。

223

ハロー・リトル・ガール

Hello Little Girl

Lennon/McCartney
1995.11.20（1962.1.1）［1'39］
「ANTHOLOGY 1」

ジョンが57年に1曲として完成させた最初期の曲。バディ・ホリーの影響を受けたこの曲も、デッカのオーディションで演奏された。ジョンとポールが2人で歌い、サビはジョンのリードにポールとジョージのバック・ヴォーカルという構成。ジェリー&ザ・ペースメイカーズに提供されたが、最終的にはフォーモストのデビュー曲として63年8月に発表された。これ、ビートルズの曲でもよかったのでは？

224

サーチン

Searchin'

J.Leiber/M.Stoller
1995.11.20（1962.1.1）［2'58］
「ANTHOLOGY 1」

デッカのオーディションでビートルズはオリジナル曲3曲を含む15曲を演奏した（ドラムはピート・ベスト）。これはコースターズの57年のシングル曲で、リード・ヴォーカルをポール、ハーモニーをジョンが担当。82年1月30日にBBCのラジオ番組に出演したポールは、無人島に持っていく8曲に「スウィート・リトル・シックスティーン」、ジョンの「ビューティフル・ボーイ」などとともにこの曲を挙げている。

225

スリー・クール・キャッツ

Three Cool Cats

J.Leiber/M.Stoller
1995.11.20（1962.1.1）［2'24］
「ANTHOLOGY 1」

デッカのオーディションではジョージの活躍も目立つ。というよりも、BBCラジオ出演を含めて初期にはジョージのヴォーカル曲が多い。「サーチン」と同じくリーバー＝ストーラー作のユーモラスな曲で、オリジナルはコースターズの59年のシングルB面曲だった。ジョージのリード・ヴォーカルとの対比も見事なポールとジョンのバック・ヴォーカルを聴くと、コミック・バンド路線も狙っていたのか？と思わせる。

226

ザ・シーク・オブ・アラビ

The Sheik Of Araby

H.B.Smith/F.Wheeler/T.Snyder
1995.11.20（1962.1.1）［1'41］
『ANTHOLOGY 1』

これもデッカ・オーディションでのジョージのリード・ヴォーカル曲。『アンソロジー1』収録の「ムーンライト・ベイ」と同じく映画『ティン・パン・アレイ』（40年）の挿入歌だが、ビートルズはジョー・ブラウンとファッツ・ドミノを参考にカヴァーした。これもユーモラスな曲で、とくにジョンの合いの手が最高だ。デビュー前後のジョージは、若さあふれる愛嬌たっぷりの溌剌とした歌声を聴かせていた。

227

ベサメ・ムーチョ

Besame Mucho

C.Velazquez/S.Skylar
1995.11.20（1962.6.6）［2'35］
『ANTHOLOGY 1』

62年6月6日、テストも兼ねて行なわれたEMIでの初レコーディング曲。プロデューサー、ジョージ・マーティンとの初顔合わせともなったセッションで、ほかに「ラヴ・ミー・ドゥ」「P.S.アイ・ラヴ・ユー」「アスク・ミー・ホワイ」も演奏された。ドラムはこの2ヵ月半後に抜けてしまう（ああ！）ピート・ベスト。オリジナルは43年のジミー・ドーシーだが、60年のコースターズのヴァージョンを参考にしている。

228

ハウ・ドゥ・ユー・ドゥ・イット

How Do You Do It

M.Murray
1995.11.20（1962.9.4）［1'57］
『ANTHOLOGY 1』

デビュー・シングルのレコーディングは、リンゴ・スター加入後の最初のセッションともなった。ジョージ・マーティンが用意していた「他人の曲」がこれ。もともとミッチ・マレーがアダム・フェイス用に書いた曲だったという。“オリジナル曲で勝負したい”という彼らの強気な思いが叶い、同じ日に録音された「ラヴ・ミー・ドゥ」でデビューしたわけだが、10人中9人はこっちを選ぶのでは？

229

キープ·ユア·ハンズ·オフ·マイ·ベイビー

Keep Your Hands Off My Baby

G.Goffin/C.King
1994.11.30（1963.1.22）〔2'29〕
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』

63年と64年の213曲以外の準オフィシャル音源には、BBCラジオ出演時に演奏された曲が多い。これはリトル・エヴァの62年のシングル曲（英30位・米12位）。「プリーズ・プリーズ・ミー」（63年）セッションの20日前にジョンのヴォーカル曲として収録されたが、「プリーズ…」のアウトテイクという噂も70年代には流れた。同じくゴフィン＝キング作の「チェインズ」と並びアルバムの候補曲として挙がっていたのかも。

230

ビューティフル・ドリーマー

Beautiful Dreamer

S.Foster - J.Keller/G.Goffin
2013.11.11（1963.1.22）〔1'46〕
『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

19世紀半ばにアメリカの作曲家スティーヴン・フォスターが書いた曲。それをジェリー・ゴフィンとジャック・ケラーが現代風に味付けし、トニー・オーランドが62年12月にシングルとして発表。その数週間後に早速カヴァーした。リード・ヴォーカルはポール。というより、ポールしかこの手の曲を歌う（歌える）人はいない。「キープ・ユア・ハンズ・オフ・マイ・ベイビー」と同じく《Saturday Club》用に収録。

231

アイム·トーキング·アバウト·ユー

I'm Talking About You

C.Berry
2013.11.11（1963.3.16）〔1'52〕
『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

61年2月にチャック・ベリーが発表した曲（半年後にシングルとしても発売された）。ジョンのチャック・ベリー好きは有名で、BBCラジオ用に9曲も取り上げている。BBCの《Saturday Club》用の演奏だが、ジョンは風邪をひいていたため、事前には録音されず、スタジオで生演奏されている。粘っこいR&B調のサウンドがイギリスのビート・バンドにも人気だが、やっぱりジョンのヴォーカルが最もドスが効いている。

232

アイル・ビー・オン・マイ・ウェイ

I'll Be On My Way

Lennon/McCartney
1994.11.30 (1963.4.4) [1'57]
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』

BBCでは"213曲"に入らなかったオリジナル曲も演奏された。ポールが15～16歳の頃に書いた曲で、リード・ヴォーカルはジョンとポール。この2週間前にビリー・J・クレイマー・ウィズ・ザ・ダコタスが録音し、デビュー・シングル「ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット」のB面収録曲として63年4月26日に発売された。「アイル・フォロー・ザ・サン」によく似ている。放送は《Side By Side》。

233

アイ・ゴット・トゥ・ファインド・マイ・ベイビー

I Got To Find My Baby

C.Berry
1994.11.30 (1963.6.1) [1'55]
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』

イントロのジョンの"アー"の一声だけでヤラレちゃう、チャック・ベリーのカヴァー曲（60年）。『ウィズ・ザ・ビートルズ』のR&B色の強いカヴァー曲は、BBCラジオ出演時にあれこれ演奏してみて収録曲を絞っていったのではないかと思える。ということで、63年のBBCのカヴァー曲は、『ウィズ…』に収録されなかった曲として聴くのがいいかも。バンド名を番組名に冠したBBC《Pop Go The Beatles》での放送。

234

ヤング・ブラッド

Youngblood

J.Leiber/M.Stoller/D.Pomus
1994.11.30 (1963.6.1) [1'56]
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』

デッカ・オーディションでも演奏されたコースターズのシングル「サーチン」のB面収録曲（57年）。BBCラジオ音源の魅力のひとつは、ジョージのヴォーカル曲の多さだ。自作曲の少ないジョージは、デビュー前のライヴ同様、ジョンとポールに負けず劣らずイキのいい歌声を聴かせていた。これもそんな1曲で、ジョンとポールのコミカルなバック・ヴォーカルも魅力的だ。同じく《Pop Go The Beatles》より。

235

シュアー・トゥ・フォール

Sure To Fall (In Love With You)

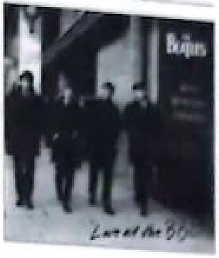
C.Perkins/Q.Claunch/W.Cantrell
1994.11.30／2013.11.11（1963.6.1／1963.9.3）［2'07／2'20］
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』／『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

ジョージが敬愛するカール・パーキンスの57年のシングル曲だが、これはポールが歌い、ジョンがハーモニーを付けている。カントリー調の素朴でまろやかな展開は『ビートルズ・フォー・セール』のカヴァー曲と並べても遜色がない。80年にはポールの援助を受けてリンゴも録音した（『バラの香りを』に収録）。《Pop Go The Beatles》での2ヴァージョンがオフィシャル音源となった。

236

サム・アザー・ガイ

Some Other Guy



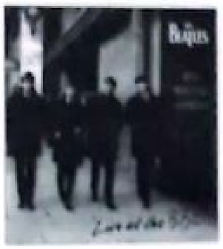
J.Leiber/M.Stoller/R.Barrett
1994.11.30（1963.6.19）［2'00］
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』

リッチー・バレットがジェリー・リーバー＆マイク・ストーラーとの共作で62年5月に発表した曲。リンゴ加入直後の62年8月22日にキャヴァーン・クラブで演奏された映像が『アンソロジー』などで観られる。BBCの《Easy Beat》で放送されたが、観客入りのスタジオ・ライヴは臨場感たっぷりで、キャヴァーンの映像に匹敵するすごい熱気だ。ジョンとポールの息の合った歌声は、初期ビートルズ・サウンドの象徴。

237

ザッツ・オール・ライト

That's Alright (Mama)



A.Crudup
1994.11.30（1963.7.2）［2'53］
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』

これがエルヴィス・プレスリーのデビュー・シングル曲（54年7月）。エディ・コクランの「トゥエンティ・フライト・ロック」と並ぶポールのお気に入りで、ソロ以降も『CHOBA B CCCP』（88年）や『GOOD ROCKIN' TONIGHT : THE LEGACY OF SUN RECORDS』（01年）などで再録音している。鼻歌でふんふんと歌って気持ちよくなれるような曲はポール向きなのかも。以後《Pop Go The Beatles》の音源が続く。

238

キャロル

Carol

C.Berry
1994.11.30（1963.7.2）［2'34］
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』

チャック・ベリーのカヴァー（58年／米18位）で、ビートルズは60年から62年までステージでも演奏していた。疾走感あふれるサウンドに乗って歯切れの良いジョンのヴォーカルが冴えわたる名カヴァーだ。63年7月2日収録というと、シングル「シー・ラヴズ・ユー」のレコーディング翌日。「ザッツ・オール・ライト」以降、『ウィズ・ザ・ビートルズ』制作時期と重なる63年9月までのBBC音源の充実ぶりがすごい。

239

ソルジャー・オブ・ラヴ

Soldier Of Love

B.Cason/T.Moon
1994.11.30（1963.7.2）［1'59］
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』

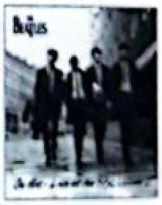
ジョンお気に入りのアーサー・アレキサンダー（「アンナ」ほか）が62年6月に発表した曲。ジョンのヴォーカル＋ポールとジョージの掛け合いヴォーカルという初期を象徴するコーラス・ワークが堪能できる。これもBBCでの名演のひとつ。というよりも、『ウィズ・ザ・ビートルズ』にぜひ収録してほしかった！　とくに64年までのカヴァー曲でのジョンのヴォーカルの説得力や表現力の豊かさといったら…。

240

レンド・ミー・ユア・コーム

Lend Me Your Comb

K.Twomey/F.Wise/B.Weisman
1995.11.20／2013.11.11（1963.7.2）［1'49］
『ANTHOLOGY 1』『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』



『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』が出た時に、なんでこんなにいい曲が入らなかったのかと疑問に思っていたら、『アンソロジー1』用にわざわざ取って置いたことが1年後に判明。その後BBC音源集の続編にも収録された。カール・パーキンスのシングル「グラッド・オール・オーヴァー」のB面収録曲だが、ジョンとジョージのハーモニーとポールのリード・ヴォーカル交互に出てくるという、類のない構成が斬新。

241

クララベラ

Clarabella

F.J.Pingatore
1994.11.30（1963.7.2）［2'39］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

「ロング・トール・サリー」をより泥臭く粘っこくした、リトル・リチャード直系のポールのシャウトにジョンがハーモニカで応酬するパワフルな曲。オリジナルはジョディマーズが56年11月に発表したシングル曲。この曲が演奏された63年7月16日は、ビートルズがBBCに出演した中でも最高にエネルギッシュな1日となった。『ウィズ・ザ・ビートルズ』制作開始直前にして、すでにエンジン全開だ。

242

スウィート・リトル・シックスティーン

Sweet Little Sixteen

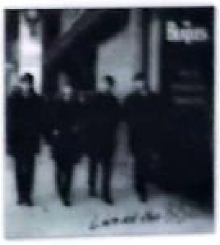
C.Berry
1994.11.30（1963.7.10）［2'20］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

タイムマシーンがあったらビートルズのどのライヴを見たいか？ と訊かれたら、まずはデビュー前の荒々しいステージを挙げたい。そしてパッと思い浮かぶのが、たとえばチャック・ベリーが58年1月に発表したこの曲（米2位・英16位）で強烈なシャウトを聴かせるジョンの勇姿だ。ジョンは『ロックン・ロール』（75年）でも取り上げたが、きびきびとしたビートルズ版のほうが"16歳"への想いが圧倒的に伝わる。

243

ナッシン・シェイキン

Nothin' Shakin'



E.Fontaine /C.Calacrai/D.Lampert/J.Cleverland
1994.11.30（1963.7.10）［2'59］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

歌手兼俳優のエディ・フォンテインが58年7月に発表した曲で、オリジナル・タイトルは"Nothin' Shakin'（But The Leaves On The Trees）"（米64位）。『ウィズ・ザ・ビートルズ』の収録曲争いでは、この曲の20日後に録音された「ロール・オーバー・ベートーヴェン」に負けてしまったのかもしれないが、同じくジョージのヴォーカルとギターが存分に楽しめる軽快な曲だ。リンゴのドラムとの相性もばっちり！

244

ロンサム・ティアーズ・イン・マイ・アイズ

Lonesome Tears In My Eyes

J. Burnette/D.Burnette/P.Burlison/A.Mortimer
1994.11.30（1963.7.10）［2'36］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

「ユア・シックスティーン」（リンゴが73年にカヴァー）を60年にヒットさせたジョニー・バーネット・トリオが56年に発表した曲。「ジョンとヨーコのバラード」の元ネタとも言われたが、たしかに曲調は似ている。これもBBCでの名演のひとつ。切れ味鋭い演奏とジョンの溌剌とした歌声が耳に心地良い。ブートレグを聴き慣れた耳には、イントロのギターのカッティングに“間”ができたのが気になったものだが。

245

ソー・ハウ・カム

So How Come (No One Loves Me)

F.Bryant/B.Bryant
1994.11.30（1963.7.10）［1'53］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

エヴァリー・ブラザーズの『A DATE WITH THE EVERLY BROTHERS』（60年10月）収録曲。珍しくジョンとジョージのツイン・リード・ヴォーカルが聴ける。それもまたBBC音源ならではの楽しさだ。『ウィズ・ザ・ビートルズ』にも2人のツイン・ヴォーカル曲がある。ということで、これは「ユー・リアリー・ゴッタ・ホールド・オン・ミー」に負けた曲、ということになる。「ユー・リアリー…」が良すぎた！

246

メンフィス，テネシー

Memphis, Tennessee

C.Berry
1994.11.30／2013.11.11（1963.7.10／1963.9.7）［2'12／2'15］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」／「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

これもチャック・ベリーの曲（59年7月／英6位）だが、ジョンが歌うチャックのほかの曲に比べると、地を這うようなもったりとした曲調は、聴きなれるとクセになる不思議な魅力がある。その意味では「ラヴ・ミー・ドゥ」に近い印象。ジョンはデッカ・オーディションをはじめデビュー前から頻繁に歌っていた。BBCの《Pop Go The Beatles》と《Saturday Club》の2ヴァージョンが公表された。

247

ザ・ヒッピー・ヒッピー・シェイク

The Hippy Hippy Shake

C.Romero
1994.11.30／2013.11.11（1963.7.10／1963.9.3）［1'48／1'46］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」／「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

「ウー！ マイ・ソウル」や「クララベラ」と並ぶポールのシャウトが炸裂するBBCの代表的音源。63年9月収録版でのジョージの攻撃的なギターも最高だ。オリジナルはチャン・ロメロ（59年7月）で、ビートルズを参考にしたスウィンギング・ブルー・ジーンズのカヴァーが63年に英2位に。2008年のリヴァプール公演でポールが最初にこの曲を披露した時には、頭の中が真っ白になった。まさかこれをやるなんて！

248

アイム・ゴナ・シット・ライト・ダウン・アンド・クライ

I'm Gonna Sit Right Down And Cry (Over You)

J.Thomas/H.Biggs
1994.11.30（1963.7.16）［2'01］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

いきなりイントロからリンゴのドラム・ロールが入る珍しい展開で、ひたすら疾走していく軽快なロックンロールは、まさにライヴ映えする1曲。実際、60年から62年までのステージでのレパートリーでもあった。作者の1人ハワード・ビッグスが53年に発表した曲だが、ビートルズは56年のエルヴィス・プレスリーのヴァージョンを参考にしている。ジョンとポールの軽快なヴォーカルが心地良い。

249

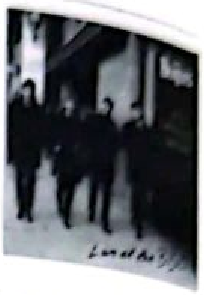
クライング,ウェイティング,ホーピング

Crying, Waiting, Hoping

B.Holly
1994.11.30（1963.7.16）［2'09］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

この曲のように、コーラスの妙を味わえるのもBBC音源の魅力だ。59年2月にバディ・ホリーが飛行機事故死する直前にデモ録音された曲が死後に追加録音され、「ペギー・スー・ガット・マリード」のB面収録曲として公表された（58年7月）。ジョージのヴォーカルをジョンとポールが後追いコーラスで援助している。初期のアルバムにはジョージのヴォーカル曲が3曲ぐらいあってもよかったかも。

250



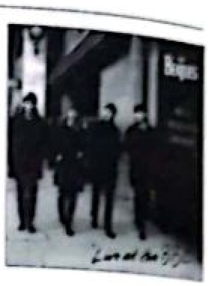
トゥ・ノウ・ハー・イズ・トゥ・ラヴ・ハー

To Know Her Is To Love Her

P.Spector
1994.11.30（1963.7.16）［2'49］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

これもBBCの名演のひとつ。ジョンの陰りと艶のあるヴォーカルは、「ガール」に通じる味わい。一声聴いただけでしびれてしまう。ポールとジョージの、「ベイビー・イッツ・ユー」に通じるバック・ヴォーカルも素晴らしい。フィル・スペクターが学生時代に結成したテディ・ベアーズの全米No.1ヒット（58年9月）で、ジョンは73年にスペクターのプロデュースで再演した（『メンローヴ・アヴェニュー』に収録）。

251



ザ・ハネムーン・ソング

The Honeymoon Song

M.Theodorakis/W.Sansom
1994.11.30（1963.7.16）［1'39］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

映画『Honeymoon』（59年）主題歌。と書いただけでポール好みと即座に判断できそう。「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」（57年／ミュージカル『ザ・ミュージック・マン』）や「フォーリング・イン・ラヴ・アゲイン」（30年／映画『嘆きの天使』）などと同じく、ジョンは絶対歌わない（歌えない）ポップ・ソングだが、聴きやすさは格別。ポールはメリー・ホプキンにも歌わせた（69年の『ポスト・カード』に収録）。

252

アイ・ゴット・ア・ウーマン

I Got A Woman

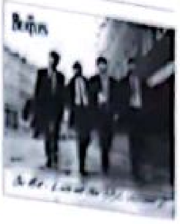
R.Chales
1994.11.30／2013.11.11（1963.7.16／1964.3.31）［2'48／2'35］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」「ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2」

受けた影響が大きいわりには、エルヴィス・プレスリーの曲のカヴァーは不思議と少ない。しかし、プレスリーがカヴァーした曲を参考にすることは案外多い。この曲も、54年のレイ・チャールズの曲を56年にカヴァーしたプレスリーのヴァージョンがお手本。BBCでは63年と64年の2ヴァージョンあり、64年版はむしろレイ・チャールズ版に近い仕上がりだ。どちらもジョンのドスの効いた歌声が魅力のすべて。

253

グラッド・オール・オーヴァー

Glad All Over



R.Bennett/S.Tepper/A.Schroeder
1994.11.30／2013.11.11（1963.7.16／1963.7.30）［1'51／1'52］
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』／『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

ジョージが歌うカール・パーキンスの曲には「みんないい娘」があるけれど、ブートレグにはまりすぎたせいか、個人的にはこの曲のほうが愛着が深い。ジョージが歌うBBC音源で最も好きな曲でもある。オリジナルは、カール・パーキンスの58年のシングル（B面は同じくBBC音源の「レンド・ミー・ユア・コーム」）。《Pop Go The Beatles》と《Saturday Club》の2ヴァージョンが公表されている。

254

アイ・ジャスト・ドント・アンダースタンド

I Just Don't Understand

M.Wilkin/K.Westberry
1994.11.30（1963.7.16）［2'46］
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』

オリジナルは、女優兼歌手のアン・マーグレット（61年／米17位）。BBCのジョンのヴォーカル曲では最も渋い仕上がりだが、じんわり沁み込む物憂げな曲調は、たとえば『ウィズ・ザ・ビートルズ』の「オール・アイヴ・ゴット・トゥ・ドゥ」や『ハード・デイズ・ナイト』の「アイル・ビー・バック」などに通じる枯れた味わいがある。ジョンのヴォーカリストとしての力を思い知らされる1曲だ。

255

ウー！マイ・ソウル

Ooh! My Soul

R.Penniman
1994.11.30（1963.8.1）［1'36］
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』

いきなり首根っこをつかまれて持っていかれてしまうかのような、聴き手を急き立てる破壊力に満ちたポールのシャウトが凄まじい。それもそのはず、オリジナルはリトル・リチャードが58年に発表した曲（米31位・英22位）。「ロング・トール・サリー」ほど広く知られた曲ではないが、こちらはポールの音楽性の幅とヴォーカリストとしての力量を思い知らされるBBC音源のひとつだ。

256

ドント・エヴァー・チェンジ

Don't Ever Change

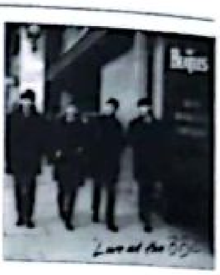
G.Goffin/C.King
1994.11.30（1963.8.1）〔2'02〕
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

バディ・ホリーのバック・バンド、クリケッツの62年6月のヒット曲（作者はゴフィン＝キング）。これもBBCならではの名演。なぜなら、ビートルズの全オフィシャル曲の中で、ポールとジョージのツイン・リード・ヴォーカルが唯一楽しめる曲だからだ。しかも、同じゴフィン＝キング作の「チェインズ」の続編的なこのポップスを、2人でずっと一緒に歌っているのが微笑ましい。

257

ア・ショット・オブ・リズム・アンド・ブルーズ

A Shot Of Rhythm And Blues



T.Thompson
1994.11.30（1963.8.1）〔2'14〕
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

ジョンお気に入りのアーサー・アレキサンダーが、ローリング・ストーンズもカヴァーした「ユー・ベター・ムーヴ・オン」のシングルB面曲として62年3月に発表した曲。抑揚のないまったりしたリズムにジョンの荒削りなヴォーカルが乗る、その絶妙なアンバランスさが刺激的だ。ほろ苦さがにじみ出たいつものアーサー節ではなく、淡々としていてちょっと風変わりな曲調がジョンの心に引っかかったのだろう。

258

トゥ・マッチ・モンキー・ビジネス

Too Much Monkey Business

C.Berry
1994.11.30（1963.9.3）〔2'05〕
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

チャック・ベリーのシングル曲（56年9月）。歌詞に"ヨコハマ"が出てくる曲として知られている。ということは、『マインド・ゲームス』収録の「あいすません」の前にジョンの日本語が聴ける曲ということになる。60年から62年までライヴのレパートリーでもあっただけに、歌も演奏もこなれたもの。ちょっと変な言い方になるが、ジョージの「ロール・オーバー・ベートーヴェン」のジョン版のような趣だ。

259

ルシール

Lucille

A.Collins/R.Penniman
1994.11.30／2013.11.11（1963.9.7／1963.9.3）［1'49／2'28］
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』／『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

リトル・リチャードが56年に発表した曲（米21位・英10位）。リトル・リチャード好きのポールは、その後も72年のウイングスのツアーや79年の"カンボジア難民救済コンサート"、アルバム『CHOBA B CCCP』（88年）でカヴァーしている。《Pop Go The Beatles》と《Saturday Club》の2ヴァージョンが公表されたが、『VOLUME 2』収録の前者のほうが演奏のまとまりもポールのヴォーカルの迫力も上。

260

ハッピー・バースデイ・ディア・サタデイ・クラブ

Happy Birthday Dear Saturday Club

M.J.Hill/P.S.Hill
2013.11.11（1963.9.7）［0'33］
『ON AIR - LIVE AT THE BBC VOLUME 2』

BBCの《Saturday Club》の5周年を記念して、「ハッピー・バースデイ」のロック・ヴァージョンを番組用にプレゼント。ストレートなロックを4人で演奏してみました、といった程度の曲ではあるが、毎年ファン・クラブに贈ったクリスマス・レコードと同じく、この手のお祝いの曲やちょっとしたメッセージ・ソングはお手のものだったのだろう。《アレンジはジョン》と番組の記録に残されている。

261

ムーンライト・ベイ

Moonlight Bay

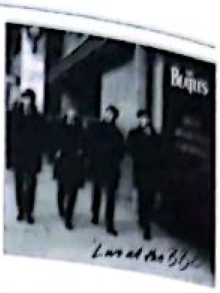
E.Madden/P.Wenrich
1995.11.20（1963.12.2）［0'49］
『ANTHOLOGY 1』

イギリスのコメディ番組『マーカム・アンド・ワイズ・ショー』に出演した際の、司会のマーカム・アンド・ワイズとビートルズによる共演曲。ちょっとした即興がこうして音源化されるのは珍しいことだが、こういう他愛のないやりとりに、ビートルズのイギリスならではのユーモアや遊び心が垣間見えるのが楽しいところ。曲は映画『ティン・パン・アレイ』（40年）と『オン・ムーンライト・ベイ』（51年）の挿入歌。

262

ジョニー・B・グッド

Johnny B. Goode



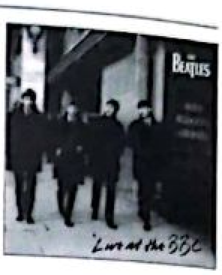
C.Berry
1994.11.30（1964.1.7）［2'51］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

チャック・ベリーが58年に発表した曲（米8位）。ロックンロールのスタンダードとして有名な1曲でもあるが、ビートルズが歌うにはちょっとベタな選曲だと思わせるところがあるのはなぜだろう。ジョンが歌いたかったといえばそれまでだけど。ビートルズ解散後の72年にジョンは、アメリカのテレビ番組で“マイ・ヒーロー”と紹介しつつ、チャック本人とこの曲を一緒に歌った。《Saturday Club》より。

263

フロム・アス・トゥ・ユー（オープニング／クロージング）

From Us To You



Lennon/McCartney
1994.11.30（1964.2.28）［0'27／0'35］
「THE BEATLES LIVE AT THE BBC」

《Pop Go The Beatles》に続くBBCのビートルズ・スペシャル番組《From Us To You》のテーマ曲。「フロム・ミー・トゥ・ユー」の歌詞の“I”を“We”、“me”を“us”に変え、ファンへの感謝の意が伝わる内容へと変化させた短縮版。ビートルズが“213曲”をスタジオで再録音したのは、「シー・ラヴズ・ユー」「抱きしめたい」のドイツ語版とこの曲だけだ。2013年発売のリマスター盤には、最後にクロージング版も追加された。

264

シャウト

Shout

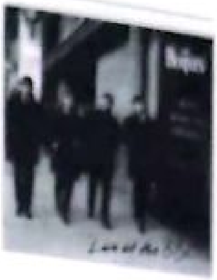
R.Isley/R.Isley/O.Isley
1995.11.20（1964.4.19）［1'28］
「ANTHOLOGY 1」

初の主演映画『ハード・デイズ・ナイト』の撮影の合間を縫って、テレビ特別番組『アラウンド・ザ・ビートルズ』用に収録された曲。「ツイスト・アンド・シャウト」でお馴染みのアイズリー・ブラザーズの59年のシングルB面曲（「シャウト・パートII」のほう）で、ポール、ジョン、ジョージ、リンゴの順に交互にヴォーカルを受け持つという珍しい構成だ。2分あった演奏の編集版が『アンソロジー1』に収録された。

265

アイ·フォガット·トゥ·リメンバー·トゥ·フォゲット

I Forgot To Remember To Forget



S.A.Kesler/C.Feathers
1994.11.30（1964.5.1）〔2'08〕
『THE BEATLES LIVE AT THE BBC』

エルヴィス・プレスリーが55年8月に発表したシングル「ミステリー・トレイン」のB面収録曲だったが、56年に再発売されて全米1位を記録した。ソロ時代のジョージを思わせるほのぼのとしたカントリー調の曲で、60年から62年にかけてライヴでも演奏されていた。《From Us To You》で演奏された曲で、これがBBCラジオ出演時最後の"213曲以外の準オフィシャル曲"となった。ひねりの効いた曲名も面白い。

266

ユー·ノウ·ホワット·トゥ·ドゥ

You Know What To Do

Harrison
1995.11.20（1964.6.3）〔1'57〕
『ANTHOLOGY 1』

「ドント・バザー・ミー」（63年）に次ぐジョージのオリジナル曲。曲名は昔から伝わっていたが、音源は93年に発見されたという。『ハード・デイズ・ナイト』用のセッションがリンゴの急病で流れ、急遽ジョンの「ノー・リプライ」、ポールの「イッツ・フォー・ユー」とともにデモ用に録音された。「アイ・ニード・ユー」まであと一息というほんのり爽やかな曲調を健気に歌う、どこを切ってもジョージ節。

267

リーヴ·マイ·キトゥン·アローン

Leave My Kitten Alone

L.W.John/T.Turner/J.McDougal
1995.11.20（1964.8.14）〔2'52〕
『ANTHOLOGY 1』

ジョン好みの重厚なR&Bだが、『ビートルズ・フォー・セール』にジョンのカヴァーが3曲あったために外されたのだろう。リトル・ウィリー・ジョン（59年）の曲だが、ジョニー・プレストンのカヴァー（60年）を参考にしている。未発表曲集『セッションズ』（85年）から「オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ（オルタネイト・ヴァージョン）」（『アンソロジー3』収録）とのカップリングでシングルになる予定だった。

268

イフ・ユーヴ・ガット・トラブル

If You've Got Trouble

Lennon/McCartney
1996.3.18（1965.2.18）〔2'47〕
『ANTHOLOGY 2』

ジョンとポールがリンゴ用に書いた『ヘルプ！』の候補曲だったが、バック・オーウェンスのヒット曲「アクト・ナチュラリー」に敗れ去った。カヴァーに負けたジョンとポールの図というわけだが、たしかにメロディも演奏も単調。『ウィズ・ザ・ビートルズ』の頃だったら収録されていたかも。とはいえ、90年代以降のリンゴのソロ・アルバムに入っていそうなキャッチーな曲でもある。って褒めてないか。

269

ザット・ミーンズ・ア・ロット

That Means A Lot

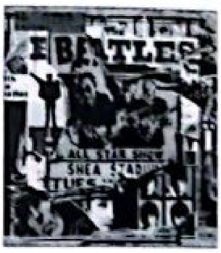
Lennon/McCartney
1996.3.18（1965.2.20）〔2'26〕
『ANTHOLOGY 2』

『ヘルプ！』のボツ曲。作者のポールは、アレンジを変えたりテンポを変えたり粘りに粘ったが、やればやるほどドツボにはまる最悪のパターン。3月30日の再録音もうまくゆかず、あきらめたポールの手を離れ、ジョンに曲提供を依頼していたP. J. プロビーが8日後に収録し、シングル曲に。英25位は大健闘かも。軽快ではあるけれど、サビのベタな歌いまわしは「ホワット・ユーアー・ドゥーイング」の上をいく。

270

12・バー・オリジナル

12-Bar Original



Lennon/McCartney/Harrison/Starr
1996.3.18（1965.11.4）〔2'54〕
『ANTHOLOGY 2』

『ラバー・ソウル』用のセッションで一発録りされたインストゥルメンタル。4人の共作となったのは、インストはそうするという取り決めがあったから。珍しいブルース調の曲で、ジョージ・マーティンのハーモニウムが効いている。アルバムに収録する意図があったとすると、“まがいモノのソウル”に引っかけた“まがいモノのブルース”という遊び心があったから、なのかもしれない。オリジナルは6分30秒以上。

271

クリスマス・タイム

Christmas Time (Is Here Again)

Lennon/McCartney/Harrison/Starr
1995.11.20（1967.11.28、12.6）［3'02］
シングル「Free As A Bird」

60年代にイギリスのファン・クラブの会員に配布されていたクリスマス・レコード（ソノシート）の67年版に収録された4人の共作曲。だが、実際に中心になって書いたのはポールだろう。95年に発売されたシングル「フリー・アズ・ア・バード」のカップリング曲として、66年版のクリスマス・レコード用には未収録だった4人の挨拶とジョンのセリフを後半に加えた編集ヴァージョンで収録された。

272

ジャンク

Junk

McCartney
1996.10.28（1968.5.25～5.29）［2'23］
『ANTHOLOGY 3』／『THE BEATLES - ANNIVERSARY EDITION（SUPER DELUXE & 3CD DELUXE EDITION）』

歌詞は一部未完成だが、ポールの初ソロ『マッカートニー』収録ヴァージョンとほとんど変わらない。70年代には「ジュビリー」のタイトルの未発表曲として知られていたが、ビートルズ版がこうして聴けるのはありがたい。サリー州イーシャーにあるジョージの別荘で行なわれた『ザ・ビートルズ』用のデモ・セッションで収録された1曲。「マザー・ネイチャーズ・サン」の代わりに入っていてもなんら遜色なしだ。

273

ア・ビギニング

A Beginning

George Martin
1996.10.28（1968.7.22）［0'50］
『ANTHOLOGY 3』／『THE BEATLES - ANNIVERSARY EDITION（SUPER DELUXE EDITION）』

リンゴ作の「ドント・パス・ミー・バイ」（『ザ・ビートルズ』収録）のイントロ用にジョージ・マーティンが書いた小品で、演奏は「グッド・ナイト」と同じオーケストラのメンバーによるもの。『アンソロジー』第3弾の冒頭に"新曲"が収録されなかったため、苦肉の策として引っ張り出されたものだ。曲名は、『アンソロジー3』収録に際し、最後の曲「ジ・エンド（The End）」に呼応して付けられた。

274

ノット・ギルティ

Not Guilty

Harrison
1996.10.28（1968.8.8、8.9、8.12）〔3'21／3'05〕
「ANTHOLOGY 3」／「THE BEATLES - ANNIVERSARY EDITION（SUPER DELUXE & 3CD DELUXE EDITION）」

「ザ・ビートルズ」のボツ曲（50周年記念盤にはデモ音源も収録）。漏れたのは、ジョージの曲を各面1曲ずつ、計4曲しか収録できなかったからだろう。ビートルズでは最長の100を超えるテイク数となった。ジョージは懲りずに（？）この曲を78年に再録音し、『慈愛の輝き』に収録した。間奏が「恋を抱きしめよう」と同じくワルツになるのはご愛嬌。混沌としたエンディングは「イッツ・オール・トゥー・マッチ」風。

275

ホワッツ・ザ・ニュー・メリー・ジェーン

What's The New Mary Jane

Lennon/McCartney
1996.10.28（1968.8.14）〔6'07／2'45〕
「ANTHOLOGY 3」／「THE BEATLES - ANNIVERSARY EDITION（SUPER DELUXE & 3CD DELUXE EDITION）」

「レボリューション9」のところに入っていても違和感がない「ザ・ビートルズ」のボツ曲（50周年記念盤にはデモ音源も収録）。ジョン、ヨーコ、ジョージ、マル・エヴァンスによる"前衛ポップ"の傑作だ。69年12月5日に「コールド・ターキー」に続くプラスティック・オノ・バンドのシングルとして「ユー・ノウ・マイ・ネーム」とのカップリングで発売寸前までいったが叶わず。理由はともに"ビートルズの曲"だから。

276

a)ステップ・インサイド・ラヴ b)ロス・パラノイアス

Step Inside Love/Los Paranoias

Lennon/McCartney//Lennon/McCartney/Harrison/Starr
1996.10.28（1968.9.16）〔2'30〕
「ANTHOLOGY 3」／「THE BEATLES - ANNIVERSARY EDITION（SUPER DELUXE EDITION）」

ともに『ザ・ビートルズ』の「アイ・ウィル」セッション時のアドリブ曲。「ステップ・インサイド・ラヴ」はシラ・ブラックのテレビ・シリーズ『シラ』のテーマ用にポールが作った曲で、シラが68年3月に発表（86年にジョージと「上海サプライズ」をデュエットしたヴィッキー・ブラウンがバック・ヴォーカルで参加）。「ロス・パラノイアス」は、ポールとジョンの息の合った掛け合いが楽しめる愉快な曲。

277

サワー・ミルク・シー

Sour Milk Sea

Harrison
2018.11.9（1968.5.25～5.29）［3'44］
『THE BEATLES・ANNIVERSARY EDITION（SUPER DELUXE & 3CD DELUXE EDITION）』

68年5月にジョージの自宅で行なわれた『ザ・ビートルズ』用の新曲のデモ・セッションでの演奏曲。その"イーシャー・デモ"の音源は50周年記念盤に全27曲が収録され、うち3曲が新たに「準公式曲」となった。これはジョージが書いた軽快な曲だが、「本番」ではレコーディングせず、ジョージのプロデュースで68年8月にアップルからデビューしたジャッキー・ロマックスのデビュー・シングルとして発売された。

278

チャイルド・オブ・ネイチャー

Child Of Nature

Lennon
2018.11.9（1968.5.25～5.29）［2'38］
『THE BEATLES・ANNIVERSARY EDITION（SUPER DELUXE & 3CD DELUXE EDITION）』

"イーシャー・デモ"より、こちらは50周年記念盤に初収録となったジョンの曲。「ジェラス・ガイ」（71年の『イマジン』収録）の、歌詞の異なる原曲として知られるメロディアスな佳曲だ。歌詞は"自然の子"から"嫉妬深い男"へと劇的に変わったが、間には「ジュリア」の"大洋の子"がくるということか。"ゲット・バック・セッション"での音源は、『レット・イット・ビー...ネイキッド』のボーナス・ディスクで聴ける。

279

サークルズ

Circles

Harrison
2018.11.9（1968.5.25～5.29）［2'17］
『THE BEATLES・ANNIVERSARY EDITION（SUPER DELUXE & 3CD DELUXE EDITION）』

"イーシャー・デモ"でジョージは自作曲を5曲演奏しているが、この曲も『ザ・ビートルズ』のセッションではやらずに終わった。暗くて地味な曲調を嫌ったのかもしれない。あるいは"静謐"という点では同じタイプの「ロング・ロング・ロング」を選んだのかも。ジョージは82年にこの曲を引っ張り出し、ビリー・プレストンやジョン・ロードらをバックに演奏。明るいアルバム『ゴーン・トロッポ』の最後を暗く締めた。

280

テディ・ボーイ

Teddy Boy

McCartney
1996.10.28（1969.1.24、1.28）〔3'16〕
『ANTHOLOGY 3』

69年1月の"ゲット・バック・セッション"より。「ロッキー・ラックーン」に通じるポールならではの"人名ソング"。ジョンの合いの手が面白い。グリン・ジョンズが編集した「ゲット・バック」（69年5月）の収録曲だったが、結局未発売に。その後ポールが初ソロ・アルバム「マッカートニー」用に再録音することを決めたため、グリン・ジョンズが2度目に手掛けた「ゲット・バック」（70年1月）からは外された。

281

メドレー：a）リップ・イット・アップ b）シェイク、ラトル＆ロール c）ブルー・スエード・シューズ

Medley:Rip It Up/Shake Rattle And Roll/Blue Suede Shoes

R.Blackwell/J.Marascalco//C.Calhoun//C.Perkins
1996.10.28（1969.1.26）〔3'08〕
『ANTHOLOGY 3』

"ゲット・バック・セッション"の後半、ビリー・プレストン加入後のアップル・スタジオでのセッションより。実際には11分以上にも及ぶ7曲のメドレーだった。カットされた「カンサス・シティ」「ミス・アン」「ローディ・ミス・クローディ」「ユー・リアリー・ゴッタ・ホールド・オン・ミー」の編集ヴァージョンは、映画「レット・イット・ビー」で観られる。4人を繋ぐ"R&Rの輪"が微笑ましい。

282

メイルマン，ブリング・ミー・ノー・モア・ブルーズ

Mailman, Bring Me No More Blues

R.Roberts/B.Katz/S.Clayton
1996.10.28（1969.1.29）〔1'54〕
『ANTHOLOGY 3』

同じく"ゲット・バック・セッション"より。オリジナルはバディ・ホリーのシングル「ワーズ・オブ・ラヴ」のB面収録曲。ジョンのちょっとかったるそうな歌声とほんわかムードのある演奏は、テンポを落とすと「サン・キング」っぽい。未発表アルバム「セッションズ」に収録される予定だった。"ゲット・バック・セッション"にはほかにもいい演奏がたくさんあるのに、なぜこれなのかと、ちょっと。

283

グッドバイ

Goodbye

Lennon/McCartney
2019.9.27（1969.2）〔2'24〕
「ABBEY ROAD - ANNIVERSARY EDITION（SUPER DELUXE EDITION）」

デビュー・シングル「悲しき天使」（68年8月発売、プロデュースはポール）を大ヒットさせたメリー・ホプキンの次のシングル用にポールが書いた曲。「アイ・ウィル」に似たアコースティック・ギターの佳曲で、自分で発表すれば良かったのにとも思うが、"アップルの歌姫"をそれほど可愛がっていた、ということだろう。「アンソロジー3」にはなぜか入らず、「アビイ・ロード」の50周年記念盤（高いやつ）にようやく収録された。

284

オール・シングス・マスト・パス

All Things Must Pass

Harrison
1996.10.28（1969.2.25）〔3'07〕
「ANTHOLOGY 3」

26歳の誕生日に、ジョージが1人で「オールド・ブラウン・シュー」「サムシング」とともにデモ録音を行なったもの。69年1月の"ゲット・バック・セッション"でも取り上げられていたので、危うくビートルズ・ナンバーになるところだった。なぜ"危うく"かというと、ビートルズ解散後の70年11月に発表されたジョージの3枚組のソロ・アルバムにこれがタイトル曲として収録されていないとサマにならないから。

285

カム・アンド・ゲット・イット

Come And Get It

McCartney
1996.10.28（1969.7.24）〔2'27〕
「ANTHOLOGY 3」「ABBEY ROAD - ANNIVERSARY EDITION（SUPER DELUXE EDITION）」

「アビイ・ロード」制作中にポールがアイヴィーズ用に作ったデモ・テイク。ピアノ、マラカス、ドラム、ベースを1人で多重録音し、1時間で仕上げた。その9日後、アイヴィーズがデモそっくりにポールのプロデュースでレコーディングした（ポールもピアノとマラカスで参加）。バンドはバッドフィンガーに改名し、映画「マジック・クリスチャン」の主題歌として69年12月に発表、英4位・米7位を記録した。

286

フリー・アズ・ア・バード

Free As A Bird

Lennon//McCartney/Harrison/Starr
1995.11.20（1977／1994.2.11～2末）［4'24］
『ANTHOLOGY 1』&シングル

"アンソロジー・プロジェクト"のために、70年1月3日の「アイ・ミー・マイン」以来24年ぶりにポール、ジョージ、リンゴがスタジオに顔を揃えた。そしてジョンの77年の未完成デモをジョージとポールが補作（その部分のリード・ヴォーカルも担当）し、ジェフ・リンの協力を得て仕上げた"新曲"。『アンソロジー1』からシングル・カットされ、英2位・米6位を記録した。ジョージのスライド・ギターやウクレレは60年代にはない"音"だったが、エンディングにジョンの言葉"Turn that nice again（"またうまくいった"の意）"を逆回転で収録したのが味（『1』の映像版には逆回転なしで収録）。歌詞に登場する人物や場所をコラージュしたその映像も、素晴らしい仕上がりだった。ビートルズの新曲や新作を待つ"現役世代"のわくわく感をようやく体験できた。

287

リアル・ラヴ

Real Love

Lennon
1996.3.18（1979秋～冬／1995.2.6、2.7、5.15、5.16）［3'52］
シングル&『ANTHOLOGY 2』

続いて、ジョンの79年のデモ・テープに3人が手を加えて完成させた第2の"新曲"。サイケ色のないポップ・バラードで、プロデューサーの筆頭に名を連ねたジェフ・リン色が強い。「ビコーズ」で使った電子チェンバロが取り入れられるなど、60年代の雰囲気を残しながらも90年代のテクノロジーでビートルズ・サウンドを蘇らせた。

『アンソロジー1』発売の翌日にあたる95年11月22日に、ドキュメンタリー番組の2回目にプロモ・フィルムとともに公開された。その後『アンソロジー2』からの先行シングルとして96年3月4日に発売され、英4位・米11位を記録。ジョンのピアノの弾き語りによるオリジナル・デモも、『ジョン・レノン・アンソロジー』（98年11月）に収録された。『1』の映像版では、ジョージのギターが一部差し替えられている。

クリスマス・レコード

63年から69年までの7年間、ファンクラブの会員に毎年無料で送付されたフレキシ・ディスク（ソノシート）。計7枚のソノシートをまとめたLPが「FROM THEN TO YOU」（69年）と「THE BEATLES' CHRISTMAS ALBUM」（71年）のタイトルでそれぞれイギリスとアメリカでLPとして発売され、2017年には「HAPPY CHRISTMAS Beatle People! THE CHRISTMAS RECORDS」のタイトルでボックス・セットとしてCD化された。

ザ・ビートルズ・
クリスマス・レコード
The Beatles' Christmas Record
1963.12.6（1963.10.17）［5'09］

アナザー・ビートルズ・
クリスマス・レコード
Another Beatles Christmas Record
1964.12.18（1964.10.26）［4'06］

ザ・ビートルズ・3rd・
クリスマス・レコード
The Beatles Third Christmas Record
1965.12.17（1965.11.8）［6'32］

The Official Beatles FAN CLUB
The Beatles Third Christmas Record

パントマイム - エヴリホエア・
イッツ・クリスマス：ザ・ビートルズ・
4th・クリスマス・レコード
Pantmime/Everywhere It's Christmas
1966.12.16（1966.11.25）［6'10］

クリスマス・タイム：ザ・ビートルズ・
5th・クリスマス・レコード
Christmas Time (Is Here Again)
1967.12.15（1967.11.28）［6'18］

ザ・ビートルズ・6th・クリスマス・
レコード
Christmas 1968（1968）
1968.12.20（1968.11）［8'03］

ザ・ビートルズ・7th・クリスマス・
レコード
The Beatles Seventh Christmas Record
1969.12.19（1969.10-11）［7'54］

クリスマス・レコード・ボックス
HAPPY CHRISTMAS Beatle People! · THE CHRISTMAS RECORDS
2017／Apple

•213曲以外の準オフィシャル曲

・61年6月のポリドール・セッション＝トニー・シェリダンのバック・バンドとして収録された"Nobody's Child""Why""If You Love Me Baby（Take Out Some Insurance On Me, Baby）""Sweet Georgia Brown"。

・ジョンによるデモ・テイク＝"Bad To Me"（63年5月収録）と"I'm In Love"（63年7月作曲）。前者はビリー・J.クレイマー・ウィズ・ザ・ダコタス、後者はフォーモストに贈られた（2013年12月、i-Tunesのみの限定配信）。

・〈Fly On The Wal〉＝「レット・イット・ビー」の再編集版「レット・イット・ビー...ネイキッド」（2003年）のボーナス・ディスクとして収録された全22トラック、22分の音源。69年1月に行なわれた"ゲット・バック・セッション"のリハーサルや会話の断片を編集して収録したもので、未発表曲"Because I Know You Love Me So""Taking A Trip To Carolina""Fancy My Chances With You"なども含まれている。

213をさらに楽しむ❺

213曲の曲名が使われたビートルズ&ソロ曲

ビートルズ／10曲引用（4曲に登場）

She Loves You（All You Need Is Love・1967）／**Yesterday**（All You Need Is Love・1967）／**［Strawberry Fields Forever］**（Glass Onion・1968）／**Fixing A Hole**（Glass Onion・1968）／**［I Am The Walrus］**（Glass Onion・1968）／**The Fool On The Hill**（Glass Onion・1968）／**Lady Madonna**（Glass Onion・1968）／**［Savoy Truffle］**（Ob-La-Di, Ob-La-Da・1968）／**All Together Now**（All You Need Is Love・1967）／**［Polythene Pam］**（Mean Mr Mustard・1969）

ジョン・レノン／4曲引用（3曲に登場）

Long Tall Sally（New York City・1972）／**Yesterday**（How Do You Sleep?・1971）／**［Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band］**（How Do You Sleep?・1971）／**［I Am The Walrus］**（God／70年）

ポール・マッカートニー／1曲引用（1曲に登場）

She Loves You（What's That You're Doing・1982）

ジョージ・ハリスン／3曲引用（4曲に登場）

［You Really Got A Hold On Me］（Pure Smokey・1976）／**You Really Got A Hold On Me**（When We Was Fab・1987）／**All You Need Is Love**（All Those Years Ago・1981）／**Sexy Sadie**（Simply Shady・1974）

リンゴ・スター／38曲引用（8曲に登場）

Love Me Do（Postcards From Paradise・2015）／**P. S. I Love You**（Postcards From Paradise・2015）／**［I Saw Her Standing There］**（Postcards From Paradise・2015）／**Twist And Shout**（Postcards From Paradise・2015）／**All I've Got To Do**（Postcards From Paradise・2015）／**All My Loving**（Postcards From Paradise・2015）／**Little Child**（Postcards From Paradise・2015）／**I Want To Hold Your Hand**（Postcards From Paradise・2015）／**Tell Me Why**（Postcards From Paradise・2015）／**Eight Days A Week**（Postcards From Paradise・2015）／**Help!**（Back Off Boogaloo・1981）／**The Night Before**（Postcards From Paradise・2015）／**You've Got To Hide Your Love Away**（Postcards From Paradise・2015）／**It's Only Love**（Postcards From Paradise・2015）／**［I've Just Seen A Face］**（Postcards From Paradise・2015）／**Yesterday**（Postcards From Paradise・2015）／**We Can Work It Out**（Postcards From Paradise・2015）／**Nowhere Man**（Postcards From Paradise・2015）／**What Goes On**（Choose Love・2005）／**［Here, There And Everywhere］**（Postcards From Paradise・2015）／**Good Day Sunshine**（Back Off Boogaloo・1981）／**For No One**（Postcards From Paradise・2015）／**Tomorrow Never Knows**（Love First, Ask Questions Later・2003／Choose Love・2005）／**［With A Little Help From My Friends］**（I'm The Greatest・1973／Back Off Boogaloo・1981）／**Getting Better**（Postcards From Paradise・2015）／**Within You Without You**（Never Without You・2003）／**When I'm Sixty-Four**（Postcards From Paradise・2015）／**［All You Need Is Love］**（Fading In Fading Out・2005）／**［Baby, You're A Rich Man］**（Back Off Boogaloo・1981）／**［Lady Madonna］**（Back Off Boogaloo・1981）／**Don't Pass Me By**（Postcards From Paradise・2015）／**Sexy Sadie**（Devil Woman・1973）／**Honey Pie**（Postcards From Paradise・2015）／**It's All Too Much**（Postcards From Paradise・2015）／**Let It Be**（Postcards From Paradise・2015）／**The Long And Winding Road**（Choose Love・2005）／**Here Comes The Sun**（Never Without You・2003／Postcards From Paradise・2015）／**Because**（Postcards From Paradise・2015）

※該当曲（引用された曲・発売年）の順に記載／［　］は曲名・歌詞などの一部が引用された曲

21世紀のビートルズ

Interview with...

Pete Best
Giles Martin
Allan Rouse and Guy Massey

●インタビュー

ピート・ベスト

Interview with Pete Best

The Pete Best Band
Back To The Beat
2000／Splash Records

ビートルズが「ラヴ・ミー・ドゥ」でデビューする直前の1962年8月に、突然解雇を言い渡されたピート・ベスト。68年には音楽業界を離れ、生きることに嫌気が差すほどの"不遇の時代"も経験したが、88年に自分のバンドを結成して音楽活動を再開。70歳を超えた現在も"ロックンロールのビート"を伝え続けているピートが、95年以来18年ぶりに日本にやってきた。ビートルズの前身バンド、クォリーメンも間近で体験した"生き証人"に、東京・コットンクラブでの2日目のステージ開演前に話を訊いた。

「僕のドラミング・スタイルがあったから、ビートルズはドイツでものすごいロックンロール・バンドになったんだ」

――ビートルズがバンドとして大きくなる最初のきっかけを作ったのは、カスバ・コーヒー・クラブを経営し、59年8月の開店時にクォリーメンを出演させた母モナだと思いますが。

「全くそのとおりだね。クォリーメンのジョージとケン・ブラウンが母に会いに来て、2人のバンド仲間には、当時は何もしていなかったジョンとポールがいた。それって後で知ったことなんだけどね。でもドラマーがいなかったから、後に僕に声がかかり、1年後にはスチュ（スチュアート・サトクリフ）も入って…という流れだった。状況というか運命というか、言葉はいろいろだろうけど、彼女の力がなかったら、ビートルズはああいうふうにはなっていなかった。ドイツから戻った後も母はテレビ局やラジオ局にアプローチし、プロモーターやマネージャーのようなことをしていた。僕もそれを手伝いながらバンドを続けていたんだ」

――ピートさんがバンドに加わる前にカスバ・クラブで見たクォリーメンは、どんな印象でしたか？

「カスバ・クラブで最初に見た時は普通のバンドだった。声はよかったけどね。ただ、見るたびに上達し、1年後に僕が入った頃にはすごくうまくなっていた。ラリー・パーンズのオーディションに受かってドイツに行ったぐらいだったから。最初の頃から火花が見えたよ（笑）。そのくらい何か光るものがあった。練習するたびにそれが大きくなっていく感じだったよ」

——その一方でピートさんは、クォリーメンを抜けたケン・ブラウンとブラックジャックスというバンドを組んでいましたよね。

「ビートルズに入る前に、ケン・ブラウン、チャス・ニュービー、ビル・バーロウとね。ドラマーにはなりたかったけど、まだドラムはやっていなかった。でもバンドがドラマーを探していたので、やることにしたんだ。ドラマーになってよかったよ」

——そしてビートルズが60年8月にハンブルクに行く時に、オーディションを受けてメンバーになったそうですね。

「ブラックジャックスがカスバだけじゃなくリヴァプール周辺のクラブでも演奏していたのをビートルズの連中も見ていて、僕の演奏を知っていたんだ。それでドイツに行く時にドラマーが必要となり、ポールから電話がかかってきた。オーディションを受けてくれないかと言われて6曲やったよ。みんなが知っているスタンダード曲を15分ぐらいやって、最後にみんなで投票して僕が選ばれたのさ。それで当時のマネージャーのアラン・ウィリアムズから電話をもらい、数日後にドイツに行くから一緒に来てくれないかと言われたんだ」

——ジョンがリーダーだと思っていたのでポールから電話があったのは意外だったと、ピートさんは回想録（『もう一人のビートルズ』）に書かれていますね。

「その時はリーダーはいなかった。ビートルズはすごく民主的で、言いたいことをみんなが言っていた。ポールはどちらかというとPR担当だったんだろう。いろいろなことをセッティングしたりするのが彼の役割だったということだね」

——61年5月のハンブルクでのトニー・シェリダンとのセッションについてはいかがですか。

「トニーは素晴らしい人で、偉大なミュージシャンだった。先生のように尊敬していたし、リヴァプールからやって来たバンドはみんな、（ドイツの）トップ・

テン・クラブでトニーとやることで何かを学んでいったんだ。当時の音楽業界を考えてもすごく影響力があったし、個人的にもとても楽しい人でね。彼のことをテレビスターとして見ていたから、一緒にいられてうれしかったよ。ポリドールのA&Rマンのベルト・ケンプフェルトからレコーディングをしないかと言われた時もうれしかった。トニーのバックで〈マイ・ボニー〉や〈ザ・セインツ〉の他に6曲やり、僕らだけで〈クライ・フォー・ア・シャドウ〉と〈エイント・シー・スウィート〉をやった。でも〈マイ・ボニー〉をレコーディングしたことでビートルズの名がその後広まっていったんだから、やれてほんとによかったよ」

――トニー・シェリダンも去年（2013年）亡くなってしまいましたが、音楽的な見解の相違でよく言い争いをしたとも回想録には書かれていますね。

「そうだね。大ゲンカしたのは有名な話だから隠すことじゃないけど（笑）、僕も若かったから。お互い何か言ったことが気に入らなくて、ものすごいケンカになった。でもその後には仲直りし、親友になったんだ。トニーが数ヵ月前に亡くなるまで友情は続いたよ」

――62年のデッカのオーディションは、1日で10何曲を全部やったのですか。

「そうだよ。62年の元旦に、14曲か15曲。朝10時から4時半か5時ぐらいまで、パパッとさ」

――62年6月6日のEMIでの初レコーディングでは4曲ぐらい演奏していますが、覚えていることはありますか？

「ジョージ・マーティンと（エンジニアの）ノーマン・スミスに出会った日でね。すごくエキサイティングだった。レコード契約が決まり、オリジナル曲――〈ラヴ・ミー・ドゥ〉や〈P.S.アイ・ラヴ・ユー〉や〈アスク・ミー・ホワイ〉をレコーディングできると。ただ、どれをシングルA面にするかはマーティンの決断次第だった。"俺たちの曲を聴かせてやるぞ"みたいな気持ちで臨んだけど、その時点ではまだ曲が100%出来上がってはいなかったので、もう1回、9月か10月に最終的な形にするつもりでいたんだ。でも、僕は首を切られてしまったわけだけどね。それでリンゴが呼ばれたけど、彼にも同じことが起きた。マーティンがリンゴの演奏を聴いてアンディ・ホワイトに差し替えたわけだから」

――スーツを着たその頃の宣伝用写真を見ると、ピートさんだけ髪型を変えていません。何かこだわりがあったのですか？

「いやいや、聞かれなかっただけだよ。別に断ったことは一度もないんだ。僕が拒んだわけじゃないということを証明するために、後（64年）に自分のバンドでアメリカに行った時に髪を下ろしたんだ。ビートルズみたいにね。でも2年ぐらいでまた上げたけど（笑）」

――「アンソロジー 1」には、62年6月のEMIでの最初のセッションの音源も入っていますが、あれは（アップルの代表だった）ニール・アスピノールの計らいだったのでしょうか。

「歴史の一部だから入れたほうがいいとニールが提案はしたけど、それ以降のやりとりは弁護士が全部やったんだ」

――聴いてみていかがでしたか。

「最後に聴いてからだいぶ日が経ってしまったから、演奏がどうだったかは忘れてしまったけど、さっきも言ったように自分のは未完成ヴァージョンで、リンゴとかアンディのは完成したヴァージョンだから、それと並べられてもね…。できたらもう1回、今の僕のバンドで自分のヴァージョンをスタジオで録音し、それでみんなにどれがいいかを決めてもらいたいよ。自分の演奏のほうがいいと思っているから（笑）」

――「Back To The Beat」（95年）では「ラヴ・ミー・ドゥ」をライヴで再演していますね。

「あれはみんなが知っている、ライヴ向けにやった簡単なヴァージョンなんだ。本格的にやるんだったら、もともとやったようにテンポを変えてやらないとね」

――初期のビートルズにピートさんが持ち込んだものは、何だったと思いますか。

「やっぱりサウンドかな。僕のドラミング・スタイルがあったからドイツでものすごいパワー・バンドというか、爆発的なロックンロール・バンドになったわけだから。リヴァプールに戻ってからは、ビートルズのバンド・スタイルをみんな真似ようとしていたんだ。みんながビートルズみたいな曲をビートルズのようにエネルギッシュなサウンドで演奏しようとしたわけだから。あとクリエイティ

ヴィティという部分でもそうだね。曲を書いていたのはもちろんジョンとポールかもしれないけれども、最初にオリジナルをやろうというふうになった時に、やろうと自分も言った1人だったし、それまでオリジナル曲をやっているバンドはいなかったわけだから。でもやっぱり、一番はサウンドかな」

——メンバーの中でいちばん仲が良かったのは誰でしたか。

「ジョンだね。カスバ・クラブで最初に見た時もいちばん格好よかった。あの時はまさか彼と1年後にドイツで一緒にやるとは思わなかったよ。夜遅くまで2人で飲んだりする仲だったので、飲んでいろんなトラブルも起こしたけど、飲んだりしながらあれこれ話をした。ガールフレンドの話とか家族の話とかね。そういう会話を通じて、一般的にはあまり知られていない彼の一面が見えた。外から見ると皮肉屋に思われがちだけど、家族のことをすごく大切にする、謙虚で愛にあふれた優しい人だったよ。その両面があってこそジョン・レノンという一人の人間が出来上がる。家庭的な彼の姿は、その後、多くの人が知ることになるけど、もっと早い段階で僕がそれを知ることができてよかったよ。当時からすべてを備えた人間だった」

——ポールについてはいかがですか。

「ポールは…昔からPRに長けていたね。ドイツにいた時も、ビル・ハリーの（音楽業界紙）『マージー・ビート』を使ったりして、リヴァプールに向けて一所懸命ビートルズのPR活動をしていたよ。もちろんミュージシャンとしても素晴らしいし、声も昔と変わらず素晴らしい。PRに長けたイメージは今も変わっていなくて、だから名誉な勲章をたくさんもらっているんだろう。だけど、それは彼に値すべきことだと思うよ」

——ジョージの印象もお願いします。

「とても静かな男だった。僕もよく“静かなビートル”って言われたけど、実はよく笑うんだ。僕以上に静かだったのがジョージだったよ。あの頃はとにかく音楽に熱心で、一番のギタリストになることが夢で、常にうまくなろうとしていた。彼のギター・テクニックも含めて上達ぶりをみればわかると思う。一般の人にはあまり知られていなかったけど、音楽業界以外にも様々なことに興味を持っていた。亡くなった後にはだいぶ語られたりしたけど、宗教的なこともそうだし、モーターレースが好きだったり、映画が好きで映画会社を作ったりもした。でも、

僕が知っている若い頃のジョージは、とにかくギターが大好きな男だったよ」

――ジョージに98年に会ったという話は本当ですか？

「いや。きのうも同じことを訊かれたよ。どこからそんな話がでてきたのかはわからないけど、ジョージが亡くなった翌日にシカゴでメモリアル・コンサートがあり、そこでジョージの話はしたけど、それだけだよ。62年以降、ビートルズの誰にも会っていないんだ」

――母モナとかトニーとかスチュとか、もちろんジョンやジョージとか、関わった方がみなさん亡くなっていますよね。そうした中でピートさんも61歳になり、"激動の半生"を送ってこられたわけですが。

「いや71歳だよ」

――あ、ごめんなさい！　間違えました。

「ははは、（若く見てもらって）ありがとう（笑）。僕ぐらいの年齢になると、リヴァプールが元気だった60年代のあの頃にやっていたミュージシャンも当然みんな年を取って、亡くなった人も多い。でもひとついいなと思うのは、いい思い出がやっぱり残っていくということ。人が亡くなるのはもちろん悲しいことだけど、それを超えて、人の思い出を――いい思い出も悪い思い出ももちろん含めて――伝えていける。でも、僕らもそうだし、ポールもリンゴもいずれ年を取ってこの世からいなくなるわけだから……そうなったら君たちの世代がそういう思い出を語り継いでいってほしい」

（2013年4月28日　東京・コットンクラブにて収録／通訳＝丸山京子）
※『CDジャーナル』2013年7月号掲載のインタビュー記事を、未掲載分も含めて再構成

Profile

1941年11月24日、インド・マダラス生まれのドラマー。第二次大戦後にリヴァプールに移住。57年に母が自宅地下にライヴ・スペースを併設したコーヒー・バー"カスバ"を開店。出演していたビートルズの前身バンド、クォリーメンと知り合い、60年に加入。メジャー・デビュー直前の62年8月、マネージャーのブライアン・エプスタインに解雇を言い渡され、脱退後はピート・ベスト・フォーやピート・ベスト・コンボなどを結成したが、67年のバンド解散とともに音楽活動を停止した。88年にピート・ベスト・バンドを結成し、音楽活動を再開。95年と2013年の二度、日本公演も行なっている。

●インタビュー

ジャイルズ・マーティン

Interview with Giles Martin

シルク・ドゥ・ソレイユとのコラボレーション・アルバム『LOVE』は、ビートルズの新作なのか、それともサントラなのか？　名曲に挿入されている音の断片はどの曲から取ったものなのか？　『LOVE』を手掛け、[illegible]のために日本にやって来たジョージ・マーティンの息子、ジャイルズ・マーティンに話を聞いた。

LOVE
[illegible]

「『LOVE』は、ビートルズのスピリットが最もよく捉えられた“ベスト・サウンド・オブ・ザ・ビートルズ”」

——まず、今いちばん好きなビートルズ・ナンバーを教えていただけますか。

「『ア・デイ・イン・ザ・ライフ』かな。ポールとジョンの特徴がよく出ているからね。父からオリジナルのオーケストラのスコアをもらったんだ」

——アルバムだとどうでしょう。

「僕の中では、ビートルズはアルバム・アーティストという印象はないんだ。今回聴き直してみて再確認したけど、曲の幅が広い。だから曲調の広さから考えると、1つのアルバムではあまり語れないんだけれども、挙げるとしたら『アビイ・ロード』の名曲の後半かなあ。『LOVE』のなかでは『ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー／トゥモロー・ネバー・ノウズ』だね。僕がビートルズのトラックを組み合わせた最初の曲だったし、メンバーも気に入ってくれたからね」

——では『LOVE』の話を。今回、ビートルズのオリジナル全213曲を聴き、トラックごとに本当にばらしていったのでしょうか。

「もう、すべてのトラックを聴いたよ。初期のヴァージョンは、テンポやキーをメモしながらね」

——初期のヴァージョンというのは、発表されていないものということですか。

「いや、そうじゃない。たとえば『エリナー・リグビー』のストリング・カル

テットは後で別に録っているんだけど、それを入れる前のヴァージョンという意味だよ」

——とくに65年の「ラバー・ソウル」以前の曲は、1つのトラックにいろんな楽器が入っているので、各トラックごとにばらすのはかなり難しかったと思いますが。

「『ラバー・ソウル』以降もそうだね。すごく難しい作業だった。たとえば〈ア・デイ・イン・ザ・ライフ〉は、1つのトラックの中にベースとドラムとオーケストラ以外のすべてが入っていて、ピアノとシェイカーとギターとコンガは別の1つのトラックに入っている。それをサラウンド・ミックスでやるんだから、たいへんな作業だったよ。でもビートルズの演奏の仕方はものすごく凝縮されたコンパクトなものだったから、やり遂げられたんだと思うね」

——「シー・ラヴズ・ユー」みたいにモノラル・ヴァージョンしか残っていない曲も初期にはありますが。

「ラフなステレオ・ヴァージョンしかないね、〈シー・ラヴズ・ユー〉は。〈キャント・バイ・ミー・ラヴ〉はステレオ・ヴァージョンしかなくて、ギターとヴォーカル抜きのトラックは残っていないんだ。むしろそれ以外のものがちゃんと残っていることのほうが驚きだったよ」

——『LOVE』のプロジェクトは2003年に始まったそうですが、ジャイルズさんの元にどんなふうに話がいったのかを教えてください。

「アップル側からまず父に話がきた。でもそのころ父の健康状態が良くなかったので、僕を紹介してくれたんだ。それで話を進めていった結果、ビートルズの架空のライヴ・ショーみたいなものにしようというアイディアが浮かんだんだ。実際、66年にビートルズはライヴ活動をやめてしまったわけだけど、そのあと続けていたら——そんなコンセプトで始めてみたわけだ。それで〈ゲット・バック〉からスタートさせることにした。最初にやったのもそれだ。続いてタブラの入った〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉、その後〈ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー〉と組み合わせた〈トゥモロー・ネバー・ノウズ〉のもっとサイケデリックなヴァージョンを作ったりしていったんだよ」

——最初に13分のデモ・ヴァージョンを作ったそうですね。

「そう。そのデモには〈ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー〉はなくて、

ピアノ・コード、ドラム・ソロ、そして〈ゲット・バック〉がまるまる1曲入ったやつ、ヴォーカルの入っていないタブラの部分だけの〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉、そして最終的には使わなかったけど〈アイ・アム・ザ・ウォルラス〉から〈フライング〉へと繋がっていくヴァージョンなんかが入っていたと思う。いかにビートルズの曲を流れよく繋げることができるかを考えて作ったんだ。でも、作った時点でアビイ・ロードのエンジニアに“お前はこれでクビだぞ”って言われたよ。“ビートルズの作品は普通そこまではやらない、やりすぎだぞ”ってね。だけど、ビートルズ・サイドの4人（ポール、リンゴ、ヨーコ、オリヴィア）はもっとやってくれって言ってくれたので、さらにやることになったんだ」

――デモは、ビートルズの音源を全部聴きこんだ後に作ったんですか？

「いや、デモの段階では全部は聴いていないよ。あくまでアイディアとして作ったまでさ。OKが出てから全部聴いて、2004年から実際の作業に入っていったんだ」

――シルク・ドゥ・ソレイユとの共同作業は、どんな感じで行なわれたのでしょうか。

「たとえば〈ビーイング・フォー・ザ・ベネフィット・オブ・ミスター・カイト〉では、“ダークなサーカス”風にしてほしいという依頼があった。どうしたらそういうものができるのだろうかと思い、自分の考えを時間をかけて発展させていき、〈アイ・ウォント・ユー〉や〈グッド・モーニング・グッド・モーニング〉を入れてみた。〈ヒア・カムズ・ザ・サン〉にしても、曲がもつ高揚感のあるスピリチュアリティみたいな感じを彼らもほしがっていたので、タブラを入れたり、チャント（詠唱）みたいなものを加えたりしてみた。だから、言ってみればビートルズのオリジナル曲に何ひとつ手を加えるようなことはしていないんだ。むしろ曲がもともと持っているスピリットみたいなものを使ってやってみたいという思いで僕もシルクも一致していたから、これは本当の意味でのコラボレーションだった。シルクの存在は大きなインスピレーションになったね。そうじゃなかったら、やる意味はないよ」

――ジャイルズさんが「LOVE」はマッシュアップじゃないと言うのは、今の発言が意識としてあるからでしょうか。

「いま最も革新的なことをやっているプロデューサーは、ヒップホップを手掛けている人たちだと思う。たとえばティンバランドとかそういう人たちかもしれ

ない。みんなほんとに素晴らしい腕前だよね。「LOVE」がヒップホップのアイディアを元にしているのは間違いないけど、でもマッシュアップは、2つの音の素材をあえて衝突させてみて、それを無機質なビートでくっつけている。その手法は、自分のやったこととは違うと思う。それをやったらビートルズの音楽からソウルの部分を取り除いてしまうことになるから、音を衝突させるんじゃなくて、1つの音がもう1つの音を柔らかく包みこむ――「LOVE」は、そういう種類のものだと思っている」

――ビートルズの曲がどんなふうにいじられているのだろうかと、聴く前に構えてしまう人も多いかもしれませんが、「LOVE」は、通して聴いてみると、実に音のいいリミックス・アルバムだと思いますよ。

「ありがとう。自分のキャラクターを乗っけることが目的だったわけではもちろんないし、それを言うなら父もそうだ。まあ父のキャラクターはビートルズの中に入っているかもしれないけどね。プロデューサーとしての自分の色を出すことがメインではなくて、ビートルズの人間的な部分っていうのかな、それを出したかったんだ。自分が手を加えても、その人間的な部分が損なわれることはなかった。だからこうして発表されたわけだけどね」

――「LOVE」はいろいろな言われ方がされていますね。たとえば"リミックス・アルバム"という言い方も当然できるし、"サウンドトラック"というふうに見る人もいる。そのいっぽうで"最新作"とか、それこそ"36年ぶりのニュー・アルバム"だと言う人もいますが。

「新作ではないよね。だってビートルズは70年にレコーディングをやめたわけだから。さしずめ"ベスト・サウンド・オブ・ザ・ビートルズ"ってところかな。ビートルズのスピリットが最も良く捉えられたアルバムであり、どのバンドのコンピレーション・アルバムよりも興味深いもの――そんな言い方もできると思う」

――『1』と『レット・イット・ビー…ネイキッド』に続いて出た『LOVE』は、サウンドに関してはビートルズのこれからの指標になる決定版だと思います。

「そうなるといいね。『1』も『ネイキッド』も僕は関わってはいないけど、『ネイキッド』はとてもいいアルバムだったよ。あれを手掛けたポール・ヒックスは、『LOVE』もやった優秀なエンジニアだけど、今回のアルバムは、前の2枚とは違い、ビートルズの新しいオーディエンスを開拓するアルバムなんじゃないかな」

――『LOVE』の作業をお父上（ジョージ・マーティン）と一緒にやってみて、改めて学んだことはありますか。

「なにを学んだかというのを言葉で説明するのは難しいなあ。アグレッシヴになることも大切だけど、父のように、我慢強く賢明になるというのも大事なんだということが今回よくわかった気がするよ」

――通常のCDだけでなく、5.1chサラウンドのDVDオーディオも同時に出ましたが、これはショーが同じサラウンドだったから制作されることになったのでしょうか。

「いやいや、ショーとはまったく関係ないよ。現在ある最新鋭のテクノロジーでアルバムを聴いてもらいたいっていうのは、プロデューサーだったら必ず思うことだし、なんてったってビートルズなんだから。ビートルズは常に“カッティング・エッジ”でなければいけないんだと思う」

――どっちか1つをと言ったら、DVDオーディオのほうを勧めますか。

「DVDオーディオのプレーヤーを持っていたらね（笑）。EMIがその2枚を一組で出したのは素晴らしいことだよ。（『CDジャーナル』2006年12月号掲載の“断片探しリスト”を見て）このリストは、5.1chをトラック別に聴いたらもっと簡単にできるんじゃないかな」

――では、ここからは“断片探し”の時間です。

「もうミスを見つけた（笑）」

――あら（笑）。その前に1つ。DVDオーディオのほうがCDより3分長いのは、具体的にはどこが違うのでしょうか。

「どうしても全部は入れられなかったので、CDは2曲分短く編集した。〈レボリューション〉にはギター・ソロがなくて、〈バック・イン・ザ U.S.S.R.〉には

ギター・ソロと最初の間奏がない。その違いだよ」

——そうだったんですか。では始めます。まず「Because」。鳥のさえずりや蝿の飛ぶ音などが入っていますが、鳥の音は「Across The Universe」からですか？

「そのとおり。だけど7秒ぐらいしかなかったので、BBCのライブラリーにあった同じような効果音を加えたけど、自分でも使うのをためらったよ。ビートルズ以外の音を持ってきて何か言われるんじゃないかと思ってね。でもメンバーもみんなOKしてくれた。〈I Am The Warlus〉のサイレンや〈Julia〉の子供の声、〈Lady Madonna〉の最初の雷や雨の音もライブラリーからだよ」

——「Get Back」の間奏の「A Day In The Life」のオーケストラの部分にはドラムも新たに加えてありますが。

「あれは〈Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band〉のリプリーズから。同じくリプリーズの2番の歌詞のところでポールがギターを"ティッティキ、ティッティキ"って弾いている音もそこに組み込んだ」

——「Glass Onion」に入っている「Things We Said Today」はわかりませんでした。

「"ジギジン"（とイントロのギターの音を口真似でやる）っていうのが左チャンネルから聞こえてくる。すごく合うんだ。あまりにもぴったりいきすぎて聞こえないんじゃないかな（笑）」

——「I Am The Walrus」のイントロのカウントはお父さんの声ですか？

「そう。その曲のストリングスを指揮している時のものだよ」

——「I Want To Hold Your Hand」の始まりのアナウンスは？

「曲はハリウッド・ボウルでのライヴ演奏をミックスしたんだ。アナウンスは〈Twist And Shout〉の曲紹介だったけど、誰がやっているかわからない。ビートルズの歴史には詳しくないから（笑）」

——「I Want To Hold Your Hand」の次に「A Hard Day's Night」と「Can't Buy Me Love」が収録される予定だったそうですが。

「その2曲をアルバムに入れる話はあった。実際〈I Want To Hold Your Hand〉と同じくハリウッド・ボウルでのライヴ・トラックを合わせたものも作ったんだけど、CDには入りきらなかったんだ。当初は〈Can't Buy Me Love〉の次に〈Twist And Shout〉も同じように入れようと考えていたんだけどね」

——「Being For The Benefit Of Mr.Kite!」には笑い声がたくさん入っていますが。

「あれは〈Piggies〉からだよ。セッション・テープを聴いたら、全部の演奏が1トラックに入っていて、残りの3トラックは笑い声だけだったんだ（笑）。〈Being For The Benefit Of Mr.Kite!〉に〈Good Morning Good Morning〉の馬の声を入れたのは、シニカルなロンドンっ子たちにも大受けだったね」

——「Yesterday」の次にも「Girl」と「She's Leaving Home」が入る予定だったそうですね。

「そうだったと思う。〈Girl〉のサウンドは素晴らしかったんだけどね」

——「Come Together」メドレーの「Cry Baby Cry」の前に入るコーラスは……。

「〈She Came In Through The Bathroom Window〉じゃなくて〈Dear Prudence〉。ひどいミスだなあ（笑）。〈Cry Baby Cry〉の直後に〈Eleanor Rigby〉のストリングスが入り、〈A Day In The Life〉のピアノのコードがかぶさってくるんだ」

——「Revolution」のイントロにドラムをかぶせていますが、あれも同じ「Revolution」からですか。

「そのとおり」

——「Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band（Reprise）」は普通に終わりますが、オリジナルのままでしょうか。

「いや。オリジナルは静かに終わるので、そこにいろんな曲のエンディングをくっつけたんだ。〈She Loves You〉の"yeah"とか、えーっと……Gのコードで終わ

る曲のエンディングがとにかくたくさん使われているよ。これはラスベガスでやったんだ」

——では最後に（もう一度リストを見せて）この中で明らかにこれは違うとか、これが漏れているというのがあったら指摘してください。

「（1曲目から見ながら）〈Drive My Car〉のところにある〈Good Morning Good Morning〉のブラスは違う。これは〈Savoy Truffle〉だ。〈Lucy In The Sky With Diamonds〉と〈Helter Skelter〉も入っている。〈Being For The Benefit Of My.Kite!〉には〈Cry Baby Cry〉のハーモニウムとジョンの"スッ"という声も加えてある。〈Strawberry Fields Forever〉のところにあるのは〈Baby, You're A Rich Man〉じゃなくて〈Strawberry Fields Forever〉のギターだね。〈Baby, You're A Rich Man〉が入っているのは〈Lucy In The Sky With Diamonds〉のほうだ。〈Octopus's Garden〉には〈She's Leaving Home〉のハープはない。〈Here Comes The Sun〉……ここらへんにはもっといっぱい入っているのがあるんだけどなあ（笑）。冒頭には〈Oh! Darling〉のバック・ヴォーカルと〈I Want You〉のベースも入れたよ。〈Hey Jude〉のブレイクダウンするところにも何か入っているけど……あとは自分で探してみて（"You Can Work It Out"）。おっとこれはビートルズの〈We Can Work It Out〉が入っているっていうことじゃないよ（笑）」

（2006年11月20日　東芝EMIにて収録／通訳＝丸山京子）
※「CDジャーナル」2007年1月号掲載のインタビュー記事を、一部編集して再録
追記：「Girl」は『LOVE』のボーナス・トラックとして、
「The Fool On The Hill」とともに2011年2月9日にiTunes Storeで限定発売（配信）された。

Profile

1969年10月9日、ロンドン生まれのレコード・プロデューサー。5人組のロック・バンド、ヴェルヴェット・ジョーンズのベーシストとして96年にデビューし、97年に『コリン』を発表。並行してフリー・プロデューサーとしても活動し、ヘイリーの『ピュア』（2003年）などを手掛けた。ビートルズとシルク・ドゥ・ソレイユのコラボレーション・アルバム『LOVE』（2006年）発売後もポール・マッカートニーの『NEW』（2013年）やビートルズの『1+』（2015年）、『ライヴ・アット・ザ・ハリウッド・ボウル』（2017年）、『サージェント・ペパーズ～』の50周年記念盤（2017年）をはじめ、ビートルズ関連作品のプロデュースやリミックスを数多く手掛けている。

『LOVE』収録の全28曲を徹底解剖

ビートルズ・ナンバー130曲の断片が使われたという『LOVE』。
ヘッドフォンで聴いた？回＋ジャイルズ直撃などを合わせ、
全28曲の詳細を徹底分析！

1.Because（1969）

- Across The Universe（1968）（鳥のはばたきと水しぶき）
- BBCライブラリーよりモリバトの鳴き声

2.Get Back（1969）

- A Day In The Life（1967）（ピアノの逆回転音）
- A Hard Day's Night（1964）（ギター）
- The End（1969）（ドラム・ソロ）
- Strawberry Fields Forever（1967）（シンバルの逆回転音）
- 65年シェア・スタジアムでのライヴの歓声
- A Day In The Life（1967）（オーケストラ）
- The End（1969）（ギター・ソロ）
- A Day In The Life（1967）（オーケストラ）
- Sgt Pepper's Lonely Hearts Club Band（Reprise）（1967）（ドラムス、ギター）

3.Glass Onion（1968）

- Things We Said Today（1964）（ギター）
- Hello Goodbye（1967）（ヴォーカル）
- All You Need Is Love（1967）（ヴァイオリン）
- Only A Northern Song（1967）（トランペット）
- Sgt Pepper's Lonely Hearts Club Band（Reprise）（1967）（ドラムス）
- Magical Mystery Tour（1967）（トランペット）
- Penny Lane（1967）（ピッコロ・トランペット）

4.Eleanor Rigby（1966）～Julia（1968）（Transition）

- Strawberry Fields Forever（1967）（シンバルの逆回転音）
- Revolution 9（1968）（話し声、サイレン音、サウンドエフェクト）
- A Day In The Life（1967）（オーケストラ）

5.I Am The Walrus（1967）

- Sgt Pepper's Lonely Hearts Club Band（1967）（ブラス）？

6.I Want To Hold Your Hand（1963）

※64年ハリウッド・ボウルでのライヴの歓声と演奏をミックス

7.Drive My Car（1965）/ The Word（1965）/ What You're Doing（1964）

- Savoy Truffle（1968）（ブラス）
- Taxman（1966）（ギター・ソロ）
- Lucy In The Sky With Diamonds（1967）（？）
- Helter Skelter（1968）（？）

8.Gnik Nus（1969）

- Within You Without You（1967）（シタール）

9.Something（1969）～Blue Jay Way（1967）（Transition）

- Nowhere Man（1965）（ヴォーカル）
- Hey Bulldog（1968）（笑い声）
- Carnival Of Light？

10.Being For The Benefit Of Mr Kite!（1967）/ I Want You（She's So Heavy）（1969）/ Helter Skelter（1968）

- Good Morning Good Morning（1967）（馬のいななき）
- Piggies（1968）（笑い声）
- Cry Baby Cry（1968）（ハーモニウム、ジョンの声）
- BBCライブラリーより風の音

11.Help!（1965）

12.Blackbird（1968）/ Yesterday（1965）

13.Strawberry Fields Forever（1967）

※アコースティック・デモ、テイク1、7、26使用

- Sgt Pepper's Lonely Hearts Club Band（1967）（歓声、フレンチ・ホルン）
- In My Life（1965）（ピアノ）

- Penny Lane（1967）（コーラス、ピッコロ・トランペット）
- Piggies（1968）（ハープシコード、チェロ）
- Hello Goodbye（1967）（ヴォーカル）

14.Within You Without You（1967）/ Tomorrow Never Knows（1966）

- Strawberry Fields Forever（1967）（シンバルの逆回転音）
- Rain（1966）（逆回転のヴォーカル）

15.Lucy In The Sky With Diamonds（1967）

- Tomorrow Never Knows（1966）（かもめの鳴き声のサウンドエフェクト）
- Old Brown Shoe（1969）（オルガン）
- Baby, You're A Rich Man（1967）（クラヴィオライン）
- Sgt Pepper's Lonely Hearts Club Band（1967）（フレンチ・ホルン、ギター、ベース、ドラムス）
- Strawberry Fields Forever（1967）（シンバルの逆回転音）

16.Octopus's Garden（1969）

- Good Night（1968）（オーケストラ）
- Yellow Submarine（1966）（サウンドエフェクト、ジョンの声、コーラス）
- Lovely Rita（1967）（ドラム）
- Polythene Pam（1969）（ドラム、ジョンの声）
- Helter Skelter（1968）（ギター）
- Sun King（1969）（イントロ）

17.Lady Madonna（1968）

※BBCライブラリーより雷と雨の音
- Ob-La-Di, Ob-la-Da（1968）（手拍子、ピアノ）
- Why Don't We Do It In The Road?（1968）（ドラム）
- I Want You（She's So Heavy）（1969）（ビリー・プレストンのハモンド・オルガン）
- Hey Bulldog（1968）（ギター）
- While My Guitar Gently Weeps（1968）（エリック・クラプトンのギター・ソロ）

18.Here Comes The Sun（1969）～The Inner Light（1968）（Transition）

- Within You Without You（1967）（シタール、タブラ）
- Oh! Darling（1969）（バック・ヴォーカル）
- I Want You（She's So Heavy）（1969）（ベース）

19.Come Together（1969）/Dear Prudence（1968）/Cry Baby Cry（1968）（Transition）

※「Cry Baby Cry」は「Revolution 9」とのつなぎの曲
- Eleanor Rigby（1966）（ストリングス）
- A Day In The Life（1967）（ピアノ）

20.Revolution（1968）

21.Back In The U.S.S.R.（1968）

22.While My Guitar Gently Weeps（1968）

※アコースティック・デモ（『アンソロジー3』収録）使用／オーケストラ新録音

23.A Day In The Life（1967）

24.Hey Jude（1968）

- Magical Mystery Tour（1967）（ドラムス）

25.Sgt Pepper's Lonely Hearts Club Band（Reprise）（1967）

- She Loves You（1963）（コーラス）

※その他Gのコードで終わる曲多数

26.All You Need Is Love（1967）

- Ticket To Ride（1965）（ギター）
- Baby, You're A Rich Man（1967）（コーラス）
- Rain（ヴォーカル）
- Sgt Pepper's Lonely Hearts Club Band（1967）（コーラス）
- Let It Be（1970）（ギター）？
- Good Night（1968）（オーケストラ）
- 65年クリスマスレコードのメッセージ

27.（Bonus Track）Girl（1965）

- Within You Without You（1967）（シタール）
- And I Love Her（1964）（アコースティック・ギター）
- Being For The Benefit Of Mr. Kite!（1967）（ドラムス、コーラス）
- Lucy In The Sky With Diamonds（1967）（ヴォーカル）

28.（Bonus Track）The Fool On The Hill（1967）

- Sea Of Time（1969）（シタール）
- Dear Prudence（1968）（ピアノ）
- Maxwell's Silver Hammer（1969）（ドラムス）
- Mother Nature's Son（1968）（ヴォーカル、ホルン）

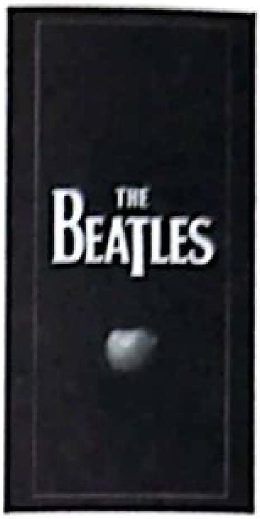
※「CDジャーナル」2007年1月号掲載記事を、改訂して再録

●インタビュー

アラン・ラウズ&ガイ・マッシー

Interview with Allan Rouse and Guy Massey

1987年の初CD化に続き、ビートルズの全213曲に新たに手を加えたリマスター盤が2009年に発売された。しかもステレオ・ミックスとモノ・ミックスの2種類である。大々的なリマスター作業は、実際どんなふうに行なわれたのか。アビイ・ロード・スタジオの2人――プロジェクト・コーディネーターのアラン・ラウズと、マニック・ストリート・プリーチャーズのライヴのサポート・ギタリストを務めたこともあるという異才ガイ・マッシーに話を訊いた。


ザ・ビートルズ・ボックス
2009／Parlophone

ザ・ビートルズ・モノ・ボックス
2009／Parlophone

> 「オリジナル・マスターをまた新たな形で、
> 今のメディアで保存するということが
> 何よりの目的でした」――アラン・ラウズ

> 「『リボルバー』の作業が最もたいへんでした」
> ――ガイ・マッシー

――今回のリマスター作業は、どういうきっかけで始まったのですか。

アラン「ビートルズ関連の仕事は、すべてアップルかEMIからの電話で始まるんです。何かやるぞとなったら、アビイ・ロード・スタジオに電話がかかってくる」

――作業開始から完成までに4年かかったそうですが。

アラン「ええ。でも、ずっとかかりっきりだったわけではないし、DVD版の『ヘルプ！』などもあったので、納期が徐々に延びていったんです」

――2009年に出ることになったのは、完成したのがたまたま今年（2009年）だったからなのか、それとも今年に出す理由が何かあったのですか。

アラン「絶対今年に、っていうことはなかったと思います。2008年の暮れぐらいに出るという感触もありましたが、ビートルズのロック・バンドのゲームと同時期になったのも偶然といえば偶然です。2009年に出るということがわかったのは今年の初めぐらいでしたから」

――リマスター作業にはアビイ・ロード・スタジオの7人の方が関わっていますが、振り分けはどういうふうに決めたのでしょう。

アラン「まず、ステレオ・ミックスもモノラル・ミックスも、レコーディング・エンジニアとマスタリング・エンジニアの組み合わせで2人ずつのチームでやりました。チームと言っても、実際にはマスタリングの、最後のイコライザーをかける作業のためのもので、ステレオはいま隣にいるガイ・マッシーとスティーヴ・ルークで、モノラルはポール・ヒックスとシーン・マギーが担当しました。モノラルはサム・オーケルも少し手伝っています」

ガイ「僕はもともとレコーディング・エンジニアなので、マスタリングは今回が初めてでした。アナログからデジタルへの最初の移行作業と修復作業を中心にやりましたが、修復作業には、専門のエンジニアのサイモン・ギブソンも関わっています。その後のイコライザーをかける作業をマスタリング・エンジニアと一緒にやりました」

アラン「マスタリング・エンジニアではないガイとポール・ヒックスをあえてこのプロジェクトに入れたのは、2人ともビートルズのカタログのリミックス作業などを10年以上やってきたからです。ガイが何かを提案し、マスタリング・エンジニアが技術的な観点から実現の可否を伝えることで、新たな効果も出ると思いました。一大プロジェクトなので、1人にすべての責任を課すのはあまりにも酷だということもあり、2人で話し合って、意見を交換できるような体制にしたわけです」

――87年の初CD化の時には最初の4作品はモノラルでしたが、今回はそれがステレオでも出ますね。

アラン「今回はモノラル・ボックスも出るので、全部ステレオで統一したものも別に出ることになりました。60年代当時、ステレオ・ミックスを作ったのはアメリカの方がステレオ市場が拡大していたので、アメリカ用にということだったんです。当時のイギリスは完全にモノラルが主体でした。たとえば『ウィズ・ザ・ビートルズ』に入っているある4曲は、3時間のミキシング作業のうち、モノラルは2時間半ビートルズ立ち会いの下で行ない、ステレオはビートルズ不在のなか残りの30分で終わらせています。『ホワイト・アルバム』まではモノラルとステレオ・ミックス両方作っていましたが、この例でもわかるように、当時はモノラルが主流で、みんなモノラルを重視していたんです」

——「ヘルプ！」と「ラバー・ソウル」のステレオ・リマスターに関しては、60年代のアナログのものではなく、87年にリミックスされたCDのマスターを使ったとのことですが。

アラン「そうです。今回のその2枚のステレオ版はジョージ・マーティンのリミックスをもとにしてリマスターを作りましたが、その他はすべてオリジナルを使っています。今回のリマスター作業は、87年の初CD化から20年経ったいま、60年代にアナログ・レコードを作る際に使用されたオリジナル・マスター・テープを新たな形で、現存するメディアで保存することが何よりの目的だったんです」

——ジョージ・マーティンは「リボルバー」と「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」も同じようにリミックスする予定だったそうですが。

アラン「『ヘルプ！』と『ラバー・ソウル』のリミックス作業が予想以上に大変だったので、音楽的にもさらに複雑なその後の2枚は手をつけることすらせずに諦めてしまったのではないかと思います」

——今回、全213曲、計525分のうち5分だけノイズを除去したそうですが、曲名や曲数は憶えていますか。

ガイ「4年もかけてやったので、どの曲のどのパートというのははっきりとは憶えていません。たとえばヴォーカルで始まる曲の、楽器がまだ入ってないトラックにテープのノイズなどがあった場合には、わずかにそこだけを取り除いたりはしました。バンドがフルに演奏しているところにノイズ除去をかけてしまうと、演奏部分の周波数にまで影響が及んでしまうので、それは絶対にしませんでした。取り除いたのは、イントロとか、楽器と楽器の間の何にもないところとか、アウトロとか、そういった部分だけです。いま思い出しましたが、たとえば〈ハニー・パイ〉のイントロなどですね」

——ノイズを除去したのはかなりの曲数でしたか。

ガイ「いや、25〜30曲ぐらいです。その判断は作業を分担した2人でやりました。たとえばステレオ班では、サイモン・ギブソンに2種類のレベルのノイズ除去をやってもらって、わずかなものと、もっとわずかなものを聴き比べてみて、僕がいいなと思った方を選ぶとか、そういうやり方ですね。もちろん最終的にイコライザーをかけたものをもう一回みんなで聴くという作業はやりましたが、細かいひとつひとつの作業は、それぞれのエンジニアに委ねられました」

アラン「最終的に出来上がったものを聴いたのは私とマイク・ヒートリー（添付のブックレットの解説者）ですが、チーム全員が良しとしなければ、仕上がったものをアップルには渡しませんでした。最終的にはチーム全員で決めたといっていいと思います」

——アルバム全体の中で、とくに音が変わったと感じる曲はありますか。

ガイ「どのアルバムにも変化の著しい曲はありますが、アルバム単位で言うと『リボルバー』ですね。作業は最もたいへんでした。もともとパンチの効いたロック・アルバムで、中音域がすごく出ていたんです。でも低音がちょっと足りないかなと思い、ポールのベースをもうちょっと行き渡らせるようなイコライザーをかけたんですが、なかなか満足のいく仕上がりにならず、何度もやり直しました。最初にやったのをアランとマイクに聴かせたら、“まだ足りないんじゃないの。あまりにもオリジナルに近いんじゃない？”って言われたんですよ。このアルバムへの思い入れが強すぎるので、無意識のうちにオリジナルの感触を求めてしまったのかもしれません。それでイコライザーをさらにかけて低音を際立たせ、最終的にオーケーが出ました」

——ステレオとモノラルでの作業の違いはありましたか。

ガイ「一緒にモノラルの作業をしたポール・ヒックスは、イコライザーをかける作業は、ステレオよりモノラルの方が難しいと言っていました。ステレオだとある程度音が分かれているし、特に初期のアルバムだと、ヴォーカルのチャンネルと楽器のチャンネルが分かれているから、ヴォーカルだけ際立たせたい場合はそっちの方だけ手を加えればいいけれど、モノラルだと全部一緒になっているので、ヴォーカルだけいじろうとしても無理。他のも全部ひきずってしまうんです。そんな中でバランスをとりながらイコライザーをかけるのは、本当にチャレンジングで難しかったと」

——ちなみにアランさんが好きなアルバムは何ですか？

アラン「『ラバー・ソウル』『リボルバー』『ホワイト・アルバム』『アビイ・ロード』です。順不同ですが」

——私も同じです。特に「ホワイト・アルバム」が好きです。

アラン「ということは、『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・

バンド』は入っていないんですね？」

——ええ、他のアーティストの名盤の中に置くと『サージェント』は際立つんですけれども、ビートルズの中に置くと、他のアルバムの方がいいなと個人的には思っています。
アラン「まったく同感です」

——アランさんは『レット・イット・ビー...ネイキッド』の時にもリマスター作業をされていますが、今回の作業はそれとはかなり異なるアプローチだったのでしょうか。
アラン「ええ。『レット・イット・ビー...ネイキッド』や『LOVE』は、ジョージ・マーティンが60年代にビートルズと一緒に作ったものとは別物で、特に『ネイキッド』に関しては、曲順も変えたりとかなりいじくったわけですし。でも今回のリマスター盤は、あくまでもオリジナル・マスターありきでの作業でした」

——今回のCDのオマケ映像を観ると、スタジオで“テイク1”と言ったりカウントを取ったりしている声が入っていますが、アビイ・ロード・スタジオにはビートルズの全部の曲の、全部のテイクが残っているのですか。アルバムに入っていない音源も。
アラン「ええ、全部あります」

——アランさんは91年にすべてのテイクをデジタルに移し変えたんですよね？
アラン「はい、全部やりました。ビートルズ本人やジョージ・マーティンも含む関係者の中で、演奏や喋りを入れてビートルズが録ったすべてを聴いたことがあるのは私だけです。ビートルズ自身もジョージ・マーティンもエンジニアも、すべてのセッションにいたわけではないんですよね」

——たとえばジョンがカウントを“1-2-3-4”とあえて言わなかったり、スタジオではしゃいだりする様子が『アンソロジー』シリーズなどから伺えますが、そうしたやりとりは活動後期まであったのでしょうか。最後はメンバーの関係もぎくしゃくしていたと思うのですが。
アラン「たしかに初期の頃は友だちから始まったので、レコーディングもすべてが新鮮で、みんなすごくはしゃいで楽しんでいました。それが『レット・イット・ビー』あたりのレコーディングでは意見の食い違いとかで言い争っている場面もあるし、リンゴが途中でスタジオを出ていったりということもありました。結婚

と同じで、離婚の始まりのようなところはあったと思います。でも、『レット・イット・ビー』の時期のそういうざこざがありながらも、最後は結局アビイ・ロード・スタジオに戻って、『アビイ・ロード』を作ったわけです。あのアルバムは、ビートルズの最高傑作だと私は思っています。ただ、後期はメンバーの仲が悪くなったという話は山ほど聞いていましたが、実際のレコーディングの様子を耳にしてみると、みんなが言ってるほどではなかった」

――アランさんはマスターテープをすべてお聴きになっているということなので、お尋ねします。個人的な関心事として、昔からわからないことが2つあるんです、曲に関して。1つは、「ロッキー・ラックーン」という曲の最後の高音のコーラスが誰なのかということ。リンダ・マッカートニーかなと思ったのですが。

アラン「実際に検証するには、マルチトラックまで遡らないとわからないんですが、すべて聴いたとはいえ、ステレオとモノのマスターテープなので、そこまではわかりません」

――もう1つは「カム・トゥゲザー」のハーモニーはポールなのか、それともジョンが一人でやっているのか。長年の疑問で…。

アラン「それもやっぱりマルチまで遡らないとなかなか…。私は歴史家ではなくてエンジニアなので、まったく違う観点から音を聴いているんですよね。だから誰が歌っているかとか弾いているかとか、そういう観点で聴いているわけではないので、そういった部分はわからないんです」

――最後に、今後のリマスター盤の予定についてはいかがですか。シングル・コレクションが出るという噂もありますが。

アラン「まだアビイ・ロード・スタジオに電話はかかってきていません」

（2009年7月8日　EMI ミュージック・ジャパンにて収録／通訳=川原真理子）
※『CD ジャーナル』2009年10月号掲載のインタビュー記事を、未掲載分も含めて再構成
追記：アラン・ラウズ氏は2016年2月20日に死去。

GET BACK SESSIONS LIST

凡例

セッション日（曜日）

演奏曲

［　］はリード・ヴォーカル、［　］内の（ ）はバック・ヴォーカル／コーラス（下段参照）

（　）は作者またはオリジナル歌手・有名なカヴァー・アーティスト（L＝ジョン・レノン、M＝ポール・マッカートニー、H＝ジョージ・ハリスン、S＝リンゴ・スター）

1.23（thu）

Octpus's Garden（S）［R（G）］

"Hey hey Georgie"*（H）［R］

Get Back（L-M）［P（J）］

Don't Let Me Down（L-M）［J（P）］＋ Happiness

Is A Warm Gun（L-M）［J］

＊Ob-La-Di, Ob-La-Da（L-M）［J］

improvisation／Mean Mr. Mustard（L-M）

Everything's Alright（Billy Preston）［Billy］※以下5曲はビリー・プレストンのソロ演奏

Hot As Sun**（M）

Can You Dig It?*（L-M）[JP] Ⓕ

"That was 'Can You Dig It?' by Georgie Wood, and now we'd like to do 'Hark, The Angels Come'" [J] ⒶⒷⒸ★Ⓕ

*は未発表オリジナル曲など

" "表記の曲名は無題の未完成オリジナル曲または即興演奏曲

＋は同時演奏曲または同時ヴォーカル曲など

太字の曲名は、その日のメイン・セッション曲または「LET IT BE」収録テイク

＊は前後の曲の間に演奏された曲

／表記はメドレー形式の演奏曲など

improvisationはギター、ピアノ、ベース、ドラムス、キーボードなどによる一人または数人による即興演奏

**はソロ・アルバム収録曲の原曲・初期テイクなど

※は注釈

" "（イタリック）は発言／[ ]は発言者

収録レコード（映画登場分も含む）
single1「Get Back / Don't Let Me Down」
（1969年4月11日発売）
Ⓐ「GET BACK」①（69年5月28日完成マスター／未発売）
Ⓑ「GET BACK」②（70年1月5日完成マスター／未発売）
single2「Let It Be / You Know My Name（Look Up The Number）」
（1970年3月6日発売）
Ⓒ「LET IT BE」（1970年5月8日発売）
★映画「LET IT BE」（1970年5月20日公開）
Ⓓ「ANTHOLOGY 3」（1996年10月29日発売）
Ⓔ「LET IT BE…NAKED」（2003年11月17日発売）
Ⓕ〈FLY ON THE WALL〉（2003年11月17日発売）

※同一曲が続く場合は、原則として1曲のみを記載

バック・ヴォーカル／コーラスの略称
J＝ジョン・レノン
P＝ポール・マッカートニー
G＝ジョージ・ハリスン
R＝リンゴ・スター
Yoko＝オノ・ヨーコ
Linda＝リンダ・イーストマン
Billy＝ビリー・プレストン
Martin＝ジョージ・マーティン
Dick＝ディック・ジェイムス
Heather＝ヘザー・イーストマン

1.2 (thu)

Don't Let Me Down (L-M)
All Things Must Pass** (H) [G]
Don't Let Me Down (L-M) [J (G)]
Dig A Pony (L-M) [J]
"Everybody Got Song"* (L) [J] / Don't Let Me Down (L-M) [J (G)]
Let It Down** (H) [G]
Don't Let Me Down (L-M) [G] + Let It Down** (H)
Brown-Eyed Handsome Man (Chuck Berry) [J (G)]
I've Got A Feeling (L-M) [J]
A Case Of The Blues* (L) [J]
Child Of Nature** (L) [J (G)] 🅟
Revolution 1 (L-M)
I Shall Be Released (Bob Dylan) [G (J)]
Sun King (L-M) [J]
Sun King (L-M) / Don't Let Me Down (L-M) [J (G)]
Don't Let Me Down (L-M) [J (PG)]
Johnny B. Goode (Chuck Berry) [J]
Don't Let Me Down (L-M) + Sun King (L-M)
Sun King (L-M)
Mailman, Bring Me No More Blues (Buddy Holly)
I've Got A Feeling (L-M) [PJ]
•Speak To Me (Jackie Lomax) [G]
•Quinn The Eskimo (The Mighty Quinn) (Bob Dylan) [G (P)]
Sun King (L-M) F / Don't Let Me Down (L-M) 🅟
Don't Let Me Down (L-M) [P/J (PG)]
•Sun King (L-M)
•Julia (L-M) [P]
Well...Alright (Buddy Holly) [G]
All Things Must Pass** (H) [G]
Two Of Us (L-M) [P/PJ]

1.3 (fri)

The Long And Winding Road (L-M)
Oh! Darling (L-M) [P]
Maxwell's Silver Hammer (L-M) [P]
Paul's Piano Piece* (M) ★🅟 / Tea For Two Cha-Cha (Tommy Dorsey)
Chopsticks (Euphemia Allen) [P] / Whole Lotta Shakin' Goin' On (Jerry Lee Lewis) [P] / Let It Be (L-M) [P]
Taking A Trip To Carolina* (S) [R]
Please Mrs. Henry (Bob Dylan) [G]
Ramblin' Woman (Bob Dylan) [G (P)]
Don't Pass Me By (S) [G] 🅟
Picasso* (S) [R]
Taking A Trip To Carolina* (S) [R] 🅟
Hey Jude (L-M) [P]
All Things Must Pass** (H) [G/G (P)]
Crackin' Up (Bo Diddley) [GP]
Crackin' Up (Bo Diddley) [GP]
All Shook Up (Elvis Presley) [GP] / Your True Love (Carl Perkins) [PG (J)]
Blue Suede Shoes (Carl Perkins) [J (PG)]
Three Cool Cats (The Coasters) [GP (J) /P]
Blowin' In The Wind (Bob Dylan) [GP]
Lucille (Little Richard) [P]
I'm So Tired (L-M) [P (J)]
Ob-La-Di, Ob-La-Da (L-M) [PJ (G)]
Ob-La-Di, Ob-La-Da (L-M)
Don't Let Me Down (L-M) [JP]
The Third Man Theme (Anton Karas)
Don't Let Me Down (L-M) [J (P)] + Happiness Is A Warm Gun (L-M) [J]
•Ob-La-Di, Ob-La-Da (L-M) [J]
•Don't Let Me Down (L-M) / Sun King (L-M)
I've Got A Feeling (L-M) [PJ/P/J]
Goin' Up The Country (Canned Heat) [P]
On The Road Again (Canned Heat) [G]
One After 909 (L-M) [JP] 🅟
Because I Know You Love Me So* (L-M) [JP] 🅟
One After 909 (L-M) [JP]
I'll Wait Till Tomorrow* (L-M) [JP (G)]
A Pretty Girl Is Like A Melody (Irving Berlin) [J]
Thinking Of Linking* (L-M) [PG]
Won't You Please Say Goodbye* (L-M) [JP]
Bring It On Home To Me (Sam Cooke) [GJP]
Hitch Hike (Marvin Gaye) [G (JP)]
You Can't Do That (L-M) [GJP]
The Hippy Hippy Shake (Chan Romeo) [P (G)]
Two Of Us (L-M) [PJ]
All Along The Watchtower (Bob Dylan) [G]
Sun King (L-M)
Bony Moronie (Larry Williams) / Short Fat Fanny (Larry Williams) [G (P)]
Midnight Special (Prisoner's Song) (traditional, Leadbelly) [JP]
When You're Drunk You Think Of Me (The Dubliners) [G (JP)]
What's The Use Of Getting Sober (When You're Gonna Get Drunk Again) (Louis Jordan) [J]

What Do You Want To Make Those Eyes At Me For? (Emil Ford And The Checkmates) [GJP]
Money (That's What I Want) (Barrett Strong)
Give Me Some Truth** (L) [PJ]
All Things Must Pass** (H) [G/(P)/G(JP)] ●
◆The Weight (The Band) [J]
◆I'm A Tiger (Lulu) [P]
Back In The U.S.S.R. (L-M)
◆Back In The U.S.S.R. (L-M) ●
Every Little Thing (L-M) [GP] ●
Piece Of My Heart (Janis Joplin) [G]
Sabre Dance (Khachaturian)
Piece Of My Heart (Janis Joplin) [G]
One After 909 (L-M) [G]
All Things Must Pass** (H) [PG/G(JP)]
◆I've Been Good To You (The Miracles)
Maxwell's Silver Hammer (L-M) [(P)/PJG/P(G)] ★
I Want You (Bob Dylan) [G]
Don't Let Me Down (L-M)

1.6 (mon)

Oh! Darling (L-M) [P] ★
Just Fun* (L-M) [P] ★ / One After 909 (L-M) [P] ★
C'mon Marianne (The Four Seasons) [JP]
I've Got A Feeling (L-M) [GP]
High School Confidential (Jerry Lee Lewis) [G]
I've Got A Feeling (L-M) [G] / Hear Me Lord** (H) [G]
For You Blue (H) [G]
All Things Must Pass** (H)
Carry That Weight (L-M) [PR]
Octopus's Garden (R) [R] / Carry That Weight (L-M) [PR]
The Palace Of The King Of The Birds* (M)
Across The Universe (L-M) [J(P)]
I Want You (Bob Dylan) [G(P)]
I've Got A Feeling (L-M) [PJ]
Don't Let Me Down (L-M) [J(PG)]
One After 909 (L-M) [JP]
That's All Right (Mama) (Elvis Presley) [J]
Thirty Days (Chuck Berry) [J]
Hear Me Lord** (H) [G]
Leaning On A Lamp Post (George Formby) [JP]
"Annie"* (L) [J]
"Maureen"* (Bob Dylan-H) [G]
I'm Talking About You (Chuck Berry) [P/G]
The Tracks Of My Tears (The Miracles) [G]
Dizzy Miss Lizzy (Larry Williams) / Money (That's What I Want) (Barrett Strong) [J]
Fools Like Me (Jerry Lee Lewis) [JP]
Sure To Fall (Carl Perkins) [JP]

Right String, Wrong Yo Yo (Carl Perkins) [GP]
Don't Let Me Down (L-M) [J(PG)/G] ●
◆Send Me Some Loving (Little Richard) [J]
Two Of Us (L-M) [P/J]
◆Frere Jacques (traditional) [G]
◆It Ain't Me, Babe (Bob Dylan) [G/P]
◆When The Saints Go Marching In (traditional) / Loop De Loop (Johnny Thunder)
Hear Me Lord** (H)
Across The Universe (L-M) [J]
I Want You (Bob Dylan) [G]
Hear Me Lord** (H) [G]
All Things Must Pass** (H) [G(JP)]
◆Let's Dance (Chris Montez) + At The Hop (Danny And The Juniors) [P]
She Came In Through The Bathroom Window (L-M) [P]
Carry That Weight (L-M) [P]

1.7 (tue)

The Long And Winding Road (L-M) [P]
Golden Slumbers (L-M) [P] / Carry That Weight (L-M) [P(R)] / Golden Slumbers (L-M) [P] / The Long And Winding Road (L-M) [P] / The Palace Of The King Of The Birds* (M) [(P)]
Lady Madonna (L-M)
She Came In Through The Bathroom Window (L-M) [P(R)]
She Came In Through The Bathroom Window (L-M) [G] ●
What'd I Say (Ray Charles) [G] / Carry That Weight (L-M) [P] / What'd I Say (Ray Charles) [P] / Shout! (The Isley Brothers) [P]
Get Back (L-M) [P(R)/P/P(RG)]
◆Get Back (L-M) [P(R)] + Helter Skelter (L-M) [P]
For You Blue (H) [G]
For You Blue (H) [G]
My Back Pages (Bob Dylan) [G]
Dear Prudence (L-M)
I've Got A Feeling (L-M)
She Came In Through The Bathroom Window (L-M) [P]
Stuck Inside Of Mobile With The Memphis Blues Again (Bob Dylan) [GP]
I Shall Be Released (Bob Dylan) [G]
To Kingdom Come (The Band) [G]
For You Blue (H) [G]
Bo Diddley (Bo Diddley) [G]
What The World Needs Now Is Love (Jackie DeShannon) [G]
First Call (George W Behn)
She Came In Through The Bathroom Window

(L-M) [J]
I've Got A Feeling (L-M) [PJ]
Maxwell's Silver Hammer (L-M) [P]
Oh! Darling (L-M) [P (J)]
The Long And Winding Road (L-M) / Maxwell's Silver Hammer (L-M)
Maxwell's Silver Hammer (L-M) [P (G)]
Rule Brittannia (Thomas Ame) [J]
Norwegian Wood (This Bird Has Flown) (L-M) [(P)]
Maxwell's Silver Hammer (L-M) [R/P/ (GP)]
Speak To Me (Jackie Lomax) [(P)]
When I'm Sixty-Four (L-M) [P] / Speak To Me (Jackie Lomax) [G] + When I'm Sixty-Four (L-M) [P]
Oh! Darling (L-M) [P (G)]
Maxwell's Silver Hammer (L-M) [P/P (J) /P (JG)] ★
A Shot Of Rhythm And Blues (Arthur Alexander) [J]
(You're So Square) Baby I Don't Care (Elvis Presley) [JG]
Across The Universe (L-M) [J/J (P) /G/P/JP] ★
*Give Me Some Truth** (L) [J]
*Julia (L-M) + Across The Universe (L-M) [J (P)]
A Case Of The Blues (L) [J]
*Give Me Some Truth** (L) [J (P)]
*From Me To You (L-M) [(P)]
*Rock And Roll Music (Chuck Berry) [J (P)]
*Lucille (Little Richard) [P (J)]
*Lotta Lovin' (Gene Vincent)) [P]
Gone Gone Gone (Carl Perkins) [J]
Dig A Pony (L-M) [J (P)] ★
One After 909 (L-M) [JP]
What'd I Say (Ray Charles)
One After 909 (L-M) [PJ]
Don't Let Me Down (L-M) [P/J (P) / (G)]
*Devil In Her Heart (The Donays) [P/J] + Don't Let Me Down (L-M)
*Devil In Her Heart (The Donays) [J (PG)] / Don't Let Me Down (L-M) [P/J (P)]
Thirty Days (Chuck Berry) [J (P)]
Revolution 1 (L-M)
A Case Of The Blues* (L)
Be-Bop-A-Lula (Gene Vincent) [J]
Lotta Lovin' (Gene Vincent) [J] / Somethin' Else (Eddie Cochran) [J]
School Day (Chuck Berry) / No Particular Place To Go (Chuck Berry)
She Came In Through The Bathroom Window (L-M)
F.B.I. (The Shadows)
She Came In Through The Bathroom Window (L-M) [P (JG)]

1.8 (wed)

I Me Mine (H) [G] ★
I've Got A Feeling (L-M) [P]
John's Piano Piece (L) Ⓟ
Soul Finger (Bar-Kays) [J] / Early In The Morning (Bobby Darlin) [P (G)] / Honey, Hush (Big Joe Turner) [P]
Stand By Me (Ben E. King) [P]
Hare Krishna Mantra (traditional) [P]
Hare Krishna Mantra (traditional) [P]
Two Of Us (L-M) [JP] ★
"You got me going"* (M) [P]
Twist And Shout (The Isley Brothers)
Don't Let Me Down (L-M) [J (P)]
I've Got A Feeling (L-M) [PJ] ★
St. Louis Blues (W.C.Handy)
One After 909 (L-M) [JP]
Too Bad About Sorrows* (L-M) [J]
"Queen says 'no' to pot smoking FBI members." [J] Ⓒ★
Just Fun* (L-M) [J (P)]
She Said She Said (L-M) [J]
She Came In Through The Bathroom Window (L-M) [G/PG] / One Way Out (Elmore James)
MacArthur Park (Richard Harris)
All Things Must Pass (H) [G (JP)]
*All Along The Watchtower (Bob Dylan)
Mean Mr. Mustard (L-M) [J]
Don't Let Me Down (L-M) [J]
All Things Must Pass** (H) [G (JP)]
Fools Like Me (Jerry Lee Louis) [J/JG]
You Win Again (Hank Williams) [J (GP)]
She Came In Through The Bathroom Window (L-M) [J (P) /P (J)]
Right String, Wrong Yo-Yo (Carl Perkins) [J]
Baa, Baa Black Sheep (traditional) [J]
Mr. Bassman (Johnny Cymbal) [(JG) /P]
I Me Mine (H)
Sun King (L-M)
Maxwell's Silver Hammer (L-M) [P (JG) /J/G] / Sun King (L-M)
Maxwell's Silver Hammer (L-M) [P (JG)]
*Happiness Is A Warm Gun (L-M) [P]
I Me Mine (H) [G (J) /G (JP) /J]
How Do You Think I Feel (Elvis Presley) [(G) /J]
The Ballad Of Bonnie And Clyde (Georgie Fame) [J] / Tutti Frutti (Little Richard) [J]
Hello Mudduh, Hello Fabbuh! (A Letter From Camp) (Allan Sherman) [JP] / The Ballad Of Bonnie And Clyde (Georgie Fame)
I Me Mine (H) [J]

F.B.I. (The Shadows)
I Me Mine (H) [(J)]
Mr. Bassman (Johnny Cymbal) [J]
Oh! Darling (L-M) [P]
I Me Mine (H) [J] + Sobre Las Olas (Over The Waves) (Juventino Rosas) [J]
Let It Be (L-M) [P (J)]
The Fool (Sanford Clark) [J]
I Me Mine (H) [G/P]／Domino (Doris Day) [P]
The Long And Winding Road (L-M) [P (J)]
Paul's Piano Piece (M)
I Me Mine (H) [GP]／Don't Bother Me (H) [(P)]
I Me Mine (H) [G (JP) /P]
True Love (Cole Porter) [P/J]
Shout! (The Isley Brothers) [J]
Sweet Little Sixteen (Chuck Berry) [J (P)]
Malagueña (Ernesto Lecuona, Richie Valens)
Almost Grown (Chuck Berry) [J (P)]／Norwegian Wood (This Bird Has Flown) (L-M)
What Am I Livin' For? (Chuck Willis) [J/G]／Two Of Us (L-M) [P]
Rock And Roll Music (Chuck Berry) [J]
I Me Mine (H) [G/G (P)] ★
The Long And Winding Road (L-M) [P]
Let It Be (L-M) [P/ (J)]
To Kingdom Come (L-M) [GP]

1.9 (thu)

Another Day** (M) [P]
The Palace Of The King Of The Birds* (M)／Let It Be (L-M) [P]／The Long And Winding Road (L-M) [P]
Let It Be (L-M) [P]／Her Majesty (L-M) [P]／Golden Slumbers (L-M) [P]／Carry That Weight (L-M) [P (R)]
The Long And Winding Road (L-M) [P]／Carry That Weight (L-M) [P]
The Long And Winding Road (L-M) [P]／First Call (George W.Behn)／Oh! Darling (L-M)
For You Blue (H) [G (P)]
Two Of Us (L-M) [PJ] ★
Two Of Us (L-M) [PJ]
Don't Let Me Down (L-M) [G]
Baa Baa, Black Sheep (traditional) [J]
Don't Let Me Down (L-M) [J (PG)]
Suzy Parker * (L) [J (GP)] ★ ※「Suzy's Parlour (L-S-H-M)」で1971年に著作権登録
I've Got A Feeling (L-M) [JP/P] ★
One After 909 (L-M) [JP] ★
Norwegian Wood (This Bird Has Flown) (L-M) [PG]
She Came In Through The Bathroom Window (L-M) [P/J]
*Be-Bop-A-LuLa (Gene Vincent) [P]／Baby Blue (Gene Vincent) [P]
Get Back (L-M) [P/P (JG)]
Get Back (L-M) ("Don't dig no Pakistanis" (M) [P (J)]
Let It Be (L-M) [(P/G)]
La Penina (M) [P]
New Orleans (Gary US Bonds)
Across The Universe (L-M) [J (PG) /P]
*Tutti Frutti (Little Richard) [J]
Teddy Boy** (M) [P]
Junk** (M) [PJ] ※フランス語風ヴァージョン
Across The Universe (L-M) [JP (G)]
Shakin' In The Sixties* (L) [J]／Ob-La-Di, Ob-La-Da (L-M) [J]
Move It (Cliff Richard) [J (P)]／Good Rockin' Tonight (Roy Brown) [J (P)]
Oh Donna (Ritchie Valens)／Tennessee (Carl Perkins) [JPG]
Across The Universe (L-M) [P/J]
I Me Mine (H) [J]／The House Of The Rising Sun (The Animals) [JP]
Commonwealth* (L-M) [P (J)]
Enoch Powell* (M) [P]
Get Off!* (L-M) [JP]／Why Don't We Do It In The Road? (L-M) [J]／For You Blue／Get Off! (L-M) [P]／For You Blue (H) [G]／Get Off!* (L-M) [JP]
Honey Hush (Big Joe Turner) [JP]
For You Blue (H) [G (P)]
*Hitch Hike (Marvin Gaye)
All Together Now (L-M) [J]
Ramblin' Woman (Bob Dylan) [G]／I Threw It All Away (Bob Dylan) [G]／Mama You Been On My Mind (Bob Dylan) [G]
Let It Be (L-M) [P (JG) / (PJG) /P]
*Back In The U.S.S.R. (L-M)／Revolution 1 (L-M)／Purple Haze (Jimi Hendrix)／Back In The U.S.S.R. (L-M)／Let It Be (L-M) [R]
*That'll Be The Day (Buddy Holly) [P]
*I've Got A Feeling (L-M)
*Jenny, Jenny (Little Richard) [P]／Slippin' And Slidin' (Little Richard) [P/J]／Jenny, Jenny (Little Richard) [P]／Slippin' And Slidin' (Little Richard) [JP]
*The Tracks Of My Tears (The Miracles) [(G)]

1.10 (fri)

The Long And Winding Road (L-M)／The Long And Winding Road (L-M) [P]
Let It Be (L-M) [P]
Don't Let Me Down (L-M) [P]
Maxwell's Silver Hammer (L-M) [P]

I've Got A Feeling (L-M) [P]
The Long And Winding Road (L-M) [P]
Get Back (L-M) [P/Dick]／I've Got A Feeling (L-M) [P]／Get Back (L-M) [P]／Lady Madonna (L-M)
Get Back (L-M) [G]
Get Back (L-M) [P]
I've Got A Feeling (L-M) [(P)/P/J(P)]
Get Back (L-M) [PJ/J/P(J)/P/J/JP/G] Ⓟ
＊She's A Woman (L-M)
＊Get Back (L-M) ("Don't dig no Pakistanis"* (M)) [P/JP]
＊Hi-Heel Sneakers (Tommy Tucker) [JP]
＊Long Tall Sally (Little Richard)／Get Back (L-M) [J]
＊Theme From The Beatles Cartoon
＊Catch A Falling Star (Perry Como) [J]
Two Of Us (L-M) [PJ/J/P]
I'm Talking About You (Chuck Berry)
(ジョージ・ハリスン脱退)

A Quick One While He's Away (The Who) [J(P)]／Don't Worry Kyoko** (Yoko Ono) [Yoko(P/J)]／I've Got A Feeling (L-M) [PJ]
I've Got A Feeling (L-M) [PJ]
Don't Let Me Down (L-M) [J(P)]
Till There Was You (Peggy Lee) [P(J)]
C'mon Everybody (Eddie Cochran) [J]／Don't Let Me Down (L-M)
Maxwell's Silver Hammer (L-M) [P/J]
Mack The Knife (Bobby Darin) [J]
Teddy Boy** (M) [P]／Maxwell's Silver Hammer (L-M) [J(P)]
Don't Be Cruel (Elvis Presley) [J(P)]／In The Middle Of An Island (Tony Bennett) [J]／Don't Be Cruel (Elvis Presley) [JP]
The Peanut Vendor (Louis Armstrong) [P]／Groovin' (The Young Rascals) [J]／I Got Stung (Elvis Presley) [P]／Groovin' (The Young Rascals) [J]／The Peanut Vendor (Louis Armstrong) [P]
It's Only Make Believe (Conway Twitty) [JP]
The Long And Winding Road (L-M)／Paul's Piano Piece* (M)／Martha My Dear (L-M)
improvisation (John & Yoko**) (L-Yoko Ono) [Yoko/J]／*"John"* [Yoko/J] + Martha My Dear (L-M)
improvisation [Yoko]／*"John"* [Yoko]
improvisation* (L-M) + *"John"* [Yoko]
Sun King (L-M)／Dear Prudence (L-M)／Do You Want To Know A Secret (L-M) [P]
I've Got A Feeling (L-M) [P]

1.13 (mon)

It's Only Make Believe (Conway Twitty) [P]
Ob-La-Di, Ob-La-Da (L-M) [Linda]
Ob-La-Di, Ob-La-Da (L-M) [P/PR]
Baby, Come Back (The Equals) [P]
Build Me Up, Buttercup (The Foundations) [P/Linda]
Build Me Up, Buttercup (The Foundations) [P]
Dig A Pony (L-M) [J]
Get Back (L-M) [P/PJ]
＊On The Road Again (Canned Heat)
＊A case of the blues* (L) [J]／Get Back (L-M)

1.14 (tue)

Whole Lotta Shakin' Goin' On (Jerry Lee Lewis)／Martha My Dear (L-M) [P]／San Francisco Bay Blues (Jesse Fuller) [P]
Lady Jane (The Rolling Stones) [P]
Jazz Piano Song* (M-S) [P] ★
Woman (Bernard Webb) [P]
Cocaine Blues (Johnny Cash) [P]
Flushed You From The Bathroom Of My Heart (Johnny Cash) [R]
On A Clear Day You Can See Forever (Barbra Streisand) [P]
The Back Seat Of My Car** (M) [P]
Lady Madonna (L-M) [P]／Song Of Love* (M) [P]
Hello Dolly (Frank Sinatra) [P]
Golden Slumbers (L-M) [P]
What'd I Say (Ray Charles) [(J)] ＊口笛のみ
Sabre Dance (Khachaturian) [(J)] ＊口笛のみ
Revolution 9 (L-M) [P]
Long Tall Sally (Little Richard) [J]
Help! (L-M) [J]／Tutti Frutti (Little Richard) [J]
Madman* (L) [J]
Mean Mr. Mustard (L-M) [J]／Madman* (L) [J]
I've Got A Feeling (L-M)／Watching Rainbows* (L) [J]
Take This Hammer (Lonnie Donegan) [J]
Johnny B. Goode (Chuck Berry) [J]
Get Back (L-M) [P/J]
Madman* (L) [J]
You Know My Name (Look Up The Number) (L-M) [J(P)]

1.16 (Thu)

Oh! Darling (L-M) [P]
Ob-La-Di, Ob-La-Da (L-M) [P]

1969.1.20-1.29, 1.31
Recording Sessions @ Apple Studios (11 days)
1969.1.30
Rooftop Session @ Apple Building (1 day)

1.20 (mon)

（ジョージ・ハリスン復帰）
Dig A Pony（1曲のみ演奏）

1.21 (tue)

Window, Window* [I]
Somethin' Else (Eddie Cochran) [G]
Daydream (The Lovin' Spoonful) [G]
You Are My Sunshine (Ray Charles) [I/G]
Whispering (Les Paul) / I'm Beginning To See The Light (Frank Sinatra)
My Girl (The Temptations)
Dig A Pony (L·M) [I(P)]
Every Night (M) [P]
Dig A Pony (L·M) [I(P)]
◆Watch Your Step (Bobby Parker)
◆New Orleans (Gary U.S. Bonds)
◆Madman* (L) [IP]
◆The Fool (Sanford Clark) [P]
◆Run For Your Life (L·M) [I]
◆Hi Heel Sneakers (Tommy Tucker) [I]
◆My Baby Left Me (Elvis Presley) [I] / That's All Right (Mama) (Elvis Presley) [I] / My Baby Left Me (Elvis Presley) [I]
◆Hallelujah, I Love Her So (Ray Charles) [I]
◆Milk Cow Blues (Kokomo Arnold) [I] / I'm A Man (Bo Diddley) [I]
◆Little Queenie (Chuck Berry) [I]
◆When Irish Eyes Are Smiling (Bing Crosby) [I]
◆Queen Of The Hop (Bobby Darin) [P]
◆F.B.I. (The Shadows)
◆"All I want is you"* (L) [I(P)]
◆Five Feet High and Rising (Johnny Cash) [I]
◆In The Middle Of An Island (Tony Bennett) [I] / Gilly Gilly Ossenfeffer Katzenellen Bogen By The Sea (David & Jonathan) [P(I)]
◆Roll Over Beethoven (Chuck Berry) [I(P)] / Hully Gully (The Olympics) [P] / Good Rockin' Tonight (Roy Brown) [I(P)] / Down In The Flood (Bob Dylan) [G]
◆Forty Days (Ronnie Hawkins) [P/I]
◆Too Bad About Sorrows* (L·M) [P/I]
◆I'm Ready (Fats Domino) [P]
◆You're Going To Lose That Girl (L·M) [IP]
Shout! (The Isley Brothers) [I(P)]
◆Papa's Got A Brand New Bag (James Brown) [P]
I've Got A Feeling (L·M) [P]
Dig A Pony (L·M)
◆[illegible] [illegible]
I've Got A Feeling (L·M) [P]
Don't Let Me Down (L·M) [I(P)]
◆In The Middle Of An Island (Tony Bennett) [I]
Dig A Pony (L·M)
"I Dig A Pygmy by Charles Hawtrey and the Deaf Aids. Phase One, in which Doris gets her oats" [I] ●
Dig A Pony (L·M) [I]
Let's Dance (Jim Lee) [P]
Don't Let Me Down (L·M) [I(P)]
My Girl (The Temptations)
Get Back (L·M) [I]
Queen Of The Hop (Bobby Darin) [I]
She Came In Through The Bathroom Window (L·M) [P(I)] ●
◆Don't Let Me Down (L·M) [IP]
◆Madman* (L) [I]

1.22 (wed)

I Shall Be Released (Bob Dylan) [G]
I've Got A Feeling (L·M) [IP]
Let It Down (H) [G]
She Came In Through The Bathroom Window (L·M)
Some Other Guy (Richie Barrett) [I]
Johnny B. Goode (Chuck Berry) [I]
Don't Let Me Down (L·M) [I]
I Shall Be Released (Bob Dylan) [G]
Dig A Pony (L·M)
Don't Let Me Down* (L·M) [P/I]
Dig A Pony (L·M) [I(P)]
◆Dig A Pony (L·M) [I(P)]
Going Up The Country* (Canned Heat) [P]
Dig A Pony (L·M) [I(P)] ●
Dig A Pony (L·M) [I(P)]
Dig A Pony (L·M) [I(P)]
I've Got A Feeling (L·M) [IP/P]
◆I've Got A Feeling (L·M) [P] / Words Of Love (Buddy Holly) / I've Got A Feeling (L·M) [IP]
The Long And Winding Road (L·M)

（ビリー・プレストン参加（1月25日を除く））
I've Got A Feeling (L-M) [P]
Dig A Pony (L-M) [J(P)]
Don't Let Me Down (L-M) [J(P)]
*A Taste Of Honey (Lenny Welch) [P]
*Oh! Darling (L-M) [P]
I've Got A Feeling (L-M) [JP]
I've Got A Feeling (L-M) [PJ]
I'm Ready (Fats Domino) ⒶⒷ Improvisation (The Rocker) ⒶⒷ I'm Ready (Fats Domino) ⒶⒷ
Save The Last Dance For Me (The Drifters) [JP] ⒶⒷ Don't Let Me Down (L-M) [J(PG)] ⒶⒷ
Dig A Pony (L-M)
Don't Let Me Down (L-M) [J(PG)] ⒶⒷ
Dig A Pony (L-M) [J(PG)] ⒶⒷ
I've Got A Feeling (L-M) [PJ] ⒶⒷⒸ
*Carol (Chuck Berry)
Don't Let Me Down (L-M) [J(P)]
Dig A Pony (L-M) [JP]
I've Got A Feeling (L-M) [JP]
I've Got A Feeling (L-M) [P]

1.23 (thu)

Octpus's Garden (S) [R]
Two Of Us (L-M) [JP]
I've Got A Feeling (L-M)
Get Back (L-M) [P(J)]
*Get Back (L-M) + Reach Out I'll Be There (The Four Tops) [G]
*Words Of Love (Buddy Holly)
*Twenty Flight Rock (Eddie Cochran)
Oh! Darling (L-M) [P]
Two Of Us (L-M) [J]
Let It Be (L-M) [P]
Maxwell's Silver Hammer (L-M)
Some Other Guy (Richie Barrett)
Mean Mr. Mustard (L-M)
Let's Twist Again (Chubby Checker) [P]
Oh! Darling (L-M) [P]
The Long And Winding Road (L-M) [P]
Love Is The Thing To Me* (M) [(P)]
*以下5曲はビリー・プレストンのソロ演奏
Everything's Alright (Billy Preston) [Billy]
I Want To Thank You (Billy Preston) [Billy]
You've Been Acting Strange (Billy Preston) [Billy]
Use What You Got (Billy Preston) [Billy]
"Together In love"* (Billy Preston) [Billy]
Oh! Darling (L-M) [J]
Improvisation [J/Yoko/JP Billy]
Happiness Run (Donovan) [J]
Shazam! (Duane Eddy) [(P)]
Dig A Pony (L-M)
Get Back (L-M)
Get Back (L-M) [P(J)]
*I'll Get You (L-M) [P]
I've Got A Feeling (L-M) [P]
Help! (L-M) [J(P)] / Please Please Me (L-M) [J] / You've Got To Hide Your Love Away (L-M)
Let It Be (L-M) [P]
The Long And Winding Road (L-M) [P]

1.24 (fri)

Twenty Flight Rock (Eddie Cochran)
Get Back (L-M)
Get Back (L-M) [J]
Words Of Love (Buddy Holly)
Get Back (L-M)
(I Can't Get No) Satisfaction (The Rolling Stones)
Get Back (L-M) / What'd I Say (Ray Charles) / If I Needed Someone (H)
Don't Let Me Down (L-M) [PG]
Get Back (L-M) [P] / Ob-La-Di, Ob-La-Da (L-M) [J]
Get Back (L-M) [P(J/J)]
Soldier Of Love (Arthur Alexander) [PJ] / Cathy's Clown (The Everly Brothers) [P/G/J] / Soldier Of Love (Arthur Alexander) [J] / Where Have You Been (Arthur Alexander) [J/G]
Love Is A 'Swingin' Thing (The Shirelles) [J] / What'd I Say (Ray Charles) / Love Is A 'Swingin' Thing (The Shirelles) [JP]
She Said Yeah (Larry Williams) [P]
Child Of Nature** (L) [J]
Two Of Us (L-M) [JP]
*You're So Good To Me (The Beach Boys) [P]
*Twenty Flight Rock (Eddie Cochran)
*Oh! Darling (L-M) [P]
Two Of Us (L-M) [PJ/P] Ⓑ
*Ob-La-Di, Ob-La-Da (L-M)
*She Came In Through The Bathroom Window (L-M) [PJ]
Teddy Boy** (M) [P(J)] ⒶⒷ
*"Balls to your partner" (traditional) [P]
*Ach Du Lieber Augustin (traditional) [P]
Two Of Us (L-M) [PJ] Ⓒ / Maggie Mae (traditional) [PJ] Ⓒ / Fancy My Chances With You* (L-M) [PJ] Ⓒ
Two Of Us (L-M)
Polythene Pam (L-M) [J(P)]
Two Of Us (L-M) [PJ/P] / Maggie Mae (traditional) [JP] ⒶⒷⒸ
The Long And Winding Road (L-M) [P]
Window, Window** (H) [G]
Two Of Us (L-M) [P]
Get Back (L-M) [J]

Two Of Us（L-M）［P］
Get Back（L-M）［P］
Two Of Us（L-M）［P］
Her Majesty（L-M）［P］
There You Are, Eddie*（M）［PJ］
Every Night**（M）［P］／Pillow For Your Head*（M）［P］／There You Are, Eddie*（M）［P］
Hot As Sun**（M）
Catswalk（M）
Two Of Us（L-M）［PJ］🅐🅑
Diggin' My Potatoes（Lonnie Donegan）［PJ］／Hey Liley, Liley Lo（The Vipers Skiffle Group）［P］／Rock Island Line（Lonnie Donegan）［JP］
Two Of Us（L-M）［P］／Tiger Rag（Original Dixieland Jazz Band）［P］／Michael Row The Boat（Lonnie Donegan）［P］／Rock-a-Bye Baby（traditional）［（P）］／Singing The Blues（Guy Mitchell）［P］
Knee Deep In The Blues（Guy Mitchell）［P］
Can You Dig It?*（L-M）［JP］🅕
"That was 'Can You Dig It?' by Georgie Wood, and now we'd like to do 'Hark, The Angels Come'"［J］🅐🅑🅒★🅕
Get Back（L-M）［P］🅕
There You Are, Eddie*（M）［P］
Get Back（L-M）［P（J）］
*（I Can't Get No）Satisfaction（The Rolling Stones）
*Get Back（L-M）［P］／Little Demon（Screamin' Jay Hawkins）［P］／Maybellene（Chuck Berry）［P/J］／You Can't Catch Me（Chuck Berry）［P］／Brown-Eyed Handsome Man（Chuck Berry）［J（P）］
*Short Fat Fannie（Larry Williams）［J（P）］
Green Onions（Booker T.& The MG's）※ビリー・プレストンのソロ演奏
*Bad Boy（Larry Williams）［J（P）］
*Sweet Little Sixteen（Chuck Berry）［J］／Around And Around（Chuck Berry）［J］／Almost Grown（Chuck Berry）［J（P）］
*School Day（Chuck Berry）［J（P）］
*Stand By Me（Ben E. King）［J（P）］／Where Have You Been（Arthur Alexander）［J（P）］
*Lady Madonna（L-M）［J（P）］
*Lovely Rita（L-M）［P］
I've Got A Feeling（L-M）
Get Back（L-M）
Lonely Sea（The Beach Boys）［J］
All Things Must Pass**（H）／Get Back（L-M）／I've Got A Feeling（L-M）
Ramrod（Duane Eddy）
I Feel Fine（L-M）

1.25（sat）

I've Got A Feeling（L-M）［P］
I'm A Man（Bo Diddley）
Two Of Us（L-M）
Another Day**（M）［P］
Two Of Us（L-M）［PJ］
*Da Doo Ron Ron（The Crystals）［J］
*Back In The U.S.S.R.（L-M）［G］
*Act Naturally（Buck Owens）［JP］
Two Of Us（L-M）［P/PJ］
I've Got A Feeling（L-M）
Nashville Cats（The Lovin' Spoonful）［P/JG］
On The Road Again（Canned Heat）［G］
I've Got A Feeling（L-M）
All I Really Want To Do（Bob Dylan）［G］
I Lost My Little Girl**（M）［J（P）］
Two Of Us（L-M）［PJ］
*A Hard Rain's Gonna Fall（Bob Dylan）［P］
*Bye Bye Love（The Everley Brothers）［JP］
Window, Window**（H）［G］
For You Blue（H）［G］★🅓
*Take This Hammer（traditional）
*For You Blue（H）🅐🅑／**For You Blue**（H）［G］🅐🅑🅒
Early In The Morning（Bobby Darin）［G］
Let It Be（L-M）［P（JG）］
*Please Please Me（L-M）［P］
Get Back（L-M）
Mean Mr. Mustard（L-M）［J］
Let It Be（L-M）［G/J/J（P）］
The Tracks Of My Tears（The Miracles）［G（J）］
Piece Of My Heart（Janis Joplin）［G］／Little Yellow Pills（Jackie Lomax）［G］／Let It Be（L-M）［P］
Early In The Morning（Bobby Darin）［GP］
Let It Be（L-M）［P（JG）］
The Tracks Of My Tears（The Miracles）／Window, Window*（H）［G/J/P］
I'm Talkin' About You（Chuck Berry）［G/J］
Let It Be（L-M）／Chopsticks（Euphemia Allen）／Let It Be（L-M）［P（JG）］
Let It Be（L-M）［P（JG）］🅓
I Should Have Known Better（L-M）［G］
Let It Be（L-M）［P］
Martha My Dear（L-M）
Let It Be（L-M）［P］
Let It Be（L-M）［P（J）/（JG）］
*Love Story（You And Me）（Randy Newman）［PG］
Cannonball（Duane Eddy）／Shazam!（Duane Eddy）
Isn't It A Pity**（H）［G］

1.26 (sun)

Isn't It A Pity** [illegible]
Window, Window** [illegible]
Let It Down** [illegible]
Octopus's Garden [illegible] ★
A Little Piece Of Leather (Donnie Elbert) [illegible] /
Octopus's Garden [illegible] ★
Two Of Us (L.M.) [illegible]
A Little Piece Of Leather (Donnie Elbert) [illegible]
Two Of Us (L.M.) [illegible]
I've Got A Feeling (L.M.) [illegible]
Dig A Pony (L.M.) [illegible]
Octopus's Garden [illegible]
Get Back (L.M.) [illegible]
Octopus's Garden [illegible]
Build Me Up, Buttercup (The Foundations) [illegible] / Octopus's Garden [illegible]
Let It Be (L.M.) [illegible]
Rain (L.M.) [illegible]
Let It Be (L.M.) [illegible]
＊High School Confidential (Jerry Lee Lewis) [illegible] / Great Balls Of Fire (Jerry Lee Lewis) [illegible] / Don't Let The Sun Catch You Crying (Ray Charles) [illegible] / Sexy Sadie (L.M.) [illegible] / Don't Let The Sun Catch You Crying (Ray Charles) [illegible]
Let It Be (L.M.) [illegible]
[illegible]** [illegible]
Let It Be (L.M.) [illegible]
＊Get Back (L.M.) [illegible]
Let It Be (L.M.) [illegible]
＊Do Not Forsake Me Oh My Darling (Dimitri Tiomkin/Washington) [illegible]
＊Let It Be [illegible] / You Really Got A Hold On Me (The Miracles)
Like A Rolling Stone (Bob Dylan) [illegible] / Twist And Shout (The Isley Brothers) [illegible] Heather [illegible] / Dig It [illegible] Heather [illegible] ●●●
Rip It Up (Little Richard) [illegible]
Rip It Up (Little Richard) [illegible] ● / Shake, Rattle And Roll (Bill Haley) [illegible] ★● / Miss Ann (Little Richard) [illegible] ★ / Kansas City (Wilbert Harrison) [illegible] ★ / Miss Ann (Little Richard) [illegible] ★ / Lawdy Miss Clawdy (Lloyd Price) [illegible] ★
Blue Suede Shoes (Carl Perkins) [illegible] ● / You Really Got A Hold On Me (The Miracles) [illegible] ★ / The Tracks Of My Tears (The Miracles) [illegible]
Agent Double-O-Soul (Edwin Starr) (Billy)
S.O.S. (Edwin Starr) [illegible]
Rockin' Pneumonia And The Boogie Woogie Flu (Huey Piano Smith) [illegible] Heather)
I'm Movin' On (Ray Charles) [illegible] Billy)
Improvisation [illegible] Billy)
Let It Be (L.M.) [illegible]
Little Yellow Pills (Jackie Lomax) [illegible]
The Long And Winding Road (L.M.) [illegible] ●●●●
The Long And Winding Road (L.M.) [illegible]

1.27 (mon)

The Palace Of The King Of The Birds [illegible] / Strawberry Fields Forever (L.M.) [illegible]
Strawberry Fields Forever (L.M.) [illegible]
Old Brown Shoe [illegible]
Baby Let's Play House (Elvis Presley) [illegible]
Oh! Darling (L.M.) [illegible]
Let It Be (L.M.) [illegible]
The Long And Winding Road (L.M.) [illegible]
Let It Be (L.M.) [illegible]
The Long And Winding Road (L.M.) [illegible]
＊Little Demon (Screamin' Jay Hawkins) [illegible] / Save The Last Dance For Me (The Drifters) [illegible]
Old Brown Shoe [illegible]
Whole Lotta Shakin' Goin' On (Jerry Lee Lewis)
I've Got A Feeling (L.M.) (Billy)
Hi-Heel Sneakers (Tommy Tucker)
Get Back (L.M.) [illegible]
Don't Let Me Down (L.M.) [illegible]
[illegible] (Harry Belafonte) [illegible]
Don't Let Me Down (L.M.) [illegible]
Get Back (L.M.) [illegible]
I've Got A Feeling (L.M.) [illegible]
Get Back (L.M.) [illegible]
＊Get Back (L.M.) / I've Got A Feeling (L.M.)
Oh! Darling (L.M.) [illegible] ●
Get Back (L.M.) [illegible]
＊Bring It On Home To Me (Sam Cooke) [illegible] + Oh! Darling (L.M.) [illegible] / Oh! Darling (L.M.) [illegible]
＊Two Of Us (L.M.) [illegible]
＊"Rosetta," (P) / "Sweet Loretta Fart she thought she was a cleaner," (J) "Sweet Rosetta Mar...," (P) "but she was a frying pan. The picker! Picture the finger, Greg." (J) ●
Get Back (L.M.) [illegible] ●●●● ＊ブレイク前まで
＊Oh! Darling (L.M.) [illegible]
Get Back (L.M.) [illegible]
Oh! Darling (L.M.) [illegible]
Hound Dog (Elvis Presley) [illegible]
Get Back (L.M.) [illegible] ＊ドイツ語・フランス語ヴァージョン
Get Back (L.M.) [illegible]
＊I've Got A Feeling (L.M.) [illegible]
Get Back (L.M.) [illegible]

I've Got A Feeling (L-M) [P]
Take These Chains From My Heart (Ray Charles) [P]
I've Got A Feeling (L-M) [JP]
The Walk (Jimmy McCracklin) [P]
I've Got A Feeling (L-M) [P]
Take This Hammer (Lonnie Donegan) [P]

1.28 (tue)

Let It Be (L-M) [P]
Shazam! (Duane Eddy)
The River Rhine (Sonny Boy Williamson) [P] +
The Long And Winding Road (L-M)
I've Got A Feeling (L-M) [P]
I've Got A Feeling (L-M) [PJ/J]
✱Words Of Love (Buddy Holly)
✱Rainy Day Women #12&35 (Bob Dylan) [J]
✱The Inner Light (H) [J]
✱I've Got A Feeling (L-M) [J] + Rainy Day Women #12&35 (Bob Dylan) [J]
✱Blue Yodel No.1 (T For Texas) (Jimmie Rodgers) [P (R)]
✱Tea For Two Cha Cha (Tommy Dorsey) [P]
✱I've Got A Feeling (L-M) + Can You Dig It?* (L) [J]
On The Road To Marrakesh* (L) [J/G/J]
Dig A Pony (L-M) [JP/J (PG)]
✱Let It Be (L-M) [R]
✱I've Got A Feeling (L-M) [P]
✱Get Back (L-M)
Get Back (L-M) [P (J)]
Love Me Do (L-M) [JP]
Dig A Pony (L-M) [J]
Teddy Boy** (M) [J (P)]
Get Back (L-M)
Get Back (L-M) [P (J)] single Ⓐ Ⓓ ▲ ※ブレイク以降
Don't Let Me Down (L-M) [P (J) /J (PG) /J (P)] single
I've Got A Feeling (L-M) [PJ]
✱I've Got A Feeling (L-M) [PJ] + Rainy Day Women #12&35 (Bob Dylan) [J]
✱Don't Let Me Down (L-M) [JP]
✱Rainy Day Women #12&35 (Bob Dylan) ※ビリー・プレストンのソロ演奏
Don't Let Me Down (L-M) [J (PG)]
✱I've Got A Feeling (L-M)
One After 909 (L-M) [JP]
I've Got A Feeling (L-M) [PJ]
One After 909 (L-M)
One After 909 (L-M) [JP]
Old Brown Shoe (H) [G (J)]
I Want You (She's So Heavy) (L-M) [J Billy]
Unless he has a song* (Billy's Song) (Billy Preston) [Billy] + Sticks And Stones (Billy's Song) (Ray Charles) [Billy] + I've Got A Woman (Billy's Song) (Ray Charles) [Billy]
Something (H) [G (JP) /JG/P]
Get Back (L-M)
Get Back (L-M) [P (J)]
✱Back In The U.S.S.R. (L-M) [J]
✱Bo Diddley (Bo Diddley)
Two Of Us (L-M) [PJ]
✱Two Of Us (L-M) [PJ/P/P (J)] + Hello, Goodbye (L-M) [PJ]
✱Two Of Us (L-M) [PJ] + Hello, Goodbye (L-M) [J] + When The Saints Go Marching In (Louis Armstrong) [J]
Teddy Boy** (M) [P (J)] Ⓑ
Don't Let Me Down (L-M) [P]
Get Back (L-M)
Teddy Boy** (M)
Two Of Us (L-M)
All Things Must Pass** (H) [JPG/G (JP)]
Get Back (L-M)
Positively 4th Street (Bob Dylan) [G (J)]
I Want You (She's So Heavy) (L-M) [J (PG)]
I Want You (She's So Heavy) (L-M) [J]

1.29 (wed)

Singing The Blues (Guy Mitchell) [P]
Get Back (L-M)
improvisation* (God**) (L)
improvisation* (God**) (L) + Rule Britania (traditional) + improvisation* (God**) (L)
I Walk The Line (Johnny Cash)
Singing The Blues (Guy Mitchell) [P]
Dig A Pony (L-M) [P]
Dig A Pony (L-M) [J (P)]
I've Got A Feeling (L-M) [PJ]
Don't Let Me Down (L-M) [J (P)]
✱Don't Let Me Down (L-M) [J (P)] + Keep Your Hands Off Of My Baby (Little Eva) [J]
Get Back (L-M) [P (J)]
One After 909 (L-M) [JP]
She Came In Through The Bathroom Window (L-M) [P (J)]
✱Love Me Do (L-M) [P]
Two Of Us (L-M) [P (J) /P]
Let It Be (L-M) [P (JG)]
The Long And Winding Road (L-M) [P]
I'm Movin' On (Ray Charles) [R]
For You Blue (H) [G]
Something (H) [P]
All Things Must Pass** (H) [P/G (JP)]
Let It Down** (H) [G (PJ)]

Singing The Blues（Guy Mitchell）［P］
I Want You（She's So Heavy）（L-M）＋“Oh, I had a dream”*（Billy Preston）［Billy］
Something（H）［J］
Sexy Sadie（L-M）［J（P）］
Old Brown Shoe（H）［J］
I Want You（She's So Heavy）（L-M）
Dig It（L-M-S-H）［J（P）］
Besame Mucho（Consuelo Valazquez-Sunny Skylar）［P（J）］★
Three Cool Cats（The Coasters）［JPG］
I Got To Find My Baby（Chuck Berry）［JP］
Some Other Guy（Richie Barrett）※ビリー・プレストンのソロ演奏
One After 909（L-M）［JP］
Honky Tonk（Bill Doggett）
One After 909（L-M）
One After 909（L-M）［G/JP］
Vacation Time（Chuck Berry）［J］
Cannonball（Duane Eddy）／Not Fade Away（Buddy Holly）［G/J］／Hey Little Girl（In The High School Sweater）（Dee Clark）［J］／Bo Didley（Bo Didley）
Maybe Baby（Buddy Holly）［J］
Peggy Sue Got Married（Buddy Holly）［J］／Thinking Of Linking*（L-M）［J/P］／Crying, Waiting, Hoping（Buddy Holly）／Thinking Of Linking*（L-M）［P］／Crying, Waiting, Hoping（Buddy Holly）［G（JP）］／Mailman, Bring Me No More Blues（Buddy Holly）［J（G）］🅓
Teddy Boy**（M）［P（J）］
＊Lotta Lovin'（Gene Vincent）
Two Of Us（L-M）［PJ］

1.30（thu）

Get Back（L-M）［P（J）］★
Get Back（L-M）［P（J）］
I Want You（She's So Heavy）（L-M）
Don't Let Me Down（L-M）［J（PG）］🅔★
I've Got A Feeling（L-M）［PJ］🅒★🅔／*“Oh my soul...so hard.”*［J］🅒★
Dig A Pony（L-M）
One After 909（L-M）［JP］🅐🅑🅒★🅔／Danny Boy（Frederic Weatherly）［J（P）］🅐🅑🅒★
Dig A Pony（L-M）［J（PG）］🅒★🅔／*“Thank you, brothers, put me hands getting too cold to play the chords.”*［J］🅒★
God Save The Queen（traditional）
I've Got A Feeling（L-M）［PJ］🅔＋ Rainy Day Women #12&35（Bob Dylan）［J］／A Pretty Girl Is Like A Melody（Irving Berlin）［J］
Get Back／**Don't Let Me Down**（L-M）［J（PG）］🅔
Get Back（L-M）［P（J）］★🅓／*“Thanks Mo.”*［P］
“I'd like to say 'thank you' on behalf of the group and ourselves and I hope we passed the audition.”［J］🅒★🅓

1.31（fri）

Two Of Us（L-M）［PJ］
Hey Good Lookin'（Hank Williams）［J］
Take This Hammer（traditional）［JP］／Lost John（Lonnie Donegan）［JPG］／Five Feet High And Rising（Johnny Cash）［JPG］／Bear Cat Mama［GP］／Black Dog（John Koerner, Tony Glover, Dave Ray）／Right String Yo-Yo（Carl Perkins）［GJ］／Run For Your Life（L-M）［JP］
Two Of Us（L-M）［J］
Two Of Us（L-M）［PJ］／Friendship（Cole Porter）［JP］＋Ob-La-Di, Ob-La-Da（L-M）［P］
＊Two Of Us（L-M）［PJ］
＊Turkey In The Straw（traditional）［J］
＊Step Inside Love（L-M）［P］
＊Friendship（Cole Porter）［J］
Two Of Us（L-M）［PJ/P］🅒★🅔
＊'Deed I Do（Fred Rose-Walter Hirsch）［JP］／In The Middle Of An Island（Tony Bennett）［J（P）］／All Together Now（L-M）［JP］／In The Middle Of An Island（Tony Bennett）［PJ］
Two Of Us（L-M）［PJ/P］★ ※口笛のみ
I Got Stung（Elvis Presley）［P］
Step Inside Love（L-M）［J］
Let It Be（L-M）［JP］
The Long And Winding Road（L-M）［P］
Let It Be（L-M）［P］
The Long And Winding Road（L-M）［P］
＊Lady Madonna（L-M）［P］＋The Long And Winding Road（L-M）［P］
＊The Long And Winding Road（L-M）［P］★🅔
I Want You（She's So Heavy）（L-M）［P］
Let It Be（L-M）
Let It Be（L-M）［P（JG）］
＊Build Me Up, Buttercup（The Foundations）［P］／Let It Be（L-M）［P/J］
＊**Let It Be**（L-M）［P（JG）］
Let It Be（L-M）［P（JG）］
＊Let's Have A Party（Wanda Jackson）［J］
＊Let It Be（L-M）／Twelfth Street Rag（Louis Armstrong）
＊Oh! Darling*（L-M）［P］
Let It Be（L-M）［P（JG）］🅐🅑 single2 🅒🅔
＊**Let It Be**（L-M）［P（JG）］★🅔

追加録音

1969.2～3?
Don't Let Me Down (L-M) [J (PG)] (ジョンのリード・ヴォーカルとポールのハーモニー・ヴォーカルを追加録音(ポールとジョージのハーモニー・ヴォーカルを差し替え) single1 ?

1969.4.30.
Let It Be (L-M) [P (JG)] (ジョージのギター・ソロ) Ⓑ single2 Ⓒ

1970.1.3.
I Me Mine (H) [G (P)] (ジョージ、ポール、リンゴ新録音) ⒸⒷ

1970.1.4.
Let It Be (L-M) [P (JG Linda Mary Hopkin)] (ジョージのギター・ソロ／リンゴのドラム／ポールのベース(ジョンのベースを差し替え)とマラカス／ポール、ジョージ、リンダ・マッカートニー、メリー・ホプキンのコーラス／ジョージ・マーティンのスコアによるオーケストラ) single2 Ⓒ

1970.1.8.
For You Blue (H) [G] (ジョージのヴォーカルとギター) ⒷⒸ

1970.4.1.
Across The Universe (L-M) [J (14名の合唱)] (リンゴのドラム／オーケストラ・合唱) Ⓒ
The Long And Winding Road (L-M) [P (14名の合唱)] (リンゴのドラム／オーケストラ・合唱) Ⓒ
I Me Mine (H) [G (P)] (リンゴのドラム／オーケストラ) Ⓒ

おわりに

"213"という数字を見ただけで、あるいは4人が道を歩いているだけでビートルズを思い浮かべてしまうのだから、"ビートルズ道"ここに極まれり、と自分でも思う。気づけばもう40年。最初にビートルズを意識して聴いたのは、1974年の秋のこと。もっぱら家ではピーター・ポール&マリーやブラザース・フォアなどのフォークや、アンディ・ウィリアムスのようなポップスがよく流れていた。クラシックのレコードもあったはずだが、音楽の授業以外に聴いた記憶はほとんどない。そこにたまたま「シー・ラヴズ・ユー」の、当時ドーナツ盤と呼ばれていた赤い2曲入りのシングルもあった。

きっかけはいつどこに転がっているかわからない。それからというもの、"ビートルズ"と名のつく本を片っ端から購入し、西新宿で海賊盤を買い漁り、80年代後半にはビートルズでメシが食えるようにもなった。30歳間近で入ったオールジャンルの音楽雑誌「CDジャーナル」編集部では、ビートルズ特集や関連ムックも数多く担当できた。そして今回、23年半に及ぶ"会社員生活"をやめた直後に古巣からこうして本書を出す機会に恵まれたのも、きっとビートルズとの何かの縁に違いない。しかも本書は、ありがたいことに、初の"ソロ名義"でのビートルズ本ともなった。

最後に…編集の原田英子さんとデザインの松田行正さん、香月利一さんの『ビートルズ事典 改訂・増補新版』に続き、またご一緒できてよかったです。お忙しいなか、最優先で時間を割いていただき感謝してます。イラストや細かい文字直しを含め、連日夜中までお付き合いくださった杉本聖士さん、お疲れ様でした。音楽出版社の柴田修平さんほかCDジャーナルのみなさん、機会を与えていただき、ありがとうございました。

2015年5月　藤本国彦

2021年版用追記

"フリー"になって最初に手掛けた本書。初版（2015年5月7日）刊行直後に重版となり、増補改訂新版（2017年11月18日）も完売してしばらく経ちましたので、「2021年版」としてさらに16ページを追加しました。本文も、2018年以降に発売された50周年記念盤の加筆を含め、かなり手を入れました。本書を片手に213曲をぜひ味わっていただければ、と願ってます。

2021年4月　藤本国彦

藤本国彦 Fujimoto Kunihiko

[illegible]

編集
柳田恵子｜藤本国彦
市川緑（2021年版）

デザイン
松田行正｜杉本聖士

編集協力
[illegible]
[illegible]

2021年版
ビートルズ213曲全ガイド
The BEATLESONGS 213

藤本国彦［著］

2021年6月25日発行［2021年版］

定価2,200円［本体2,000円］+税

発行人　野村弘幸
発行所　株式会社シーディージャーナル
〒101-0035　東京都千代田区神田紺屋町21-1 神保ビル
編集部　［tel］03-3527-1217
営業部　［tel］03-3527-1216

印刷・製本　シナノパブリッシングプレス

©2021 Fujimoto Kunihiko, CDJournal Co., Ltd.
無断転載を禁ず。乱丁・落丁本はお取り替えいたします。
Printed in Japan
https://www.cdjournal.com/